UNIVERSITY OF ILLINOIS-URBANA
252 M69N C001
Nuture and cultivation of the mind and s
3 0112 087623408

THE UNIVERSITY
OF ILLINOIS
LIBRARY

The D.C.Greene
Collection
of
Books relating to
Japan
252
M69n

Tsuneteru Miyakawa

—

The nurture and cuttivation of the Mind and soul.

—

Tokyo, 1909.

Shinrei no Shuryo (1 Vol.) By Tsuneteru Miyagawa, published by Keiseisha, Tokyo, 1909, Collection of Mr. Miyagawa's sermons.

Digitized by the Internet Archive
in 2015

https://archive.org/details/nuturecultivatio00miya

心靈の修養

LIBRARY
UNIVERSITY OF ILLINOIS
URBANA

252
M69n

227728 cfg

心靈の修養

目次

第一章　心靈の修養……一
第二章　心靈の偉大……七
第三章　靈育と德育……一四
第四章　不覺の靈力……三五
第五章　使命の自覺……五〇
第六章　吾人の向上を妨るものは何ぞや……六四
第七章　心力傾注……七六
第八章　人生の價値……九二
第九章　人生の大願望……一〇八

637638

第十章　人格の進歩に伴ふ愛の發展……一二五
第十一章　沈默の教訓……一四四
第十二章　昧爽の祈禱……一六四
第十三章　祈禱の生涯……一七九
第十四章　祈禱の極致……一九三
第十五章　聖化の階段……二〇七
第十六章　俗中の聖……二三〇
第十七章　逆境の聖者……二四八
第十八章　心情の聖化……二六〇
第十九章　颶風中の聖……二七五
第二十章　超脫の妙境……二八六
第二十一章　此世ならざる快感……三〇四

第二十二章　生辱と死榮……三一八
第二十三章　天上の星……三二九
第二十四章　家庭の向上……三三九
第二十五章　家庭の趣味……三五八

心靈の修養

宮川經輝著

第一章　心靈の修養

キリスト曰く「人全世界を得るも其生命を失はゞ何の益あらんや」と。然り、人類の有する內なる心靈は外なる生涯よりも偉大にして、且つ其言ふ所や行ふ所よりも遙に優越せるものである。

されど世には身斯くの如き偉大なる心靈の內在せることにすら思ひ及ばざる者が多い。偶々ここに心する人あるも、先づ彼等の兩眼を遮るものは、或は利慾、或は權威、或は名譽等所謂果敢なき浮世の快樂である、斯くして心靈修養のことに力を盡くす人は誠に稀である、此間に在りて吾等基督信者は少くとも心靈の偉大なるを知りて、これが修養に努めねばならぬ。左は言へ心靈の修養

は遊藝の稽古の如く短日月にして早く眼に見ゆる効果を現はすものではない、ソコデ誰でも暫くは修養に志すも、忽ち日暮れて道遠しの感に打たれ、未だ其半ばにだも至らずして志を變ずるやうになる、英米の如き祖先以來心靈修養に心を傾けたる國ですら中途志を變ふる人あるを見る、古より倫理と道德以外に心を寄せざりし我國民の未だ心靈修養に全力を注ぎ得ざるは、誠に慨嘆の至りである。

我基督敎の歷史を繙きて、熊本郊外花岡山頂の盟約の條に至る毎に、一種云ふべからざる感慨の湧き出づるものがある、明治九年、其連判の白紙に署名せる者四十余名あつたが三十三年を經たる今日に於て尙ほ堅き信仰を保てるもの幾人なるかを尋ぬれば大凡其の五分の一若しくは六分の一に過ぎない。

實に心靈の修養は難いが倦まず怠らずして十年十五年二十年三十年の熱禱を以てすれば神必らず其の信仰に報ひ給ふ事は吾人の確信する所である、見ずや、かのナイル河上、一葉の蘆舟に載せて流された幼兒モーゼは、四十歲にして己が國民の苦しめる狀を見て埃及の寳を受けんよりは寧ろ神の民と共に苦しむは

良してふ志を懐きてメデアンの野に心靈を養ふこと四十年間、齢八十にして再び世に立ちて憐れなる猶太人を埃及より救ひ出だし又も四十年間アラビオの原野に彷徨ふたモーセがシナイ山頭に立つて神の聖前に切なる祈禱を捧げつゝ山を降りたる時の顔は天使のそれの如く光り輝いたと云ふことである、心靈の修養は短日月の間に其の出來榮を現はすものではない。

更に、詩篇四章の八節に於て「われ安然にして臥又ねぶらん、エホバよわれを獨にて坦然にをらしむるものは汝也」と歌ふたダビデを見られよ、彼は幾度びか罪を犯し又幾度びか悔い改めたる人だが、「われを獨にて坦然にをらしむるはエホバ也」てふ安心を得るに至るまでの修養は蓋し容易ではなかつたらう、又使徒パウロは羅馬書八章三十七節以下に「然ども我儕を愛しめる者に頼りすべて此等の事に勝ち得て餘りあり」と叫んだ、男子こゝに至つて是れ豪雄、飢渇も、裸程も、惱みも、責めも、死迫るとも、すべて此等の事に勝ち得て而かも尚ほ餘りありと云ふ。蓋し斯る勇氣は修養せられたる心靈の上にのみ恵まるべきものである。

心靈の修養とは何であらうか是れは一大問題である、思ふに淀江の水滾々〳〵流れ〳〵て盡きざるは、其の水源琵琶湖に連なるが故である、心靈の修養も亦その通り、先づ其の心靈をして天地宇宙の神に結び付かせねばならぬ、而して其の神より出づる清き靈的生命の絶えず我が靈に注がれ來るに至つて始めて心靈修養の道に入り得たるものと云ふことが出來る。

ナザレのイエス、キリストが十二の歳より三十歳まで窃かに養ひ給ふた心靈を持つてバプテスマのヨハネより洗禮を受けられたが其の時天よりこれ我か心に叶ふ愛子也と云ふ聲が聞えた、實にキリストをしてキリストたらしめたのは此の聲であつた彼はこの一と聲によつて我は父の秘藏子也、父は我と共に在すてふ堅き自覺を抱かるゝやうになつた、天の父の秘藏子なればこそ且つ父彼と共に在せばこそ枕するところなくとも、前より後より將た左より右より責め立てらるゝ間にも不屈不撓の態度を以て諄々道を説いて止まず遂に萬世の救主たる使命を盡された次第である。

私共先づ舊約聖書の詩篇を讀み現はれ來る靈味津々たる言葉を我が心に潜め、

尙ほ新約聖書を開いてヨハ子傳に現はれたるキリストの靈的經驗、パウロ十三通の書翰に現はれたる彼が心靈修養の道程を辿つて深く考ふるところあらば心靈修養の根本はキリストのそれの如く、又パウロのそれの如く、「我は天の父の愛子也、天の父我と共に在す」てふ自覺に因ることを悟るであらう。

又私共を資けてこの自覺を強からしむるものは、神の造り給ふた自然である、同時に自然を歌へる文學美術である、ブラオニングの詩中「小兒の神觀」てふ詩がある、云く「神高きに在すと人の言へば、我は仰ぎ見ぬ松の梢、されど神は見え給はざりし」とこれ首句である、神を慕ひ神を見んとて求むる切にしてあどけなき心を見ずや、「さは言へ造り給ひし自然の中に、いづこより漏るゝ聲かは知らねども、ヒシと我が身に染むばかり、御手に觸れけん心地ぞする」とこれ終句である、哲學者でも、思想家でも、倫理學者でも、又科學者でも、これ以上の言葉を言ふことは出來ない、終日春を尋ぬるも、春の姿は見えない我家に歸つて軒の梅ケ枝に春は來てあつたと云ふ事があつて人一度び奥山深く分け入りて山靈の氣身に染むところ孤座して天地の神に祈禱を捧ぐるの時必ずや

云ひ知れぬ一種の思ひに滿されそこに始めて神の御姿を認めることが出來る、私共常にこの思ひを持つて神に接觸し、朝に夕に聖書を繙き瞑想を凝らし祈禱を怠らずんば知らず識らざるの間に我等の靈は養はれて、美しき心靈の光遂には出でゝ顏面に輝くに至るであらう。

私共日本人は古より靈性修養に資すべき良き書物を惠まれない不幸の國民である、近時坊間に行はるゝ文學書及詩文は云はずもがな、蜀山人の詩集、古今集、其中に輕妙の文字、綾羅錦繡の句はあるが靈的修養に貢獻する所は極めて少い、今こゝに舊約聖書中の詩篇を繰り返し〳〵て深く味ふの時はブラオニングやテニソンやロングフエローやウオルヅオルスの與へざる或物を發見するではないか韓退之の語に人の能く人たるは其腹に四書あるに依ると云ふことがあるが私は改めて人の能く人たるは其腹に聖書あるに依ると叫びたい。

第二章　心靈の偉大

我なんぢの指のわざなる天を觀、なんぢの設けたまへる月と星とをみるに、世人は如何なるものなれば、これを聖念にとめ給ふや、人の子はいかなるものなれば、これを顧みたまふや。

（詩篇八章三節四節）

思へば心靈ほど偉大なるものはない。從來敎會では人は罪にそめるもの、墮落せるもの、實に見る影もないものとしてをつた。成程人間の一面は誠にそうであつて中には鳥獸にも劣つた生活をして居るものも少くない。曾つて米國の紐育で貧民窟を見に行つて、アヽこれでも人間か、何のためにコンナ生活をして生きて居らねばならぬのかと思つた事がある。が然し夫れは朽つべき肉體の事であつて、一度人の靈魂の事を思へば決してそうでない。ヘンリ、ワード、ビーチヤーが、停車場で手も顏も黑光りに光つて居る新聞賣子を抱いて、其頰に接吻をした時或人が先生汚いじやありませんかと云ふと、ビーチヤーは『彼の中にも限なき魂があると思へば可愛くて接吻せずには居られぬ』と云つたと云ふ

話がある。若し人あり、深夜前庭に立ちて蒼空を仰ぎ、幾千萬の星辰が燦然として輝き、天體が無音の樂を奏して運行するを見、而して翻つて我と我身を顧み來るならば、何人も古の詩人と共に、いかなれば蛆虫にも比すべき吾等を斯も顧み給ふかと叫ばざるを得ないであらう。人の子はいかなれば之を聖念にとめ給ふやと彼等が歌つたのは、是れ實に心靈の偉大を自覺したものゝ叫びである。

去る四月のヒッパート、ジョーナル誌上に、信仰個條と云ふ一文があるが之れは近來の大文字である。其中に『人の靈魂は其の議論よりも大なり、又其行よりも大なり。人が自らの失敗と不完全とに屈せずして、理想を實現せんと欲して已まざる所以のものは、自己の裏に合理的なる無限大の意志の存するを自覺すればなり』云々とあるが、實に人の魂はその事業や議論や又は成敗以上遙かに大なるものである。人は時とすると神など云ふものはない、人間は此世限りのものだなどと云ふことがある。然もイザ死ぬとなれば何人も矢張り永遠生きたいと希ふものである。之れは實に裏なる靈魂の自然の叫びである。曾て

私が東京で某博士を訪ふた時、博士は神はないと云はれた。所が共に卓を圍んで夕餐の膳に向ふと、自から食前の祈禱をせられた。博士は之れは習慣だと云はれたが、思ふに博士は議論でこそ神はないと云はれるが、博士の靈魂は神のないと云ふ事を承知しないのである。世の中にはそう云ふ人がよくある。之れ即ち靈魂が議論以上、現實以上、より大なる所以である。以下各種の方面より少しく之に就て述べて見よう。

第一、心理學上の現象。近年唱らるゝ心理學上の學說によれば人には二つの意識即ち現意識と其奥に潜める副意識がある。換言すれば今する事の後ろに隱れ居る更に大なる意識があるとの說である。

例令ば演說を聞く、如何にもそうであらうとか、之れは自分が思ふ所と符節を合する樣だとか思ふのは、云はゞ潜める意識が出て來たのである。又祿な腹案もないが、イザ演壇に立ては感興大に湧いて雄辯滔々滿堂を壓すると云ふ如きも、此の副意識の作用に外ならぬので、之等は現意識より潜める意識が大なるを示すものである。之から考へても人の靈魂は現在の吾等が自ら知るよりも

遙かに大なるものであるとが分かる。

第二　道義學上より見れば如何と云ふに人の希ふ所は實際行ふ所よりも遙かに偉いものである。例令ば人格の高い人が、節を變じ其人格を毀けた時世は堂鼓を鳴らして之を責むる。夫を責むる人は如何なる人物かと云へば其人格に於て品性に於て却てツマらぬ人である。之れは即ち其人の道義上の理想が云はしむるので即ち現實以上である。又自分が密かにツマラぬ事をやる、人は一人も知らぬけれども衆目の間に曝された如き悔恨を以て之れで男が立つかと責めらるゝは何のためか。云ふ迄もなく魂が責めるのである。是前にも云る如く人の魂が其行ふ所よりも大なる所以である。

第三　文學上より見れば如何、人の心は現實に滿足が出來ぬものである。泰西に於ても佛蘭西のゾラの如き獨逸のニヰツエーの如き露西亞のゴルキーの如き盛に寫實主義、現實主義を主張した。之等のものは一時は成程社會の迎ふる所となるかも知れぬが、決して永續的のものでない。現實の心は多少之を喜ばんも魂は承知しないのである。我國でも近頃自然主義など云ふ狂病的な文學が

勃興した。其おかげで色々な弊害が起つて來た。然し如何に墮落せる日本でも靈魂は之を許さぬのである。西洋でも常に現實主義を理想主義が仆す。我國でも早晩理想派の大文學が起り來るに違ひない起らねばならぬのである、何となれば覺醒せる偉大なる靈魂は云ひ難きの嘆きを以て高き文學の起り來るを望むからである。

第四　哲學上よりは多く云ふを要せぬ。大哲プラトーンは現在の社會に滿足し得ず彼の有名な理想國を書いた。又トーマス、ムーアも同じくユートピヤーを書いた。之等は何を意味するか、云ふ迄もなく現在に滿足せぬ我が靈魂の憧憬を具體的に現はしたのである。其他何れの哲學者と雖も理想を說かざるはない、之れ吾人の現在は永遠に生くる魂の住家としては餘りに小なるからである。

然らば主イエスは如何に敎へ給ひしか。主が人の命は全世界よりも貴しと喝破せられたのは、人心の偉大を洞察したる萬古不易の眞理である。イエスが如何に人の心を尊ばれたかは癩病人、稅吏、罪人を愛し、之と飮食を共にした事でも知る事が出來る。人の心を愛するとは即ち其の魂を愛するの謂であつて、

馬太傳五章六章七章の絶大なる教訓は皆之れ限無く人の魂を愛するキリストの告白と云ふべきものである。彼は十字架上の今はの際にすら、人の靈を思ひて、父よ彼等を許し給へ、彼等なす所ろを知らざればなりと祈り給ふたのである。我等は此の我等の衷に秘められて居る所の靈魂は慥に偉いものである事を認めねばならぬ。而して之れが修養を心掛けて、益々其大を完成せねばならぬ。人は肉體の爲めには絶えず食物を要求して、もし一食にても得ざるに於ては不平を起すものであるが、何故夫れよりもモット大切な我が靈魂のためには食物を取らうと努めぬであらうか。何故靈魂の食物を得るとに熱中しないのであるか。之には種々の原因もあらうが、我等の祖先から之を忽せにして居つた事も大なる原因である。歐米の立派な人々を見るに彼等は先祖傳來實に高潔なる宗教的生活をなして、父より子に子より孫に、其清い高い信念を傳へたものである。彼の新英州又は英國蘇格蘭の如き處で實に見上ぐる計りの慕はしい大人格に出逢ふ時に迚も我等が企て及ぶべくもあらぬやうな、一種の深い高い尊いものがあるとを見るのは即ち之である。然し過去は追ひ難し、今や我等は自らを起點

として次に來るべき我等の子孫のため奮然として此大事業をなさねばならぬ。之れは敎育家が如何に骨折つた所が又た報德敎や孔子敎が如何に奮發した所が、眞に靈魂の尊貴なる所以偉大なる所以を自覺し、靈魂をキリストに結びつけ神に結びつけねば到底駄目である。此宗敎的修養を外にしては斷じて不可能である。故に私は我が國民が一刻も早く此の靈魂の尊貴なる所以に目醒めて魂の修養を努め、鹿の溪水を慕ひ喘ぐが如く我靈魂は活ける神をぞ慕ふと歌ひし古の詩人の境涯にまで到達し、先づ自ら高尙雄大なる奥ゆかしい宗敎的人格となるの日の來らん事を希望して已まないのである。

第三章　靈育と德育

我等の語る所は秘密たりし神の奥義の智慧なり此は創世の先より神の預じめ我儕なして榮を得しめんが爲に定め給ひしもの也、此世の有司に之を識もの一人もなし若し識ば榮の主を十字架に釘ざりしならん、錄して神の己を愛する者の爲に備へ給ひしものは目いまだ見ず耳いまだ聞ず人の心いまだ念ざる者なりと有が如し。

（哥林多前書第二章七節、至九節）

諸君は敎育に三育あるといふ事を御承知であらうと思ふ、即ち智育と體育と德育である、今一つを其の上に加へなければならぬといふことを敎育者が唱へる樣になつた、即ち情育である、譬へば美を愛し美を樂むの情を養ふが如きは即ち情育の一である、又善を好み善を行ふ心を大いに發揮して、善を見ては何うしても之を爲さずしては居られないといふ情を養ふのは情育の一ッかも知れない、けれども情育といふ時には寧ろ美しい情感を養ふといふ事に限つたものではあるまいかと思ふ、我日本では一向さういふ方面には今日まで心を用ゐら

れなかつたのである隨分人の快しとしないやうな言葉を使つたり又見苦しい動作をしたり、又聽苦しいやうな事を云つたりした、人がどんなに不快に思はうが介意ないといふやうな事もある、稍や進んだ國民の間に於ては、所謂文明の上流に位する人々の間に於ては、情感を重んずるといふ事は余程注意されてある、成るべく我四邊に來たところの人々が心持よく感ずるやうに言葉使ひと云ひ動作と云ひ行狀と云ひ、大いに注意する事になつて居る、兎も角情育に付ては我日本よりも大いに進んだ點がある樣に思はれる。

更に其上に加ふべきものは今晩の主題たる靈育といふ事である、德育といふ方面は我日本に於ては勿論であるが、遠き昔に於て希臘にも羅馬にも支那にも印度にも盛んに行はれた事である、殊に我國の德育は希臘、羅馬、支那、印度に比べて見ても劣らざるのみか、遙かに優つて居る點がある、明治維新以來に於ても體育智育を重んずると共に、德育の重んずべき事を大いに唱道し、殊とに二十三年に敎育勅語を賜はつて以來は、何れの學校に於ても一年に二度なり三度なり捧讀式を行ふのみならず、學生には諳記させて居る、ところが學校の

德育は案外効果がないといふ事であつて、獨り當局者が心を苦めて居るばかりではなく、私共までも其効果の擧らない事を見て、是ではならないと思つて大いに心を傷めて居るやうな次第である、何故に効果が擧らないかと云へば餘りに形式に趁り過ぎ、何ういふやうにして君に忠を盡すとか、何ういふやうにして親に孝を盡すとか、又目上の人にはどう云ふ風にお辭儀をするとか、只坐作進退動容周旋といふやうな事が重になつてある、何うしてもそんな事では生きた人間、即ち活潑な心靈を有する人間を薫陶る譯には行かない、夫では決して萬物の靈長として立つ自由の精神を有する人間を養ふ術ではあるまい、彼の軍馬を養成するとか、或は犬や猫を躾るといふやうな事であれば、何歩進んで止まれ、幾分間止まつて居れば更に幾歩向ふへ向つて進め、或はワンと云はなければ此魚は食はされない、ワンと云へと云ふやうな風でも夫で躾が屆くが、自由の心靈を有つ所の萬物の靈長たる人間はさういふやうに外部から來るところの方法ではそんな薫陶方では立派な道徳家になる事は出來ない、何うしてもさういふやうな事では、多くの人々が敬慕するやうな人格を磨き立つる譯には行

かない、折角出來上つたところの人間は何うであるかといふと、宛然木偶見たやうなものになつてしまふ、かくの如くして養成された人には人が笑ふやうな時にも瞬きもせずして澄し込んで居る、敎育勅語を捧讀する時は直立不動の姿勢を取らなくちやアならぬ、讀終つた時には最敬禮を行はなくちやアならぬといふやうな事丈はチヤンと出來るのである、けれども其人が一度敎場を退いて宿舍に這入るか、或は學校を卒業して會社員になるか、銀行員になるか將又店員にでもなるかした時には、其敎育勅語で磨かれたところの直立不動の姿勢も、最敬禮を行ふ事も何にも役に立たず非道德の行動を敢するものが尠くないやうである。

そこで今日はマア一歩進んで德育といふものは人格を磨かしむるものである、德育といふものは立派な品性を養ひ育つるといふ事に着目をしなければならない、之をやるのには今までの方法では何うしても不可ないからして、大いに一ツ古への學問をさせた方が宜い、夫には論語や孟子を讀ましたら宜からう、是は今までの敎育が誤まつたといふ、即ち今までの敎育勅語に基づける德育では

充分に目的を達する事は出來ないからして、何でも一ッ方法を考へなければならぬと云ふ事丈は明白である、而して替へるといふ方法がどんな方法であるかといふと、虫の食つた古い論語、又は孟子を此所へ引張り出して來て皆に讀ませる、尤も夫を讀めば決して無用なアない現に私の如きも論語を讀んで、アゝ實に是は聖書にでもあるやうな良い言葉であるといふやうなのを悉く書抜き、又孟子を讀んで、是は實に自分の心に刻み込むべき言葉であるといふやうなのを悉く抜萃して、夫を小さな本にして座右に備へて居るくらゐに論語も讀めば孟子も讀んだけれども、夫を千度萬度讀んで見たとて、果して夫がどのくらゐな益があるかと尋ねて見れば、何うも孔子さんはなか〳〵エライ人である、孟子はなか〳〵辯士であつて、能くも斯ういふ工合に言廻したといふ事に就ては非常に感服する次第だが我が人格又は品性を磨き養ふ上に於ては、格別の効がないと云つても宜い譯であつて私に取つては格別の効をなさぬのである、夫はお前が基督教に氣觸れて居るからして、何程やつてもさういふ心でやるからして決して益がないといふ人もあるであらう、然れば孔子や孟子に心醉したとこ

ろの漢學者とか、或は今日論語孟子を讀むところの人が何れくらゐに立派な品性を養ふて居るか、何れくらゐに見上るやうな人格を養ふて居るかと尋ねて見ると、其人達も大いに失望して、思つた程の効能もなかつたといふ事に歸着するであらうと思ふ。私は德育といふ方面は今お話しするが如く論語孟子を讀むといふ事も、或は孔子孟子のやうな人格を慕ふといふ事も極めて善い事ではあるけれども、夫丈では何うしても目的が達せられない教育勅語を尊重して、さうして動容周旋禮に當るといふやうに心懸けた者は、其教場に於ては成功をしたが、教場以外に於ては失敗を來して居るといふが如く、論語孟子を讀んで味ふところの者も、論語孟子を讀んで居る其瞬間は大いに益があるやうであるけれども一度其本を疊んで棚の上に置いたといふ時には、何れくらゐ其感化が殘つて其人物をして高からしむるか又清からしむるかといふ事は問題であつて、何うも普く効果を奏する譯には行かない、此德育といふものゝ目的は何所に在るかと云へば、私共をして仁を行ひ義を行はしむるといふ事に歸着するであらうと思ふ、尤も古人を調べて見ればさういふやうな養ひ方に依つて伊藤仁齋親

子、中江藤樹、貝原益軒の如き人も出來て居るからして、滿更効がないといふ事は出來ない、ところが明治の今日に於て夫が効がないといふは何ういふ譯であるかと云へば、昔の人は一生懸命に夫に心醉してやつたから夫丈の効があつたが、明治の人は傍ら仕事にやるから効がないといふ人があるかも知れないけれども、實はさうぢやアない、藤樹先生と云ひ伊藤仁齋先生親子と云ひ貝原先生と云ひ、是れは百年に一人か二百年に三人より出ないやうな極めて上根な人間であつたので、非常なる自信力と非常なる勢力を有した方であるからして、彼の先生達が孔子の教へに行かずして佛法に行つたならば、必らず佛法の善智識になつて居るに違ひはない、彼の先生達が軍人になつたならば、名將となつたに違ひはない、さういふやうなエライ先生は何の道を取つたとても極めて上達をするのである、只私が問題として考へなければならないと思ふ事は百年に一人出るとか二百年に三人出るとかいふやうな大人物ではなしに、さういふやうな人は放つて置いても一人で進歩發達をして行く人である、放て置けば發達の出來ない放て置けば進歩の出來ない否進歩發達が出來ないのみか墮落すると

いふ、詰らない人間になつてしまふといふやうな人々を、何うしたらば德育で遣り付ける事が出來るかといふ事が問題である、西洋諸國の狀態を見て、何ういふやうな所が一番德の盛んな所であるか、何れの國が一番能く公德が行はれて居るかといふ事を調べて見ると、論より證據靈育の盛んな所である、言換れば宗教々育の能く行屆いて居る所である、然らば何處の國かとお尋ねになるならば、毎も私がお話し申す如く英國であるが、英國といふ中にもスコットランドである、次は米國であるが、米國といふ中にもニューイングランド、ボストンを中心として居る其四邊の五州六州といふ間であらうと思ふ、宗教の最も盛んなる所に麗はしい人物が居る、宗教の最も盛んなる所に美しい家庭がある、宗教の最も盛んなる所に美しい社會道德が行はれて居るといふ事は、宗教家であるところの私共が之を論ぜずとも、苟くも耳を持ち眼を持つた人々が佛蘭西、伊太利、葡萄牙、西班牙。夫から露西亞獨逸等を歩いて、而して後に英國に踏込んでスコットランドに這入り、更に轉じてニューイングランド諸州の間を巡廻つて見聞し而して聽く物見る物觸

る物に就て公平なる觀察を下す事の出來る人であつたならば、確かに心の底に此所は奥床しい、ア、彼所には實にア、いふやうな美しいものがあると銘肝し、自然に頭が低つて慕はざるを得ないやうになる事あらう。

然らば諸君が短刀直入私に向つて靈育といふものは何かと問はるゝであらうが、此靈育といふ言葉は宗教家の間に於ては決して今日に始まつた事ではない、昔から行はれた言葉である、殊に英語に於てはスピリチユアル、カルチユールといふ文字を使つて、頻りに唱へられて居つた事である、けれども靈育の二字は只宗教家が之れを唱へた丈であつて、未だ大中小の學校教育に從事するところの教育家の間にまでは普く及ばなかつたのである、ところが今日亞米利加の大學教育に從事して居る人々の中で、オベリン大學の校長キング博士の如き、又ノルスウエスターン大學校のコイ教授の如き、其他スタンフオルド大學の理學の講座を擔當するスタルボク氏の如き、ハルワルド大學のロイス博士の如き、又はクラーク大學の校長ホール博士の如き、口を開けば靈育の重んずべき事を唱へて居るのである、靈育といふのは體育智育德育情育と段々經登つて來て、

其總ての教育の冠として、尊重すべきものである、靈育とは御互ひ銘々の心が智、情、意といふ三つに岐れる樣であるが、其智、情、意といふ三つに分たる其奥に、モー一つ奥深いところに潜んで居るものが即ち靈、或は心靈といふ文字も使へば、本我とか小我とかいふ文字も使つて居るのである、兎に角私共の心の働きが智となり情となり意となつて大いに發達をする、其大本源に遡つて其所に總てを繋いで居るところのものを指して心靈と稱するが、其心靈を智として養ふには科學哲學がある、之を意として養ふには道義學がある、之を情として養ふのには審美學がある。

然らば心靈其者を養ふのには何うしたら宜いかと申せば、是は何うしても此天地宇宙の奥に在す大實在者といふところの大いなる心靈、我靈を此世の中に生ぜしめた大靈と相結び、此靈に觸るゝに非ざれば何うしても發達する事は出來ない、何うしても成長する事が出來ないといふ事丈は明白である、諸君の中には我裏に靈があるといふ事丈は自分も承知であるけれども、天地宇宙の奥に眼に見えないところの大靈があるといふ事は何うしても分らない、分らないけ

れども何か其所に在らねばならぬと思ふて、假りに在るとして置くのだといふ考をお起しになる方がある、夫は丁度佛法の考と同じ事である、如來といふのもあるものじやアない、菩薩といふものもあるものじやアない、只我心はある、我靈はある、我靈の中に極めて高尚なる極めて奥深いところの理想がある思想がある、夫を如來とか菩薩とか名づけて假りに之を佛として拜んで居るのであるといふ事であるが、若しそういふ事であると、丁度案山子を此所に立てゝ鳥を威すのと同じ事である、我靈が……我心の他には何にもないものである、けれども假りに我心の内に在るところの理想なり思想なりの粹の粹を如來とか佛とか名づけて、假りに在るとして置くといふ事であつたなら、假りに在るとしたといふ事を我心が知つて居るから、夫は作物である、夫は僞物であるからして、夫で我靈を養はうと思つても出來ない、夫は丁度諸君の前に極めて巧妙な畫工にパンの畫を書かせて、夫から牛肉をビステキにしたり或はフライにしたり、或は其他の美しい料理にした畫を書かせてさうして、パンと洋食の總てを諸君の前に掲げて、諸君が毎日其パンを睨み、其牛肉の色々の形に變つた料理

を睨んでお在でになつたならば、諸君の身體が夫れで成長するか、夫で諸君の身體が確かに發展するか、到底さういふ事では發展はしない、到底さういふ事では成長はしないだろうと思ふ、矢張り客觀的に存するところの牛肉を料理した物を手に取つて食はなければ血液にならない、食はなければ身體の滋養にならない、して見ると印度思想は別に心の外に何もない、けれどもないといふのでは何うしても人が承知はしないからして、假りに在るとして置いて是で安んじてやるといふやうな事で養ひをしても夫では養いが附かない、然らば道德學者がいふやうな工合にナニ神も佛もあつたものじやあない、あれば結構であるけれ共、別にあるといふ事を極めなくても人間は品性を養ひさへすれば宜い、人間は人格を磨きさへすれば宜い、人間は何所までも高き理想を養ひさへすれば宜いと云つて押へ附けて見れば何うなるかといふと何うも押へ附けられた時には何だか夫で宜いやうである、けれども押へを取つてしまつた時には何うであるかといふと、心の中は何にも無いやうになつて、更に人生といふものは味のない詰らないものになつてしまつて、是で

は何うもならぬといふ事に成行くものである、今朝も私がお話しいたした如く多くの賢者や學者が世に出てゞ、口の酢くなるまで否な人の耳に蛸が出來るまでに道德の講釋をなさる、人は正義の道を踏まなければならない、人は仁愛の道を行はなければならないといふ事を講釋なされて、幾らかの人は立派な人間になつたけれども詰り其敎は世の中に行はれないやうになつてしまつたといふものは、即ち何うも其深い所に這入つて養ふ心がないからである、品性とは何であるか、人格とは何であるか、仁義五常の道を行ふといふのは何であるか、私が見るところでは是は花である、是は實である、花なり實なりといふは何うして木の枝に着いたかと云へば、其枝が幹に連なつて居るからである、其幹は根があるからである、其根は眼には見えない人の眼には觸れないけれども、地の下の深い所に這入つて、上に十間伸びて居るなれば地の下にも亦十間這入り込んで、そうして地の下に在るところの滋養分を取つて之を幹に送り、幹から枝に送り、枝から遂に花として現はれ、實として現はれて來るといふ事になるのである。

私が今晩諸君の前にお話しをする所ろの靈育といふは即ち夫である、德育の極致は正義を行ふ人になるといふ、正義を行ふ人になれば即ち夫が品性となる、そこで立派な行狀丈が出來る、ところが其正義の道を聽いて、そうして夫を行ひ得るといふ人は稀な人間であつて、普通一般に於ては只正義の道を聽いた丈では行ふ事が出來ぬといふ事で失敗してしまう、然らば靈育の極致は何であるかと諸君がお尋ねになると靈育の極致は信仰といふ、信仰に始まつて愛に終るのである、夫れは彼得後書の一章の五節以下に信仰に德を加へ德に智識を加へ、智識に撙節を加へ撙節に忍耐を加へ忍耐に敬虔を加へ、敬虔に兄弟の睦を加へ兄弟の睦に愛を加ふべし」とある彼所をお開きになつてよくお讀みになれば其信仰といふものが眼に見えない所、即ち智、情、意の三ツに岐れて働らく前の心靈、極めて奥深い所に在る心靈が天地宇宙の奥深い所に在つて、人の眼に觸れない其大實在者の靈と相結び相觸れて、さうして其奥深い根本から養ひを取つて來るといふ、夫をイエス、キリストは誰でも分り易いやうに、何人も悟る事の出來るやうに天に在ます我儕の父よと云つて祈れと仰しやつた、密に祈る

といふばかりではなくして、イエス、キリストは天の父の御慈愛を人間にお示しになつてさうしてどんな下根の人間でも、一丁字を知らないやうな人間でも、天の父の深い〳〵御慈愛が其人の腹の底へ一度示されると、其人は茲に一種の光明に觸れて、其天の父を慕ひ天の父に憧れて、己が所有物も我靈も我身體も、何も彼も悉く天の父の御前に差出して、獻身犧牲の生涯を以て神に仕へやうといふ心になる、是れが宗教である、己が持てるところのものは財産でも學問でも名譽でも爵位でも、尚己が生命までも神の聖前に差出すといふ心を此所に起さしむるといふのは、是れ非常なる力である、其の力を人々に與へて、さうして人々の心をズーッと高いところへ引揚げてしまう、既に高い所へ引揚げられて、さうして朝に夕に天の父よと云つて祈り、朝に夕に其の父の御聖德に感化されて、其の愛に率かれて居るといふ事になれば、我衷には神の子といふ高き理想が生じて來る、我衷には天の父が偕に在すから何をも恐るゝに足らないといふ慰安が出て來る、さうなれば、我心の奥底がズーッと濕ふて來て、心廣く體胖かなりと云ふ心持になるのである、さういふやうな人が此所に出來たとす

れば其人の顔を見て御覽なさい、其人の人格を見て御覽なさい、實に麗はしい實に尊とい、何うしても帽を脫いで敬禮をしなければならないやうなものがあるのである、靈育も此妙境に達すれば眞に難有ものである。

若し諸君がヂョンバンヤンといふ一人物を御研究になり、又はバンヤンが著した天路歷程を御研究になつたならば、私のいふ事が能くお分りになるであらう、バンヤンといふは若い時には實に仕方のない男で嘘言を吐き人を呪ふやうな事もする、殆んどあらゆる惡事を行ふて遂に零落果てゝ、日本で云へば煙管の直し見たやうなことまで行つたのである、一日彼れが商賣用で或人の家を訪ねた、すると二三の老婦人が車座になつて話をして居る、聞くともなしに其話に耳を傾けて居ると、婆さん達が交る代る心靈上の話し、交る代る安心を得た話しをして居る、バンヤンは仕事をして居つたが遂に仕事を廢めて、其話しに全身耳となつて聞入つて居つた、話しが終ると彼は我に歸り、アヽ實に驚いた、實に驚いた、彼の三人の婆さん達は敎育もなく、一丁字も知らないといふやうな無學な婆さん達である、然るに今の話しは我耳には天の使者の話しのやうに

聞えた、彼の三人の婆さん達の顔を見るにつけ、彼の婆さん達の美しい品性を見るにつけて、我は恐ろしいばかりに罪人である何うして斯ういふやうな恐ろしい罪を行ふて居つたか、此所で一つ我は生れ變つて立派な人間にならなければならないといふ、無限の感がバンヤンの心の中に起り來つたといふ、是から彼は天の父を慕ひ、キリストを慕ひ、生命々々、限りなき生命と云ふて一生懸命に天の父に寄縋り、キリストに寄縋つて、さうして罪を憎み汚れに打勝ちたいと思つて非常に奮闘をいたして居つたが、遂に非常なる人物となつたのである、夫れから侃々諤々の辯を揮つてさうして斯道を說いた、當時英吉利に於ては免許を得た即ち按手禮を受けた牧師の外には、英吉利の政府の免許を受けた敎會員の外には道を語る事が出來ないといふ制度があつた、夫に反對してバンヤンが頻りに道を說くのであるから、到頭牢屋の中に打込まれた、彼れは牢屋の中に十二年の間いれられた其の間に何をいたしたか、即ち著述に從事した、初め筆を執つて天路歷程を書掛けた時には手が震つて何にも書けなかつたが、聖書を精讀しば結果立派に靈育上の書物を著す事が出來た、是れは二十年前ま

では聖書に次で人々が愛讀した書物であつた、天路歷程は實に面白い書物であつて、此方の靈的經驗が進めば進む丈分るけれども、其の經驗のない者には分らないと云はれた書物である、使徒パウロが大人格に成つたのは、今朝お話しした如く、ステパノが石にて打殺された時に笑を含んで、自分の身を害する人々の爲に祈禱をして此世を去つたのを、深く感じたからである、又バンヤンが斯くの如き立派な人格に成つたのは、三人の無教育な女達が無教育ではあるけれども、靈育といふ方面には非常に進んで居つて、未だバンヤンが聞いた事のないやうな心靈の世界の話しをしたからである、諸君、曩にお話しました如く藤樹のやうな仁齋のやうな、益軒のやうな人間ならば、夫は別に是れといふ靈育を與へなくても其自信力と其勢力を以て孔子の教を取れば、聖人賢者といふところまで行く事が出來佛に歸すれば善知識となれる人である、けれども私共はさういふ上根の人間に生れずして、普通下根の人間に生れたところの者が、罪を解脫し慾に打勝つて、立派な美しい人格となりたい、尊い品性になりたいといふ事であるならば、麗はしい花を見、麗はしい實の熟つて居るのを認むる

時に方つては、地の下の見えない深い所にまで根が張つて居る事を忘れてはならない、其根があつて初めて花となり實となるといふ事であれば、私共の德育のモー一ツ後ろに靈育といふものが控へ、さうして眼に見えないところに於て理想を養ひ精神を養ひ趣味を養ひさうして天の父を拜し天の父を慕ふ事に依つて、右の如きものが私共の內に發し來つた時に初めて夫れが四肢百躰に現はれて來て、諸君が平素御希望なさるところの人格も出來れば品性も出來る、人格が出來品性が出來れば、其人格あり其品性ある人が行ふ時には義の行ひとか仁の行ひとか、不言不語の內に五常の道は獨り行へるやうになる、ところが動容旋禮に當るやうにといふ事を何ぼ考へて居つても、此人格が高まらず此品性が清まらなかつたら到底出來ない、然るに其人格や品性なるものは、我々下根の人であつては何うして養ふか我々凡人であつては如何にして之を養ふかと云へば其上根の人、即ち曩に列擧したやうな人物が生れながらにして有つて居るやうなものゝ我々は生れながらにして有たないから下根だ、夫をキリスト、イエスが私共に與へやうとして世にお降りになつたのである、使徒パウロは哥林多

前書の第二章に「目いまた見ず耳いまた聞ず人の心いまだ念ざる者なり」と錄したが、夫が即ちキリスト、イエスが靈の賜物として我々にお與へなさるゝところである、此靈の賜物を得なければならぬといふ事を此所に鼓吹して居る。

私は近頃此方面に於ての教育が足らないと思つて居る、我日本の總ての學校に靈育を施したいのであるけれども、未だなか〳〵さういふ塲合に行かない、切めては基督教會に集るところの我々が、其靈育の何者であるかを深く味はうて、之を我物としたいものである。

更に一言したい事は、斯くの如き靈的實驗を得るのが靈育とすれば、夫は諸君が靜かなる部室に於て膝を曲げて、天の父と御交際なさる事に依つて得らるべきものであるかも知れない、けれども膝を曲げて天の父と交はるに先だつて必要な事は、其靈育に關する書物をお讀みになる事である、然らば靈育に關する書物とは何であるかと云へば羅馬書の第八章である、之と共に哥林多前書の第二章も皆お讀みになる筈である、更に諸君に讀んで貰ひたいと思ふのは約翰傳である、其約翰傳をお讀みなされて何しても其意味が分らないといふ事であ

るならば、不肖私が「約翰傳釋義」といふものを著はして居る、其一本をお求めになり、二度三度初めから終りまでお讀み下されたならば、幾らかお助けになるであらう。

前述の如く德育といふ丈では力足らずして、到底下根の人間に於ては其目的が達せられない、上根の人間ならば自信力と勢力に依つて遺果せる、そこで我々下根の者に於てはいよ〳〵キリスト、イエスがお與へなされた其靈育といふ方面に這入つて、上根の人間が持つて居るものよりも更に優れる心靈の世界の奥妙なる味ひを得ねばならぬ、左すれば夫が自信力となり勢力となつて、上根の人が進んだところよりも更により以上の所にまで進む事を得るので、此所に立派な品性と立派な人格が出來て、諸君が希望せらるゝところの行狀も出來るやうになる、德育と靈育は恰も車の兩輪の如きものなれば此二ツを結び付くるに非ざれば、到底目的は達し得られないどうかよくお考へになつて、一層其意味をお味ひにならん事を希望する次第である。

第四章　不覺の靈力

イエス自ら能力の己より出たるを知おほぜいの人々を顧みて曰けるは我衣に捫りし者は誰なる乎、

（馬可傳第五章三十節）

本節の趣意とする所は會堂の宰にヤイロといふ人があつて或時イエスに來つて其足許に伏して、私の幼き娘が今死なんとして居るから、何卒來て彼の女の上に手を按いて生かして下さいといふ切なる願ひをした、イエスは其願ひを容れて足をヤイロの家にお運びなさる〻途に、多勢の人が押合つてイエスに追隨たからイエスは人の力に擁されて前へ〳〵とお進みなさるやうな有樣であつた、其内に不思議な事には何かイエスのお身體からして力が出たやうにお感じなされ、誰か私に觸つた者があるかと仰せられた、弟子達はこんなに多くの人々が押合つて居りますから、誰が觸つたのか到底分りませんと申したところが、誰か觸つた者があるに違ひはないと云つて其邊を環視しなされた時に、一人の女が恐る〳〵前へ來て私は永い間病氣に罹つて困つて居りましたが、先生のお召

物にでも觸りますれば病氣が治るだらうと思つて一寸觸りましたところが、直ちに病氣が治りましたと申したと云ふことである。

私は近來人間に失望をする、瀧車に乘つて居る人を見て失望をする、又船に乘つて居る人を見て失望をする、電に往來の人を見て失望をするのみではない、博士、學士、道德家、宗教家といふやうな一粒撰りの人を見ても失望をする、表面に現はれた丈の人間を見ると是が神の姿に象つて造られた人間であるならば、神は餘程人間を造り損ひ給ふたのであらうといふ感が起るのである、是が萬物の頭であるといふ事は受取れない、何うも萬物の內にて人間が其上席を占むるとは訝しい話である斯く考へて人間を研究すると、第一己れが淺墓なこと、基督信者になつて以來既に幾十年を經て居るにも拘はらず薩張り詰らない、又他人を見ても心から敬はねばならぬやうな立派な者は多く見當らないので、甚だ失望の至りだと思つて居る。

然るに歷史上に現はれたる人物中で、今尙ほ世に知られて居る人、又は知られざるも、大に優れたる人々に就いて研究する時は、人間は打見たよりもエラ

イものである、成程是れだから神の姿に象つて造られたとも云へよう、是れだから萬物の頭とも云へようといふ考へになつて來る、愈々其方面を調べて見ると、愈々人間の奥床しい事が分つて來て、心の内に大いなる喜悦を生じた次第である、今其研究の二三を擧て見よう。

人間には意識の外に副意識がある事は心理學者の證明する所なれば既に御承知であらう、副意識とは演説をする、オルガンを彈く、手紙を書くなど總て人間が仕事をする時に忠義なる下僕となる者で言はゞ意識の家來である、意識を助くる所の忠義なる下僕である、其副意識の一段高尚なる方面がある、夫を英語ではサブリミナルコンシアスネスといふ、是れは潜意識といふ意味で、心の内の奥深いところに潜んで居る力である、意識を滿洲の野に百萬の軍隊を指揮せる大山元帥に譬ふれば、副意識(私のいふ潜意識)は兒玉大將を長とせる參謀部である、意識を東郷大將に譬ふれば、潜意識は三笠艦に集まつて居る海軍の粋を集めた最も優れたる參謀部である、其滿洲に於ける陸軍の參謀部と、三笠艦に集まつて居る海軍の參謀部の後ろには東京に參謀本部があり、其參謀本部

には海陸軍の俊才が集まつて如何せば此戰ひに勝つ事が出來るかと、智惠を絞り力を集めて居るのである、私共の意識は話をしよう、詩を作らう、歌を詠まふ、畫を描かう、音樂をやらう、樂譜を作らう、と云やうに活きた働きをする、其活きた働きをさせる其後ろに潛意識なるものがある、其所には非常な力が集めてあつて時々驚くべき有樣を現はすとである、意識が大名の表座敷であれば潛意識は奥座敷である、其奥座敷の力に依つて表座敷が活動を呈するのである。

時々世の中に神童といふ者がある、日本では五六歳の子供が巖谷一六も小首を傾けるやうな立派な字を書く事がある、又五六歳の子供が小野湖山も舌を卷くやうな詩を作る事がある、西洋では度々數學上に神童が現はれるが、私の調べたものゝ內には數學上の神童が十八まで載せてあつた、其最も早く算盤の才を現はした者は三歳で、其最も遲く現はした者は十歳であつたが、彼等の才智は實に驚くべきもので、此處に一萬七千八百六十一は何と何を掛け合せたものであるかと聽くと、即ち其尋ねの未だ終らない先きに三百三十七に五十三を乘けたのであると答へた、數を聞くや恰も電光石火の如く直ちに何々を乘けると

即答をなす、如何にしてそんな答へが出來るかと尋ねて見ると自分でも分らないのである、然しこの驚くべき才智も多くは五年でなくなつて、普通の人に歸つてしまう、ピッテルとホエートリーといふ二人丈は其算盤の才が生涯續いたといふ事である、普通の人に一萬七千八百六十一は何と何の數を乘け合すれば出來るかと尋ねれば、なかなか急に答へが出來ない、けれども數學の神童は直ちに三百三十七に五十三を乘じたものであると答へる、實に驚くべきものである、大山大將をして戰に勝たしめたのは參謀長である、其參謀長の下に集まれるは陸軍の大英才である、其の陸軍の大英才と共に數十年間に集められたる地圖だとか、其他軍事に關する書類だとかである、數學の神童が斯の如く電のやうな力を以て數を現はすのは、其神童の心の奥に在る潛意識といふものゝ働きである。

更に進んで詩人が詩を作る事を言て見よう、佛蘭西人にシャバネーといふ詩人があつたが、彼は詩を作り掛けてクッと睡つてしまふ、次の朝起きると、昨日作り掛けて置いた詩の續きが泉が地の底から混々として湧き出づる如くに、

金玉の名句が出て來る、これを速記者が私の說敎を速記するやうに速記すれば茲に何人も及ばないやうな最も優れたる詩が出來たといふことである、尙其他英國で有名なるジッケンスといふ文學者があつて『ミッセスカンク』といふ傑作を著はした、其傑作をなすには奥座敷の方から微かな聲がするので、其の聲に耳を傾むけつゝ筆を走らしたといふことである、希臘の聖人ソクラチスは常に其心の中にデモンといふ魔が居つて、深遠なる考へを彼に與へて呉れたといふ事が書いてある。

十五世紀の頃であつたと思ふ、佛蘭西が英吉利の爲に攻められて、殆んど國の半分は英領になつてしまつた時に、ジャンダークといふ無學なる百姓の娘が此佛蘭西を英吉利の手より救ひ出すのは我が使命であると思ひ、時の帝王に見へて其事を奏聞すると、帝王は殊の外滿足に思召し、政府は一に汝の手に任せるぞといふ特命を與へられた、茲にジャンダークは千軍萬馬を指揮し、佛蘭西を救ふて立派に勝利を得せしめたが、時是ならずして捕はれて火炙の刑に處せられた、これ彼女が十九の年である、無學なるジャンダークが佛蘭西を英國の

手より救はんとの志を興したのは僅に十八才、而も其僅かの日月に大軍を指揮して敵を惱ます事が出來たのは、是れ彼女に兵法に達したる智識があつたのではない、陸軍の事に精通せる智識があつたのでもない、只其の奥深きところに潜んで居つた力が現はれ來つて、斯の如き偉大なる働きを爲しめたのである。

聖書を開いて見ると、使徒パウロは我内に二人の人ありと申して居る、一人は惡をなせよといふ、一人は善を行へよといふ、この善をなせよといふ力が即ち潜意識を意味するのではあるまいか、昔から今日に至るまで代々の神學者がイエス、キリストの頭腦は普通の頭腦ではないと思ひ、其の頭腦の中には神の魂と人の魂とが二ツ相住居して居つたと信じたのである、人の魂といふ方は時に飢を叫んだり時に疲勞を叫んだりして居るが、神の魂は其奥深い所に潜んで居つて、時々其大いなる力を現はしたものである、キリスト、イエスが世界萬人に優れ且つ神の子と唱へらるゝ所以は、全くイエスのお頭腦の中に神の靈が宿つてあつたからだと申すことである、其神の靈は則ち善意識である、猶太の總ての預言者、總ての天才が代々に練上げた所の其宗教の潜意識が、キリスト、

イエスの内に住居をして居つたから、希臘も羅馬も何れの國も現はす事の出來ないやうな宗教の大天才なるキリストを猶太の國が現はすことが出來たと學問上から說明をする事が出來るのである、其他ラフアエルが畫を描いたとか、ミカエルアンゼローが像を彫つたといふ時には、人以上の力が其畫や其像に現はれて居るといふは、此畫にも此像にも、内に潜んで居る靈力が現はれたと申して宜い、潜意識の力は實に偉大なるものである。

諸君は斯樣な話しをお聽きになれば不思議だ、實に不思議な事だと思召すかも知れないが、何にも不思議な事はない、或婦人が子供を風呂に入れて居つた時に、俄かに火事だ、サア火事だつといふ騒ぎになつた所が、屠弱き婦人が其風呂桶に子供の這入つた儘引抱へて外へ出したといふ話がある、其力は何所から出たのであらうか、其婦人は平素懸命の力を出して見ても、大方此の見臺が上らぬくらゐだが、ソレ火事、子供の命に關はるといふ大事が眼の前に現はれた時には其屠弱い女の手を以て、風呂桶に子供の這入つたまゝ外へ出すといふ力は何所からくるのか、肉體の力の上にも斯ふいふ潜んだ力がある、私共でも

平素相撲を取れといふ事であれば、誰にでも負ける事を自覺して居るが、人間の一大事といふ場合になれば、平素力のない私でも五人や十人を毆り倒すくらゐの事は譯はないと思ふ、斯樣に只ならぬ力が肉體の上に加はつて來るのである、肉體の上に加はつて來る力は肉體の力であるが靈の上には只今說明した通り詩を作る、書を描く、彫刻をする、等の場合に、到底人間の力ではない、神の力といふべきものが現はれて來る事を見るのである、道德の上に於ても、亦斯くの如き現象を見る、二十三年も牢獄に繫がれて罪といふ罪は悉く犯し、放火もすれば盜强もする、人殺しもすれば皆樣の前に云はれないやうな罪を幾度犯したか知れないといふ者が、今日私共が說敎に行けば實に親切を盡して、寢床の世話から食事の世話、汽車に乘れば汽車の世話、船にのれば船の世話をすると云ふ其殊勝なる有樣を見る時に、人間以上の力が彼れの上に加はればこそ、極惡の罪人が斯かる殊勝げな男になつたかと思はるゝことである、實に人間には善意識といふところに人間以上の神の力が加はつて來て、人間では出來ない道德上の生れ變りを得せしむる事を見るのである、使徒パウロの生れ變り、オ

ーゴスチンの生れ變り、イグチショスロヨラの生れ變り、聖フランシスの生れ變り、今日我々が眼の前に見る人々の生れ變りも凡眞個の生れ變りであれば皆これ潜意識の上に人間ならざる神の力が加はつたのであるといふ事は、私が信じて疑はない所である、然らば此潜意識は何所に通じてかゝる力を現すかと云ふに、此は靈の世界に無線電信で通じて居る、我々の心の奥まりたる所に潜んで居る靈の力は眼に見えない天國に通じて居る、我々の衷情に、己も氣づかないやうな所に潜んで居るこの靈能は天地の奥に位したまふ天の父に通じて居るといふ事は、心理學者が學問の上から今日證明てゝ來たのである、只聖書に書いてあるといふ事丈ならば、宗教家の寢物語りであるといふであらうが、英國に於いて心理學者の大家と仰がれるマヤ博士の如き、或は亞米利加に於いて心理學の大家と仰がれるゼームス博士の如き人が之を證據立てゝ來たのである、雷に心理學者が之を證據立つるのみならず英國の科學界の大王と呼ばるゝボルミンハム大學のサーオリオルロッヂは、科學の方面からして人間の心の内に潜まれたる靈は、天地の奥に在る靈なる神と相通じて、此靈なるものは未來永劫

決して滅ぶべきものでない事を證明てゝ居るのである。

諸君、其潜意識の中に在るものは神の力といふよりも、寧神が其處に在すと云つても宜いくらゐのものである、主イエスがヤイロの家に足をお運びなれた時に、女がお召物に觸つたが、主イエスから力が現はれて、其女の病ひが立所に癒えたといふは潜意識から力が出て行つて、其病ひを癒したのである事は、今日心理學者が催眠術の上から證據立つる事が出來るであらうと思ふ、けれども主イエスがエリコに於いて桑の樹に登つて居るザアカイに降りて來い、今夜汝の家に宿ると只一言話され而してザアカイの家にお這入りになつてから未だ一言の說敎もなさらぬのに、ザアカイは、主よ私が他人から無理な事をして金を奪つた事があるならば、之を四倍にして返しませうと罪の悔改めをしたのは、キリストの善意識に在るところの靈力が現はれて、ザアカイを悔改めしめたのである、主イエスがお弟子方の船にお乘りなされた時に、まだ一言も言葉を發しなさらぬのに、ペテロは此罪人より離れ給へと言て、キリストの前を飛退いといふのは、何かキリストの靈力が現はれて、たペテロに其罪の深き事を非常

に感ぜしめたものであらうと思ふ、主イエスが此靈力をお持ちなされたばかりでない、フランシスもザウヰエーも之を有つて居つた、今より凡そ七八十年前米國に於いて盛んに道を傳へたフヰニーの如きは紡績工場に行くと、サアフヰニーが來たといふので、紡績の女工共が、クス〳〵笑ひ出す、大方其姿の可訝しいのを見て笑つたのであらう、其時フヰニーがクスクス笑つて居る女工を一瞥すると一言の說敎をしないのに、其娘達は其所に屈んで、罪を悔いて泣叫んだといふ事が記されてある、三年ばかり前に英國のウエールスに現はれた、ロバーツといふ青年が集會に行き、是から讃美歌を謳ひませうとの只一言を發し、其讃美歌を唱へ出すと、其所に集まつて居る人々は皆罪に責められて泣いて罪の赦しを求めたといふ事が書いてある、是等は群衆心理といふ方面から幾分か說明が出來るに違ひはないのであるが、私は宗敎上から之を見ると、人間ならざる神の靈力が彼等に潛んで居て、これが彼等の人格を通じて自己には分らぬが何時か其力を現し人々に罪を悔改めさせるのであると思ふ、此力が基督敎になかつたならば、基督敎は既に此世界の表に存在して居ないであらう、若しあ

つても佛教の如くに詰らないものになつてしまつて居るに違ひはない、けれども此力が時々現はれ來つて、枯れんとする時に濕潤を與へ、死なんとする時に活力を與へ、さうして神の教會を今日まで活かして來たのである、今にも我日本に於いて其靈力を有する人があると思ふ、これは所謂不覺の靈力で、機があれば力を得て一ッ動かしてやろうなど、思ふ人には其靈力はない、謙遜にして神の聖意に叶ふやうにと殊勝な精神を以て心から神に事て居る者が、何時しか其奥座敷即ち潜意識から神の力が非常な勢ひを以て現はれ來るのである、私は常に靈力が知らざる内に現はれて、人を動かす事を望むばかりではない、私共の道徳力も亦潜意識として思はず知らざる内に現れ人々が其の前に出れば、もう其罪を謝らなければ堪へざる苦痛を持つやうになるだらうと思ふ、只私が希望する所は、智識上に現はれて居る天才が道徳上、心靈上に現はれて、さうして死せるが如き信者、枯れたる如き信者を活かして、遂に神の御國が盛んに世界の表に擴まる事である、けれども其力は求めて得られるものではない、只私共が求むる所は日々にキリストを學び、且つ意識上に於てキリストを理想とし、

キリストを救主としてキリストの目の前に行きたいといふ考へで一生懸命に努め勵み朝に夕に祈禱を以て神に近づいて行く內に、何時しか潛意識の神の力が現はれて來て、自分は知らざるに、自分の奥座敷に實に感謝するばかりのエライものが現はるゝといふ事となるのである、只諸君と共に努めたい事は我々が目を覺まして居り、我々が生きて居る以上は一生懸命に努めて、不覺の靈力我が知らない靈力が我の上に加はつて來るやうにならねばならぬ、キリストは自分の身體から力が現はれて、彼の十二年血漏を煩つた女が癒されたといふ事は一言半句もお求めなさつたのではない、お祈りなさつたのではない、是は神より賜はつて其所に行つたものである、私共も神に近づき神の聖意に叶ふやうな信仰を養ひ、而して立派な人格を築き立てゝ行くならば、思はず知らず其力が四方の人々を感化するやうになる、彼れを一ツ感化しようといふやうな生臭い、水臭い考へでは到底出來るものではない、人は神に象つて造られたといふのはこゝである、人間が萬物の靈長といふのはこゝである、只人間が水を飲み飯を喰つて、さうして暫らくすると死ぬといふのでは萬物の靈長ではない、神に象

つて造られたものではない、思はず知らず靈力が加はつて來る時に又其靈力の現はるゝ源に這入つて、其所に神の聖意に等しい心がある事を認むる時に、其人間の前に頭を低げる譯である、其人間の前に大尊敬を表する譯である、今日學問のない人でも其靈力を有つた人がある、私共は其人に對しては頭を低げざるを得ない。

第五章　使命の自覺

みなバプテスマを受けるにイエスも亦バプテフマを受けて祈るとき天ひらけ、聖靈鴿の民如き狀にて其上に降りぬ又天より聲あり云なんぢは我愛子わが喜ぶ所の者なり、時にイエス年おほよそ三十にして福音を宣始む人々にヨセフの子と意れ給へり

（路加傳第三章二十一―二十三）

紀元三十年の頃ヨルダン河の邊に身には駱駝の毛衣を着腰に皮帶を束ね、食物は蝗蟲と蜂蜜丈であつたといふ大預言者、名はヨハヂと申すが現はれた、待ち設けたることゝて猶太は申すに及ばず、四方より幾千の人々か雲霞の如くに押寄せて來て、或は自己の罪を責られて豁然として悟る者もあり、或は己が使命を敎へられて欣然として悅ぶ者もあり、誠に何うも其勢は凄まじいことであるといふ評判がガリラヤの田舍までも聞えたので當時ガリラヤの湖邊で漁をして居つた若い漁夫の中でも、シモンの兄弟のアンデレ、ゼベダイの子ヤコブとヨハヂ、其他二三の人人が逸早く駈付けて、ヨハヂの偉大なる人格に打たれ、

且つは其靈能に滿てる敎訓に心を取られて弟子となり、ガリラヤに歸り來る毎に師のエライことを吹聽して已まない、又ヨハヂは神の國は近づけり汝等悔改めよといふ旗を樹てゝ、盛んに大說敎をやつて居るといふ話しを傳へたのである。

當時イエスは父ヨセフが住んで居つた家に母親のマリアと四人の弟、二人の妹達を養育する責任があるので、日々大工の仕事衣を着て、或は家を建てたり或は塀を設たりして、恰もヨルダン河邊の預言者騷は知らざるものゝ如くして日々の仕事に力を入れて居られたが、ヨハヂが天國は近づけり汝等悔改めよといふ說敎をする、而かも悔改むる人が澤山ある、其說敎の眷後には猶太國に過去四百年間見ることの出來なかつた、大預言者といふ、實にエライ人格があるので、ヨハヂの精神は舊約書中の火の如き預言者、エリヤそつくりだといふ評判を耳にされた時は、左なきだにキリストの心には此頃何か非常な警が聞えて居つた、表面から見れば何にも大きな出來事があることは知らざるものゝ如くして、日々の仕事が忙がしくて居られたけれども、其實はイエスの裏にエライ

ものがあつた丈夫れ丈、其心の耳に響くところの響はエライものであつたらうと思ふ、内に何にもエライものゝない人はどんな時勢になつても、何ういふやうな出來事に出會つても、夫は濟ましたものである、何にも心に響くことはないのであるが、内に一種エライものがあれば非常に響く、其響は智恩院の鐘を耳許に持つて來て撞鳴すよりもマア少し響くことである、バプテスマのヨハネがヨルダン河の邊りに出でゝ神の國は近づけりといふ說敎をした其時代の模樣は我日本の德川の末維新の幕が將に開かれんとする時のやうなものであつた、三百年の長き夢は破られて驚天動地の事變が世の中に出來湧いて來るに違ひはないといふ時代に當つて、三千萬衆中胸にエライものを持たない人々は依然として眠つて居つたが彼の薩摩なる片田舍の小松帶刀の心の中には何か大いに響くものがあつた、長門の田舍なる吉田松陰及び其一輩には何か響くものがあつた、越前にては橋本左内、信濃にては佐久間象山の胸に何か響くものがあつた、内にエライものを持たない人には何にも響がない、内に何か一種の力を得て居る人々には非常に響いたのである、響いたからして何うしてもジッとして居ら

れないので皆京都を指して上つて來たのである、丁度其如くにバプテスマのヨハヂ即ち野に呼べる人の聲が響いた、ペテロが行くアンデレが行くヤコブが行くヨハヂが行く、ナタナエルも行けばピリポも行く、シモンも行けばイスカリオテのユダも行くといふやうな譯で、皆ヨルダン河邊に引付けられたのである、イエスは後ればせにガラリヤを窃と脫けて、多勢の人々の中に立混つて、ヨルダン河の邊りに歩みを運び、人々の後からバプテスマのヨハヂの容貌風采を眺めて居られたのである、悔改めよといふ雷の如き聲も、別にイエスの耳には何等の響をも與へなかつたのであるがヨハヂの顏に現はれて居た熱心と、其使命の爲には火の如くになつて叫ぶ其眞摯なる態度は確にイエスの心に何等かの響を與へたに違ひはない、遂に群集の中からしてイエスが現はれて、近くヨハヂの傍にお立ちなされた、ヨハヂは一目イエスを見るや其崇高偉大なる人格に打たれて、陶然として醉ふたのである、さうするとイエスは何う思召したか謙遜つてヨハヂの前に來て、何うか私もバプテスマを受けたいものであると仰せられた、其時ヨハネは私が貴方に洗禮を受くべき筈なるに、何うして私が貴方に

洗禮をお授け申すことが出來ませうかと云つて拒んだのである、イエスは否と
よ是は世の人々の普通守るべきところの禮儀であるから我にも洗禮を授けてよ
とお頼みなさるゝので、左らばと云つてヨハ子は遂にイエスの手を取つてヨル
ダン河に降つて水中に淵然と沈んだのである、今や河から上らんとする刹那、
不思議なるかなイエスの心中にありし靄の四散して恰も煌々たる太陽を見るが
如く二ツ自覺なされたものがある、一は是れ我心に適ふ愛子なりといふ自覺と
今一つは犧牲的公生涯に入るの自覺であつた。

尤もイエスはバプテスマをお受なさるゝ其時まで神の子てふ自覺をお持ちな
さらなかつたとは思はない、イエスが十二歳の時にエルサレムの宮にて父母の
間に對して貴方々は何所を探して居らつしやつたか、私は何所へ行きませうか、
行くべきところは天父の家ではありませんかと仰せられた、此一言を以て見て
もイエスの心中には神の子であるといふ一の自覺があつたに違ひはない、而し
て沈默十八年の間イエスが或は山に祈り或は谷に祈り、或は人知れず己が心を
お磨きなさるゝ時に、我は天父の愛子だといふ自覺をお養ひなされたであらう、

然らば其バプテスマの時にわざ〳〵天より聲ありて、是れ我心に適ふ愛子なりとお聽きなされたといふは何ういふ意味であらうか今までも父の秘藏子だ、天父の愛子だといふ事は思つて居らつしやつたが、いよ〳〵バプテスマを受けて水からお上りなさるゝといふ時に、一層切實に天父の愛を感じ天父の心とイエスの心とが一になつて、殆んど水も洩れないやうになつたのを意味するのだらうと思ふ。

今一ッの自覺は三十年の間は私の生涯で大工をして居られた、イエスのバプテスマは罪の悔改めのバプテスマでもなければ又自己中心の生涯を離れて神中心の生涯に這入る意味でもない、イエスには罪の自覺はないのである、イエスには私といふ自覺はないのである、然らばイエスのバプテスマは何の自覺にお這入りになつたのであるかと云へば、今までは私の生涯を送つて來たが、是れよりは父の聖前に己が身を捧げて、犧牲の生涯に這入つて、世の人を悉く神の子にしなければ已まない、イエス自身が是れ我心に適ふ愛子なりといふ、神の聲をお聽きなさるゝと同時に此世の人々が罪や汚れの中に陷つて居る有樣

を爛はして、之に天父の御慈愛を知らしめ此人々をして皆神の愛子たらしめたいといふ即ち救世主てふ自覺にお這入なされたのである。

諸君、此頃自覺といふ言葉を能く耳にすることであるが一體自覺といふは何であるか實は自覺といふはエライ事である、一寸自分が感じたくらゐの事ではない、一寸思ひ付いたくらゐの事でもない、又己が理性に訴へて、アヽすればかうなる斯うすればアヽなるといふやうに研究して、さうしていよ〳〵其秘訣に達したといふやうなものでもない、然らば自覺とは何ぞや少し無理な説明かも知れないが我心靈全體が一丸となつて、或一ッの事を摑んで己が有とするのである、イエスが我は父の愛子であると自覺なされた時には、天の父の腹に這入つておしまひなされた、天の父の愛が溢るゝばかりにイエスに來たのでイエスと天の父と一になつておしまひなされた、即ち我と父とは一なりといふ自覺が其處に生じて來たのである、神の國を此世の中に擴めようといふ時には、總ての人をして神の子たらしめんが爲には全心全力を打込まれたのである、例之ば約翰傳の四章にイエスがサマリアの女に向つて道をお説きなさるゝ時に饑じ

いのを打忘れてお話しになつた、弟子方が主よ食物をお喫なされと云つた時にキリストは『我に爾曹の知らざる糧あり』と仰せられた、さうすると弟子方は不在の間に誰かゞ食物をお上げ申したのであらうかと思つたので『我を遣はし〻者の旨に隨ひ其工を成畢る是わが糧なり』と仰せられた、イエスは人の心靈を救ふといふ事に專一になつておしまひなされて、食物を食ふ事までも打忘れ、總身悉く使命となつて力を盡したと申しても差支はない是は自覺である、私共も矢張り何か其所へ自覺を得なければならない、石井君が岡山の醫學校を將に卒業をせんとする前になつて、或田舍に行つて休んで居る時に憐れなる乞丐の子供を見て、自分は醫者をして金儲けに掛らうかと今日まで思つて來たが、孤兒を救ふのが自分の使命と自覺したといふ、其自覺はエライもので、孤兒の爲に我を捧げてしまつた「石井君、君は孤兒を育つるのに辛い事はないか』と云へば『何にも辛い事はありません、乞丐の子を澤山我許に寄せて、病氣をした時には其汚ない子供を抱いて寢てやるのも、其子供を風呂に入れて洗つてやるのも樂しい事になつて、少しも汚ないといふやうな感が起らないやうになつて

來ます」と言はれた、自覺といふはエライものである、孤兒を救はなければならないと自覺をすれば、頭に汚ない瘡の出來たやうな子供でも夫れを抱いて寢てやる事が快樂となると云ふ、ダミエンが癩病患者を看護するのは我使命と自覺をした時にはモロカイ島に飛込んで行つて、癩病人と同じ所に住居をなし、患者の衣服を洗ふたり、其傷口を洗ふたりするのが喜悦となり快樂となつた、癩病がダミエンに傳染つた時には朋友も醫者も早く此モロガイ島から引揚げろと云つた時に「ダミエンはモロカイ島の癩病人に身を捧げたものだ、何うして彼等を見棄てゝ我一人故郷に歸るべけんや」と云つて泰然として動かなかつた是れはダミエンの使命の自覺であつた。

扨て私共が牧師となる事が天の使命だと自覺をすれば、牧師の生涯を果さんが爲には敢て何者をも避けないといふ事になるのであつて、本を讀まなければならないといふ事であれば本を讀むが、夫位の事は何でもない、虱の集つて居るやうな貧乏人の寢床に行つて、其虱が自分の衣服に付くも物の數ともしない、夫れに福音を說くのが自分の使命と自覺をすれば、虱を貰つて歸つて來る時に

は自分の心の中に非常なる愉快が生じて神は我をして今日此使命を果さしめ給ふたといふ喜悦に這入る事が出來る、其使命を果さんが爲にはキリストは天の父の愛子として、何所までも父の御慈光の廣さ深さ高さをお味はひになつて、總ての人を神の子になさんが爲に全心全力をお盡しになつた、私共も自己の使命を悟つたならば、其自覺した事に總てを捧げて盡すやうになつて來る。

世の中には何うしたら道德家になれようか、何うしたら人格を磨き立つる事が出來ようかと苦心する人があるが、人格を磨く爲に人格を磨く工夫をする人は、若し人格が磨けたとしても、誠にキザな誠にイヤな人格より出來ないのである、道德家にならうと思つて道德家の修業をした人は、何だか其所に一種妙なものがある、即ち形式に流れ易いのである、けれども人格の何たる事を知らず、道德家の何者たる事を知らずして一生懸命に己が使命の爲に力を盡すといふ事になれば、知らず識らざるの間に人格が高まり、道德が高尚になつて、之に接觸する人々は如何にもと敬服せざるを得ないやうになるのである、其所に秘訣があるのである、パプテスマのヨハネは火の如くになつて悔い改めろと叫

び、ヘロデ王が罪を犯せば、猛烈に王を責めたのである、ヨハヂの人格は實に光芒閃電夏猶塞てふ觀があつた、キリストは救世の使命を自覺されたので、其の人格は東風吹き來つて滿地の氷雪を拂ふ樣であつた、諸君は金儲けが自分の使命だとお考へになつて之が爲には手段方法は撰ばない、金さへ握れば宜いといふ考へで金儲けをなされたならば、聖書の講義を聽かれやうが道德談を聽かれやうが更に其効は見えない、同じ金を儲けるにしても、カルネギーの如く金を握るのが目的ぢやない、金を得たならば平和の爲に貢獻したい、金を得たならば大學を建てたい、金を得たならば世の人々が敢てしないやうな宜い仕事をして、人類の益を計りたいといふ高尚なる動機で金を儲ける、其カルネギーの心の中には高尚なる理想と奥妙なる思想とが養はれて行くので、一億になつた十億になつたといふ時に、金が儲かつたと共に其人格が輝き、何人も彼の前には頭を低げざるを得ない事になる、金は百萬圓儲けても千萬圓儲けても構はない、只金を儲ける動機が那邊に存するか是れに注意せねばならない、大學に某といふ博士がある、なか〳〵能辯に演說をされる、殊に敎育論でもされる時に

は、耳を傾むけて聽くに足るやうな事を云はれるのである、其人は口を開けば人格をいふ、口を開けば道德の講釋をする、さうして人に接する時には己れの人格はどうだ、見上る程のものがあるだらうといふ風にやつて居る、夫が卽ち人格のない證據だ、けれども若し其人が敎育學を考へて、之を天下の敎育家に敎へ示すのが我使命であると思つて、一生懸命に其事にのみ力を盡して而して自分の人格や自分の道德といふ事を忘れてしまふやうであつたら衆皆が其人の前に頭を低げるやうになるであらう。

諸君、實に妙なものである、實に妙なものである、庭前に一本の松の樹を植ゑて、之を一ツ立派な庭松にしようと思つて手を入れると、出來上るは出來上つたが蜿蜒曲りしたやうな松より出來ない、けれども山の中に自然に手を擴げて、良い空氣を吸ひ太陽の光線に照され、風に充分に打たれて、さうして伸び〳〵したところの其の松の樹を見ると到底庭前で手を入れた蜿蜒曲りした松とは同日の論ぢやアない、彼れが若し大人格であるならば、此蜿蜒曲りした松は小人格と云はなければならない、私共は人格とか道德とかいふ事を頭の中に入

れて置くやうでは、到底立派なものにはなれない、そこで私共に大切なる事はキリスト、イエスが得られた神の子の自覺、我は神の愛子であるといふ自覺に這入らうとすれば、朝に夕に天父の愛の深さ高さ廣さのみを考へて、之と同化されたいといふ事に熱衷し且つ天父の愛を圓滿に現はされたイエス、キリストをお慕ひ申して、其跡に從いて行くことである、左すれば何時しか我衷に神の愛子であるといふ自覺が生ずると共に、神の子のやうな人格の輝を發することゝなるのである、私共は金を儲ける人であらうが、敎育に從事する人であらうが又お役人であらうが、實に今日の基督信徒は、老たるも若きも男も女も、我周圍の人々を神の子にしなさなければならないといふ大使命が我双肩に懸れる事を自覺して、娘さんは娘さん、お婆さんはお婆さん、息子さんは息子さんといふ風に皆それ〳〵に我勢力範圍の人々に神の福音を傳へ、さうして我周圍の人を神の子にしなすといふ信者の本領を發揮せねばならない、夫を盡して御覽なさい、夫を盡しさへすればいよ〳〵私共の人格が高まり、見違へるばかりの人となる事が出來るのである、何ぼ說敎をお聽きになつても何ぼ敎會に出入を

なされても、何ぼ道徳の論をお聽きなされても神の子の自覺に這入らず、又我使命を自覺してこれが爲に盡すといふ事にお進みにならなかつたならば、格別の効は現はれないと思ふのである。

第六章　吾人の向上を妨ぐるものは何ぞや

惑に入ぬやう目を醒かつ祈その靈には願ふなれど肉體よわきなり。

（馬太傳二十章四十三節）

前章に述べた如く我が內には此世のものに滿足する能はずして、上に向つて上らんと欲する望がある、而してキリストは吾人に天の父を御現はしになり、殊に限なき愛を示して、吾人を上に引上げようと爲された。一口に申せば內には上らんとするものがある、外には又之を引下んとするものがある、然るに私共が容易く上ることが出來ずして、宗教の極意とも謂ふべき神人合一の妙境に達することが出來ないのは、抑々如何なる譯であらうか、キリストの引きたまふ力が足らないのであらうか、將た又上らんとする我望を妨ぐる力が強いのであらうか、實にキリストの道を多年求めて、尙ほ得ざる者が頗る多いのは遺憾千萬のことである。

馬太傳七章の十四節を見るに、キリストも確に向上の難を認めて居られたや

うに思はる、曰く「命に至る路は窄その門は小し、其路を得もの少なり」又曰く「沈淪に至る路は濶その門は大なり」と如何にも沈淪に至る門は濶いが、上へ向つて進む門は窄い、之に入る者甚だ稀なりと云ふに至つては、實に困難を明示されたものである、殊に先程朗讀した馬太傳二十六章のゲツセマヂの園の祈禱を讀んで見ると、如何にも殘念な考がする。實は御承知の如く、キリストの一世一代の大難關であつて、死ぬるか生きるかの大問題を御定め爲さる場合であつたから、キリストも非常に寂しく御感じ爲された、然るに十二の弟子を悉く連れて行く譯には往かない、其中の高弟――最も能く進んだと覺しき三人を撰り拔いて、園の奥深き處まで御連れになつたのである、我も祈るからお前達も目を醒して祈つて呉れろと御頼みになつた。さうしてキリストが祈り了つて來て見たまへば、三人は眠つて居る、此一時だけ目を醒して居ることが出來ないか、どうぞ目を醒して祈つて居れと云つて、又祈り了つて來て御覽なさると前の如く眠つて居る、三度目も同じやうであつた、私共であつたならば實に馬鹿々々しい、三年の間も牝鷄が雛を育てる如く、母親が小兒を愛育むが如く

にして養ひ育てた弟子である。殊に腹心の弟子とも云ふべき、ペテロ、ヨハ子、ヤコブの三人である。それがキリストにとつては死ぬるか生きるかの場合であるのに、暫くも目を醒して祈つて居ることが出來ぬ、詰らないと思つて疳癪でも起すべき所であらうが、キリストは決して疳癪などは起したまはない、只「靈には願ふなれど肉體よわきなり」と仰せられたが、此一言は、深く人間の弱點を見抜いて、是れ位までも養い上げた所の弟子ですら此通りだ、靈には願ふなれど肉體が弱いからだと云ふのは、無限の同情を人間の弱點に向つて御注ぎになつたのである。

此一事を見ても、私共の内に奮然向上せんと欲する所の願はあつても、妨ぐる力の強いことが現れてゐる、蓋し人間の腑甲斐ない所を能く現はしたもので、コノ「肉體よわし」と云ふ一言は本當に肉體が弱い、眠むたい時に何ぼ力んでも、どんなに工夫をして見ても眠らずしては居られない、即ち心靈が肉體を支配することが出來ないのである、心理學の進歩しない時代に於いては、是れは惡魔の誘ひ、或は惡魔の業として八釜敷く申たものだが、今日では人間の靈魂

と身體とは非常に密接なる關係があつて、何ぼ靈には願つても肉體が弱ければ思ふやうに進まれないことを發見したのである、茲に人あり、又しても他人の物を盜む、それならばと云つて盜まなければならないやうな貧家でもない、是れは盜みたい病氣である。蓋し彼は肉體に何か缺けた所があらうと云ふので、之を調べて見ると果して頭腦の組織に缺點があるとか、或は四肢百體の中で何處か發達の鈍い所があることを發見する次第である、昔ならば直に是れは神に祈らなくてはならぬとか、或は惡魔を拂はなければならまいと云ふことになるけれども、今日ではイヤ是れは體操をやらなければならない、適當な食物を與へて機械體操をやらせなくてはいけないと云ふ、それで六ケ月か一年も體操場に入れて、朝に夕に機械體操をやらせて見ると、其發達の鈍かつた所が能く發達し、隨つて頭腦の工合も餘程宜くなるので、モウ盜みを爲ないやうになる、其他の惡いことも致さないやうになるのである、岡山の孤兒院などに於いても、能く物を盜む者がある、そこで充分食物を與へ、充分運動を爲せて、人並の身體に爲なすと、トント盜みを爲ないやうになると云ふことである、是れは當だ

惡少年を改めさする爲に必要であるばかりではない、私共にも必要なことであつて、盜みは爲ない、又其他法律上の罪人となるやうな惡いことはしないけれども、胃が惡ければ頭腦が惡い、頭が惡くなつて來ると記憶力が惡くなる、或は大切なことを打ち忘れることがある、隨つて癇癪を起すやうなことも出來る、しがんだ顏をして毎日送らなければならぬやうなことにもなる、何ぼ精神上の敎を聽いても、何ぼ祈禱をしても、胃が惡く頭が惡くあつたならば、健全なる人のやうに發達が出來ぬのである、そこで胃病を治せば隨つて頭も宜くなる、頭が宜くなつて來れば癇癪も起らないやうになる、其他今まで打勝ち難しと思つたことも、容易く打勝つことが出來るやうになる、「肉體よわければなり」、此肉體を本當に健かなるものにするならば、どれくらい精神上に助かるか知れない、どれくらい罪に打勝ち易くなるかも知れない、キリストは弟子かたをお叱りにならなかつた、「肉體よわきなり」と云ふて同情を御表しになつたのである、私共も惡い事をする人があるからと云つて、無暗に其人を攻擊し、又無暗に其人を罵る代りに「肉體よわければなり」、どうも彼の人はいけないが何か身體に

悪い所があるのだらう、それで彼の人は充分に發達が出來ないのであらうと思つて、其人に同情を寄せ之を助けるやうにしたならば、彼は向上することが出來るだらうと思ふ、又諸君も大に身體を健全に爲されたならば、確に向上することが出來るであらうと思ふ。

次は矢張り肉體に因んだことで、肉慾と名くべきものである。或人曰く身體に血が滿ちきつて居る、どうしても情慾が制しきれない、其實肉體の強い人よりも肉體の弱い人に情慾の強いものが多い、青い顏をして下宿屋の二階に人情本などを讀んで居る青年に、却て情慾の奴隷となる者が多い、學校の課業を了つたならば、テニスをやるとか、ボートを漕ぐとか、又は野外に散歩するとか、適當なる運動を執る人は却て能く勉強が出來、夜の十時頃には早や鼾をかいて高枕で寢ることゝなるので、情慾情念の誘惑に遭ふことは少ないのである、所が運動もテニスもやりきらぬ、ボートも漕ぎきらぬ、新聞を開けば何時も三頁を讀む、書物と云へば人情本を讀む、そんな出來損ひにいつも女の後を追つて廻る者が多いのである、キリストは馬太傳の五章の二十八節に、「凡そ婦を見て

色情を起す者は中心すでに姦淫したる也」と御教へになつた、即ち情慾の誘惑が胸に燃へて來て、色々とさう云ふ方面の想像などをするのは、女に觸れないでも既に姦淫をしたと斷言をされたのである、元來人間には飲みたい喰べたい着たいと云ふ慾がある、又人間には色々なことを想像したい情念がある、其の情慾情念を適宜く制することが出來なかつた時は、由々しき大事を惹起すものである。尤もキリストは此の情慾情念のことは餘り多くお話しにならなかつた、蓋しキリストには情慾情念は無かつたであらう、否な全く無かつたのではないであらうが、惡い意味のものは無かつたであらう、所がパウロの書翰を開いて見ると、情慾情念のことを委しく述べ立てゝ居る、又ヤコブの書を讀んで見ても、ヨハネの書を讀んで見ても、同樣の次第である、尤も肉體が弱い爲に向上が出來ない、又情慾情念が强い爲に向上が出來ないと云ふこともあるかなれども、更に進んで私共を虜にするものは何であるか、私共を妨ぐるものは何であるかと云へば即ち罪惡である。罪惡と云へば恐ろしいことだ。佛法では煩惱と云ひ罪惡と云ふ言葉は用ゐないやうである。又孔子の教では私慾私情と云ふ言

葉を使つて居るが、罪惡と云ふ言葉は用ゐないやうである、所が孔子よりも釋迦よりも聖く且つ大なるイエスキリストは罪惡と云ふ言葉を頻りに御用ゐになつたのには、何にか其處に深い意味が無くてはなるまい、看られよキリストは當時の猶太人の罪惡を認めて非常に御責めになつた、外の事には大に同情を表して大抵ならば御赦しになつたけれども、罪惡に付てはどうしても忽せにして置くことが出來ない、どうしても大目に見て置くことが出來ないと云ふので御責めなされた、其御責めなされた罪惡が幾つもある、路加傳の十一章三十九節に云く、「爾曹パリサイの人椀と盤の外を潔す、然れど爾曹內は貪慾と惡にて充り」と、是れはパリサイ人の貪慾を御嫌ひなさつたのである、貪慾とは何であらうか、人が金の指環を箝めて居る、欲しい、人が當世流行の衣裳を着て居る、欲しい、人が金持になる、欲しい、欲しい欲しいと云ふ考が遂に詐僞取財を爲さしむる、欲しい欲しいと云ふ考が不義の儲を爲さしむる、又欲しい欲しいと云ふ考が遂に賄賂を取らしむるやうになる。

次は馬太傳の六章の始を開けて見ると、施濟をするにも斷食をするにも、人

の目の前を繕はんが爲めにするな、即ち僞善の罪を御責めになつたのである、殊に馬太傳二十三章の終りを見るに學者やパリサイ人が内は惡事に充たされてありながら、表は虫も殺さない溫和しい人の如くして居るので、「噫なんぢ禍なるかな僞善なる學者とパリサイ人よ」と云ふて、其僞善を御責めになつてある。

次に御責めになつたのは自負心である。路加傳十八章の十四節に云く「自己を高る者は卑られ自己を卑する者は高らるべし」、と吾人は何でも豪さうにしたい風がある、實に自負心は、道に進む上に於て大なる妨となる、自分ほど豪い者はないと云ふ考へがあつたならばどうしても向上は出來ない、雅各書四章六節には、「神は驕傲者を拒き謙卑者に恩を與ふ」と錄してある、馬太傳五章の三節には「心の貧き者は福なり」と敎へてある是れは謙遜なる者でなくては道に進まれないと云ふ意味である。

次にキリストが御責めになつたのは姦淫、言換れば不義を行ふことである、正當の結婚をせずして男が女に觸れると云ふのは、基督敎に於ては姦淫である、正當の結婚式を擧て後、夫ある女が他の男に觸れる、又妻ある者か他の女に觸

れると云ふことは、姦淫中の大姦淫である、此姦淫罪は總ての罪の中に於て最も大なるものとして御責めになつたのである、姦淫ほど人の心を腐らすものはない、姦淫ほど人を柔弱ならしむるものはない、又姦淫ほど込み入つた罪惡はない、一たび姦淫罪を犯したならば本心から腐れるので病膏盲に入つたと云ふやうな譯であるから、キリストは此罪を非常に御嫌いになつたのである。

思ふに何が私共の向上を妨げると云つても、貪慾と僞善と自負心と姦淫ほど大妨害となるものはあるまい、けれども諸君、キリストは罪を御犯し爲さつたことがないので、一點の罪汚も無かつたから、當時の猶太人の罪惡はキリストの眼に映じて、斯の如く四つの罪を盛に御責めになつたのである、所がキリストの弟子のヨハヂ、ヤコブ、ペテロ、パウロになれば、勝れた人ではあつたかなれども私共と同じやうな人であつた、自ら罪の念に充たされたこともあり、又罪を犯したこともあるだらうと思ふ、それで私共の向上を妨ぐる罪のことに就ては、キリストよりも尚ほ鋭く、キリストよりも尚ほ深く敎へて呉れたやうに思はれる、例之へば羅馬書の一章の十八節以下を開いて御覽なさい、これは『罪

のパノラマ』である、又同書の七章の十三節以下は、パウロの情慾の戰に於ける『全勝』である、キリストは色々御示しになつたけれども、キリストにはア、云ふ戰が無かつたのであつて、偶々あれば馬太傳四章の誘惑ぐらゐの事であつた、パウロは我を妨ぐる罪惡の強きを感じ、「噫、われ困苦人なる哉この死の體より我を救はん者は誰ぞや」と叫んだのである、又ヤコブは雅各書一章の十三節と十四節以下に、「慾すでに孕て罪をうみ罪すでに成て死を生」と云ふて居る。いづれも皆罪惡に付ては非常に苦んだ跡が見える。

然し罪惡の事は先づ是れ位にして、是れより如何にすれば之を脫却することが出來るかと云ふ、大問題を考へたい、肉體弱くして情慾情念が強い時には如何にすべきであらうか、キリストは「目を醒し且つ祈れ」と敎へられた、情慾情念が萌して來た時には、主よ我を救ひ給へ、我は肉情の虜となつて此處に大罪を犯さんとす、願くは我を救ひたまへと叫ぶの外はあるまい、私共は嘗て情慾情念の誘惑に出遭ふて、將に大罪を犯さんとする危急の場合に迫つた時に、晨に褥を出でゝ林の中に入つて、天の父よ我を助け給へと、誠心こめて祈るの

外は無かつた、さうして四日五日祈つて容易く其情慾情念に打勝つことが出來た、其時には烟雨濛々たる五月雨の天が始めて霽れ、萬里碧天を見るが如き考になつて、新なる尊き神の御前に感謝を致したことがある、デ諸君が情慾情念に襲はれ、不義の儲をしたいと云ふやうな考が起り來たつた時は其危き場所を逃げて靜なる所に入つて主の御前に目を醒し且つ祈るのが一番の上策である、ナニ俺は強いから搆はない大丈夫だと云ふやうな考を持つのは恰も憐寸の箱を抱へて火の側に摺り寄るやうなもので頗る危險である、憐寸の箱を持つて居るなら火の端から逃げるが一番宜い、三十六計逃ぐるに若かずとは是等のことを言ふのであらう。

第七章　心力傾注

なんぢ心を盡し誠意を盡し意を盡し力を盡し主なる爾の神を愛すべし是誡の首なり

（馬太傳第二十章第三十七節）

此言葉はキリストが御發明なされたのではない、申命記の六章を御愛讀になつたと見えて、イヤ六章ばかりではない、六章七章八章といふやうなところを御愛讀になつて、大方宙に記えて居られたのであらう、其證據には馬太傳なり路加傳なりの第四章に野の試みにお出遭ひなされた時にも、申命記を引いて惡魔をお退けになり、又玆に或學者が來て、先生、誡の中最も大いなるものは何でありませうかとお尋ねした時に直ちに申命記の六章の五節をお引きになつて、先きに朗讀を致したやうなお答へをなさつたのである。

今日は『心力傾注』といふ題を掲げたが、實は私は此題に就て諸君にお話しをいたす資格のないものである、夜寢床に這入る前に、毎も靜かな所に於て其日の事を顧みる時に、神前にお斷りをいたして居るやうな事である、或は演說

をなし或は說敎をなし、或は聖書の講演會にも出席して、他人の眼から見られた時には多忙しさうに見えて居るが、神前に進み出でゝ果して力一杯を盡したかと顧みる時に、濟まない思ひが生じて來る、神よ今日も是々の事を致しましたが、準備は不完全でありまして、僅かにお茶を濁したくらゐの事であります、誠に相濟まない事でございます、明朝からは早く起きてマア少し一生懸命にやりますからどうぞ免して下さいと、お詫をするのが常である、さういふ私が皆樣に此大切なるキリストのお示しに就いてお話しをする事は出來ない譯である、併しキリストが斯くまで盡せと仰せられたのだからして、自分が盡せないにしても其意味だけを考へて見たいと思ふたのである。

第一に『心を盡し』とあるが是は何であらうか、或は讀めもしませんけれども希臘語を出して見たり、又は二十世紀の新約全書を繙いて見たり、或はベンゲルの註釋を取出して見たりしたが、今日までは度々講義を致して居つた事とは違ふ意味を見出したのである、心を盡してといふ事は心情を盡してと替へたら宜からう。

諸君私共人間が有して居る心靈の働きの中で、最も高尚なるものは心情であらうと思ふ、何が先立つかと云へば腹である、其腹といふ事をマア一つ言換れば誠となるので、心情を盡すといふ時は即ち我生命を傾けてといふ事になる即ち命懸になつて盡すといふ事であるから此以上はあるまいと思ふ、諸君は生れてから今日に至るまで何か命懸の仕事をなされたことがあるであらうか、事は大小を問はない、命懸の仕事をなされたことがあらうか、親に孝を盡さんが爲めに命懸になつた事があらう、妻を愛するが爲めに命懸になつた事があらう、子供の病氣の爲めに命懸になつた事があらう、或は國の爲め或は神の王國の爲めに命懸になつた事があらう、今日の盡すといふは即ち我が命を懸けてといふ、命を差出してといふのである。

其次の精神を盡すといふは、是は我が喜ぶ物我が樂しむ物を打棄てゝ、アシシのフランシスが父親の意に背いて信者になつた時に、父は怒つて裁判所に訴へ、我意に背いたところの息子には何一つも讓らない、一物をも與へないといふ事で段々裁判が進行致したのである、フランシスは法廷に呼出されさうして

父親と對座をして裁判を受けた時に父親は我意に背いた息子には何一物も與へませんと申立てたので裁判官はフランシスの顔を見て『夫で宜いか』と尋ねたれば『宜しうございます、何一つをも貰ひません』と云つて其所で釦を外して素裸體になつて、自分が着て居た衣服を父の前に差出し裁判所から裸體で飛出した、我着て居る衣服までもキリストを愛せんが爲、神に事へんが爲に拋つたところのフランシスは人の悦ぶ富を棄てた譯である、人の悦ぶ家を棄てたのである、人が欲しいと思ふ物は悉く棄てたのである、精神を盡すといふ、此精神は英語にてはソールといふ字が使つてある、即ち活力といふ意味である、活きて居るからには家も欲しい衣服も欲しい食物も欲しい、色々悦び樂しむ物があるが、夫等の物を皆悉く打棄てゝもやる、即ち犧牲となつてといふ意味であらうと思ふ、其次の意を盡すといふことは、是は英語にてマインドとなつて居る、此の意味は即ち智惠を盡してといふ、今持つて居るだけの智惠を盡すといふのでは足らない、私共が熊本に在學中斯教を受け而して、いよ〳〵決心して先生の所へ行つて『先生、私等は是から道の爲に盡さうといふ決心を致しました』

と言つた時先生は『道の爲に盡さう…何になる積りか』『ミニストル教師になりたい』と云ひますと先生から直ちに一棒を食はされた『汝等のやうな詰らない人間が神の爲めに、或は道の爲めに教師になるといふ事が出來るものか退れ』と酷い目に叱り飛ばされた、若し普通の宣教師であるならば眼に涙を湛えて『アヽ良い志を起した、それであつてこそ』といふところだが、汝等のやうな詰らない人間が何うして教師になれるか、退れといふ譯で非常に叱られた、夫から五六ケ月經つて又同じ人が同じ事を繰返して云つたところが、今度は先生非常に悦んで賛成した、其教訓は私共の心魂に銘じた譯である、我々のやうな詰らない者が何うして教師になれるか、教師といふものは實に大にしては天下を双肩に擔ふて立たなければならない、只一教會の牧師に非ずして、其時代に對しての教師とならねばならぬといふところで、磨き上げた智識を以て主の爲に盡さなければならない、爾來三十幾年の年月を經來たつたが、私共は一日も先生の教訓を忘るゝことなく、意はせを盡して主に仕へなければならぬ、磨き上げたところの智力を以て盡さねばならぬといふ考へを有して居る。

第四は力を盡すとある、英語にはスツレングとか、又はマイトといふ字になつて居が、元の意味は意志の力を盡すといふ即ち己が身體を統一して、全心全力を盡してといふ意味であらうと思ふ、私共の先生はワン、アット、エ、タイム、一度に二ツの事をするな、只一の事をせよと敎へた、夫から其次にはヅウ、ウイズ、ザイ、マイト、汝の全力を傾けてやれ、是が即ち此所にある、力を盡してといふことである、聖德太子は十人の訴訟を聽いたとか何とかいふ事がある、又或人は書物を讀みつゝ人の話を聽く事が出來るさうであるが、夫は例外、人の話を聽く時には全身耳となつて聽くのである、物を見る時には全身眼となつて見る、物を考へる時には全身皆心となつて考へる、夫が即ち力を盡してといふ、耳では聽きつゝ眼では外見をして居る、眼では本を讀みつゝ耳では隣りの謠曲を聽く、心では考へつゝ何所かに野遊びに出掛けて居るといふ事であつたならば力を盡して居るのではない、力を盡すといふ時は我心をも我身體をも統一して、思ふといふ時は眼も耳も閉いで思索に這入るのが、是れ力を盡すといふ事である、斯く考へ來る時には、恐らく此世界の人に心を盡し精神を盡し

意を盡し力を盡すといふ、此文字に當る人はないだらうと思ふ、恐らくないだらう、けれども多年修養を積んだところの人は或は是が出來るかも知れない、今日は　陛下が我大阪市の東から北の方を汽車に召して御通行なさるのである、之に就て思ひ起すのは我日本人の忠義である日本人ほど忠義心の厚いものはない、けれども其忠義といふのは千代田城に向つての忠義であつて其他の點に於ては頗る不忠實なる國民ではないかと思ふ、職務を盡す上に於て不忠實、約束を守ることに不忠實、時間を守ることに不忠實、己が委任されたる其委任に對して不忠實、總ての點に於て不忠實なる日本國民は只千代田城に對した時のみ忠實なものである、イエス、キリストがお敎へなされたる忠實といふことは今お話し申した四ツを盡すといふ字から生出されて來た、イエスのお敎へなされたる忠實は上に向つての忠實であると共に下に向つての忠實である、眼に見えない物に向つて忠實だ、其意味は事のある物に向つて忠實であると共に眼に見えない物に向つて忠實だ、其意味は事の大小輕重に拘はらず自分がなさなければならないと思ふ事は全力を盡してなすといふことである、力一杯を盡してなすといふのがイエスの敎訓である、左れ

ばこそ聖書の中に賞められた人々に付て、其賞められた點を味ふて見ると如何にもと思ふのである、一は馬可傳十二章の終りの所にイエスが弟子方に向つて說教をして居られた時に金滿家達が賽錢箱の所に來て、聞えよがしに金の音をさせて入れるのには、イエスは少しも氣をば注けられず、知らざるものの如くして居られたが、其所に身に黑い服を着け頭に黑い頭巾を冠りたる女がコッソリと音もさせじと歩み來て賽錢箱に近寄りソット賽錢を納めた途端イエスは說敎を廢めて其の方を見やられた、女はもと來し途を逃るが如く退いた、イエスは言葉を續け「誠に我爾曹に告ん箱に投入し凡の人々よりも此貧しき寡婦は多く投入たりそは彼等は皆其餘れる所を以て入れこの婦人は其不足ところより其すべての所有すなはち全業を盡く入れたれば也」と御賞贊なされた。

今一つは馬可傳十四章の中程を見ると、一人の女が歩つて來て、ナルドといふ價高い香膏の函を破つて、其香膏をイエスの頭に塗つた逸事が記してある、イスカリヲテのユダや其他の弟子達は實に詰らない事をする女だ、先生も先生だ此ナルドの香膏を賣つて貧乏人に施せば一廉な慈善になるのに、ムザ〳〵其

函を打破つてイエスの頭に注ぐ、なんちうことかと囁いた、其時イエスは只一言「此女は力を盡してなせり」と仰しやつた、此女は力を盡してなせり、もうイエスがお死になさるのも程遠くない、切めてはイエスのお葬式の印にと思つて秘藏して居つた價高き香膏を持來つてイエスの御頭に注いだ、此女は心力を盡してなせりと云つてイエスは御滿足なされた。

夫から今一つは路加傳八章の四十節の邊りである、一人の女がイエスがパリサイ人の家で饗應を受けて居られたる時に歩つて來た、さうしてイエスの足に接吻をして止まない、其時パリサイ人は呟いた、イエスは私は足下の家に來たけれども足も洗ふて呉れず、香水も注けて呉れない、けれども此女は我足に吻を接けて止まない、此女は我足に香膏を塗つて呉れたとお示しになされて、多く罪を赦さるゝ者は又多く愛するといふ一句をお添えなさつた、イエスは此女の綠の黒髪を以て其の足を拭き、唇を開いて、イエスの足に口吻をするといふ、其優しい所爲に御滿足をなされたのである。

諸君、イエスに叱られた人は澤山ある、其叱られた人は多くは男子である、

イエスに賞められた人は少ない、其賞められた人は三人が三人共に婦人である、而して其女達が賞めはれるほどの仕事をやつたといふのはどんな事であるか、一人の女は四厘の賽錢を納めたに過ぎない、一人の女は香膏をイエスの頭に注いだに過ぎない、今一人はイエスの足に口接したといふに過ぎない、お母さんは子供の頬邊に何ぼでも接吻をする、譯のない話だ、此事は至つて小さい事であつて殆んど算ふるに足らない程小さい、若し誰かゞ私の頭に香水を注けて呉れても、別にさう有難いとも思やアしない、四厘の金を教會に寄付して呉れても別に其人にお辭儀もせぬであらう、けれども主イエスは其小さなる行ひを見て、彼れは身代を盡して納めた、其香膏を注ぎたるを見て、彼れは力を盡してなせりとお示しになつた、して見ると大說教者にならなければ神が滿足をなさらぬといふ譯でもない、大傳道者にならなければ神が滿足をなさらぬ譯でもない、又大事業家にならなければ神が滿足なさらぬといふのぢやアない、成程私共はクレルウオーのベルナルド或はアシシのフランシス或はタルソのボーロ或はウキッテンベルヒのルーテルといふ名前を聞いて、其實に偉大なる事業に憧れる

のであるが、諸君、世の中に名を知られたるルーテルやフランシスやベルナルドやポーロといふ人ばかりであつたならば、決して神の王國は世界に擴まるまい、決して神の御名は全世界に響き渡りはせぬのである、何ぞ知らん四厘の金を納むるところの聖者があり、己が白粉を主の爲めに拋つところの聖者があり、人の足までも洗はんとするところの聖者がある故に、尚知れない無數の聖者があるからして、神の御名は崇められ神の御國は全世界に擴がる譯であらうと思ふ、して見れば今日の我々でも智惠はないだらう、力はないだらう、德はないだらう、意は甚だ薄弱でありませう、けれども私共が主の御名の爲に盡さうといふ一念が此所に發揮すれば、主は其盡さんと欲する狀をお認下さるに違ひはない、諸君は御實驗なされた事はないであらうか、私共が有らん限りの力を盡すと、神は我々に力を御加へになるといふことを、火事だ〳〵といふ聲が隣家から聞える、アッと思つて臺所を見ると早火が廻つて居る、我愛する子は二階に臥せてある、其時に其母親が二階に駈け上つて、外へ抱へ出したといふ話があるが、女の一念岩をも通すといふ、我子を救はなければならないといふ一念

で、猛火の中に飛込む事が出來たといふ、人間の力の盡きるところ超自然の力が加はり來る、恐ろしい力が其所に加はつて來る事を私共が自覺せねばならぬ、是は物質の力であるけれども私共が或は文章を記かうとする時に或は又演說をしやうとする時に、取措考へても〳〵何も出て來ない、時は一刻々々と迫つて來る、又考へても出て來ない、もう何うもならぬと思ふ時に一生懸命になつて、神よ我に力を與へ給へと祈りつゝ、僅か三分か五分の間に思想が沸いて來て、夫が流れて文章となり、夫が流れて演說となつたといふ時には多くの人々の心を振ひ動かす力が生じて來る、ショーペンハウエルが洋筆に墨汁を付けて、紙の上に持つて行つた時には、未だ何も是といふ思想も起らなかつたといふけれども、其洋筆が段々〳〵と走り始めた時に思はず知らず思想が加はつて來て、世にも類ゐ稀なる傑作が出來たといふ、平素磨き鍛ふて居る所の人が、イザといふ場合に一生懸命になつて、洋筆に墨汁を染めたといふ時には、超自然の力が其所に加はつて來るのである、私共が此世の中に於て道の爲に盡さうとか、或は福音を天下に宣傳するといふ場合に、此靈妙不思議なる天の力が我に加は

つて來ないといふ事であるならば、私は今日から辭職する、私は今日から福音宣傳の仕事を拋つ外はない、何ぼ諸君が御同情下されてもお助け下されても、諸君の御同情や諸君の力だけでは私共は働くことは出來ない、けれども毎度々々不忠實なる我にも天の靈力が加はつて來て、今日こそは大失敗をいたしたと思ふ時に、不思議にも多くの人々が悔改めて、誠の生涯に這入つて行くことを見る時には、アア神よ實に感謝す、何うして斯の如き力を我に與へ給ふたかと申さなければならない事がある、一生懸命になりさへすれば己れ以上の力が加はつて來るが故に、只瞞着半分に……左なくても仕樣事なしに仕事をして居る事柄に對して見れば、其上よりの力が加はつて、瞬間の仕事の出來榮は實にエライものである過日も一人の若い人が斯う云つた、責任を負て治療をしなければならない、外科治療をやらなければならない塲合が迫つて來ると祈つて刀を取る、祈つて刀を取る時に自分以上の良い結果を見ると、如何にもさうだと思ふ、重患者を預つてシガレットを吹きつゝ刀を取るやうな不信實なるお醫者樣と神よ是は此人の生命に關します、私の刀が一度誤れば此人の命が亡くなりますど

うぞ神よ我を助け給へといふ眞面目なる祈禱を以て刀を取るといふ時に、天の力が加はらずして居ようか、必ず神は其人の心を愛でゝ、力をお注ぎなさるに違ひはない、何事にまれ私共が心力を注いでやるといふ時には、確かに我以上の力が加はり來つて、思ひ掛けないといふ程の良い結果を得させ給ふに違ひはない。

斯く考へ來る時には、私共はいよ〳〵神の恩寵を感謝せざるを得ない、私が傳道の生涯に於てどれ程に一生懸命になつた事があるかと聽かれたらば、實に恥かしい、是々である、云へないが、神が我を用ゐて大いに力を現はし給ふことを見る時には、神の恩寵を感謝するの外はないのである、どうぞ私共は諸君と共に我は智惠が足らぬ、我は力が足らぬ、我は意が弱い、我は肉體が實に弱いなんといふやうなことを言はずして、主よ我此所にあり、願はくば我を用ゐ給へ、我は及ばずながら一ツ力を盡して見ませうといふ考へを以てやりさへすれば、やる度毎に神は私共に失望をさせるやうなことは決してなさらぬのである、して見ると諸君、此所に心を盡し精神を盡し意を盡し力を盡して主なる汝

の神を愛せよとお示しなされた、其主たる汝の神を愛するといふに就いては、兎も角も一層一生懸命になつて、諸君と共に一勉強やつて見たいと思ふ。

神は事の大小はお問ひなさらぬ、事の輕重はお問ひなさらぬ、只心を盡すや否やといふことを神はお尋ねなさるのであるから、夫を深く思ふて、殊に姉妹方が大いに勵んでお立ちなさらねばならぬ、さうすると我々男子も之に遲れじと大いに力を盡すやうになる、けれどもキリストが姉妹方をお賞めになつたのは、何うも女は賞めて貰はないと息附く所がないからであらう、男子が叱られたのは、叱られたのであるけれども、姉妹方が賞められたよりも宜いかも知れない、若しマグダラのマリヤにサタンよ汝後ろに退けとお叱りなされたら、追のマリヤも挫けてしまつたに違ひない、けれどもシモン、ペテロはサタンよ汝退けと叱られても、汝は三度我を知らずといふに違ひはないと云はれても……三度知らずと云つたけれども矢張りイエスの跡に從いて行つて、さうしてバウロに優ることがあつても劣ることはないといふ大人格を磨き立てたところを見ると、こりやア婦人では出來ぬ、婦人は賞められて從いて行く、男子は叱られ

ても従いて行くといふ、此所に元氣を惹起すところが男子の男子たるところであるから、女子をお賞めになつたのは是れキリストの深き意のある所である、けれども今日の日本の男子は女子のやうな取扱を受けなくちやア立つて行かれぬ、叱られるともう直きに弱つてしまふから、是は矢張り賞めて行かなくてはならぬ、もう少し男子は腰が強くたらねばならぬ、サタンよ汝後ろに退けと叱られても、ナニ行きますといふ勢ひで全力を注いで修養するところがなくてはならないと思ふ、叱られるのが嬉しいか賞められるゝのが嬉しいかは疑問、けれども矢張りイエスは人情の秘密を知て居られたからマリヤには賞めて下され、ペテロ其他の弟子はお叱りになつた、叱られても従いて行つたから、矢張り全力を盡して愛して下された其御心事を私共は忘れてはならない。

第八章　人生の價値

神の子をもつ者は生を有その子を有ざる者は生を有ず　（約翰傳第一書第五章十二節）

舊約聖書によれば、何でも人々が幸福と思つた事は家の繁昌と、長壽であつた、約百記を見るに、初めの三章はヨブが多くの財產を持つて居つたが、悉く之を失ひ、其上息子七人娘三人とも殺され、終りにヨブ自身も腫物が出來て痒くて堪へられない、死ぬるか生るかといふ目に遭つた、然るにヨブはかゝる災難に遭ふても泰然として動かず、三人の朋友否四人の朋友が來て色々と議論をしても自若として應對することが出來た。神は最後に非常なる恩寵を賜はり其の身代を倍にしてお與へになり子供も以前の如く男七人娘三人を擧るに至つた、又ヨブ自らは長命を保つことが出來た、此の約百記は世界の文學上より見るも一大傑作といふことであるが、其筋書はヨブが百折不撓の精神と確立不動の信念を有したことを描いたものである、之を描くに家門の繁昌と長壽とを背景としたるを見れば極めて幼稚なる考であつたと申して差支はない。

舊約聖書の中でも詩篇には餘程高い思想が書いてある、詩の十六篇の十一節を見ると「なんぢ生命の道をわれに示したまはん、なんぢの前には充足るよろこびあり、なんぢの右にはもろ〳〵の快樂とこしへにあり」と記してある、家が繁昌するのが幸ひだとか、長壽をするのが福ひだといふ考もないのである、それよりも餘程進んだ考へ、生命の道を我に示し給へ、汝の御前には充足れる喜びがある、汝の右には諸々の快樂が長へにあり、神の御前に於いて生命の道を守ることが此世なき喜悦であると歌ふたのである、同じく詩の三十六章の九節を見ると云く「そはいのちの泉はなんぢに在り、われらはなんぢの光により て光をみん」と、神の命を泉と見たのである、神の御前から生命の水が滾々と流れ出でゝ、吾人の人生を濕すといふ高い意味の語である、神は御光であつて、其の御光は吾人の人生を照して、私共は陰雲濛々たる世の中に居らずして、實に晴やかなる大空に煌々たる明月を望むが如き生涯を送ることが出來るといふことを語つたのである、詩人といふものは何時の世に於ても、其の時代よりも十五年も二十年も五十年も百年も進んだ考を持つて理想を謳ふものであるから、

舊約聖書中の詩篇に於て、當時の人々は家が繁昌するのと、長壽をするのが此上なき幸福であると思つたのに、詩人は神の御前にあることが幸福である、神の御前に一日居ることは俗の世の中に千年居るよりも幸福であるといふ、極めて高い思想を有して居つたやうに思はれる。

新約聖書を見ると、生命の二字は其骨子となつてある、路加傳の十二章の中程に二人の兄弟が財産爭をやつて何うしても判斷が着かないので、イエスキリストの裁斷を願つた時、イエスは例話を以てお諭しになつて、其終りに貪慾の心を愼めよ、夫れ人の生命は所有の豐かなるには依らざるなりと仰せられた、即ち人間の生命は財産の多少に關するものではないとお示しになつたのは、舊約の家が繁昌する、長壽をするといふ考とは、雲と泥との差があるところの御敎訓と申して差支はないだらうと思ふ、又馬太傳六章の二十五節以下を讀んで見ますると「是故に我なんぢらに告ん生命の爲に何を食ひ何を飮まん身體の爲に何を衣んと憂慮こと勿れ生命は糧より優り身體は衣よりも優れる者ならずや」と示して、最後に至つて「まづ神の國と其義とを求よ然ば此等のものは皆なん

ぢらに加へらるべし」とキリストがお叫びになつたのである、此本文は散文であつて、韻文ではない、けれども天空の鳥を見よ、野の百合を見よと示されたるその想は、詩に優る詩である、歌に優る歌であるかくの如くキリストが詩歌ならざる詩歌を以て、何をお教へになつたかと云へば、先づ神の國と其義を求めよといふ、是れは何を意味するのであらうか、これは生命といふ、生命を求めよといふ意味である、然らば諸君が生命とは何ぞやとお尋ねになるならば、只此の世の中に破れたる兵児帯を引つ張つたやうに長命して居るといふのが生命ではあるまい、高利貸の爺が金は腐れるほど貯めたが、到るところに輕蔑され、到るところに毛虫のやうに嫌はれて生きて居る、これが生命であるまいか、私はこれを生命とは思はぬのである。

然らば生命とは何であらうか、私は子供の時から人の傳記を讀むのが非常に好きであつた、一夏或宣教師の宅で、明けても暮れても人の傳記を開いて讀んで居つた、其時にホルランドといふ人が書いたアブラハム、リンコルンの傳を讀んだことがある、彼が貧家に生れて、手習をするには紙がないので、大きな

木の葉を拾ふて夫れに習字をなし、本を讀むのには本がないから、隣りの家から本を借りて來て讀んだ、かく貧乏の中に身を起したるリンコルンは、四年の間の大統領を勤めて、五年目に再び大統領に選擧された時に、祝ひの劇場で暗殺をされた所で筆を止めてあつた、其本を讀んだのは明治の十年であつて、今日まで三十年の年月を經て居る、然るに眼を閉れば、アブラハム、リンコルンの人格が躍如として現はれ來るのである、私の生涯にリンコルンがどれだけ深く這入つて來たかは知らんが、兎に角生命の一部となつて居るに違ひはないと思ふことである、其後讀んだ傳記の中で、クレルウオーのベルナルド、アシシのフランシスといふ此の二人の聖者は、矢張り私の生命の中に這入り來つたと思ふのである、尚傳記ではないが、亞米利加のニウヘウンのモンゴルといふ牧師は只の一度より遭たことはないが其の人の生命が私の內に這入り込んで來たやうにふ、尚オクスフオールドの神學者、サンデーと、倫敦の牧師ホルトンに會つたことは只の一度——けれども其人の生命は確かに私の內に這入り込んだと思ふのである、私が生命といふ生命は何であるかと諸君がお尋ねになるなら

ば、主イエスが約翰傳の十五章に「我は眞の葡萄樹わが父は農夫なり」とお示しになつた、葡萄の幹と枝とは其皮の色が同じである、以上述べたところのアブラハム、リンコルン、セントベルナルド、セントフランシス其佗、モンゴル、サンデー等の人格が――其の品性がキリストを現はして居るのである、品性がキリストに似て居ることを認めたのである、皮は生命の表に現はれたものである、内に生命があるから皮が生々として居る如く、内に生命があるからして其の人達の人格、品性が生々として表に現れ來る譯である、即ち其の傳記を讀めば傳記に魅せられ其人に接すれば其思想なり動作なりに動かされることゝなる、枝を包んで居るところの皮と、幹を包んで居るところの皮が同じものであるといふ所に味ひがあることは忘れてはならぬ。

けれども諸君、其皮の中に何があるかを考へなければならない、皮の中に生命がある、枝に通ひ來るところの液は幹から上り幹の中に溢れて居るところの液が枝を傳ふて遂に葉が出で、皮が出來、實が出來るといふ譯になるのである然らば我々が茲に人を魅するやうな、一度其人に會へば、最う忘れられぬ程の

生命を現はす品性は何に依つて形成らるゝかと言へば、使徒パウロは羅馬書の八章に「靈の事を念ふは生なり安なり又肉の事を念ふは死なり」と申されたのである、何うして金儲けをしやうかといふことを寢ても覺めても思つて居る人に、麗はしい人格が出來ようか、斯ういふ別莊を造つて住はうとか、ドーいふお座敷に於いて御馳走を喰べやうとか、或ひは美人を我が片傍に侍せよやうといふやうな、肉のことのみを考がへて居る人の人格がどうして出來ようか、左樣なことばかりを寢ても覺めても考へて居る人は日々夜々に下落するだけである、左らばパウロが「靈の事を念ふは生なり安なり」と申された意味は何であらうか、私は本文として引いた約翰傳第一書の五章の十二節に「神の子をもつものは生を有その子を有ざる者は生を有ず」とある、パウロもヨハヂも其隱れたる生涯に於ては、寢ても覺めても神の子イエス、キリストを念ずるといふこと、イエスが如何なる心、又如何なる精神をお持ちなされたか、又如何なる人格をお持ちなされたか、イエス、キリストと天の父との間の御交際は何うであつたか、キリストがゲッセマヂの園に祈禱をなされたる時の御心情は何うであ

つたか、己を殺す者の爲に彼の立派なる祈禱をなされた御心持は何うであつたか、ヨハヂに母親のマリアをお頼みなされたときに、イエスのお心は何うであつたか、雷にキリストを念ずるばかりでなく、加拉太書の二章の二十節に「われ生るに非ずキリスト我に在て生るなり」とある如くキリストを意識するやうになつたので生命が表はれて神々しい品性となつたのである。

私は新島先生の家に屢々泊つたことがある、サア寝ようとすると、先生が蠟燭に火を點けて寝床に導き、もう何にも用事はありませんかと云つて室外に去られ、朝起ると先生が盥嗽の湯にまで氣を注けて下さる、出立をする時には持つて行くべき辨當にまで氣を注けて下さるといふ時に、成程人間といふものは、これくらいに行屆いたる愛情を以て人を扱はなければならないと思つたのである、又彼のホルトンがあれだけの大家でありながら其家に人が訪ねて行けば、椅子を持つて來て、膝と膝と接するぐらゐに近く腰を掛けて顔を突出し、耳を傾けて心から打解けて餘念なく話をして居ることを思ふ時には、私共も斯くありたきものであると思ふことが、即ち生命となるのである。

然らば私共がキリスト、イエスを學ぶと云ふのは、キリストが癩病人の手をお握りになり、或は子供を失ふて落膽せる母親に同情を表し、如何なる場合にもイエスの口には嘘言がない、何所までも眞を以て押通しておいでになつたといふやうな、其の御生命が一々我に移り、さうして如何に穢ない癩病人と雖も之れを遠ざくることなく、淋しき心の人に會へば心から同情を表するといふやうなことを初めと致して、キリストが終夜天にお祈りになつたとか、敵の爲にお祈りになつたとかいふやうな奥深きところに漸次〳〵に相近きキリストの意を意とし、其高き清き尊きものが我に移つて來る時に、我が品性が不知不識の間にキリスト化することゝなり、人に對するには優しく寛かになり、人の罪惡を攻むる時には罪を犯したところのものは、もう實に我前には立ち得られない程の力を以て、威光を以て望むことが出來るやうになるのである。

諸君、諸君の内に……殊に青年の諸子はどうか人格を磨きたい、どうか品性を養ひたい、どうか立派な道德を修めたいと叫ばれるのである、私は其叫びを聽いて悦ぶが道德も品性も人格も、突然として天から降つて來るものではない

ことを考へて頂きたい、葡萄の樹は深く地の中の見えないところに根を下して居る、其根から滋養分を吸上げて、幹や枝を養ふて居る、キリストの御人格は卽ち天の父に結び付いて居ることを思はなければならぬのである、私が列擧いたしたところの人格もキリストに結び、キリストを通じて天の父に結び付いて居ることを思はなければならぬ、よくお分りなさるやうに申せば、密室に於いてミッシリと聖書を讀まない人、密室に於いてミッシリと天の父に祈禱をしない人、尙敎會の祈禱會などには冷淡にして出席をしない人、只人格を養ひたい、只品性を養ひたい、只道德を高尙にしたいといふことを欣慕して居るが、扨て互ひに相會した時には、此世の話のみをして、更に天國の話をせず、更にキリストの話をせず、更に心の修養の話をしない人にして、何うして其點に進まれようか、葡萄の皮の麗はしき、葡萄の葉の綠をなして居るところ、葡萄の實の如何にも房々して居るところは慕ふなれども、其の葡萄の中に通ふて居るところの液、其液を作出すところの根に心を寄せずして求むるのは、是れ猶ほ木に緣て魚を求むるの類ではあるまいか、今日の信者は何うしても眞個な生命を得

なければならぬ、眞個な生命は人格となり、品性となるのであるが、其の人格となり品性となるべき生命は何所から生じ來るかと云へば、キリストに結び付き、キリストを通じて神に結び付くといふこと、其の靈的生涯を送るといふことに歸着をするのである、私共は寢ても覺めてもキリストを思ひ、寢ても覺めてもキリスト、イエスの内に在つたところの思想と精神と聖德とを思ふて、さうして夫れが私共の内に滿溢れて來て、遂に我が人格が清まり、我が品性が高くなるといふ譯のものであらふと思ふ、昔から今日に至るまで一世を風靡したといふやうな人格、或は人々の中に在つて、多くの人々に生命の感化を與ふるところの人物は、確かに神の子を持つ者は生命があり、神の子を持たない者には生命がないとヨハヂが斷言された通りに、神の子を持つといふところが甚だ大切なことである、或人はキリストの言葉を引いて人間の生命は全世界よりも尊いといふ、それはセントペルナルドの生命、セントフランシスの生命、セントポールの生命、尙誰某といふ清らかなる人々の生命は全世界よりも尊いであらう、けれども日々慾のことばつかりを考へて、或は女色に耽り、或は金錢の

爲には親類を突飛ばし、或は己が名譽の爲には朋友を陷るゝといふやうな、詰らない生活をなす人の生命が、何で全世界より尊いことがあらうか、磨かない魂は何にも尊いことはないと思ふ、キリストを龜鑑とし、キリストに倣ふて磨立てた生命にして初めて全世界よりも尊いといふことが出來るのである。

諸君も私も折角此の世の中に生れて來て、磨けば斯の如く尊くなり得る魂を有して居りながらにこれを磨かず、折角キリストの福音を聽きながら、折角祈禱を覺えながら其の福音を讀まず、其の祈禱を蔑ろにして、靈的生命を磨かないといふ人ほど氣の毒な人はない、敎會にお這入りなさるところの諸君が洗禮を受けて、暫らくの間は人格とか、品性とか、道德とかいふやうな、問題でお來でなさる、サアもう一步進まなければならぬといふので、靈的といふところになつて來ると、何うも不熱心だ、キリストの後ろから多くの人々が從いて來た時に、キリストは靈の話をなさるものだから、もう私共は斯ういふ話を聽くに堪へないと云つて、一人減り二人減りした時に、キリストはお弟子方に向つて、お前達も彼の人々のやうに我より離れるかと申された時に、ペテロと十一

人の弟子は、主よ、限りなき命の語を持てる者は貴方である、貴方を離れて誰に行けませうかと云つたのである、今日洗禮を受くる人々の中には人格問題の話がある時に實に兎耳を振り立てゝ聽かれるが、其の人格、品性といふやうな麗はしいところの道德家を造出した源たる祈禱をしなければならぬ、聖書を愛讀しなければならぬ、更に神の御懷に這入つて尊いものを得なければならぬといふ、心靈の話になつて來ると、もう薩張り分らない、祈禱會には二度三度出席して見たけれども、一向面白くない、聖書の講義も五度六度は足は運んで見たが、一向面白味がないと云はれるのである、成程これは面白味がない筈だ、眼の着けどころが違ふから、其の奥深いところが分りさうな筈はない、丁度木の枝や實の如く表に現はれたものを見るのは容易いことである、けれども其木の根を掘つて見ようと思ふ時には實に困難である、汗水を流して堀らなければ見えない。

然らば諸君が其木の根を御覽にならうと思はるゝならば、祈禱會には五度や六度では不可ない、五十度も百度も五百度も通ふて、さうして朋友と共に心靈

のことを語り合ひ、共に熱心に祈禱をして御覽なさい、或は更に興味のあることは、密室に於いて天の父に心から祈り求めて、さうして手應へのあるところまで行つて御覽なさい、私はこれくらゐに興味のあることはないと思ふ、人生の價値といふものはキリスト化せられて、初めて生ずるものである、斯る妙味のあるとを知らない人生といふものは何の値打もない、實に穀潰しと云はなければならぬ、世の中に居つても何の役にも立たない、世を去つても地獄の釜汚しぐらゐである、どうか私共はキリストの聖意に適ふ生命を養ひ立てゝ、此世に於いて芳しき人生を送るばかりでなく、天國に於いては尚更に麗はしき生命を以て、神の聖前に出るやうに、大いに磨き養ひたいものである、今日の我々は僅か幾萬といふ信者の數で、而かも四千八百萬の人間を感化しなければならぬ責任を負ふて居るのである、又是れより後に來るべき幾億の人間に感化を及ぼすべき責任を負ふて居るのである、又亞米利加や英吉利や獨逸邊りの信者よりも、尚更に清き麗はしき尊とい……彼等の龜鑑となるやうな信者にならなければ、私共の責任を盡し得たりとは云へない、或人は四千八百萬の人間を感化

しなければならぬとか、亞米利加や英吉利邊りの信者の龜鑑とならねばならぬとか、何を夢見て居るのだといふであらうか、そんなことは何うでも宜い、我々はさういふ詰らない人には眼を注がない、我々の眼を注ぐところは聖書である、聖書の中に示されたるキリスト、聖書の中に注がれたる生命といふ、神の子を持たぬ者は生命がないといふところに眼を注いで、大いに養ふところがなくてはならぬ、英吉利や亞米利加や獨逸邊りの麗はしい信者は兎も角も、一般の信者は左程感心の出來ないものである、其の左程感心の出來ないものを我々の標準にするならば、何うして此の四千八百萬の人間を、何うしてこれより來らんとするところの幾千萬の人間を感化することが出來ようか、セントベルナルド、セントフランシスを標準として、キリスト、イエスを標準として、大いに磨き、大いに清めたいと思ふのである、けれども今日の私共は實に詰らない、味ひのない生涯を送つて居る、私共の生命は全世界よりも尊いといふことは夢にも思へない、日本全國より尊いとも思へない、大いに磨いて、キリスト化した生涯になつてこそ、全世界よりも尊い譯であらうと思ふ。

どうぞキリストの語に對して恥ないやうに、値打ある生涯を天下後世に傳へたいものである、否少なくとも我が子孫に傳へたいと深く感じたので、今日諸君にお話申した次第である。

第九章　人生の大願望

若我兄弟わが骨肉の爲にならんには我はキリストより絕れ沈淪に至らんも亦わが願なり

（羅馬書第九章第三節）

凡そ人間ほど種類の多いものはあるまい、牛羊其他の動物にしても年所を經るに隨ひ漸く種類が殖えるやうなれ共人間ほどには多くないやうである尤も人種別にすれば、其の種類は五つか六つに限られてあるが、十人十色といふ意味の區別に致したならば、百人あれば百色、千人あれば千色、萬人あれば萬色、夫れから百萬千萬億兆となつて行けば、億色兆色といふやうに分れて居る、實に千差萬別、殆んど算ふることの出來ない程である、而して斯の如く多くの差別を生ずる所以は那邊に在るかと尋ねて見れば、人間の願望が違ふある、銘々に願望がある、私は其の人生の願望の大きい小さい、又其の願望の高い低いに依つて、人格の上に非常なる相違が生ずるものではあるまいかと思ふ譬へば此所にコツ剝た椀を一ツ携へ、如何にも粗末な衣服を着た乞丐があつて、表に立

つて何か貰ひたいといふならば、大抵な家が腐れた飲か、喰ふに堪られないやうな汁でもやるだらうと思ふけれども、若し焚立の飯と焚立の汁を其の缺椀に入れてやつたならば、大満足……五度も六度も頭を低げて感謝しよう、是れは乞丐の願望である、乞丐の願望は飢た腹を満たしさへすれば宜いのである、ところが世の中には縮緬の衣服を着た乞丐が澤山に居る、錦の褥の上に座る乞丐が數多居る珍膳佳肴を以て口腹を満たし、夫れで満足するといふ其の願望は、眼の球ほど小さな願望、寧ろ小豆粒ほど小さな願望と申しても宜い、又夫れと同じやうなことがある、夫れは此の十九日からは誓文拂ひがあるから、高島屋か三越に行つてシッカリ反物を買ひ込んで、切めては簞笥一杯衣服を造りたいといふ人もある、イヤ其所まで行かなくても、一ッの抽斗に満つる丈の物を得たいと思ふ人もあるけれども、其の願望や實に小さなもの、これも矢張り小豆粒ほどの小さな願望と申して宜からう、或る月給取が、あれは百圓取つて居るが、何うも百圓では足りない、切めて三百圓ほど欲しいものだといふ、夫れでも小さな願望である、私は日本人の内で満洲鐵道の總裁をして居る後藤新平と

いふ人は、實に愉快な男だと思ふ、日本の歴史に五十頁書いて貰ふやうな人間となるよりも、世界の歴史に一頁書いて貰ふやうな人間になりたいといふ願望を持つて居る、面白い……實に面白い、日本の歴史に五十頁書いて貰ふよりも、世界の歴史に一頁書いて貰ふやうな人間になりたい、さうすると彼れの願望は世界的の仕事を一ッやつて見たいといふ、何うも日本一の願望を持つて居るけれども、後藤新平さんも救世軍のブースの傍に行つたならば、草履取にも價せんかと思はれる、何となればブースは世界の凡ての人間、殊に貧境に居る人間は皆我子と思つて居る、世界を我家庭と思ひ、其家庭の中に居る凡ての人間は我子だからして、之を救はなければならぬといふので、七十幾つの高齢なるにも拘はらず、世界を巡廻つて力を盡して居る、何ぼ後藤新平さんがエライ願望を有すると申しても、世界の億兆を救ひたいと云ふブース大將には及ぶまい。

又私は人間の願望に高いのと低いのがあるといふことを考へて見たのである、何うしたらば朋友に賞めて貰へるか、何うしたらば世の人々にヤンヤと喝采をして貰へるだらうかといふやうなことを考へ、美しい衣服を着たい、美味い物

を喰ひたい、柔かに蒲團の中に寢たいといふ、是等はみんな己れ……己れといふものが標準、何ぞ其考の低きや、或は新華族になると、直きに標札に男爵何の某、子爵何の何某と筆太に書るさせ、下女下男には直ぐに御前樣と云はせる、今まで旦那樣といふたのが、俄かに御前樣といふのだから、ウツカリ言損ふ、さうすると何うも怪からぬ、言直せといふ、何ぞ夫れ願望の低きや、伯爵樣でも子爵樣でも侯爵樣でも、其心は己れといふより他にない、己れといふところに結付いて居るから實に低い、一椀の飯を貰ふて滿足する乞丐と、願望の高さ低さといふ點から考へて見れば相去ること遠からず、即ち間髮を入れない、ところが見る影もなき陋屋に住んで居つて、神よ願くは日本國を救ひ給へ、願くは五千萬衆を救ひ給へと、祈る人が玆にありとするならば、其理想と其願望の崇高なるには感佩せざるを得ない、第十九世紀の前半に英國にトマス、アルノルドといふ大敎育家があつて其門下より幾多の大人物を輩出したるとは諸君の知らるゝ通りである、其家に數十年の間寢床に寢た儘で動くことが出來ない老姉さんがあつたが、或人がアルノルドに向つて「先生は實に敎育界の偉人である

のみならず、神の教會の爲にも大恩人である、一夜の夢の覺むるときは確に神の御前に於ては天國の上座を占めらるゝであらう」と云ふ意味の話をした所がアルノルドは赤い顏をしてイヤ「私よりもマア一ツ上座を占める人がある」と云はれた、ソコデ其人は吃驚して「誰でせう、凡そ英國に於いてトマス、アルノルドほど立派な人間はない、トマス、アルノルドほど大人物を薫陶た人はない、功績より見るときは何人も彼に及ぶものはあるまい、然るに彼よりマア一ツ上座を占める人があるといふのは誰だらう……先生誰です」と問へば『私の内の姉さんです』と答へた、すると其人は『貴方の姉さんは幾十年の間寢床に寢たッ切で動けぬ人であつて、世の爲人の爲には口を開いて說敎をされたこともなければ、又手足を動かして働かれたこともない、其姉さんが何うして貴方より上座を占めるのであらうか』と云へば、アルノルドは答へていふに『マア彼の姉ほど私心のない人はありません、幾十年の間寢床に就いて居りますが、自分の身上に就いて何一ツ訴へたことはありません、私の妻が外に出るときには衣服を着替や、頭のことから足のことまで注意をして呉れます、又私の子供

等の教育のことに就いて充分氣を付けて呉れますが、自分の事に付ては身に病氣のあることまで忘れて居るやうであります、自分が病身であるといふことは、殆んど思ふて居らないくらゐである、只四邊の人々の爲に心を用ゐて、人は宜かれがし、人に過失のないやう、人が成功するやうに、人が立派な人物になるやうにと思ふて、日夜人の爲に心力を用ゐて居ります、到底私は姉には及びません、天國では確かに姉の方が上座を占めるでありませう』と言はれたと云ふが、いかにも其の姉君は立派な人であつたらう。

今一つ之に類した話がある、新島襄氏は我日本に於て、六大教育家の中に算へられた一人である、此大家の功績は今更喋々するには及ばないけれども、天國に於て、確かに氏よりも上座を占めて居る者があらうと思ふ、夫れは何人あらう、その姉君はアルノルドの姉君と同じことで、多年病床に臥して動けない人であつた、其人が此世を去られたときには、海老名君がそのお父さんのところに悔狀の代りに、喜悦の手紙を送られた、其文言は『承る所によれば、貴方のお娘御は天國にお嫁入をなされたる由、悦ばしいことである、此上もない悦

ばしいことである、今は天國に於いて嘸ぞお幸ひなことであり[illegible]せう』と云ふ意味であつたそうだ、人が死んだのに悔みを云はず、お芽出たいといふ手紙を送つたといふは、同人間に一つ話として、傳はつて居る、斯くも新島襄氏の姉君の此世を去られたことを賞讃する所以のものは實に麗はしい品性の方であつた、實に愛の深い、私のない方であつたからである、何も此の世の中に於いてエライ仕事をしたからと云つてエライ譯ではない、其人が己れを忘れて、人の爲に父母の爲に、兄姉の爲に、弟妹の爲に、親戚朋友の爲に、又天下國家の爲にといふ、美しい、氣高い願望が其處に存すれば、夫れが此上なき立派なものとして賞讃さるゝ譯であらうと思ふ、夫れで私共の願望には大小があり、また、私共の願望ひには高下がある、何うしても人間は小さな願望よりも大きな願望、低き願望よりも高き願望を持たねばならない。

又吾人の願望に清められた願望と、清められない願望との差別がある、即ち或人は金を儲ける、金儲けにのみに力を盡して居る、實に小さい願望だ、金を儲けやう〳〵と思ふ人は果して汚れて居る、アゝ穢いと云つて袖を拂はなけれ

ばならないようなのが頗る多い、去りながら諸君、私共の知れる内外の人々の内には、幾十萬幾百萬幾千萬の金を儲けても決して、穢いといふ言葉を附けることの出來ない人が居る、金が貯れば蓄るほど穢なくなるのは世の常であるが、金が貯るほど清らかになつた人がありとすれば、是れくらゐ尊い人はない、ロツキフエローは石油王として世界第一の金滿家となり、世の公益の爲には幾千萬圓でも惜氣なく出す人であるが、人はロツキフエローといふと、皆嫌がる、皆爪彈をするのである、同じ金を儲けた内にても、カルチギー翁は何時へ行つても尊敬される、何所へ行つてもカルチギーの話は人が雲霞の如く集つて聞く、何故にロツキフエローとカルチギーに斯くの如き差異を生じたであらうか、同じく金を儲けた人であるのに、一人は排斥され一人は持囃さる、ロツキフエローは實に亞米利加の人々から憎まれる、一人で道を歩くことも出來ないほどに憎まれる、金を出さないかといふと、市俄古大學の爲には既に一千八百萬圓も放り出したくらゐである、茲が即ち清いか汚いかといふ點であらうと思ふ、其の金儲けの方法が汚ないのと清いのとの相違であら

うと思ふ、又政治家といふものを見ても同じことである、政治家といふ名を聞くと、賄賂を聯想する、政治家と賄賂と云へば、マア大抵當らずと雖も遠からずだらうと思ふ、其同じ政治家の中でも、亞米利加の大統領ローズベルトが金持征伐をやつても、人々を牢屋の中に打込んでも、今日亞米利加の八千萬の人間が彼を敬ひ尊ぶ、實にこの人のやうな立派な人はないと賞讃して居るばかりではない、世界萬民が彼の人格には感服をして居るのは、抑々何故であらうか、多くの政治家は自分が權威を握つたならば、慾の爲に其の權威を用ゐようとか、世の中に盛名を得ようといふやうな、穢いものがあるからして、位の山に上つても、人々に嫌はるゝ譯であらうと思ふ、ローズベルトの如きは位の山の絶頂に上りながら、實に清き生涯を亘り清き願望を以て一心不亂に力を盡して居るから、人々に尊敬さるゝ譯であらうと思ふ、又同じ學者の内でも彼かと輕蔑さるゝ人もあれば知ると知らざるとに拘らず先生と仰かるゝ人もある、同じ學者であり同じ帝國大學の敎授でありながら、一人は彼かと輕せられ一人は先生と敬はる何故に斯の如き違ひを生ずるか、是は其願望の清いか汚いかによる譯で

ある。

して見ると諸君、私共は清められたる願望を持たねばならぬ、學問ではニコートンをして三舍を避けしむる程の大學者になつても構やアしない、金を儲けても構やアしない、政治家になるならば、ローズベルトの頭を押へてやるやうな政治家になつても構やアしない、只此所が（胸を示す）清らかであつて、人を救ひ世を救ひ、天下國家に盡したいといふ清められたる願望を以て立つといふことが、是れ甚だ大切であらうと思ふ、私共が四福音書を開いて、イエス、キリストの願望が何であつたか、彼の全生涯の願望は何であつたらうかと尋ねて見ると、亡びし羊を尋ねて之を救ふといふことに他ならぬ、將に滅びんとする人間を救ひたいといふ願望、夫れが爲には生命をもお棄てなさるゝといふのであつたから、是れくらゐ高い願望はない、イエス、キリストのお願ひの内には一點の私がない、然らばイエス、キリストのお願ひはどのくらゐ大きいかといふと、萬國萬民を救ふといふことであつた、お弟子方は何うであつたらうか、パウロ曰く、若我兄弟わが骨肉の爲にならんには或はキリストより絕れ沈淪に

至らんも亦わが願なりと元來宗教を信ずるといふは、安心を得たい爲である、キリストに救はれたいといふのが願望であるのに、使徒パウロの如きは同胞猶太人が救はるゝ爲であるならば、自分はキリストより離れて、沈淪に至るも一寸も介意ない、他人を救はんが爲には我身は滅びても介意ないといふ、凡そ新約全書の内に斯の如き大きな固い願望を持つたものを見出すことが出來ない、我骨肉我兄弟の爲にならんには、キリストより絶れ沈淪に至らんも亦我願なりとは、何ぞ其の願望の清きぞ、舊約全書の内に於きては、曩に讀み上げた出埃及記の三十二章の三十三節にモーゼが『然どかなはゞ彼等の罪を赦し給へ然ずば願くは汝の書しるしたまへる書の中より吾名を抹さりたまへ』と祈つて居る、私の名前が神樣の前に帳消にされても好い、イスラエル人民を偶像を拜だ罪より救ふて下さい、私の名前は帳消にしてゞも、イスラエル人民を救ふて下されと願つた、故に舊約聖書に於いてはモーゼほどエライ人物がない、故に新約聖書に於いてパウロほどのエライ人物がない、キリストは無論別者である、キリストを除ては、舊約聖書に於いてはモーセが獨り曉の明星の如くに輝き、新約

聖書に於いてパウロが宵の明星の如くに輝いて居るといふのは何に故であらうか、其の大切な一命を失ふもて構はない、我が兄弟我が姉妹の救はるゝ爲にならばと云ふ願望によることである、心の底に在る願望の深さ、高さ、尊とさは、神のやうな願望と申しても差支はない。

諸君、今日世界に於いて何所が一番宗教上の感化の行届いた、一番道徳の高い、一番清い人間が居る國であるうか、諸君は亞米利加のニューイングランドと仰しやる、諸君は英吉利だと仰しやる、併しながら私は世界で一番清い一番道徳の高い、一番宗教心の盛んなる人間の住んで居るところはスコットランドと思ふ、多年スコットランドに留學をして居られた某君の話に、彼の地には實に美しい習慣が澤山ある、家の内に息子が三人五人あると、百姓屋では一人は牧師又は教授としてさゞげなくてはならぬと云つて、一人丈高等教育を受けさす爲に、餘の兄弟達が力を協せて稼ぐと云ふことである、實に美しい、五人の兄弟があれば、其内の一人は牧師か大學の教師にして神の御用を勤めさせたい、夫れが爲には他の兄弟は土を掘つて居るとはいかにも美しい話である、其のス

コットランドが世界第一の美しい國になつたといふのは、抑々何に原因するか、今を去ること凡そ三百年の昔にジョンノックスといふ清い人が居つて、『神よ我にスコットランドを與へ給へ然らざれば我に死を與へ給へ』と祈つた、ノックスの祈禱の底に一點の私がない、微塵の汚れがない、全身を捧げてスコットランドを救ひたいと祈つた、スコットランドの女王マリヤは英吉利の女王エリサベスの兵よりも、ノックスの祈禱の方が怖いと云つたくらゐ、其願望を持つてノックスが方を盡した、其感化が……神樣がノックスの願望をお聽入れになつたから、スコットランドは實に清められた。

諸君、今から三百年前に我が日本にザビエーといふ一人の聖者が印度から渡つて、豐後に上陸して、夫れから山口に行き終に堺まで來た、と云ふことである、ザビエーは『神よ我に日本國を與へ給へ』と祈つた、素足になつて日本を道中して、斯教への爲に力を盡した、さうして餘儀なく日本を去つて支那に行く途中或島で死んだ、ザビエーが我國に働いたのは僅か一年半であつたが其感化により彼の後に多くの宣教師が渡り來つて、終に十五萬の信者が出來た、其

のザビエーの『日本を我に與へよ』といふ大いなる願望を、今神が聽上げになつて居るのかも知れない、新島襄氏は將に死なんとする日まで、我は日本の前途の爲に計畫をなし、『神よ我國を救ひ給へ』と祈つて居られた、氏は明治二十三年の春に墓なく大磯の露と消えられたけれども、組合敎會が今極めて優勢に神の道を傳へて行けるといふことを考へて見ると、死に至るまで祈られた『我國を救ひ給へ』といふ願望を神が聞き給ふたものと見てよからう、其清い願望は今尙活きて居る、我名に依つて求むるものは必らず與へらるゝとお示しになつたイエス、キリストは私共の願望をお叶へなさらぬことはないと思ふ。

して見ると諸君、今日の我々としてもさう云ふ大きな祈禱は出來ない、さういふ高い祈禱は出來ないと云つて已むべきであらうか、日本帝國の爲に祈ることが出來ぬならば、何故父母の爲めに祈られないか、何故良人や妻の爲めに祈られぬか、何故に息子娘の爲にお祈りなさらぬ、何故に朋友方の爲めにお祈りなさらないか、眞個に神の御前に切なる願ひを捧げたならば、其願ひが聽かれぬといふことはない、其二三の好適例を擧けて見よう、ノックスの願望がノック

スの眼の黒い内に聽かれたか、ザビエーの願望が、ザビエーの眼の黒い内に聽かれたか、パウロの願望も、イエス、キリストの願望も、其眼の黒い内には何にも聽かれなかつた、イエス、キリストの願望は千九百歳の今日聽かれつゝある、パウロの願望も今ヤッと猶太人が救はれ掛けた、千九百歳の後にパウロの願望が聽かれて、猶太人が救はれ掛けた、ノツスやザビエーの願望が今日聽かれつゝあるといふことを考へて見る時には、私共は十年祈つたけれども功驗が見えないと云つて、夫れで失望すべきであらうか、神の一歩は五百年かゝるといふのであるから、十年や十五年は只束の間にして何でもないことである、けれども私共人間の方から云へばもどかしくて堪らぬが、神の方に於いては何にももとかしいことはない、其の願望が生きて居る内に聽かれなくても、眞個の願望を以て此世を去ることであつたらば、ノツクスは死んで後にスコットランドが清まり、ザビエーは死んで後に日本に基督敎が擴まつた如く、私共が死んだ後に初めて聽るゝやうになるだらうと思ふ、假令又私共の願望が願ひ通りに聽かれないとしても今お話し申すが如き大きな願、今お話し申すが如き高き願、

即ち清められたる願を以て、日夜に神の御前に祈る人があつたならば、其人の願は其人の心を清めるのである、其人の風采を清める、其人の人格を清める、其人を大きくするのである、大きい人は大いな願を持つて居る、高い人は高い願を持つて居る、イヤ大きい願高い願を持つて居る人こそ大きい高い人格になれる、何うしたら美しい衣服を造れるだらうか、何うしたら美味い物が喰へるだらうか、何うしたら立派な家屋に住めるだらうかといふやうな、小さな詰らない願を以て祈り、そんなことばかり考へて居つたならば。其人は段々詰らないやうになるものである、けれども眞個に大きな願望を持つて祈るのであつたならば、アルノルドや、新島襄氏の姉さんの如く、寢床に臥して何をも爲す能はずと雖も、其人の願望が天に沖し、之に依つて幾多の社會が清められるゝに至ることは必然である。

どうか諸君と共に大願望を起して、夫れが爲に有ん限りの力を盡すやうにして見たいことである、何ぼ小さな人物と云つても、其小さな人物が他日清らかなる人物になるに違ひはない、棒ほど願つて針ほど叶ふといふのであるから、

私共は世界大の祈禱を致したいものである、かくして初めて我社會を救ふことが出來る、神のやうな清い願ひをしたならば、其願ひが初めて世を清めることが出來る、祈禱會に行つて、各々の願を聞くと、各々の祈禱は立派である、併し其人を見ると、何うも其願が相應せぬやうに見える、けれども祈らない人に比べて見たらば、幾分か清い、何うしたら美い衣服を着られるか、何うしたら美味い物を喰へるかといふやうな詰らない願をせず神よ我を清め給へ、神よ御名の爲にならば私は何をも差出しますといふ祈禱は、假令法螺であつても、其の法螺は實に清い法螺である、神は其清い法螺を認めて、確かに其の法螺を法螺でないやうになさしめ給ふに違ひはない、どうぞ虚言でも宜いから良い願をせねばならぬ、更に進んで其の願望を實現するやうに力を盡したら宜からうと思ふ。

第十章　人格の進歩に伴ふ愛の發展

己人に施れんとする事は亦人にも其如く施よ、己を愛する者を愛するは何の賞賜あらんや惡人にても己を愛する者は愛する也、己に善を行者に善を行は何の賞賜あらんや惡人もまた是の如く行なり、爾曹償るゝ事を得んとおもふ人に貸は何の賞賜あんや惡人も其ごとく償を得んとて亦惡人に貸なり、爾曹仇を愛し又善をなし何をも望ずして借與よ然ば其賞賜は大なり且至上者の子と爲ん夫上者に恩を忘るゝ者及び不善者にまで慈愛を施せば也

（路加傳第六章二十一節至三十五節）

只今讀んだ己れ人に施れんとする事は亦人にも其如く施よといふ言葉は黄金の法律と稱するものであつて、キリストの御教訓の中で最も大切なる一句である、他の聖賢方も略ぼ之に似よつた事を云つて居らるゝやうである、猶太のラビの間に行はれた言葉は己が憎む事を他人にしてはならぬといふ、希臘の哲學者の教にも是はストア派の言葉であるが、矢張り同じやうな意味の言葉がある、孔子が仰せられたる「己が欲せざるところを他人に施す勿れ」といふ言葉は丁

度猶太のラビの己が憎む事を他人にしてはならぬと云はれたのと似て居つて、其意味も殆んど同一ではあるまいかと思ふ、キリストのは己が欲するところを他人に施せといふのである、他の聖賢方のは己が欲しないところは他人にしてはならぬといふ事であつて、其相違は裏と表の差である、積極と消極の相違であるから、字の面で見たところは左程大した相違ではないのであるけれども、之を實際に應用する上に於ては東洋と西洋の相違を生ずるのである。キリスト以前の文明とキリスト以後の文明の相違を生じたのである、己が好かない事を他人にしてはならぬといふ事であつたならば、詰るところは山の中に隱遁して、己れ一人を正しくし己れ一人を清うし己れ一人を立派にして居りさへすれば宜いといふ事になつて參るから、即ち是は利己に陷り易いのである、己が欲するところを他人に施せといふ方であれば、是れは段々と末擴がりにズーッと擴がつて行かなければならない、之れを家庭に施し、之を一町村に施し、之れを郡縣に施し、之れを國家に施し、遂に之れを全世界に施すといふところまで擴がつて行かなければならぬのである。基督信徒の中にも中世紀の頃に於ては世の中

がイヤになつて或は山の間隙或は谷の奥に逃込んで、己れ一人を正しうしようとした佛法類似の隱遁者も出來た事である、けれども夫は己れを正しうし己れを淸うしようといふ一念から發したのであるから、さて隱遁して自己が淸められて見れば、キリストの御敎訓は己が欲するところを他人に施せといふ事であるから他人の居らない山中、他人の居らない谷の奥では施すことが出來ないのであるからして矢張り山谷から出て來て世の中に愛の働きをしなければならないやうな事になつて來たのである。

私は熟々と考へて見たが、凡そ人間のする事は何をするにしても先だつ者は己れなり、花一ツ見るにしても矢張り己れといふ眼鏡で見るのである、心に憂愁があれば靑空に煌々として輝いて居る明月を見ても月見れば千々に吻こそ悲しけれと云つて泣くやうな事になつて來るのである、心に喜悅があれば東の山の端に昇るところの太陽を見て、實に嬉しい喜ばしい宜い心持になつたと云つて飛立つばかりに嬉しくなつて來るのである。併しながら此太陽と月と果して何の相違があらうか、同じ大地を照すところの陰と陽だけの相違であるけれど

も、之れを見るところの人間が陰氣になつて見れば悲しくなり、陽氣になつて見れば嬉しくなるといふやうな事である、天地宇宙の大主宰であるところの神の事を考へるにしても先だつ者は己れなり、己れが小さければ現はるゝところの神も亦甚だ小さいものである、己れが大なれば現はるゝところの神も亦大きい神である、海や湖水の表を照すところの月影は稍や大きいものである、草葉の露に移るところの月影は至つて小さなものである、己れが即ち土臺である、己れを棄てて計る事が出來ない、して見ると此黄金の律法も亦同じ事である、愛といふ問題になつても矢張り己が計りである、汚い心の人に汚ない愛が移る、高貴な人の心には高貴な愛が移るのである、世間狹い人の心には狹い愛が移るのである、世間廣い人の心の中には廣々とした愛が移るのである、淺墓な人の心の中には淺い愛が移り、棹せど底も知れぬ程の深い心の人には深い愛が移るのである。何を計るも皆我心である、我心を棄てゝ計る事は出來ない、玆にキリスト、イエスが己が人に施れんとする事は亦人にも其如くせよと仰せられたが、其己がといふのは何であるか、己がといふは即ち人格であらうと思ふ、人

格といふ内には智意もあり智力もあり情もある、物を決し行ふところの意力も備はつて居る、言換れば人格といふは智も情も意も、總て我に屬する有りとあらゆるところの機關を統一して居るものであるから、此の人格が進歩するといふ時には、即ち己がと仰せられた、己れが進歩する譯である、山に登るにしても一歩高ければ夫丈眼界が廣くなる、數十歩高ければ、又夫丈眼界が廣くなつて來る、いよ〳〵絶頂に登つたといふ時には、攝河泉は愚か大和山城までも眼界に這入つて來るといふ如くに廣々となつて來るのである、此人格が低いといふ人間であつたならば、其人格の低い人間が人にして欲しいと思ふ事はどんな事であらうか、内に無い物は外に出ないといふ、是は科學の法則、内に含まれた物でなければ外には出て來ない、此瓦斯管には瓦斯が一杯滿ちて居るから、螺旋を捻れば其瓦斯が直ちに現はれ出て滿室を照すのである、水道の管には漉上げたところの清い水が一杯に滿ちて居るから栓を捻れば滔々として水が出て來る譯であるけれども、水が涸れてしまひ瓦斯の源が盡きてしまつたならば何ぼ螺旋を捻つて見ても少しも出て來ない譯である、其出て來るといふにしても、

夫に汚ない水を充たして置けば汚ない水が出て来る。汚れたる瓦斯を充たして置けば汚れたる瓦斯が出て来るといふ譯であるからして内に在る物が外に出て来るのである、淨瑠璃新内浪花節といふやうなものを我人格の中に入れて置くといふ人即ち我情感は浪花節や淨瑠璃や祭文で始終悦ばされて居る人が此所にあるとしたならば、サア其人が何か自分が慰めて貰ひたいと思ふ時には、矢張り浪花節が淨瑠璃か或は祭文かチヨボクレか新内かといふやうなものであらう、又友人が茫然として居るのを見て一ツ慰めてやらうと思ふ時には、己れ人に施れんとする事は亦人にも其如くするといふのだからして、其所へ行つて浪花節をやつて見る、チヨボクレを語り出すといふやうな詰らない事になるだらうと思ふけれども、ベトーウエンの作曲かワグネルの夫れか、或はテニソン、ブラオニングの詩といふやうな類のものを常に味うて居る人であつたならば朋友が此頃鬱して困つて居る、何とかして慰めなければならぬといふ事を聞けば、己が欲するところを他人に施すといふのであるから、自分はテニソンの一節を君の爲に朗讀して見よう、自分は出來ないが一ツ誰かに頼んでベトーウエンの作

曲をやつて貰はう、イヤ夫れは宜からう、さういふやうな高い調子の人であつたならば、實に其人格が高いだけ夫丈施すところの愛も亦高いものである。又讀物と云へば自然主義の小説、何所で情死したとか何所で海に飛込んだとか縊死をやつたとかいふやうな事を讀んで、我心に面白いと思つて居る人であつたならば、誰か他の人が何ぞ讀物があるまいかと云へば、其最も汚ない下劣な情を描いたものが我心に欲するものだからして、夫れを人に貸してやらうといふ事になる、借りて讀んだところの者は、貸した人よりもマア一ツ下劣なところに落込む、地獄に飛込むのと同じ事である。

之に反して偉人イエスを思ひ或は波多野博士の「基督敎の起原」を讀んで見たとか、別に慰安となつたといふ譯ぢやアないけれども非常に我智識を增したアいふやうな書物を一ツ我々は進んで讀まなくてはならないと思ふ人がある、誰か讀物が欲しいといふ事であつたならば、其人の頭の中には自然主義の汚ない小説なぞはない、推薦しようと思つても無い物を推薦する譯には行かない、君は「基督敎の起原」をお讀みになつらば、宜からう、君にはスミス女史の書い

た「幸福の生涯」が宜からうと思ふ、君は歴史が好きだが、此頃村田勤氏が「宗教改革史」を書かれたが、十數年の骨折で書かれたものだからして是は御一讀になつたら宜からうといふやうな譯で、我裏に在る物を他人に出すより他に仕樣はないのである、情の上に於ても智の上に於ても同じ事であつて內に在る物が出て來るのである、又何か他人の爲に盡すといふ時に何なつて來るかと云へば、自分は高尙なる贈物を受けて實に氣に入つた、アゝいふ贈物をして呉れる人の心は實に床しいものだと思つて居る人であつたならば、誰某に物を贈りたいといふ時には野卑な物でなしに、實に高尙なる物を贈りたいといふ考になつて來るのである、何か他人の爲に盡すといふ時にも、同じやうに眞に其人が心の休養となり、心の喜悅となるやうな物を其人に施したいといふ事になつて來るのであるからして、人の贈物を見ても其人の人格が其所に現はれて來る、人の讀む書物を見ても其所に人格が現れて來るのである、他人を慰むるといふ時にも其人の人格が其所に現はれて來るのであるからして、我人格が高くなれば高くなる程他人に施すところの愛も亦高くなつて來るのである、或所に火災に

罹つた家がある、私は其災難に同情を表する手紙を一本送つたのである、其隣りの家は半焼までは行かなかつたけれども四分の一ばかり焼けたといふのだからして、其家にも亦一本の手紙を送つたのである、ところが思ひ懸けない其二軒からして非常に厚い禮狀が來たのである、夫れから其後其家族の人に會つたところが非常に禮をいふのである。過日其二軒の家を訪ねたところが、何よりも彼よりも先きに其の手紙の禮をいふのである、私は是れはしたりと思つた、一軒は丸焼をした、一軒は四分の一だけ焼かれたといふ、何か私が先方の家の道具とか何かさういふやうな物を送つたならば夫程に禮をいふて貰ふ譯もあらうけれども卷紙を取つてスラ〳〵と五分か七分も費らない内に二本の手紙を書いて、三錢の郵便切手を貼つて函に放り込んだ丈である、ところがさういふやうに非常に悦ばれるのである、是は何ういふ譯であらうかと考へて見るに、先方の人は實に數十年刼を經たところの基督信者、日曜學校に於て教へ上げられたところの若夫婦である、そこで一本の見舞狀を貰つたといふ事は、簞笥一棹の贈物を貰つたよりも悦んで呉れるといふは何か其所に床しい人格が存する事

を認めざるを得なかつたのである。

使徒パウロの如きは我が爲に祈つて呉れろといふ事を、テサロニケの人々に前の書にも後の書にも言ひ送られた、前の書の五章の二十五節を見ると「我儕の爲に祈るべし」とある、後の書の三章の一節を見ると「我儕の爲に祈れ」とある、他人に祈禱をして下さい、我神の道を憚るところなく說得るやうに我爲に祈つて呉れろといふ、其非常に高いパウロの人格は贈物を下されとは云はない、我爲に祈つて呉れろといふ要求をせられた、そこで使徒パウロが人々に何を與へようかといふ時に我爾曹の中に記臆して居る事は神が證據人であると書かれた、パウロが他人に與へようとする第一の贈物は祈禱である、自分が他人に祈つて欲しいといふのだからして、他人も亦祈禱が欲しからうと思つて他人の爲に祈るといふ、自分が災禍に遭ふた時に同情の手紙を貰つて實に嬉しかつたといふのならば、同情の手紙を他人に送る事が即ち其人に盡すベストだと心得るのと同じ事である、自分が病の床に臥した時に他人が慰安に來て呉たといふ事を此上なき喜悅とするならば、他人を慰むる爲他人を訪問する事を以てベスト

と考ふるのは是れ當然であらう、自分が罪を犯した時に他人が二度も三度も來て我を諫めて呉れたといふ事を此上なき愛と思つて居る時には、他人が墮落しようとする時には面を冒して諫める事は、是れ他人の爲に與へるベストであると思ふのは當然であらうと思ふ、當に人々が只一時愛の爲に是々の事をしようと思ひ立つばかりではなく、全生涯を愛の働きに打込むといふ決心をするのは何の邊から湧き出して來るかと尋ねて見れば、矢張り己が人格の底に非常に感ずるところのものがあるからであらうと思ふ。

曾てアウトルックを讀んで居つた時に感じたのは、一人の看護婦がある、其看護婦に對して貴女は何うして看護婦に成られたかと問ふと答へていふには「私が九ツか十かの時であつたと記憶致します、其時私の母は亞米利加の西の開墾地に住んで居つて大病に罹りましたところが、醫者も居らない、切めて看護婦なりとも間近に居つて呉れゝば此病氣は助かるだらうと思ひましたが、看護婦は居らない、醫者にも掛る事が出來ず看護婦にも介抱さるゝ事が出來ずして到頭我母は亡くなりました、夫れから私は其九ツか十の幼な心の中に自分が人と

成つたならば看護婦になつて、切めては斯かる塲合に遭遇した病人を助けたいといふ情から、身を捧げて看護婦の職に就きました」と、其幼な心に動いたものが其女の全生涯を通して、愛の使者として、幾百幾十の病人を救り助くるところの愛の施しとなつた事を思はなければならない。ゴルドン將軍か千軍萬馬の間に立つた時には、實に如何なる大軍をも取挫ぐといふ勇猛豪氣な軍人であるけれども、彼れが病人の傍に行つて葡萄の房を千切つて、之を病人の口に含ませる時には何と云はうか、實に好個の畫題だ、其ゴルドン將軍が全生涯を通して愛の働きをしたといふのは、是れ何か將軍の心の中に深く感ずるところのものがあつて、遂に其所へ至つたのであらう。

諸君、下劣なる人間は……否下劣なる人間でなくとも、私共の人格がまだ進まない時には報酬附きの愛を人々にしようとする、己れ人に施れんとする事を其如く人にせよといふのであつた、斯くして置けば又人が斯くして呉れるであらう、如彼して置けば又人が如彼して呉れるであらうといふやうな、實に水臭い愛を施すやうな事になつて來るのであるけれども、其人格が進んで來て、い

よ〳〵清くいよ〳〵尊とくなつて來た時には、其人は何をも要求しない、神よりも人よりも報酬を貰ふといふやうな考は更に抱かないで、只我衷に在るものを他人に施したいといふ一心になつて來るのである、ナサレのイエス、キリストの愛は即ち夫れであつたのである、イエスは報酬をお望みなさらなかつたのである、假令報酬をお望みなされたとても、彼の十字架上に命を棄てるといふ犧牲の精神に對して誰が報酬を與へる事が出來るであらうか、恐らく神も人もキリストに報酬を拂ふ事は出來なかつたであらう、報酬の附かない愛なればこそ二千歳の今日に至る迄幾千幾萬の人々が其愛に濕ほされて、自ら悦ぶのみならず、慰められ、勵まされ、他人をも慰め勵まし且つ助くるといふ事になつて來た譯ではあるまいかと思ふ。

アシヽのフランシスの愛にも報酬を望む考はなかつたであらう、他人に施れ樣と思ふ事を他人にするといふのぢやアない、其所は解脫してしまつて、他人が憎まうが嫌はうが叩かうが介意ない、自分が善い事をして貰ふといふのぢやアない、善い事をせずしては居られない善い事をしなければ安心が出

来ないといふので全心全力を注いで他人の爲にするといふのであるからして、其愛や實に非常なる感動を與へるのである、其愛や非常なる潤を與へるのである。私共の父母の愛にも報酬を望むやうな分子は少なかつたと思ふ、私共の愛に對しては父母が報酬を求めたかも知れない、斯うして育てゝ置けば、老境に及んだ時に孚んで呉れるといふ考を有つたかも知れない、けれども末子の私に對しては、到底此子が大きくなつて家を持つまで自分達は生存へる事は出來ないと思ふたかも知れない、故に少しの報酬だに求められた事はないだらうと思ふ、そこで其の父母の愛は私の心の中には非常に響いた、非常なる感動を與へたのである、私共の愛も他人に斯うして貰ひたい、如彼して貰ひたいから自分も斯うするといふのでは不可ない、パウロがいふやうに「我愈々爾曹を愛すれば愈々爾曹に愛せられず左れど我爾曹の爲に財を費し身を盡すべし」といふ、是が聖賢方の愛である、是が神の子の愛である、使徒パウロは正しくキリストの愛を我心に受けて、遂に其愛の報酬を望まずして施す事が出來るやうになつたのである、不肖私共の如き詰らない者でも、初めは多分の報酬を求むるやう

な心持で愛もいたしたが、漸次〳〵に報酬を望むやうな卑しいものは薄衣の如く滅らされて、報酬を望まずして眞個の愛が施したいものであるといふ理想丈は、確乎として我衷に存するやうになつたのではなからうかと思ふ、諸君も亦同樣であらうと思ふ。

けれども諸君、我衷に無い物は出て來ない、英語を稽古した事のない人が西洋人に出會つても英語は決して出て來ない、和歌一ッ學んだ事のない者が如何に美い景色に觸れたと云つても歌が出て來ない、我衷に愛を感じた事のない人であれば何うして愛が出て來やうか、他人が我に盡した事か、神キリストが我の爲にお盡しなされた事を深く覺えて居る人でなければ、實は我四邊の人々に對して愛の心も起らないからして愛の働きも出來ない譯である。して見ると他人の愛をアップリシエートする事は是れ實に大切である、他人の愛を受けてグッと我心の中に感興を起して居るといふ事が是れ大切である、忙しい人が某を訪問しなくちやアならぬ、アヽ昨日も出來なかつた今日も出來なかつた、到頭此週間は出來なかつたが、切めては日曜日の午後になりと其人を訪問しようと

思ふと、日曜日の午後貴重なる時を割いて訪問に出て行く、さうしてア、我勤めを盡した、是れで肩の荷が下りたマア〳〵一週間思ふて居つて遂に日曜日の午後に訪問をした、ア、嬉しかつたと思ふ、其人が又忙しい人の訪問を受けた時に君はマア忙しい中で此遠方にようこそ來て呉れた、サア上つて呉れろと云つて特別の待遇をする、忙しい中を割いて人を訪問した事のない人は、忙しい人が訪問して呉れた時に左程に感ずるものではないのである。他人に物を贈るにも之にしようか彼れにしようか何を持つて行けば彼の人が悦ぶであらうかと、夫婦額を集め、二三日の研究の末、ヤッと是れならばと云つて他人に物を持つて行つて悦ばれたといふ經驗のある人であつたならば、又他人が心盡しの物を贈つて呉れた時に、ア、此贈物は一寸したもの、金に積れば一圓か一圓五十錢だが、此贈物を送るに、彼の夫婦が幾度も相談し幾度も考へて、遂に之を持つて來て呉れたかと思へば、其親切を實に有難く感ずるのである、さうまで思つて持つて來て下さつたかと云つて、深く此方が其愛を受入れる事が出來るのである、ところが諸君、人格の下劣なる人間は夫れが分らない、他人を愛した事

のない人は他人の愛を認むる事が出來ない、他人の愛を認むることの出來ないやうな人であるならば又他人を愛する事も出來ない、是に於てか私共は神の愛を深く味ひ、キリスト、イエスの十字架上の愛の犧牲を深く心に味うて、夫れから父母の愛、師匠の愛、朋友の愛、或は人々の愛を深く〳〵我心に味うて置いたならば、內に在る物が外に出て、遂に夫れを他の人々に敎へ施す事が出來るやうになつて來る、何故に人が明智光秀を憎むであらうか、何故に足利尊氏を憎むであらうか、何故に歐米の人はイスカリオテのユダをあれ程に憎むであらうか、他ぢやアない、イスカリオテのユダはキリストの愛を他の弟子方と同じやうに受けたに拘はらず、恩に報ゆるに仇を以てした、足利尊氏は後醍醐天皇の寵愛を受けながら、遂に天皇に向つて弓を引いた、明智光秀は織田信長に頭を叩かれたといふ忿怒はあらう、けれども信長の恩寵を身に浴びながら信長父子を本能寺に斬つたといふので人々が憎むのである、世の中に恩知らずほど仕方のない人間はないといふのは卽ち夫れである、恩を知らないといふ人間、恩を忘れるといふ人間は人間の屑である、恩を知らず恩を忘れるやうな者が何

うして他人に愛を盡す事が出來ようか、恩を思ひ恩を返す人にして初めて愛の實行が出來る、私共基督信者が神の恩を思ひキリストの愛を深く感ずるにあらざれば到底報酬の附かない眞實の愛を人々に施す事は出來ないであらうと思ふ。

此黃金の律法は個人と個人の間に行はれて居り、又家庭と家庭の間に行はれて居つたが、遂に今日では國と國との間に之を行はなければならぬといふのである、然るに國の人格が低い國では行ふ事が出來ぬ、世界に於て國としての人格が一番高いのは英國である、英國が第一に之を實行する資格を有て居りはしないかと思ふ、亞米利加は勿論之を行ふべき國であるけれども、如何せん八千萬の人間の中には伊太利人ありボヘミヤ人あり獨逸人ありといふやうな譯で、種々雜多なものを含んで居るから、大統領は實に人道的大統領といふルーズヴエルトを頂きながらカリフオルニヤ其他の州に於ては日本人を排斥するといふやうな非人道的の決議をやらうとする、實に亞米利加の善い人々に取つて氣の毒に堪へないのである、善い人々がキリストの黃金の律法を實行しようとするのに、其矢先に惡い無智な者共が其黃金の律法を片端から破るといふ、我日本

も同じ事である、善良なる民は韓國民を敎化したいと思つて居るのに善からぬ同胞が韓國人を虐るので、いよ〳〵韓國人は日本人の憎むべきを知つて慕ふべきを知らないといふ事になる、是は日本の國としての人格が低いからである、個人としての人格が高まつて初めて高い廣い愛が出來る、家庭の人格が高まつて初めて其家庭から清い高い愛が現はれて來る、國家といふ人格が進んで、初めて其國家から高い清い愛が流れ出る譯である、併し國家が黃金の律法を守るやうになるのは前途尙遼遠である。

どうか私共の家庭の內に御互ひ個人〳〵がキリストより流れ出る愛の泉を汲んで、此愛を四邊の人々に是非施したいものである、夫れで人格の進歩に伴ふて初めて淸き高い愛が發展するといふ事丈を、此黃金の律法と共に御記憶あらんことを切に希望するのである、

第十一章　沈默の教訓

其時いたりて必ず成べき我が言を信ぜざるに因なんぢ瘖となりて此事の成日まで言ふこと能はじ
然りといへどもエホバはその聖殿に在ますぞかし全地よその御前に默すべし
（哈巴谷書第二章二十節）

（路加傳第一章二十節）

先日路加傳を開いて見ると、ザカリアといふ祭司が神の宮に登つてお祭りの事をいたして居つた時に、神が其妻エリサベツに一子を與へ給ふとの示しを受けたところがザカリアは甚く其事を疑つて、年も既に老いたるものであるからして、到底さういふ嬉い事はあるまいと思ひ神命を受けなかつたからして曩に朗讀致した如く汝は必らず成るべき事を示されたのに信じないから、子供が生れる日までは瘖となつて物言ふことが出來ないといふ神の宣告を受けたと書いてある、これ、果して事實であつたか何うだか些と疑はしい事である、然し只一の傳說として敎訓を學ぶ事にせよう、瘖となつて物言ふ事が出來ない、而も

其間が十ヶ月の久しい事であつたといふところからして、此十ヶ月間の沈默の生涯はザカリアに取りては何の敎訓を與へたであらうか、彼は十ヶ月間に沈默に依つて益を得たのであらうか、又損を得たであらうか、彼れの精神は向上したであらうか將又下落したであらうか、何うであつたらうかと考へて見たいものだ、餘り願ふ事ではないが自分達も進んで瘖となつて、若干の日の間又は若干月の間精神の修養をいたしたならば確かに益が多からう、確かに我心は向上するであらう、ザカリアは沈默して深く神の恩愛を味ふた上に、年頃日頃求めて得なかつた一人の子さへ得たといふ事であれば彼れに取つては內外に於ての恩愛であつたと思はれる、して見ると沈默といふ事は實に味ひのある事だといふ考へが起り來つたのである。

諸君、私共人間には外面の生活と內面の生活との二ッがある、扨て外面の生活といふのは何うして食はうか何うして着ようか何うして飮まうか、どんな家に住まはうか何の仕事をやらうか、家を何ういふやうにして治めやうか、天下國家の爲に如何にして盡さうかといふやうな譯で、我身を處し、我家を治め、

社會に對しての人間の道を盡すことに外ならない、內面の生活とは或は書齋に引籠か、或は化學室に這入り込、或は人里遠き奥山に潛む、して心意の働をすることである尤もさういふやうな所に潛まなくても、道を歩いて居ても瀛車に乘つて居ても其人の心の內の働きをすることである、外面の働きは身體の外に現はれ、內面の働きは多くは身體の內で行はれて居る、幼兒は一種の肉の塊見たやうなものであるが、又其內面の働きはないとは云へないが未だ內的働が始まらないと云つても宜いくらゐだらうと思ふ、そこで幼兒は外から來るところの刺戟又は暗示に依つて動くものである、非常に泣いて居つても抱へて動搖つてやると直ぐに泣止む、又母親の聲が聞えると、今まで泣いて居つたのか直ちに泣止む、何か外から刺戟を與へ暗示をいたすと、其方角に心が轉じてさうして色々な動作をやる、大抵十か十一くらゐまでは始終外の物に動かされて居るから一寸もジッとして居らない、三十分ジッとして居れと云つてもジッとして居らぬ十分賴からジッとして居れと云つても、三分でも宜いからジッとして呉れろと賴んでも、其三分も何うやら難儀である、始終動いて〳〵止まない、と

ころが十二ぐらゐか十三四になつて來ると內の働きが大分出來て來る、頻りに石盤を持つて何かやる、姉や妹が其近所でワイ〳〵云つて騷いで居つても平氣で何か書いて居る、實に妙だ、十か十一ぐらいまではなか〳〵ジッとして居ない、餘程面白い玩具でもやつてこれで遊べといふ、其玩具を以て二十分か三十分は遊で居る、けれども直きに倦いて來ると又騷ぎ出す、實に面白い、十二十三になつて來るとチャンと一人で治り返つて居る、十でとつくり治まつたといふところは其所だらうと思ふ、實に妙である、自分の子供の時の事を考へて見ても同じこと、諸君の幼い時分のことを考へられても同じ事、さう喧しう云はずにジッとして居れ、些とぐらゐは一人で其所で遊んで居れと幾度叱られたか知れない、お前は本を讀んで居るのか遊んで居るのか分りやアしない、本を讀むなら一人でジッとしてお讀み、本を讀むのは心で讀む、口先ばかりで讀んで居る、手習は手の先である、心ぢやアやつて居ない、夫で矢張り手習しとるつもりか、右の手で手習をして居つて左の手で何かやる、口では本を讀んで居つて此方の手では隣りの人の首筋を摑んで何かして居る、なか〳〵ジッとして居

ない、けれども十でとつくり治まる、私は九歳の時に治まつて、グッと自分の心に何か感じた、夫までは矢張り口で本を讀んで耳では他人の話を聽いて居つた、右の手で手習をして左の手で遊んで居つたが、九ツの年に不圖感ずる事が出來てからは、本を讀む時にはジッとして本を讀む、手習する時には一生懸命に手習をする、夫で矢張り靜かにして治まつて勉強も出來る、家で家内やなんぞと實に彼の子はサッパリ性根が入らぬ、何うもならぬといふやうな事をいふが、私の九ツの時分の經驗があるから今に治まる、今に沈默するに違ひないと思つて居ると、果して皆それ〳〵内面の働きが出來て來ると治まるといふ事を見るのである。

是は子供の生活であるが大人の生活も同じ事である、些ともジッとして居ない人がある、起つて見たり坐つて見たり歩いて見たり窓から覗いて見たりマア何か始終ガサ〳〵やる、實に何うも他の人が氣忙しい程に其人がガタ付く、夫か家で些ともジッとして居らない、誰かを相手にして喋舌つて居る、お朋友を連れて來る他家に出掛けて行くといふやうな譯で薩張り坐りが着かぬ、夫かと

思ふと何日でも默つて殆んど居るか居らないか分らないやうな人があるのである、イエス、キリストはそんな人であつたらうと思ふ、彼れは喧しき事なく其聲は巷に聞えなかつたと記いてある。治まり返つて居らつしやつたらうと思ふ、どんな人が治まり返つた人であるかといふと、心の確かな人思ひの深い人内面の生活のエライ人である、どんな人が騒ぎ廻るかといふと、學問もなく教育もなく、内面に於て何等の働きもないやうな人が動き廻つてガサ〳〵して居るのである、果してさうであれば大抵其人の動作を見て、是はエライ人か詰らない人か、是は深い人か淺い人か、是は高い人か低い人か直きに分る、何うも人間は過日からお話しするやうに何でも看板に現はれて來るから仕樣がない、其内面の事をよくせようといふ事になつれば沈默の生涯が甚だ必要であらうと思ふ、之を歷史に探ね之を今日に徵して見ればよく分る、一體どんな人が沈默を守るかどんな人が沈默の生涯を求めて居るかと尋ねて見ると、いづれの方面にもある、ルースヴエルーのやうなエライ政治家は一寸もジッとして居らないだらうと思ふであらうがそうでもない、彼が大學に居つた時に朋友の部屋に遊

びに來て其邊に本があると「一寸此本を見せて呉れろ」と云つて、さうして安樂椅子に腰掛けたらば、他の連が皆返つてしまつて、其訪ねて行つた朋友も其所に居なくなつても、些とも知らずして矢張り其本を讀んでしまふまで讀入つて居つた、アブラハム、リンコルンの如き政治家は彼れ程の活動をやつたのだからして沈默といふ事は知らなかつたかと思つて尋ねて見ると、リンコルンは青年の時代には學校へ行く資力かなかつたので、日々勞働をして働いて居つたのである、時に近傍の小山の上に登つて、木の下に朝日の射す時には西側に坐り、夕日の射す時には東側に坐つて、心から本を讀込んで居つた、スプリングフヰルドに於て彼れは毎朝運動をする、彼が運動をする時に人が道で出會つても些とも知らない、其脇をスレ〳〵に歩いて行つても知らない、其時はアブラハム、リンコルンは政治問題を頻りに考て居つただらうと思ふ、ジョンスチユアルトミルは倫敦に住居をして東印度會社に事務を執つて居つた、自分の家から會社へ行く間に、或時は道端の瓦斯燈の柱にコツンと行當つたり、或時は向ふから來る牝牛に行當つて帽子を脫いで失禮御免なされと云つて挨拶をしたり、

或時は淑女に衝當つて此畜生めがと云つて無禮をしたといふやうな逸事が澤山あるが、我宿から其印度貿易會社に足を運ぶ間に彼れは一ツの大思想を辿り辿つて、遂に一代の傑作を出したといふ、二三日前にデカルトの傳記を見て居つたが、近世哲學の鼻祖と仰がるゝデカルトは八年の間天主教の學校で勉強をして、其勉強が終ると、家庭の切なる願ひに依つて軍人生活に這入つた、軍人の常として彼れも交際社會に出なければならぬやうな事になつて來たからして、少時交際の花を唉せて居つたといふ、けれども一人の學者と話しを交へ、一人の朋友と學問上の話しを致した其瞬間に、快活なる少年士官と交はるよりも陰鬱なる學者と交はるは餘ッ程優れりといふ考へになつて、遂に彼れは巴里の或巷に隱れてしまひ、門を閉ぢて學問の研究に取掛つた、二年の間は親戚も朋友も何所にデカルトが隱れたか知らなかつたといふ、軍人生活の間に冬營をやつた、寒風凛冽と吹頻る時に營所に籠つて居つた、此營所に籠つた其間にデルカトは人世觀、或は宇宙觀を考へた時代でつて、彼れの內面生活の最も活動をした時だと申す事である、而して彼れが一卷の書物を著はすと評判が高くなり四

方八方から論戰を向けられたけれども、戰ひを避けて靜かな所〳〵と云つて或は和蘭に逃げて行き或は瑞典に逃げて行つて、沈默の生涯を送らんことを彼れは努めたのである。

宗教家といふことになれば、パウロは三年の間亞拉比亞の野の中で沈默を守つたのである、ペテロは大方毎日々々物干に登つて沈默を守つたであらうと思ふ、中世紀の聖人達の內には己が家を飛出して、深い谷や深い山に籠つて沈默を守つた人もあるのである、ナザレのイエス、キリストは十二の年までは矢張り子供の生涯で、近所隣りの腕白小僧のみを相手にして遊び暮しなされたかも知れない、けれども十二の年以來父ヨゼフが死去して後は、何かイエスの心の中に深く思召す事があつたか、三十の年まで十有八年の間沈默の生涯を送られた、尤も大工の仕事をして日々お稼ぎなされたのであらう、けれども時にはテーポル山に登り、時にはガリラヤの湖邊を散策なされて沈默の生涯をお送りになつたらうと思ふ、其證據にはあれ丈のエライ考への人、あれ丈の奥深き智惠と思想とを持つところの人が、三十の年に公の生涯に這入つて弟子を取つて活

動を始めらるゝまで、即ち外面の活動を始めらるゝまで近所隣りの人は一個の大工さんと思つて居た、何にもエライ人とは思はなかつたそうである、彼れはヨセフの子に非ずや、彼れは大工の子に非ずや、何うして大工の子がアゝいふ學問をしたかと近所隣りを驚かせた、其三十の年までは確かに沈默の生涯をお守りになつたであらう、公けの生涯にお這入りになつて食事をなさるゝ暇がない時でさへも、ソッと宿を脱出でゝ山にお登りなされて、終夜沈默の生涯をお送りになつたといふ事が聖書の中には彼所此方に見えて居るのである、英吉利の諺にも「口喧しき人は頭が空虚」とある、頭の充實した人は口を噤んで居ると云つても間違ひはなからうと思ふ、貴方方の知己の内で考へて御覽なさい、彼れは初めから終りまで喋舌り續ける、道などでウッカリ會へぬ、摑へて喋舌るから困ると思ふ人がありませう、そんな人に頭のエライ人があらうか、四斗樽に三斗八升酒を入れ置けば能く音がするといふ、四斗樽に四斗入れたら……一杯入れたら何の音もしない、即ち沈默である、人間も亦然り、内に充實をして來ると外が喧しうない、外の喧しいのは内に何にもない證據と云つても宜い

だらうと思ふ、沈默なるかな〳〵、沈默の生涯こそ實に味ふべき生涯である、イエス、キリストは「汝等祈禱をする時は嚴密かなる室に這入り戸を閉ぢて隱れたるに在す天の父に祈れ」とお示しになつた、彼の密なる室といふ言葉を見ると嚴めしい室の中に這入つて而も扉を閉て其内に沈默して居れといふことである、私が勝海舟にお目に懸つた時に先生は「私は氷川に住んで居る實に東京の中央でなか〳〵喧しい所に居るんだ、私は東京の中央で隱居が出來るが、板垣退助は土佐に引籠まねば隱居が出來ない」と是は眞に味ふべき言葉だと思ふ、海舟は大都會の眞中に在つても隱居の出來る人、喧々囂々の巷を歩いて居つても隱居の出來る人だが板垣さんでは六ツかしい、其所が勝伯のエライところだと思ふ、内面の働きがエライからどんな所でも隱居が出來るが、内面の働きの乏しい人は隱居は出來ない。然らば諸君が私に向つて沈默して何うする、小人閑居して不善をなす至らざるところなしといふが、我々が沈默の生涯に這入つてジッとして居るとどんな事を思ふかも知れない、夫よりもまだ彼方此方驅ずり歩いて居る方が餘ッ程ましだといふ、夫はエンプチマインドの人がジッとし

て居たら不徳義な事を思ふかも知れない、そこで沈默の生涯に這入る第一歩は讀書することである、其讀書書物を開いて眼をパッチリ開けて字丈讀んで居るではない、本を開いて居ても心は隱居しちやア居ない、心は沈默を守つちやア居ない、道頓堀を歩いて見たり、千日前の喧しい小屋の中に出這入をしたりして居れば、半日本を見て居ても其人は本を見て居るのぢやアない、沈默をして本を讀むといふのは、其書物が與へる思想、其書物が與へる奥深きものに觸れて、さうして內面の心の働きが非常に盛んになつて來て、續々と面白い思ひが沸いて來、新らしい考が其所へ附いて來て止められないといふやうになつた時が、即ち沈默の効能の現はれた時である、多くの人は本て讀むのに、友あり遠方より來る又樂しからずやといふやうに大きな聲を出して讀む、坊主がお經を讀むのに大きな聲を出して讀む、夫は口が讀むのである、心で本を讀まうとすれば沈默する、默讀する、ジッと沈んで書物の中に這入り込んでしまふのだからして大きな聲などは出ない、聲を出して本を讀むといふのは、外部の騒がしいのを防ぐ爲なら宜いかも知れない、けれども眞個に書物を讀む人は默つて心

で讀む、讀めば讀むほど内の世界が面白くなつて來る、諸君さういふやうに本を讀れた事がありますが、なか〳〵六ヅかしい、私も六ヅかしい、本を讀む内に時々心が外へ遊びに出でゝ仕樣がない、けれども朝早く起きて靜かなる時、我心の未だ散らない時に良い書物を手に取つて、之を讀去り讀來るほど面白い事はない、次には考察といふ事が大切である、暗記するやうに本を讀んでも仕方がない、本に書いてあるところを皆覺えてしまつたところが別に益するところがないかも知れない、是は物識になる丈である、物識になつたとて仕樣がない。今度は沈默の間に考察する、或は讀んだ事或は見た事或は聞いた事、何か茲に與へられた暗示に依つて考へ、我は何所から何をする爲に來たか、其仕事が終つたから何所に行くか、宇宙は是は何の爲に存するものであるか、宇宙の内に我は存して居るが、我は無意味に此所に生れて來たのであらうか、或は今日の我日本に對して我は何ういふ使命があるが、其使命を果すのには何ういふやうにやらなければならないかといふ工合に或は考へ或は察し、考察といふ事を頻りに努むるやうになつて來たらば、もう傍へ來て人が下らない芝居の話を

したり、相撲の話をしたり、イヤ何所其所で情死があつたとか、イヤ何所其所で首釣があつたとか、井戸端會議で斯ういふ事をいふたとか云ふ事を聞くのは嫌で〳〵堪らないやうになつて來て、人が來てさういふ事を耳に入れる程心の奥深い所に入つて、さうして口ではウンさうか〳〵と聽いて居るけれども、自分の心の内面の働きが非常に活動して居るから、さういふ話を聽くと、社會問題を考へ始めて奥深い所を研究して居る、イヤ井戸端會議などいふものは非常に風俗を惡くするから不可ないとか、或は芝居を見たり相撲を見たりするのは考へ物だといふやうに考へで行くやうになつて來る、其考が他日現はれて或は書物となり或は演説となり或は人に對する助言となり、さうして非常に益をなすやうになつて來るのである。

夫から其次には瞑想である、瞑想といふは眼を閉ぢる、此眼は心靈の門といふ、此の門を閉ぢて、さうして心が奥深い、或は神の愛を考へ或は我心靈の行末を思ひ、或は神のやうな清き心には何うしてなれるか、キリストのやうな美しい愛は何うして出來るか、さうしてキリスト、イエスを憧れ慕ふて、其美し

い性質が我心の中に感化を及ぼして來るところまで行く、瞑想といふのは今まで冷たい氷のやうな心であつたのが解けて、アヽ春のやうな心持になつたといふ如く神を念じキリストを念じて居る間に感化せられて、自分の煩悶も取れてしまい、心配もなくなつてアヽキリストあるが故に我は實に聖なるものである、重きを負へる者疲れたる者は我に來れと仰しやつたが今日はキリストを念じて初めて我心の冷たい氷が解けたといふところまで行くのが、是れ私は瞑想であらうと思ふ、神の心に瞑入り神の心を我心とするといふところまで行くのが瞑想の目的である。

夫から其次には祈禱である、一昨日であつたが、三四の牧師が私の家へ見えて研究をいたしたのである、私は其時に云つた、何うも監督教會などへ行つて祈禱の模樣を伺ふのに、彼れは神との交際ではなくして、司會者と信者との掛合問答だ、神は大なるものなれば神に從ふべしと司會者がいふ、さうすると神は大なるが故に我々謹んで神に從はんと信者がいふ、宛然問答だ、神は天の高い所から子供等が何か問答をやつて居ると欠はせ給ふに違ひはない、祈禱をし

て居るとは思召さぬだらうと思ふ、組合教會の祈禱は、多くは神の名前を唱へて、周圍に居る人々に對する演説である、神よといふ事はいふのであるが、其次に何をいふか、私は斯ういふ決心を致しまして、是から此決心を貫かうと思つて居りますといふと、周圍の人々がエライ決心を彼の人は感じたなと思ふ、私は是までは愛心が少なかつたが、是れからは一ッ愛心を燃して人々の爲に犧牲の生涯を送らうと思ひますといふと、アヽ彼の人は犧牲の生涯に是れから這入らつしやるさうだなと思ふ、又神の方ではなか〳〵エライ事を彼所へ來て唱へて居るエライ唱事を始めたものだと思つて聞いて居らつしやるだらうと思ふ、けれども其心を開いて神とのお交際はとんとないのである、さうして大抵な祈禱が斯樣な事が出來るやうになし給へ、我を清き者となる事の出來るやうにして下さいと云ふ、是は自分が清き者になるから、兎に角清き者になるやうに上の方から些とばかり手助けをして下さいと云つて祈るのである、直接の祈禱には適當しない言葉である、而し其言葉の奥を尋ねて見ると、祈を唱へさうして近所隣りの人々に聞えよかしに長演説をやる、夫れなれば先づ演説をする

が宜い、祈禱をせようと思ふ者は聽衆に或は其所に集れる人々に向つて、私は愛心の足らない者でありましたが、是からいよ〳〵深く愛心を養ふて犧牲の生涯を送らうといふ決心を致しました、私は今日までは詰らない生涯を送りましたが、是から心を入換へてやりますといふ演説をなし而して後神の方に向つて、神よ斯の如き決心を發表致しましたからして、私の力ぢやア行きませんからどうかお願ひ申しますといふ祈禱をするが宜しからう、實に此嚴かなる室に於て神に祈禱をする、沈默の間の祈禱といふのは、神に話しをしてお聽かせ申すといふよりも、神のお話を聽くといふ事の方が大切であると思ふ、祈禱は唱言に非ず、演説に非ずして神の聖意を伺ふ事である、果して祈禱が我靈と神の靈との交際であるとするならば、私共は神の聖前に沈默して、大御心が何所に在かを伺ひ奉るべきであらう。

斯の如く祈禱が沈默の間に出來るやうになり而して會衆と共に祈禱をするといふ時には、其祈禱は極めて簡單である、キリストの敎へなされたる祈禱は極めて簡單である、又キリストが御賞讃なされた祈禱は極めて簡單である、神をだ

しに使つての演説的の祈禱は極めて長い、司會者と聽衆との問答的祈禱は極めて長い何も彼も知つて居らせらるゝところの神の前に出て、祈る祈禱が眞個の祈禱であるならば一言半句にて盡きる筈であらうと思ふ、繰返し事も何にも要らないとキリストはお示しになつたのである、斯く考へ來る時に私共は未だ祈禱の奥妙なる味ひを知らない、どうか諸君と共にキリストの教に從ひ、靜かなる室に於て沈默の間に神と交際をして、其交際の結果はいよ〳〵起つて此所に公衆と共に祈る時にも、密室の内の祈禱が其所へ現はれて來て、我周圍に人あるを知らざるが如き祈禱に這入りたいものである、ソコデ初めて祈禱が眞面目になり、初めて祈禱が眞實な祈禱になるだらうと思ふ、神よ眞個に祈ります、眞に祈りますと云つて、言葉丈が眞個に眞にといふ事を繰返す時には、心が嘘言だ〳〵と云つて内の方から其人の心を引張るに違ひはないと思ふ、眞個の祈禱には眞個にとも、是が眞心から、心からの祈禱だとも云やアしない、オウオウといふて泣く時には眞個に泣くのぢやアない、眞個に泣く時にはオウ〳〵もア〳〵も出るものではない、蒲團に喰入つて泣いて居る、眞個の祈禱をする時

には沈默の間でなくてはならない、私共夫婦の間に於ては口には出さない、けれども眼と眼で話しをして居る、心と心で話しをして居るが如く、神と我との間には心と心との交際でなくてはならないと思ふ、キリスト、イエスがお弟子方と一度も祈禱をなさつた事がなかつた樣であるが、キリストの高き心と弟子方の低き心では提灯に釣鐘、何うも一緒に祈禱は出來なかつたらうと思ふ、ゲッセマヂの園にお這入りなされた時でも、三人の弟子に共に祈つて呉れと云はれても直きに疲れて寢てしまふ、そこでキリスト一人でお祈りなされたのは、其キリストの御心事を考へて見ると、キリストのみが天の父とお交際が出來たのであつて、ペテロ、ヤコブ、ヨハヂの輩はまだ祈禱が出來ない、後に至つて修養に修養を積んで、さうしてペテロなりヨハヂなりヤコブなりの心がズッと高くなつて來た時に、成程イエスが自分等と共にお祈りをなさらぬのはア、此所の意味であつたと思つたであらう。

眞の沈默は以上四つの事を實行する、さうして我內面の世界が開け心の働きが非常に進んで來たならば、私共は何時でも默つて居る、已むを得ずして話す

といふやうになつて來て、其話が心の奥深いところから出て來た時に一言半句が人の腸に徹するやうになるのである、けれども話が口から出て來ると、何ぼ上手に喋舌つて居つても人の腸に徹底しない、自分が實驗した事や、沈默の間に考へた事、又自分が手に握つた事を腹の底から探つて來たならば、隻言半語と雖も人の腸を突くのである、其所が大切である、聖書六十六卷は何所から生れて來たかと云へば矢張り預言者なり、キリストなり、弟子方なりの沈默の生涯から生れて來たのである、私共は餘りに口喧しい生涯をやつて居る、外面の働き丈をやつて居るから、新たに內面の働きに這入り而して、神の聖前に右お話し申すが如く、默つて居つても口未だ物言はざるに人の心を引くやうになつて、多くの人々が從いて來て沈默の間に我を學び、我を味ふて呉れるやうになる、其所が私共の大切なところである、ザカリアは十ケ月の沈默を得て初めて神の聖旨を得たから、我々も若干の時間の間沈默して祈るならば、神の聖旨が分るだらうと思ふことである。

第十二章　昧爽の祈禱

昧爽にイエス早く起人なき所にゆき其處にて祈禱せり　（馬可傳第一章三十五節）

イエス、キリストは神の福音を宣傳ふる爲にガリラヤの彼方此方に說敎をなされ、而かも其御說敎は非常に力の入つたものであつたと見えて、聽聞に來た人々は是は學者のやうではない、權威を以てお話しになつたと云ひ、中には是は如何なる新らしき敎ぞやと云つて驚いた者もあつたと書いて特書してある、何ぼエライキリストのやうなお方でも人々に深い感動を與へる程の說敎をなさるのには、隨分力をお入れになつたに違ひはないのである、力をお入れになつた結果はお疲れになつたといふ事も想像が出來る事である、扨て、いよ〳〵說敎が濟み、步いてベツサイダのシモンペテロの家にお這入りになつた所が、生憎其姑が熱を病ふて居つたので、之を癒してお遣はしになつた、姑は悅んでお給仕をしてイエスをお待遇し申したと書いてある、而して其食事が濟むと多くの病人や、狂人を連れて來たので、イエスは一々其人々に應接をなされに、是

は御說敎よりも五月蠅ことでお疲れになつたらうと思ふ、說敎の方はキリストの使命である、福音宣傳の事はキリストが悅んでなされたところで、何ぼ力をお入れになつても夫程にお疲れではなかつたらうと思ふ、けれども多くの病人だの狂人だのを其所へ連れて來てワイ〳〵ザワ〳〵と騷ぎ立てたのは是は五月蠅いことで、餘程キリストをお疲し申したらうと思ふのである、去りながらキリストの慈悲心の深き、折角賴つて來たものを無氣にお返しなさらずして癒せる丈のものは癒してお遣はしになり、又慰めもしてお遣はしになつたらうと思ふ、其晚は大分疲れて寢床にお這入りになつたものと見える、又前日來の奔走と、病人だの狂人だのいふものを癒す五月蠅い事柄の爲に、天の父とお交際をなされる時間はなかつたものと見える、キリストは多忙しい時は已むを得ず天の父とのお交際もお見合せになつたかも知れない、然しイエスの心としては暫時も天の父の聖顏を拜せずして居らつしやる事は出來ないのである、其晚暫らく身體を寢床の上に橫たへてお就眠が出來たので、まだペテロも其妻も其妻の母上もお弟子方も皆な溫かき夢を貪つて居る時に、誰も知らないやうにキリス

トはコツソリと寢床を脫出でゝ外に出ておしまひなされた、此所はガリラヤの湖の西北の海邊であつた、恰度イエスが外にお出ましなされた時はまだ夜は明放れて居らなかつたが、曉の明星は東の山の端に煌々たる光を放ち而して明鏡のやうな湖水の表には星の光は黃金の浪を漲らして居つたらうし、其所に颯々と吹來る湖水の朝嵐は、イエスが寒さを防ぐ爲に上に纏ひなされてあつた肩衣のやうな上衣を飜へして、如何にも心地よき有樣であつたらうかと思ふことである、獨り人なき所に於いて祈禱をなされたといふ事であるから、或は木の蔭か或は石の上に座してお祈禱をなされたであらうと思ふ、祈禱をするのに非常の時と普通の時とは少し異なるものである、何か出來事があつて、何うしても神の力を仰がなければならないといふ刹那は時所に構ひはないのである、何所にても眞面目な祈禱が出來るか、けれども普通の場合、別に何にも事があるのではない、只天の父とお交際を致したい、只其大御心を伺ひたいと思ふて祈禱を致しまする場合には、時と場所を選ぶ必要があらうかと思ふのである、猶太人は朝の祈禱は九時、晝の祈禱は十二時、午後の祈禱は三時と時を定めて居

つたと云ふ、午後の祈禱よりも十二時の祈禱の方は時が宜かつたらう、十二時の祈禱よりも朝の九時の祈禱の方が時は宜かつたらうと思ふ、朝の九時の祈禱よりも味爽の祈禱は更に宜かたらうと思ふ、イエス、キリストは味爽の祈禱の時をお選びになつたからして、是が最も好い時であつたと思はれるのである、何となれば先きにもお話し申した如くに彼の麗かなる湖の邊り、而かも曉の明星が湖面に黄金の浪を漲らして居る其景色を眺めつゝ、眼を閉ぢて天の父とお交際になると、はや東は白んで來る、東が白むと共に千鳥は聲高らかに音樂を奏する、風は梢を鳴して之に和するといふ時には、小女子が謳ふ歌に優つて、キリストの心を悦ばしめて、其祈禱を助けたに違ひはないと思ふのである。

朝の祈禱は私共の心に非常なる關係がある事を思はなければならぬ、夕の祈禱は疲れ果た身體と衰へたる頭腦でするから、精神が散亂して、何うしても精力を集注して祈る事は出來ないのである、時には祈りつゝ睡眠に這入る事もないではない、けれども一夜靜かに眠しつて身體は元氣付き、頭腦は新らしくなつて來、而して心に懸る心配は夕の睡眠と共に消失せたといふ、朝の時に而も

昧爽に於て神々しき聖前に祈禱をする時に、四圍の境遇は鳥は謳ひ花は笑ふて、我が祈禱を助くるといふわけであるからして、私共の情念は清らかになり、私共の心意は一に集注が出來何となく清々してるから其時に祈禱をする事は最も適當である、若し夫れ私共の祈禱が佛者や神道家のするやうな加持祈禱か又は唱言であつたならば、只大音聲を擧げて叫びさへすれば宜しからう、けれども諸君、私共の祈禱は一面から見れば禪學者や禪僧が試むるところの座禪のやうなものである、座禪義といふ書物を開いて見ると、三不足を謹まなければならぬと書いてある、三不足といふは衣服が足らずして冷々しく身に覺える事は不可ない、衣服が溫か過ぎても不可ないであらうが、まだ溫か過ぎるのは宜いが寒さ過ぎるのは不可ない、食物が不足して腹の中に力がない時も不可ないといふのである、今一の不足は睡眠不足であつて、眠たい眼を擦り〳〵座禪は出來ないといふ、私共が心を澄して天地の神の聖前に靈と眞を以て話しをするといふ時は是れ座禪に似たものである、神の聖前に或は天の恩寵を思ひ或は我心靈の行末を思ひ或は又キリストの榮光と恩寵を思ふ時は、是れ實に靜思瞑想の時

である、其時に腹に力がなく、もう風引きさうな心持になつて來たり、又眠たいといふやうな事であつたらば、何うして眞個の瞑想に這入る事が出來ようか、まだ瞑想丈であるならば宜いのであるが、祈禱の妙境は天の父の御聲を聽くといふ事であり、又天の父の聖旨を悟るといふ事ではないか、聖旨を悟り御聲を聽くといふ時に眠たかつたり、風引きさうなと思つたり、腹が減つたと思つたりしたならば、もう夫で氣は拔けてしまふので祈禱は駄目となる、いよ〳〵祈禱の妙境に這入つて天の父の御心を知り又御聲を聽くといふ時には、我身體のある事を忘れてしまはなければ不可ぬ、イエス、キリストの如き聖なる人でさへも、人なき所に這入つてお祈禱をなされたといふのは、深い意味のあつたことである、四邊に子供の泣聲がする、人々が高らかに笑ひ興ずる音が聞えるといふやうな時でてつたならば何うしても氣が散つて、幽玄なる神の聖旨を伺ひ、神の聖聲を聽く譯には行かないのである、人なきところに這入つてるのは外の譯ではない、四邊の境遇が寂として聲なく、何にも我思ひを散らすものがないことを期するのである、而かも腹工合がよく、衣服の工合がよく、頭腦は

極めて鮮明であるといふ事であつたらば我を超脱してしまふ、己れを忘れてしまふ、我を超脱し我を忘れてしまつたといふ時に初めて、天の父の御聲が私共に聞ゆるの時ではあるまいかと思ふのである、是が祈禱の妙境であり、是が祈禱の本旨でありとすれば、イエス、キリストが昧爽に早く起きて人なき所に行き、其所にて祈禱せりと書いてある、此一句は最も學ぶべき、最も大切なる教訓ではあるまいか、諸君は天の父に祈禱を捧げる場合に我が四邊の事を忘れてしまひ、己れをも忘れておしまひになつたといふ御經驗をなされた事があらうか、使徒パウロが我は身體の内に在つたか身體の外に在つたか知らないが、携へられて第三の天に登つて、聞くべからざる神の聲を聞いたといふ實驗を、哥林多後書の十二章の初めに記されたが、是れが卽ち祈禱の妙境に這入つたといふものではあるまいかと思ふ、私共は祈禱に實驗のないものである、けれども或時には祈禱會に列して、其所で一の大切なる問題に就いて祈禱を始めた時には、司會者の居らるゝ事も、我が四邊に兄弟妹姉の居らるゝ事も打忘れてしまひ、而かして、一生懸命に祈禱をなし祈禱を終つた時に、隣りの人が祈

禱を始めたのを聽き、我が祈禱に同情を表して啜泣をして居る者があるのを見て、アヽ是はしたり此所は祈禱會の席であつたかといふ事に氣が注いた事もあつたことを憶起す次第である、又或時に二人の姉妹と家庭の祈禱をして居つた時に、我思ひが漸次々々に高くなつて、遂に神の聖前まで登つたかと思ふやうな事もあつた、其時も我が前に二人の妹姉が頭を低げて共に祈つて居るといふ事は全く打忘れてしまつて、祈禱終つて眼を開けて見た時に、姉妹がボンヤリとして其所に座つて居るのを見て、アヽ共に祈つて居つたかと思ふやうな事もあつたのである、己れを超脱して、我が精神がいよいよ神の聖前に進み近づく時に方つては、快感と申しませうか清き思ひと申しませうか、實に使徒パウロが聞くべからざる聲を聞いたといふは其所であらうと思ふやうな心持である、使徒ペテロが曰く言ひ難しと申しました趣は即ち夫れであらうかと思ふのである、いつ何時御互ひが祈禱を致しても、天の父は耳を傾けて下さるに違ひはない此頃（暑中の大阪）諸君が水道の水を取らうと思つてバケツを携げて、朝の六時半か七時頃に行つて栓をお捻じなされると、龜の尾の如くタラ〳〵、タラ

〳〵と僅かばかりの水が出て來る、夫から半時間も經つてバケツを携げて行つて、其栓を何ぼ捻つても〳〵一滴も水は出て來ないのである、けれども朝五時か或は五時半頃にバケツを携げて、其水道の栓の口に充て〳〵捻ぢて御覽なさい非常なる勢ひを以て水は滔々と心地よく出て來るのである、私共も同じこと、もう七時八時といふ時になつたならば、サア子供は學校へ行くと云つて大騷ぎをする、家の者は其邊を拭掃除をして居る、もう郵便屋が郵便を放り込んで來る、新聞屋が新聞を放り込んで來る、サア朝飯を喫するといふ大騷ぎ、まだ其時は少しは水が出て來る、もう十二時頃になのたならば何うであるかといふと、大分自分の頭腦が何所へか散つてしまつて居る、さうして夕方になり、もう夜の十二時頃になつて、サア是から祈禱をしようと思つて祈禱を始むるが、何を祈つたやら少しも分らない、祈禱と共に眠つてしまふといふ事である即ち一滴も水は出て來ない、本當な祈禱は何うしても朝でなければならぬ、一度祈禱の妙境に到達しましたならば、朝起する事が快樂となるものである、殊に誰もまだ目を覺して居らない隙を窺ふて、天の父の聖顏を拜する事が非常なる快樂と

なつて來るのである、私は大阪で初めて家を定めたのは土佐堀の五丁目であつた、何所ぞ人の顏の見えない所へ行きたいものであると思つて、夕方から中之島の北側を捜して見ても人ばかり、公園へ行つて見ても人ばかり、是ではならないと思ふて、終に城の南の杉山といふ、今の射的場のある少し北の方へ行つて見たが、其所でも矢張り人の聲が聞える、是ではならないと思つて夫れから敎會に這入つて見たが、此敎會堂とは違ふて、小さな日本建の敎會であつたからして、是又喧しい、其時にもう大阪では人なき所にて祈禱をすると云へば、昧爽人々が寢靜まつて居るときを選ばなければ眞個な祈禱のときは得られないかと思つたのである、今は幸ひに玉造の極く靜かなる所に居つていつでも水殘が出來る、私の書齋は朝早く雨戸を開け放せば、東山が一目に見える、而かも太陽が東の山の上に顏を出して呉れるので、其光線を背に浴びつゝ聖前に祈禱を捧ぐるといふことは非常な喜悅である、牧師としての生命は人なき所に於いて天の父に祈禱をして、其の聖聲を聽き、聖旨を悟るといふところに在りとするならば、アゝいふ靜かなる所に居らるゝといふは、是れ天の恩寵に非ずして

何ぞやといふ考へも起り來ることである。

何うしても諸君、一日の内に……若し一日の内に一度祈禱の妙境に這入ることが出來ないとすれば切めては一週間に一度、一週間に一度祈禱の妙境に這入ることが出來ないならば、切めては一ケ月に一度はキリストの如くに昧爽に早く起きて、人なき所に行き其所にて祈禱せりといふ、其實驗を繰返すことが必要ではあるまいか、今日の信者は獨り日本のみとは申さない、歐羅巴でも亞米利加でも德を修めようとか人格を磨かうとか、家庭を整へようとかいふ實地の問題には餘程熱心をいたすやうであるが、彼のベタニヤのマリヤが我家にイエスをお迎へ申して、お膝元に坐つて、イエスの口から迸り出る玉の言葉に耳を傾けたといふ、彼女の實驗……彼女の實驗を得ることが甚だ疏遠になつて居りはしないかと思ふ、宜しく基督信徒の祈禱は何所から出て來るかを考へなくてはならぬ、家を修め身を修め我人格を高くするといふことは是れ祈禱の結果である、結果のみを求めて其原因に遡つて天の父の聖顏を拜し、聖聲を聞き、又聖旨を行はうといふ、此祈禱の妙境に這入らずして居るといふことは何ういふ

譯であらうか、昔から今日に至るまで如何なる人物が世の中に出でたとしても、眞に清らかであり、眞に奥床しくあり、眞に尊い神々しい人物と云へば、みんな祈禱を常にした人、祈禱の妙境に達した人である、かの信仰の泰斗オーゴスチンから祈禱を取去つてしまつたならばオーゴスチンは何うなるであらうか、オーゴスチンの母親のモニカから祈禱を取去つてしまつたならば、果してモニカの名が今日に傳はたであらうか、果して彼の放蕩息子がセントオーゴスチンといふ聖人になることが出來たであらうか、セント、ベルナルドから祈禱を取去つてしまひ、セント、フランシスから祈禱を取去つてしまつたならば、其セントといふはなくなつたであらうか、聖なりといふ言葉は取消されてしまふ、ルーテルとかカルビンとか、是は新敎の聖なる人であるすから、セントといふ肩書はなかつたのであるけれども、確かに聖者であつた、此等の聖者たちは神の聖前に屢膝を曲げてお交際をしたといふ、實に祈禱の妙境に達した人々であつたと思はれる、私共は三時間の二時間のといふ祈禱は、何ぼしようと思つても出來やアしない、切めては十分間か二十分間、時を費やして聖前に祈禱をす

るといふことは大切である、先日同志社女學校の生徒に話しを致した時に、美しい娘さん達も多く見受けたのである、その時に私は考へた、あなた方は女の嗜みとして鏡の前に坐つて二十分ぐらゐ顔のお化粧をなさるだらう、成程夫れは必要なことである、けれども二十分鏡の前に坐つてお化粧をする時があるならば之を十分にお減らしなさつて、殘の十分を以て心の鏡の前に坐つて、心のお化粧をなされたならば何うでござりませうか、顔のお化粧をしても眞個の美は現はれませぬ、心の鏡の前に坐つて心のお化粧を一日に十分か二十分かなされたならば、あなた方の心が清くなり奥床しくなり、心が美しくなつて來ませう、其清められたる心美しき心尊き心があなた方の顔を映出して來た時に、得も云はれない美しき清き尊き顔となりますぞと申したことであるが、是は獨り女に限つたことはないのである、私共男子も此頃はなか〳〵洒落れて所謂ハイカッテ頭を撫で付ける、中にはチックを附けるといふやうな譯で、鏡の前に坐つてお化粧をする男も大分出て來たやうである、けれども鏡の前に坐つて五分でも十分でも頭を撫で髯を撫でる時があるとするならば、夫れと同時に心の鏡

の前に坐つて、我心のお化粧をすることが甚だ必要であらうと思ふ、心の鏡とは何ぞや、天の父の前に出で聖書を開いて、夫れから聖書を通して神の聲を聞くことが必要である、聖書を通して神の聖旨を知ることが必要である、更に聖書を疊んで直接に神の聲を聞き、神の聖旨を悟ることが甚だ必要であらうと思ふ、けれども多くの人々は時がないといふ、然り時がない、時は造らなければならない、此頃五時に起きて御覽なさい、もう夜は明放れて居る、四時四十分にも夜は明放れて居る、五時半に起きる人が五時に起きたら結構、六時に起きる人が五時半に起きたら結構、六時半まで寢坊をする人が六時に起きたら結構、三十分間早く起きるといふ決心さへすれば、未だ曾て見ないところの味爽の景色を見ると共に、時には曉の明星の光り輝く有樣をも見ることが出來る、諸君が朝早くお起きになり、さうして神に交はるといふ祈禱の妙境に這入ることは、是れ實に人間の生涯に取つて之に優る快樂はないのである、之に優る喜悦はないのである、斯の如き喜悦があればこそ斯くの如き快樂があればこそ、主イエスは昨夜の疲勞を物の數ともせずして、昧爽に早く起出でゝ、人なき所へ行つ

て天の父とお交際をなされた譯であらうと思ふ、どうぞ此祈禱の妙境を眞似をして頂きたいものである。

第十三章　祈禱の生涯

なんぢ祈る時は嚴密なる室にいり戸を閉て隱微たるに在す爾の父に祈れ然ば隱微たるに鑒たまふ爾の父は明顯に報たまふべし　（馬太傳第六章六節）

私共人間は先づ普通の場合に於いては、凡そ生れた時から死ぬる時に至るまで我が周圍の人間に對する生涯を送つて居ることである、父母の如き尊長者、紳士淑女と云ふやうな德の高い人に對しした時には、我心が汚れてあれば自ら恥るやうな思ひを生じ、又我が行狀が卑しければ堪えられないやうな感がするので、夫れは確かに私共の修養に取つては一積の善き感化である、けれども多くの場合には、見る物、聞く物、觸る物悉く私共を害するやうなのが多いこともある、春の彌生の花咲く頃に郊に散策をし、扮裝を凝して歩く佳人を見れば、何か心の內にムラ〳〵と浮上るものがある、夫れは決して良い心ではない、花を見ようと思つて偶々花の下に行けば、醉ひ狂ふて居る者が見える、心を害するやうな三味線の音が聞える、其他我が遭ふ人我が觸れる人は大抵我心を引下

しこそすれ、之を高めるやうな感化力を有つものはないりません、是れが人間普通の生涯である。

さて祈禱の生涯とは何を意味するであらうか、極く容易く一口に云へば、心を天に向けると云ふ事である卽ち對天の生涯である、併しながら祈禱と云ふ中にも加持祈禱と申して、病氣に罹れば病を治して下さい、身上建立に付ては金を儲けさせて下さい、地震災難に對しては災禍を避けさせて下さいと祈るので、是れは基督信者の間にも屢聞く祈禱であるが、多くは稻荷大明神、金毘羅、其他の淫祠に對して御利益を下さいと云ふのであるから、決して心を向上せしむるやうな善き感化は受けないのである、吾人基督信者が對し奉つる神は如何なる御方であるかを悟られたならば、疫病避けの祈禱などは余りしないやうになるだらうと思ふ、尤も金儲けをさして下さいと云ふやうな祈禱は余り聞かないことである、災難を逭れしめ給へと云ふ祈禱は折節聞くやうである、夫は人間の弱點として免がれない事ではあるけれども、斯樣な祈禱ばかりを致すならば、假令天の神にお祈禱を致して居ても、其人は弱い詰らない乞食根性の下卑た人

間になつてしまふと云ふ事は、私が斷言して憚らない所である、又一方には禪宗或は儒道の流れを汲む人があつて、詰らない神や佛は拜まない、我は眞如に對して渴仰するとか、天は則ち理なりとか、又音もなく香もなき、蒼々の天に對して居るとか云ふが、是等は狐だの狢だの金神だのに對して居る者に比べて見れば宜い、確かに宜いけれども、其實は空々漠々のものに對して居るが故に、悲觀的になつてしまふやうである、一寸高尙なやうではあるが、其空々漠々たる譯も分らないやうなものに對した結果は、極く〳〵高慢なものになつてしまふ、有るか無いか分らぬと云ふやうなものを對手にして居る時には、我ほどエライ者はないと云ふ考へに驅られるからして、實に其の品性を傷ける事は少なからないやうである。

左らば吾人は何に對して居るかと申せば、高尙幽玄なる靈的實在者に對して居ると云ふ感を有つものである、世には基督教は淺薄なりと云ふ人もあるやうなれども、夫れは高尙幽玄なる實在者に對して居ると云ふ眞意を知らないから起つたことであろす、私の心の奥の院に潛まつてある所の我靈と、天地の奥深

い所に内住せる實在者と相對すると云ふ事を實際に悟つたならば、森嚴の念に打たれざるを得ない、私の友人に某なるものがあつて外國の公使館に勤務を致して居つた、其人は同志社で神學を修めた人であつたが、遂に基督教より飛出した人である、一日其人に向つて『其后君の生涯に於て祈禱をした事はないか』と尋ねた取ところが『自分は露西亞の内地を旅行して、何百哩續いて居るか殆んど際涯の知れないやうな森林の中に這入つて、白晝と雖も眞暗黑であつて何方を指して行けば人里に出るか分らない時には極めて森嚴なる感想に滿たされ、天地の主よと叫ばざるを得なかつた』と答いた、此の天他の奥深き所に内住せる實在者に對する時には、何か我衷に森嚴なる思念の生ずるは、是れ免がるべからざる事である、併し夫れだけでは矢張り禪僧の所謂眞如又は儒者の所謂天に對した時の如く、空々漠々たるものではないかと云ふ疑ひがある。

そこで其の實在者は眞實正義、少しの傷も汚れもない、德の上乘にて在ます所の神である事を認めねばならない、かく認めると我衷に眞面目な心が勃如として起り來り、而して、眞實であり正義である神に對すると云ふ念が強くなれ

ば強くなる程、己が汚れた事や己が下劣なる事が分つて來る、卽ち己が罪惡が分るやうになる、猶太人がシナイ山に對して戰き懼て、最う大神の御前から追れたい、神に彼方に去りたまへと叫んだと聞くが、私共にも同樣の感が起ることである、舊約聖書を開いて見ると、アダム、エバが罪を犯した時には神の御前が怖くなつて、木の蔭に隱れたと書いてあります、イエス、キリストがペテロの船の中に突然乘り込まれた所が彼はいたく恐れて海の中に飛込んだと書いてある、人間でさへも聖く義しき人に會合すると、其威嚴に打たれて時々戰慄る事がある、況んや心の底の底までも知り給ふ實在者に對するに於てをや、戰慄ざるを得ない、又若し神に對して戰慄ないと云ふ人があるとすれば、其神が如何に眞實に在ますか、又如何に正義に在ますかを知らない、盲蛇に怖ないと云ふ仲間であらう、基督信者の中にも盲人が多いので、あるまいか、森嚴なる神の御前に出でゝ居ると口に唱へながら、己が罪を憎まず、己が賤しきことに、氣付ず、昂然としてエラさうな祈禱をする人があるが是れは實際に神を認識して居らない證據である。

諸君、高尚幽玄なる實在者を認める時に方つては、此の世界に居りながら我は天地の奥に這入り込んだやうな心持がすることである、又眞實にして正義に在ます神を認識する時に方ては、若し地に穴があるならば、其中に這入りたいやうな心持がする、よしや穴の中に這入つたとても、神の御前を遁れる事は出來ない、詩人の句調を以て云へば『曙の翼をかりて海のはてにすむともかしこにて尙なんぢの御手われをみちびき汝の右の手我をたもちまもはん』（詩百三十九〇九、十）天涯地角いづれに參つても、神は其所に在ますが故に、森嚴なる御前を遁れる事は出來ない。併し神の眞實と正義を單に認むるだけであるならば、最う苦しくて堪らないだらうと思ふ、けれども基督イエスは弟子方が祈禱を敎へて下さいと願つた時に、高尚幽遠なる實在者と敎へ給はず、又眞實正義なる神を指ざして祈れとは敎へ給はず、天に在ます我儕の父よと祈れと敎へ給ふた、若し基督が高尚幽玄なる實在者を指ざし給ふか、眞實正義の神のみを指ざして祈れと敎へ給ふたならば、其の結果は何うなつたであらうか、私曾て富士山に登つたことがあるが、丁度一合目邊の松の木は上に伸る事が出來ずして、地に

匍ふてある、何となれば山上から吹下す山嵐に壓迫されるからである、吾人人間も、神の威嚴にのみ打たれたならば、此松のやうに地に蹲踞して居るであらう、然るにキリストは人間の弱きを知り給ふが故に天に在ます我儕の父よと祈れと仰せられた希伯來書の記者は此意を汲んで『憚る事なく恩寵の御座に來りて祈れ』と敎へ、使徒パウロは『爾曹が受し靈は奴の如く復び懼を懷く靈にあらずアバ父よと呼ぶ子たる者の靈なり』と示された。

諸君、天に在ます我儕の父よと祈れと敎へ給ふたのは天のお父樣に對せよと云ふ示されたのである、私の祈禱の生涯に於いて、祈禱ほど喜ばしいものはないと云ふ感に這入つたのは、他ぢやない、天のお父樣と云ふ事が……天のお父樣と云ふ事が分つたからして、此世に於ては時に誤解され又時に曲解され、左なくとも苦しい生涯に陷るやうな塲合にも、夜寢床に這入る前に天のお父樣と云ふ聲を出して祈禱をする時には、一日の疲勞も苦痛も、人の誤解も曲解も打忘れてしまつて、恰も今まで眼を泣腫して居つた幼兒が、お母樣が外からお歸りになつた時に、其の膝の上に、昇つて其溫き懷に抱付いたならば、今までの

悲歎も今までの悲哀も打忘れてスヤ〳〵と睡るが如く、私共は眞に安心の境に這入る事が出來る、即ち私は天の父に對して居るのである、左らばと云つて其の天の父は余りに懐かしいが故に、余りに親しいが故に、馴過ぎてはならない、何ぼお父樣が親しい懐かしいと云つてもお母樣が親しい懐かしいと云つても、其のお父樣お母樣に學問があり、德行があり、威嚴があつたならば、馴々しい中にも、子供はお父樣お母樣の前には愼重の態度を以て事へると云ふ事は、あなた方のお認めなされる所であらう、天のお父樣は實に親しいお方であります、只獨子のイエスキリストさへ惜まずして與へ給ふた愛のお父樣である、けれども其お父樣は高尙幽玄なる實在者であり、又た眞實正義の神で在ますので、馴過ぎる事は出來ない、諸君、斯の如き思念を以て天のお父樣に對すると云ふのが祈禱の生涯である、只時に口を開いて唱言をするばかりが祈禱の生涯ではないぬ、机の上に頭を摺附けて祈つて居ると云ふ丈が祈禱の生涯ではない、朝起きてから寢る時まで、夜寢床に這入つた時にも、天のお父樣の懐の中に在る思ひを持つて居る人が、實際に祈禱の生涯に這入つた人である。

舊約聖書に祈禱の事に就いての詩が凡そ六篇、其五つは詩篇中に出てある、卽ち十七篇、十八篇、九十篇、百二篇、百四十三篇である、最う一度繰返して置かう、詩の十七と、十八と、九十と、百二と、百四十二と、夫れから哈巴谷書の第三章である、是れは韻文で書いてある、六篇共に御通讀なされたならば、高尙幽玄なる神に對しての趣きも見え、又、眞實正義の神に對しての味も見え、又仁愛に富み給ふ天の父に對した意も見える、此の六篇の中で私が愛誦して置かないのは、先きに朗讀を致した詩の十八篇である。今十八篇を開いて、御注意の爲に五ッばかりの言を擧げて見よう二節にダビテが神を何と唱へて居りますか、云く『エホバはわが巖、わが城、われをすくふ者、わがよりたのむ神、わが堅固なるいはほ、わが楯わがすくひの角、わがたかき櫓なり』と、キリストは天の父と云ふ一語を以て此の總てを其中にお含めになつたのである、二十節には『エホバはわが正義にしたがひて恩賜をたまひ、わが手のきよきにしたがひて報賞をたれたまへり』と書てある、天の神に對する所の私共は此心でなくてはならない『エホバはわが正義にしたがひて恩賜をたまひ、わが手のきよ

きにしたがひて報賞をたれたまへり、われエホバの道をまもり惡をなしてわが神よりはなれしことなければなり』：惡い事をしては神より離れて、偶逆思ひ出して苦しい時の神頼みでは、お父様の懐に入る事は出來ない、『われエホバの道をまもり惡をなして神よりはなれしことなければなり』この念慮が神に近づかしむるものである、二十四節『この故にエホバはわがたゞしきと、その眼前にわが手のきよきとにしたがひて我にむくいをなし給へり』二十五節と二十六節『なんぢ憐憫あるものには憐みあるものとなり完全ものには全きものとなり、きよきものには潔きものとなり僻むものにはひがむ者となりたまふ』と書いてある、夫れから四十六節に『エホバは活ていませり、わが磐はほむべきかなわがすくひの神はあがむべきかな』とある、此の詩をどうか皆様が今日初めから終りまで繰返して讀んで、さうして斯くの如き人間の琴線に觸れる言葉には圈點を施して、後日の紀念にお備へなさらん事を希望する次第である。

新約全書に於いては、主の祈禱を第一とするのである、馬太傳の六章の九節以下にある主の祈禱が第一である、其他はキリストの時々刻々の祈禱である、

否其他のキリスト、イエスが終夜山へ行つてお祈りなされたとか、ヘルモン山頭白雲漠々の邊に於いて、空々漠々たる所に天の父とお接しなされた所などは如何にも意味の深いものである、基督の御生涯の中に於いて奥深い事を尋ねたならばキリストの言葉ではないち、祈禱の言葉である『我意の儘に爲さんとするに非ず聖意に任せ給へ』と云ふやうな所になつて來ると、私は分らない、其の言葉の意味は分つても、其の奥深き心情が分らない、尚分らない事は、何うして終夜祈り續ける事が出來させられたか、何うしたならば天の父と顔と顔と相對する事が出來るか、何うも私は分らない、夫れで私共の祈禱と云ふものは實に加持祈禱のやうな淺墓な……私共の祈禱と云ふのは世の人が考へて居るやうな詰らないものである、祈禱する時丈天の父に向つて居るやうでは駄目だ、常に天の父に對して我心が向いて居らねばならす、兄弟姉妹と共に寄集へば、誰かゞ一人言を出さなければみんな同意して心を一にして天の父に向ふ事が出來ないから一人が聲を出して其所に居る會衆の心を導くことである、祈禱會と云ふのは即ち是れである、今度青年大會に臨んで三四百の人が集つて、さうして

祈禱會が始まると、支那人は支那語で祈り、印度人は印度語で祈り、朝鮮人は朝鮮語で祈り、獨逸、佛蘭西、英吉利、みんな各々の國語で祈つしたが、珍奮漢で薩張り意味は分らないけれども、熱誠溢るゝばかりに祈つて居ると云ふ事は、其音聲によつて知る事が出來た、私は今度の大集會の內に於いて何が嬉しかつたか、何が森嚴の思ひをなさしめたかと云へば、此の諸國の言葉で彼方の隅から、此方の端からも祈り始めた時であつた、分らぬからして何うしてもアーメンと、云へなかつたが其の祈禱の心が天に向つて居るばかりぢやアない、其所に集まつた人は、平素祈禱の生涯に這入つて居る者が多いと云ふ事丈は確かに認むる事が出來たのである。

何うか私共も祈禱の生涯に這入りたいと云ふのは、毎も仰いで天のお父樣に事へて居る心を持ちたいと云ふ願ひが夫れが現はれて祈禱の言となることである、即ち夫れが現はれて天に對する訴願となり、願望となり、感謝となるのである、天に對する思ひがあつたならば、只時と塲合に依らず祈禱の生涯ほど森嚴なるものはないのである、祈禱の生涯ほど私共を眞面目ならしむるもの、清

くならしむるもの、尊くならむるものはないのである、基督信者が祈禱をして居つてすらも、汚ない思ひに染んで居ると云ふのであるならば祈禱をしない人々は何れくらゐ汚れて居るか、何れくらゐ汚ないかは私は測られないと思ふ、實際に祈禱をしようと思へば祈禱の準備が必要である、祈禱の準備と云ふのは、先きに引いた祈禱の詩が最も妙である、其の祈禱の詩を暗誦して、或は只今謳ふた『夕暮靜かに祈りせんとて』と云ふやうな讃美歌を謳ひ、さうして目を閉て深き悲に入り、いよ〳〵天の父の前に我は居ると云ふ思念に這入つた時に、其思念が唇を突いて出て來る、かくして、實際に祈禱の心を以て祈りの言を發すると云ふ事になつて來るのである、斯くの如き祈禱が私共をして眞に清く、正しく、且つ眞面目なるものにならしむるものである。

由來我が日本の信者には未だ敬虔の念が乏しい、故に祈禱の生涯など云ふものを味ふた者は、私共牧師を初めとして多くの信者諸君の中にも少ないやうである、殊に此頃バプテスマを受けて教會に這入つた人の中には、未だ祈禱の何たるを知らない方もあるやうである、今日お話し申した『森嚴なるかな祈禱の

生涯』と云ふ事を能くお味ひの上詩の十七と十八と九十と百二と百四十二を御記臆になつて、さうして哈巴谷書の三章をお讀みなさつて、自ら進んで祈る人になつて貰ひたい、只説教を聞いて、其の説教の言を覺えても何の役にも立たない、其の説教に依つて祈禱の生涯に這入る人が出來てこそ、初めて此の説教が實切を奏したと云ふものである。

第十四章　祈禱の極致

少し進往てひれふし祈いひけるは吾父よ若かなはゞ此杯を我より離ち給へ然ど我心の從を成んとするに非ぞ聖旨に任せ給へ

（馬太傳廿六〇三九）

諸君の御承知の如く、物質の世界には遠心力と求心力の二つの大きな力があつて、前者は外へ飛出して、中心から離れようとする力にして、後者は中心に近づかう〳〵とする力である、夫れと同じやうに私共の神靈にも遠心念と求神念との二つがあり、遠神念と云ふのは神に遠ざかる思ひであり、求神念と云ふのは神を求むる思ひである、只今讀んだ主のゲッセマヂの祈禱の中に『我心の從』と云のは遠神の方にて、私共銘々の心を一貫して居る所のものである、即ち主我心の意味である、然るに此の天地は正義の神が、即ち聖旨を以て御支配をなさるゝのであるから、何ぼ人間がエラくつても、銘々が己が心の儘を爲さんとしても、神の聖旨に背く事は出來ないのである、何うあつても聖旨には從はねばならない次第である、ところが主我心が強い爲に、小さな時から何をす

るにも聖旨に背く事が多いのであるから、いよ〳〵神の正しき事が分り、聖旨が分れば、神が怖くて堪らない、神が怖くて堪らないから、神から遠ざからう〳〵とするのが人間の常である、イエスキリストが約翰傳三章の二十節に惡をなす者は光を惡む……何故光を惡むかと云へば、其の行狀が惡いからであると申されたのは、是れは人間の弱點を突いた語である、若し私共が神から遠ざかる思ひ、即ち主我心の爲に神が怖くなつて、御前から離れたいと云ふ丈であるならば、總ての人間はみんな無宗教になつてしまひ、どんな惡い事をするかも知れないやうに思はれる、然るに求神念と云ふ神を求むる思が、私共の心の深い〳〵所に存して居る、是れが優い信念又は信賴心である、即ち寄縋りたいと云ふの心であつて、何ぼ父母から叱られても、其の幼兒は父母を慕はずしては居られないやうになつて來る、鹿が野山を飛歩いて居つても、咽喉が渴いて來れば溪川の水を求めて走るやうな、私共は主我心が强い爲に、惡い事をして神は怖いけれども、內にいと優い信賴心があつて、何うしても神の御傍に接近なければならないやうになつて來る、是れが即ち宗教の根底である。

去りながら私共の天性から申せば、極く僅かなる宗教心の強い人間を除いては、主我心の強いものがあるからして、天性の儘に放つて置いたならば、みんな神から離れてしまふものである、キリスト、イエスが此の世にお降りになつて、さうして宗教をお擴張になつた、其のキリストの宗教は何であらうか、神の王國を建つると云ふのが大主眼である、其の王國の第一は何かと云へば、馬太傳七章九節以下に示されてある、即ち『爾國を臨らせ給へ』である、馬太傳の記者は其の意味を敷衍して『爾旨の天に成ごとく地にも成せ給へ』と教へたのである、して見るとイエス、キリストが一生懸命に私共人間に教へ示さうとなされたのは、天の聖旨を知つて、其の聖旨に從ふと云ふ事である、然るに先きにもお話し申す如く聖旨が那邊に在るかと云ふ事は、聖書は一頁だに讀まなくても、御互ひ銘々の心に神が本心にお授けになつてあるから、其の本心に尋ねれば能く分ることである、どんな惡人でも聖旨に叶ふには善を行はねばならぬ、正しきに從はねばならぬと云ふ事丈は辨へて居るものである、又私共聖書を讀む者は、皆神の聖旨が那邊に在るかと云ふ事は能く辨へて居る、能く分つ

て居りながら、主我心が強い爲に、其の聖旨の一つだに行ふ事が出來ない、夫れが人間の病氣である、そう云ふ譯なので主イエスは何うしたならば主我心の斯の如く強い人間をして、神の大聖旨に全く從ふ者たらしむる事が出來ようかと思ふて、非常なる御苦心をなされた譯である、一生懸命の力をお盡しなされた譯である、其の手段は求神力を強むるより他に仕樣はない、神を求むる思ひを強くするの外はないのである、譬へば諸君の內に、何うも行狀の善くない息子娘がある時に、又しても親の名を汚すやうな子供がある時に父母は是れは自分達の行狀が惡いからである、自分達の品性が汚れて居るからであると思ふて、一層行狀を正しうし、一層品性を高くして、子供が少しの過失をしても、心得違ひをしても、許す事なく、正しい眼を以て其の子供を睨み附けて行くやうになされたならば。子供が善くなるであらうか、子供は親を毛蟲のやうに嫌ひ始むるのである、自分の行狀と親の行狀との對照が……懸隔が甚だしくなつて來る、親は水道の水の如く透明つて居る、子供は雨後の川水の如く濁つて居る、濁水と清水と一緒になつちやあ堪らない、遂に內を飛出してしまふと云ふ結果

を來すのである、然るに其の父母が自ら正しき行狀もせねばならず、正しい言葉も云ふて聞かせねばならず、品格も清らかにして子供に對さなければならないけれども、其の子供は何が好きであるか、何を慕ふて居るか、何うすれば其の子供が滿足をするかと云ふ事を考へて、限りなきの愛情を以て其の子供を愛し、親の眞實なる愛が染々と子供の心に徹底するやうになつて來た時には、其の子供は內ほど良い所はない、世の中へ出ればチヤホヤと他人が云ふて呉れるけれども、お父樣お母樣ほど善いものはないと感ずるやうになる、併し時には飛出さうと思ひ、時には親の金を持つて逃げ出さうと云ふ考へも起る、けれども父母の愛の鎖が其の子供の心を繋いで、其の溫かなる愛に引寄せやう〳〵として居るからして、漸次々々に親子の間柄が近づいて參る、漸次々々に近づいて來れば睦じい話も出來るやうになつて來る、共に歌を謳ひ、共に野遊びをする事も出來るやうになる、知らず識らざるの間に子供は感化されてしまひ、遂に父母の如き品性を養ひ、遂に父母の如き正しき言葉を使ひ、遂に父母の如き善き行動の出來るやうになつて來る、神も亦然り、神の正しい事を思ひ、神の

清らかなる事を思ひ、神の眞面目なる事を思ふて居りさえすれば、我心の腐敗、我心の邪曲、我行狀の不良なる點と、神との懸隔が天國と地獄のやうに甚しいことを感ずるからして、何うしても神に近づく事は出來ない、いよ〳〵思へば思ふほど神から遠ざからうとするのが人間の常である、是に於いてかイエス、キリストは全生涯の間人間にお示しなされたのは天の父であつて、其父の溫かく懷かしく慕はしい所をお示しなされた、卽ち父が世を愛し給ふ事は只獨り子を與へ給ふ程であると云ふことであつた、キリストの生涯は三十の年までは母親の許に在つて自分の兄弟姉妹を扶け、三十の年からしては有らん限りの力を盡して、愛のみをお行ひなされたと云ふ事である、イエスは『我若し擧げられなば萬民を引きて我に就らせん』とお叫びになつたのである、釋迦も孔子もソクラテスもみんな人を引く力は强かつたである、けれども諸君、開闢以來今日に至るまで、イエス、キリストの如く人の心を引く力をお持ちなされた方があらうか、仁者の爲めには生命を捨てやうとする者も世の中には幾人か在る、けれども諸君、今日のやうな利害のみを主とする世の中であつても、イエス、キ

リストの爲ならば生命を捨てやうと云ふ者が、世界に幾千幾萬居るが測られない程である、我々日本人の内にも、キリストの爲ならば生命を棄てやうと云ふ人がある、現に今此所に集つて居る我々の内にも、キリストの爲にならば生命を差出さうと云ふ者がある、夫れくらゐに人の心を引くと云ふのは是れ正しく人間の優い信頼心を以て天父を慕はせ、憧らせ、何うしても其の天父には抱付かなければならないやうにキリストがなされたのである、其のキリストの吸引力は何所に集つて居るかと云へば、即ち十字架上の死である、イエスが十字架上に生命をお棄てなされたと云ふのは、天の父の限りなき愛の顯現である、キリスト、イエスが如何に我々人間を愛し給ふかと云ふ其愛の顯現である、ペテロがキリスト此世を去り給ふて僅か五十日の後に、三千人集まつて居る所に於いて、キリストの十字架の死を語りて、三千人が其愛に引かれて信者となり、更に五千人が信者になり、遂に三百三十年頃に至りては、羅馬帝國に幾百萬の信者が出來て來たと云ふのは、全く十字架上に現はれた基督の吸引力、即ち愛の力に外ならないのである、使徒パウロが『爾曹が受し靈は奴たる者の如く復

び懼を懐く靈に非ずア丶父とよぶ子たる者の靈なり』と申したのは、信頼心の極を示したのである、ヨハヲが第一書の四章一八節に『愛の中に懼あることなし全き愛は懼を除そは懼は苦を有り凡そ懼る丶者は愛を全備せざる也』と叫んだのは、神を求むる思ひの極を示したものである。

左らば諸君、私共の祈禱は初めの間は主我心と聖旨との衝突である、己が心の從をしたい、氣隨氣儘が遣りたいと云ふ思ひと、清き聖旨には從はねばならないと云ふ、此二ッのものが内に大衝突を起したのである、夫れで何方が勝つて居るかと云へば、我心の從を爲したいと云ふ主我心が勝つて、聖旨に從ふと云ふ心が負けて居る、夫れで祈禱は……『イヤ祈禱ほど嫌なものはない』と云ふ、祈禱會に行つて人が祈禱をして居ると、自分の心が穢い爲に『彼の人は口先ばかりで立派な祈禱をして居ると云ふ批評をして、祈禱會には行かないと云ふ考へになるのは、我心が穢いからである、氣隨氣儘をしたいと云ふ心が強い間は、何うしても眞個な樂しき祈禱會には這入られない、併しながら神を求むる思ひが段々と增して、基督の愛が日に〳〵我心に明らかになつて來、隨つ

て天の父の我を思ひ我を慈しみ給ふ其の有難さが日に〳〵我心に深くなつて来ると、祈禱が樂しくなり、祈禱が嬉しくなつて、一日片時も祈禱を缺かす事が出來ないやうになつて來るものである、舊約聖書を見ると、古へのダビデとダニエルは一日に三度づゝ、朝と晝と午後の三時頃に神に祈禱をしたと錄してある、新約全書を開けば、イエス、キリストは一日に三度ではなかつた、一日に五度ではなかつた、イエス、キリストは終夜山に這入り、祈禱を爲されたと書いてある、私共のやうに主我心と神の聖旨と衝突ばかりであつたならば、到底終夜恐い〳〵神樣の前へ行つて、祈禱をすると云ふやうな事は出來ないことである、求神力即ち信賴心と天の父の深き愛の聖旨とか和合致して、何の恐怖もなく何の懸隔もないやうになつた所で、絶えず祈禱をする事も出來る、終夜山に這入つて祈禱をする事も出來る、勿論私共の祈禱と云ふ内には不平不滿を神の前に漏す事もある『アヽ實に我を取卷いて居る親類緣者は、冷やかなる手を以て我を虐待つける、堪らない』と云ふ不平が起つて來る又不滿が生して來る、其時には何所に行つて其の不平不滿を漏さうか、天のお父樣の前へ行つて、心

の一伍一什を打明けて、不平不滿の聲を漏すの他はないのである、何か聖なる事業を遣らうとか、何か聖旨に叶ふ事業を遣らうとか思つて決行けた時に、中途で挫折いて、其の事業が將に破れんとするやうな時には援助を求めるが常である、何所へ行つて援助を求めようか、豫て親しくする所の天のお父樣に向つて『どうぞ助けて下さい』と願ふの他はないのである、又私共は人にも何うも談されず、親兄弟にも談されず、實に心の底に色々なる懊惱があつて、此の懊惱が病み續いて、最う我は死んでしまはうと云ふやうな悲しい場合がある、其時には何所へ持つて行かうか、天のお父樣へ行つて心の懊惱を悉く打明けて、さうして哀訴するの他はないのである、詩篇を讀んで見ると、古への聖なる人々は其の懊惱の一伍一什を神樣の前に哀訴して居るのである。

尙私共の內には只天のお父樣の顏が見たいと云ふ祈禱がある、子はお母さんの顏が見たいやうに、妻は良人の顏が見たいやうに、良人は妻の顏が見たいやうに、天のお父樣の顏が見たい時には、只靜かに神の聖前に跪いて、さうして天のお父樣の笑顏を念じて、夫れを樂しんで居る事もある、けれども諸君、ジ

と『』
ば我
醫者は
親が代
云ふ無
死が近
る、而
はゝ
ならば
れども
あつた

死なずしてはと云ふは、主我心であつて我心の行
『我心の從を爲んとするに非ず聖旨に任せ給へ』と三度までお祈りなさつた、遂
に全く聖旨に任せると云ふ所になつて、基督の主我心は退いてしまつたのであ
る、私共も『何うでも斯うでも子供の命だけは助けて下さい』と毎夜々々叫んだ

の一伍一什を打明けて、不平不満の聲を漏すの他はないのである、何か聖なる事業を遣らうとか、何か聖旨に叶ふ事業を遣らうとか思つて決行けた時に、中途で挫折いて、其の事業が將に破れんとするやうな時には援助を求めるが常である、何所へ行つて援助を求めようか、豫て親しくする所の天のお父様に向つて『どうぞ助けて下さい』と頼み祈るより他はよりどころ、又私共はこゝ何

談されず、惱が病み續時には何所さうして哀々は其の懊

尚私共の顔が見たうに、天の天のお父様

ョン、ノックスは『我に蘇格蘭土を與へ玉へ、然らざれば我に死を與へよ』と云ふ祈願をさゝげ、バトリック、ヘンリーは『我に自由を與へよ然らざれば我に死を與へよ』と叫んだ祈願もある、又『我子の命を助け給へ、神よ、醫者は匙を投げましたけれども、御手の力に依つて我子の生命を助け給へ、母親が代られるものならば私が代りますから、私の此の生命を取つて下さい』と云ふ無理な祈願も神の聖前に捧げらるゝ事がある、主イエスも最早十字架上の死が近づいて來た時には『我心いたく憂て死るばかり也』と仰せられたのである、而してゲッセマネの奥深き園の橄欖の木の下にお座りになつて『父よ若かなはゞ此杯を我より離ち給へ』とお祈りになつた、夫れは死なずとも宜いものならばどうぞ死なずして救世の道が建てたいものであると云ふ意味である、けれども死なずしてはと云ふは、主我心であつて、我心の從を爲さうとするのであつた『我心の從を爲んとするに非ず聖旨に任せ給へ』と三度までお祈りなさつた、遂に全く聖旨に任せると云ふ所になつて、基督の主我心は退いてしまつたのである、私共も『何うでも斯うでも子供の命だけは助けて下さい』と毎夜々々叫んだ

事もある、けれどもお取りなさるのが聖旨ならば、聖旨の從に任せ給へと云つて全く聖旨に任せた時には、死なうと活きようと、此世に置いて下さらうとお取りなさらうと、夫れは最う神の聖旨に任せると云ふ所に決着したならば、今まで大波小波が海の上に荒廻つて居つたのに、其浪がなくなつて凪さへも打たず、四海浪靜かになつて來た時のやうに、我心の內は確かに平らかに且つ靜かになつて來るに違ひはないのである。

諸君、祈禱の稽古は基督の愛を通して神の愛を味はふ事に始まつて、祈禱の極致は我心を棄てゝ、萬事萬端悉く神の聖旨に任せると云ふ所に終るのである、故に或人は『實際の祈禱は祈禱なきの祈禱なり』と申して居るのである、又或人は『祈願なきの祈禱に達する是を眞正の祈禱なり』と申して居る、キリストイエスもゲッセマヂの園に於いて『我心の從を成んとするに非ず聖旨に任せ給へ』と血の汗を絞つてお祈りなされたが、いよ〳〵聖旨に從ふと云ふの御決心が出た後は、我を十字架に釘ける.ならば釘けよ、我掌に釘を打つならば打てよ、我の脇腹に槍を刺すならば刺せよ、何の恐るゝ事があらうかと云つて、泰然自若

として十字架上の死をもお取りになつたのである、私共も其の祈禱の妙境に達したならば、此の世界が悉く我に敵對をしても、千萬人がみんな我を襲ふて來ても、大磐石の如くに確かであつて、決してピクッとも動く事はないのである。

どうぞ諸君と共に祈禱を好む人にはなりたいものである、祈禱を嫌がる人にはなりたくない、祈禱を嬉しがる人にはなりたいものである、我が心か極めて卑劣なる爲に、神が怖いやうな人にはなりたくないのである、私共は恐怖を懷くやうな婢僕にはなりたくない、アヽ父よと呼ぶ秘藏息子にはなりたいものである、聖旨に任せる事を以て唯一の快樂とする嬉しい〳〵信者になりたいものである、使徒パウロは『我は神を樂しむ』と申しましたが、どうか、私共も神を樂しむものとなりたい、夫れで求神念と遠神念……神に遠ざかる思ひと神に近づく思ひとの二ッがある、其神に近づく思ひが切になつて來れば、遂に神に遠ざかる思ひがなくなつてしまつて、神の聖旨に從ふやうになるのであります、どうぞ皆樣と共に益々信賴心を發展せしめて、いよ〳〵神の秘藏子となり、さうして使徒パウロの如く『我は神は樂しむ』と云ふ所まで進みたい、即ち祈禱の

極致（きょくち）にまで到達（とうたつ）致（いた）したいものである。

第十五章　聖化の階段

爾曹の心を堅くし我儕の主イエスその諸の聖徒と偕に來らんとき爾曹をして我儕の神なる父の前に潔くして責べき所なからしめん事を　（帖撒羅尼迦前書第三章十三節）

願くは平安の神自らなんぢらを全く潔し又なんぢらの全靈全生全身を守りて我儕の主イエスキリストの臨らん時に咎なからしめ給んことを（帖撒羅尼迦前書第五章廿三節）

今晩の題は『聖化の階段』といふのである、聖化といふは一段は一段より高く清く化せらるゝといふ事である。孔子の教の目的とするところは國を治め天下を平らかにするといふ事である、國を治め天下を平らかにするには先づ家を齊へなければならぬ、家を齊へようと思へば先づ身を修めなければならぬ、身を修るには先づ其心を正しうせねばならぬ、心を正しうするには意を誠にしなければならぬといふのであつて、實際一人一個を清めさそうといふ事が目的ではなくして、國を治め天下を平らかにするといふ政治上の問題が目的になつて居る、意を誠にし心を正しくして身が修まり、遂に家が齊ふた其結果は、一國が

治まり一天下が平らかになるといふところに歸着するのである。

佛の敎は心の外には何にも無いといふ事である、先月の今頃であつたと思ふ、南海鐵道の連中が西本願寺の赤松連城師を招き、佛敎の我日本に渡り來つた歷史の講話をして貰つたさうである、講演終るや專務取締の某君が赤松師に向つて『佛法では如來の客觀的存在をお認めになりますか』と突込んだところが、師は肅然として『さういふ六ヅかしい事を尋ねになれば、いよ〳〵本音を吐かなければならぬ譯になつて來たが、本願寺の敎では如來といふものが天地の間に、客觀的に存在して居る事は認めて居りません』と答へたと云ふ、禪學の方では心の外に何も無いといふのだからして、如來も菩薩も皆假設的であつて、決してさういふものが宇宙の間に存在して居る事は認めて居らぬと思つたが、本願寺の方では阿彌陀如來が確かに存在して居るといふだらうと思つて問ふたところが、本音を吐けば阿彌陀如來は何にも在るものぢやアない、心の外には何も無いといふのである、さうすると此佛法の極意は己が心を磨き養ふて、否慾惡煩惱を解脫して涅槃寂滅に入り、覺えて居るでもなく、覺えて居らぬので

もなく空々寂々といふところに達するのが其目的らしく思はるゝのである。

ところが基督教では馬太傳の五章の終にキリストの言として『天に在す爾曹の父の完全が如く爾曹も完全すべし』と錄してある、天の父が完全であらせらるゝやうに、基督者は皆完全に成らなければならぬといふ事である、基督教の修養の大目的は神のやうに成るといふのである、そこで聖化といふ言葉は自らが清く化するといふのではなくして、天地宇宙の間に至つて清く至つて正しく至つて誠なる神が在します、其神を見出して其神の如く成るといふのが目的である、即ち極く寒い日に暖爐が焚いてある、炎々と火が燃えて居る、諸君は寒風の吹頻る中を歩いてお來でになつたので、耳も千切れるやうに手も凍えて居らつしやるけれども、暫らく暖爐の傍に立つて暖取つておいでになると、遂に暖爐の溫かさで自分の身體が溫まつて來て、春のやうな心地になる時が即ち暖爐の溫氣と諸君とが同化された時である、是は聖化でなしに溫化である、溫かさに化したのである。此天地宇宙の神が眞に清く眞に尊とく、眞に聖なるものである事を認めて、此神に近づき此神に觸れ、此神を念ずることに依つて、遂

に我が心が神のやうに成つたといふ時が、聖化の極度に達した譯である、其聖化と申すにも色々ある、聖化の極致といふのは神と同じ意識に這入るといふ、神の如く思ひ神の如く感じ、神の如く行ふといふ事である、神の如く意識し神の如く感じ神の如く思ふといふのは之れを名づけて第二の神といふ外はないのである、開闢以來今日に至るまで幾億萬の人間が此世の中に現はれ出たかも知れないが、今お話し申すが如く聖化の極致に達した者は、イエス、キリスト一人であつた、其次のは神の如く意識する事は出來ないが、神と目的を同じうし、思想を一にせようと勤め勵んで居るところの者をいふのである、使徒パウロの如きヨハヂの如きペテロの如きアシシのフランシスの如き聖人達は即ち其所に達したものであらう、然らば今日基督敎會を組織して居るところの連中は何うだ、歐羅巴、亞米利加は勿論の事、東洋の島々に至るまで、所謂基督信者なるものはどの邊に居るか幾億幾萬の基督信者であるからして、神と目的を同じうし神と同じ考へに這入つて居る人も尠なくないであらうと思ふが、是は極めて少數であらう、其他の人々は神が示し給ふたる目的に達したいと思つて朝に夕

に力を竭しては居るが、階段を登らうとして又しては踏外し〳〵して、中には三段登つたかと思へば二段下に退つて居る者もあれば、三段登つたかと思へば四段退つて居る者もあるといふやうな譯で日暮れ道遠しといふ考へになつて、到底自分達は清められるゝ事は出來なからうと思つて、大いに嘆息をして居るところの輩もあらうかと思はれる。

そこで神は世の中の人々はどんなものであらうかと高御座から御覽なされた時に善を行ふ者が一人も居らない、義を行ふ者が一人も居らない、皆盤紆屈曲して惡を行ふ者になつてしまつたと詩篇に書いてある、使徒パウロも之と同感で羅馬書三の十以下に此詩を引用して居る。

千八百年後の現代の人々も神の眼から御覽なされたならば、矢張り一人も眞個に正しい、誠の善人といふはお見當りにならぬかも知れない、尤もキリストに聖化された者の中には立派な者はあるであらうと思ふが生れながらの善人は一人も居ない、生れながら、義人は一人も居ないと云つて差支はなからう。昔の人は世の人は皆罪人になつてしまつたといふけれども、今日では少し其言葉

を柔らげて皆墮落してしまつたといふ、罪人となつてしまつたと云つても墮落してしまつたと云つても、少し言葉が柔らかいか強いか丈の話しであつて、神の如く成るといふ、其聖化の大目的に比べて見れば、實に遠い〳〵、非常に遠く離れて居る譯のものであるからして、之を聖化するのには何としたら宜からうかと神がお考へになつて、其天のいと高き所に神がお座りになつてさうして世の中の人々が神の如く成るやうにと如何に念じ給ふたとても、夫は五六十階もある段梯子の一番上に居つて、さうして下にやつと歩き習ふた赤ン坊が居るのに、此梯子に登つて來いと命令を下すとの同じ事であつて、到底不可能である、して見ると赤ン坊には段梯子を登る能力がないからして、天の神が手を伸して、坊の手を握つて、段梯子を引揚げるより他に途はない、抱へ上げるより他に仕樣はない、聖なる神の前に立つたところの我々人間は、皆段梯子の下に居るところの、やつと歩き掛けの赤ン坊と同じ事である、無能力者である、そこで何うしても是は世の人々を摑へて、上に引揚げる者を世に現はすの他はないと思召したと見えて、今より千九百年の往時ガリラヤのナザレに降されたの

がイエス、キリストである、彼は三十の年迄は田舎の隅で大工の仕事をして居られたが、三十の年から公然世に出でゝ道をお説きになつて『我もし地より擧れなば、萬民を引きて我に就せん』とお叫びになつた、自分が段梯子の絶頂に登つたならば、世界の萬民を引張つて此段梯子を登らせて遣らうといふお叫びであつたらうと思ふ、イエスは何の力を以て此無能力者をお引きになつたか、諸君が街を歩いて御座ると、二歳ばかりの幼兒が足に赤い草履を縛り附けて貰つてさうしてヨチ〳〵して歩いて居ると、自轉車が來る人力車が來る、もう危くて堪らない、其赤ン坊の後ろに斯うして跡から從いて行く者は誰であるか、赤ン坊の後ろに從いて行く者は母である、母が手を伸して其赤ン坊を擁護する、又母が前の方へ廻つて、此所までお來で〳〵と云つて其赤ン坊を招いで居ると赤ン坊は母親の招くまに〳〵勇氣を出して、其の方に躙り寄つて行くのである、イエス、キリストが此世にお降りになつたのは即ち夫れだ、私共はヨチ〳〵して居る、又しても轉ぶからイエスが引張り起して、さうして段梯子へ登らせて遣らうとなさるのである、平地でさへもこんな風であるから況んや段梯子に於

てをや、何うしてもキリストが引張つて下さらなければ登る譯には行かない、其引張るといふは無限の同情を以てお引張りになるのである。『重荷を負る者勞れたる者は我に來れ我爾曹を息せん。』と仰しやつた、ヒステリーを起す者あり、神經衰弱に陷る者あり、煩悶に惱む者あり罪に苦む者あり、憂愁に泣く者あり、實に仕樣のないやうな、眼も當られぬやうな有樣に弱つてしまふ、其弱つて行くところの人間に向つて、サア此所まで來い〳〵と云つて始終愛を以てお引きなさる、お引きなさつて行かない時には、キリストが後ろに廻つて抱いて引張り上げて行かうといふのである。

そこでキリストが此世の中にお降りなされて、人間にお現はしなされたものは何かといふと父母に優る愛である、キリストが私共の眼の前にお示しなされたところのものは、たらちねの父と母とに優るところの愛である、終には此人間を救はんが爲に十字架上に犧牲の死をお遂げになつたといふは、生命までも棄てゝ人を誘ふといふキリストの愛、キリストの力は愛の力である、其愛の力で無手と我心を摑んで引張り揚げて遣らうといふ高い〳〵思召であつた、とこ

ろが未だ人間は夫丈で不充分である、默示錄の第三章を讀んで見ると『我戸の外に立て叩もし我聲を聞て戸を開く者あらば我その人の所に就ん而して我はその人と偕に其人は我と偕に食せん』とある、是は何を意味するであらうか、キリスト、イエスが十字架上に擧げらるゝ前に、若し擧げらるゝならば爾曹に聖靈を與へると仰しやつた、神の聖靈が世に降る、其聖靈は人の心の中に宿るといふ、人の心の中に宿つて神を慕はせ、キリストを慕はせ且つ眞理を慕はせると共に、罪の憎むべき不義の厭ふべき、汚れたる行狀の忌むべき事を充分に聖靈がお示しになるといふ事である、諸君は聖靈をお受けになつた事があらうか、又聖靈を受けたといふ自覺にお這入りになつた事があるか、私は今尙忘るゝ事の出來ない一事がある、夫は明治十六年の四月の廿四日に、大阪敎會の牧師となる爲に按手禮を受けたのである按手禮を受けて直ちに東京に向つて出發した、横濱に船が着くと、二百十二番の女學校で聖靈の恩化を受くる爲に祈禱會をして居るといふ事で其祈禱會に行つて見たのである、東京に着いたところが、東京では大親睦會と唱へて、全國の信者達が此所に集合して居つた、ところが其

集會には神の聖靈に依つて皆罪を悔改め、宛然狂人のやうになつて皆が罪を悔改めて居るのを私は目擊をして、何だか皆氣でも狂つたんぢやアないか、大騷ぎをやつとると冷淡に夫を見て居つたのである、いよ〳〵親睦會が濟んだ時に其大集會に集つた牧師達が、一室に集つて訣別をいたした、其訣別の時にもなか〳〵熱切なる祈禱などがあつて、私は愉快に感じた、さうして二人の友人と共に歸路は東海道を通らうぢやアないかといふので神奈川まで汽車に乘つた、神奈川から馬車を雇つて第一日には箱根の湯本まで參つて福本樓に泊つた、さうして翌朝三人草鞋穿きで箱根山を越えやう箱根八里を草鞋で蹈破うといふ事で出掛けて、さしもの峻坂を喘ぎ〳〵登つて居る時に、私の友人が『宮川、君は野心があるか』と問懸た、私は何氣なしに『イヤ僕には野心がない』と答へた、さうすると再び友人が、『君に野心はないといふ事があるものか考へて見給へ』と突込んだ、夫から友人二人も無言私も無言になつてしまつた、私は汗を拭きつゝ山を登つて行く時に、我に野心があるかないかといふ問題よりも、我に罪があるかないかといふ問題に就て考へた、罪があるかないか、私の高慢心

は罪がないと打つて出るのである、けれども朋友が君に野心がない事があるかと突込んだ時に、神の聖靈が私の心の中に這入られたものと見えて、罪がないと如何に思はうとしても思はれない、色々な罪を眼の前に突付けられて是でも罪がないか、是でも罪がないかといふやうに迫り來つて、箱根驛を通過する頃に成程蘆の湖が一寸見えたやうであるが、私は湖水の景色などを眺めて居る餘裕はなかつた、罪があるかないかといふ問題に就て考へ續けた、遂に箱根の元宿を出て、今度は爪先降りの西坂を降り掛けても、相變らず罪があるかないか、三島驛に降つても罪があるかないかと考へた、沼津で說敎會があつて一晩泊り、靜岡で又一晩泊つたが、其說敎をする前にも罪があるかないか、說敎が終つても罪があるかないかと責められ通しに責められたのである、もう止そうかと思つても止されない、矢張り罪があるかないかと考へずには居られない、さうして靜岡を出發いたして宇津谷峠の手前を人力車で走つて居つた時に、私は其車の上で服罪した、神の聖靈の前に服罪をした『私は罪の子であります、私には罪があります』と服罪をすると共に、キリストに向つて此罪を赦免して貰ひた

いといふ祈禱を捧げた、夫が友人が私を責めたといふくらゐな事なれば、甚だ高慢な意思の強い青年が容易に服罪をせぬのである、けれども確かに神の聖靈が我衷に在つて我を責め給ふたと思はるゝのは、其服罪をいたした瞬間から我衷に聖化が始まつた、罪があるといふ自覺に這入るまでは高慢な不謙遜な、何事も理窟で揑廻すといふ我が、私は罪人である、どうか我罪を赦し給へと涙と共に服罪して後は謙遜になり、眞面目になり、實に我ながら驚くらゐに變化した、さうして大阪に歸つて來たところが、宣教師も教會員も浪花教會の人も島の內教會の人も、代表者が歸つて來たからと云つて、皆東京の土產話を聽かうとして待つて居る、其中央に立つて『私は罪人であります、斯ういふ罪もあり、如彼云ふ罪もありますどうぞ諸君、此罪人を免して下さい』と云つて、是又涙と共に罪の赦を乞ふたやうな事であつて、歡迎したところの者は實に驚いたであらうと思ふ、中には又狂人にでもなつたかと思つた人もあつたやうであつたが、我は眞面目なんだ、聖靈に攫へられて聖靈が責むるに依つて、先輩が責めようが何者が責めようが、更に頭を低げた事のない強情な青年が、聖靈に責め

られて罪の白狀をいたすやうになつたといふ時は、即ち我衷に聖化の一段階を登つたものと見て宜からうと思ふ、神が人間に聖化を與へ給ふといふのには、神御自身が天の高い所からお招きなさるゝ丈では、人間は神の御傍に行く事は出來ないから、聖書の言葉で云へば獨りの御子なるイエス、キリストを世に降し給ふたのである、キリストが千々に心を碎いて、愛を以て人間を愛で育て給ふけれども、未だ夫では人間が罪に服さない、正義の道に登る事が出來ないからして、今度はキリストが聖靈を與へると云つて、其聖靈が人の心に降つて働らき始むるや如何に强情な奴でも如何に傲慢な者でも、其頭腦を叩かれた時には服罪せざるを得ない、使徒パウロがダマスコの道に於て服罪したのも即ち夫れである、諸君が基督教の聖人達の傳記をお讀みなされると、どの人々も聖靈の鐵槌に觸れた跡がある、聖靈の鐵槌で打たれた時に如何に强情な者でも服罪せざるを得ない、罪が碎けるのが卽ち聖化の道に登る第一の梯子である、其所に一段階を登る譯である。

諸君が一寸お考へになつても分る事である、此所に輕氣球を空中に登らせよ

うとする時に八方に綱を縛り附けて、球中に先づ瓦斯を滿たし、瓦斯で輕氣球が段々膨れて一杯に擴がつた時に、其綱が引張つて居る間は何うしても上に登る事は出來ぬ、此輕氣球を登さうとするには第一の手段として其綱をプツリと切つてしまふか、或は其綱を解かなくてはならぬ綱が引張つて居る間は如何に瓦斯が滿ちても上には登らない、瓦斯は空氣よりも輕いから上へ登る、けれども綱が引張つて居る間は登る事が出來ない、御互でも其通りである、何うしても宇宙の間には父なる神が在さねばならぬ、キリストの御慈愛は實に清い尊いものであつて、此キリストの御慈愛には引かれずしては居られないといふ事になる、聖靈は早く此理想に向つて走れ、早くキリストに服從せよ、神に服從せよと云つて下さる、キリストの愛心と天父の仁惠を思ひ、又聖く正く、且誠なる事を思へば今日のやうに嘘言を吐き、僞善を行ひ、くだらない罪を犯しては居られないといふのだからして、いよいよ我心は輕い瓦斯に滿たされて上へ登らうといふ意氣込になる、ところが綱が引張つて居る、オーゴスチンがいよ〳〵父の愛を認めて、キリストを救世主として仰がうとした時に、彼を引張つ

て居つた綱は何であるか、彼れの身邊に纏ばり附いて居るところの婦人の麗はしい顏と香水の匂であつた、看よ彼は一大勇斷を以て『父よ我を救ひ給へ』と云つて天父の懷中に飛込んだ、諸君の內には妾の爲に引張れらて上へ登る事の出來ないといふ方はないかも知れないが、相場に手を出して儲けようといふ綱が搦み附いて居る人はあるまいか、イヤ一度だけ儲けさせて貰つたらばブツツと綱を切るといふ、夫は嘘言の皮だ、一度だけ儲けさせて貰つたらば三度も五度も儲けさせて貰ひたい、儲らなくなつた、ブツンと切るといふのでなく、儲る目的がある間に相場などに手を出してどうして道に進めるか、神の聖前に我は濟まないと思つて、聖靈の劍を以て其投機や何にかで儲けようといふ慾を打切らなければ、聖化の一段階には登られぬのである、ところが又一方にはイヤ自分は投機もやらない、女狂ひもしない、只夕方になつて食事の時に一杯グッと飮む、彼の酒の味といふものは忘れられぬのだといふ人がある、酒嫌ひな人は禁めぬでも宜いかも知れない、酒好きといふ人が其酒を禁めなければ、聖化の一段階には登られぬのである、回顧し來れば何か一ツさういふ事がある私は

朋友に野心があるだらうとグッと突込まれた時に、即ち自分の腹の中を抉られた時に夫を打落して、夫で少し登る事が出來た。

何うしても諸君、其秘藏の罪を斷切らなければならぬ、とつときの慾を打切らなければならぬ、とつときの快樂を打切らなければならぬ、皆人には一ッの癖がある、其一ッの癖に打勝たなければ向上は出來ぬ段梯子を登り始むる事は出來ぬ、何ぼ聖靈が引張らうとしても、何ぼキリストが引張らうとしても下の床に搦り附いて居る人は何うしても引上げることは出來ない、矢張り聖靈に引張られようと思へば、ヨチ〳〵しながらにでも登らなくちやアならぬ、既に綱を切放ちさへすれば今度は旨いものだ、瓦斯が滿ちて居る、瓦斯は空氣よりも輕いからフワ〳〵と登る、登るは登つたが今度は風が吹く、何方へ吹附けらるるか知れないから梶を取らなくちやアならぬ、梶を取るといふのは何かと云へば、意力を養ふて神の如くならねばならぬといふ一大事である、即ち彼岸に向つて、梶を取つて進まなければならぬ、横濱の港を發したならば桑港に船の舳先を向けて舵機取がチヤンと握つて居る、何ぼ大風が吹附けても何ぼ大浪が船

を洗ふて、舳先を彼方へ曲げよう此方へ曲げようとしても、チャンと舵機取が握つて動かさない、神がお與へなされた此意力が清められて、天の方に向つて進まうとする、色々な風が當る親類緣者の迫害がやつて來る、嫁を取れと云つては未信者の嫁を差向けて來る、金を儲けさせようと云つては一杯飲まぬか、頭を低げぬかといふて來る、マア色々な風が吹いて來る、其風が當る時にチャンと舵機取が桑港に向いて居なくてはならぬ、諸君が向上しようと思つて綱を斷切つて乘り出して、さて走り出しは走り出したがなか〳〵風が吹くといふ、中には私も大分基督教を研究して考へましたけれども、トンと心の中に喜悅がありませんトンと元氣がありません、もう是れなら餘り感心しませんといふ、夫は何だ、夫は情感といふものである、氣分といふものである、情感は雲の如きものである、何うも雲が一杯に擴がつて居る、是れなら雨天だと思つて居ると今度は風が吹いて雲がはれて誠に好い天氣になる、兎に角情感などいふものを當にして、喜悅があるとかないとか、哀しいとか苦しいとかいふやうな事を當にするには及ばない、情感は意力の跡からついて來るものである、神の方に

向つて方針を定めて進んで行くと一ッ進めば一ッ喜悦が生ずる、二ッ進めば二ッ元氣が附き、三ッ進めば三ッ愉快が生じて來て、實に心の中には順風に帆を揚げたやうな勢ひで向ふへ向つて進めるのである、夫に自分の意識を以て戰ふといふ事をせずして、只希望があるとかないとか、喜悦があるとかないとか、憂悶があるとかないとか云つて、もう教會へ行く氣分がせぬやうになつたなどゝ云はずに、教會へ進む其三ッの階段を登つて來るもの矢張り向上の一ッである、教會の方に足を踏込まずして松島の方へでも足を踏込むならば地獄に足を踏込むのと同じ事である、夜店を素見に行くのならば教會を素見に遣つて來るやうにしたならば確かに聖化されたであらう、既に港を出たらば今度は其意力を以て向ふの方へ進む、さうすると其品性が堅牢になつて、何が來ようが彼が來ようが巖丈な岩のやうな我品性が碎くるものかといふ譯になつて來る、其巖丈な岩の上に蔦が巻附いて紅葉して來ると、實に趣味があり雅致があつて、所謂有德なる君子といふところに進んで來るのである、さうなつて來たらば占めたもので、誰も冷評に來ぬやうになる、岩に蔦蔦が附いて夫が紅葉して居る時

には、人がア、實に美なる景色かな、自然の風景といふものは實に畵圖帖の如しと云つて賞讃する如く、戰ひ終つて此所に動かすべからざるところの品性が出來て、其品性に今度は情感が聖化されて、極めて趣味のあるものになつて來た時が、即ち聖人の域に達したのである、夫からもう一ツ進むとキリストになるのである、けれども未だ人間では何うやつて見ても、キリストのところまで達する譯には行かぬのである。

諸君、實に愉快ではないか、御互ひに泣いても笑ふても五十年の娑婆、進んでも退いても五十年の娑婆同じ五十年の娑婆であり旨く行つて七十年の娑婆としても一生涯詰らない罪の中に地鞴踏をして居るやうな事をせずして、矢張り今申す聖人の列に加はり、さうして神には悦ばれ人には愛せらるゝやうな人間になるといふ事が、何よりも快樂、何よりも愉快な事ではあるまいか、併し聖人と云へば一國の宰相になるとか、或は滿天下に感化を及ぼすやうにならなければ、聖人と思はない人があるかも知れないが私は取付の聖人が見たい、私は八百屋の聖人が見たい、私は人の家のお傳をして居るお媼の聖人が見たい、何

も孔子さんやお釋迦さんやソクラテスのやうな聖人などを見たいといふのぢやアない、さういふ聖人が我日本に澤山出來なければならぬと思ふ、彼の八百屋の主人を御覽なされ、彼れは朝に夕に物を賣つて居るが、彼の顏貌の宜い事、彼れが聖人であります、彼れが聖化されたものである、彼のお媼が車を押して行く狀を御覽なされ、彼のお媼が車の中の幼兒を見て嫣然と笑む狀を御覽なされ、彼れが眞個の聖人ではありませんかといふ、さういふ聖人が出來なくちやアならぬ、此基督敎はさういふ聖人を數多く造つたのである、私が英吉利のケンブリッヂに參つてホーサイス博士に會つて、若し此ケンブリッヂにキリストに似た人があるならば私に紹介して下さい、キリストに似た人があるならば、私は其人に會つて見たいものだと云つた、さうするとホーサイス博士は誰に紹介したかと云へば、寡婦の婆さんに私を紹介した、私は婆さんに會ひに行つたところが婆さんがいふのに、『此ケンブリッヂに居る三千の學生の爲に私は家を開けて居ります、私の家は學生の爲に公開してある、學生が放課時間になると三三五々這入つて來て、雜誌を讀むのもあり本を讀むのもあり、片隅で遊ぶ者も

ある、さうして今は世界の全面に散つて居るところの學生からして、私にケンブリッヂのお母さんといふ宛名で手紙が參ります』と之を聞いて私は滿足した、世界全國から大學の卒業生がケンブリッヂのお母さんと云つて私に手紙を呉れる、實に愉快だ、其婆さんが即ちホーサイス博士が私に紹介したキリストのやうな人であつたのである、我帝國大學の附近に此の如き婆さんが居るだらうか、京都大學の附近にそんな婆さんが居るだらうか、私は居らないだらうと思ふ、居れば日本の榮である、學生の金を捲上げて取つて遣らうといふ鬼婆は澤山居る、けれども卒業後に學生が京都のお母さん、東京のお母さんと云つて手紙を送るやうな婆さんは餘りないであらう、何うです、御婦人方さういふお母さんになりたい事はありますまいか、どうか諸君の内に私のいふやうな八百屋になる人はありませんか、人力車の爺でも宜い、社會の受付でも宜い、何も必らずしも重役にならぬでも宜しい、重役の鬼になるよりも受付の聖者になつた方が宜いかと思ふ、夫は重役の聖者になるといふ方で宜いには違ひないけれども、重役の聖者になれぬならば、寧ろ受付の聖者になつた方が、どれ丈天下後世に

其感化及ぶかも知れないと思ふ。

どうか學生諸君の内にも聖者を見たい。けれども學生時代には聖者と呼ばるまでは行かないが、聖化の一段階を登つたといふ丈でも宜しい、天父と齊しい、神と目的を同じうする丈の聖者になつて貰ひたい、基督教で聖靈を受けるといふのは何を意味するか、輕氣球を揚げようとする刹那にプッツと綱を切つた、横濱の港を出發する船が錨を揚げた、二階に登らうとする人が段梯子を一段登つたといふ、即ち此世の罪に暇を遣つたといふ、此世の情慾に暇を遣つたといふ、舊き人を棄てたといふ、さうして新らしき人となつて聖化の道に登つたといふ、昔は洗禮といはず、浸禮であつて水の中へ沈めた、水の中へ沈めるといふは、此罪の舊き身を葬つてしまふ、それで水から登つて出て來る時に新らしい生命に這入つて神の前に聖化の道を踏んで出たといふ事である。諸君は既に今日に至るまで、短かきは三ケ月、長きは一年二年、日曜日の夜毎に此所へ來て說教をお聽きになつたらうと思ふ、けれども耳に蛸が出來る程說教をお聽きになつても、若し夫れ諸君が罪を斷切る事が出來ず、色々な慾を棄てる事が出

來なかつたならば、三年五年十年此所へ來てお聽きになつても何の益するところもない、今晩にでも諸君が其舊き罪に暇を告げて、聖化の道に登らうといふ意をお立てになつたならば、其瞬間からして諸君は漸次々々に聖化されて、遂には私が諸君の前に描き出して今お話したやうな聖人にも成るやうに神がお導びきになるのであるから、どうか聖化の一段階として諸君が此所に斷然意を改めて、さうしてとつときの罪を棄てゝ聖者の群にお加はりになる事を、私は切に希望して已まないのである。

第十六章　俗中の聖

あゝ禍なる哉偽善なる學者とパリサイの人よ爾曹杯と盤の外を潔して内には貪慾と淫欲とを充せり、瞽者なるパリサイの人よ爾曹まづ杯と盤の内を潔せよ然ばその外も亦きよまるべし。

（馬太傳第二十三章二十五六節）

世の中には意外な事が色々ある、一見して聖人の如く見ゆるところの人にして俗人よりも劣り果たる者がある、一寸見たところでは何所の勞働者、何所の店の手代かといふやうな、極めて俗な風采をいたして居る人にして、之に交際つて見れば見上るばかりの聖なる人がある、猶太國には昔ダビデ王の時代からして、否なモーセが國を建てゝ以來、十二族の外にレビ祭司といふ族があつて、此人々は他の十二族の如く國を分けて貰はなかつた代りに、極めて山里の美しき自然に近いやうなところに四十八の邑を貰つて、其所に生活をいたして居つたのである、而して其人々の勤務とするところは、エルサレムの宮に……二十四組に分たれてあるレビ祭司の族が一週間交代で二組づゝ仕へたのである、三

大節といふ時には諸國から多くの人々がエルサレムに登り來つて、宮は非常に雜踏をいたすから、レビ祭司の族が總掛りでお勤めをするといふ事になつて居つたのである、其住居地が自然に近い極めて淸らかであるところの四十八の邑であつたといふばかりではなくして、苟くもレビ祭司の族といふものは利未記の十七章から二十六章までに錄されてある、所謂淸潔の律法を守らなければならぬものであつた、其淸潔の律法と申す中には、神の宮に奉仕するところの祭司の仲間は決して死人の身體に觸つてはならない、蟲螻の類に觸れてはならない、離緣されたる女他人に汚されたる女、又は醜き勤めをいたしたところの女を娶る事はならない、又其他にも日々淸水に浴して其身體を潔めた上でなくては神の宮には出る事が出來ない、曰く何〳〵と外面からして淸くなる道は、殆んど至らざるところなきまでに微細に敎へてある事を見るのである、其祭司の長たる者は一年に一度大贖罪の日に神の宮の奥の院に這入つて、多くの民草の爲に罪の贖ひをする時には、白のリンネルの淸淨なる衣を纏ふといふ事になつて居る、其他の時に於ては靑紫赤紫、夫から眞紅といふ、眞赤と眞白、靑紫

赤紫、紅白、此四種類の衣を着けるといふ事であつて、額にはエボバの聖前に聖なれといふ文字を書現はして、胸には猶太の十二族を現はす爲に色々な寶石を以て、即ち十二の寶石を以て鏤めたる胸當を當てゝ居るといふのである、一寸見たところでは其十二の珠は光を放つて、額に記されたる文字は多くの愚民共を壓服するに足る程の威光を備へたものであつたらうと思はれる、キリストの時代までは、祭司レビの族は實に非常なる勢ひを以て猶太の上下に蔓つたのである、尙此祭司レビの族は神の宮に人民が十分の一の稅を納める、其十分の一はレビの族の所得となり、レビの族が其十分の一を所得した內から更に十分の一を出すのを、祭司の所得とするといふ譯であつて、自ら耕して食ふ譯でもなく、又自ら商賣して食ふ譯でもない、神の宮に捧げられたものゝ其餘澤を受けて日々の生活をして居るといふ、我日本の士族が文武の道を講ずる爲に家祿を貰つて居つたのと同じやうな事になつて居つたのである、さうして住居は何所かと云へば美しい清らかなる山里である、其日々の服裝を見れば實に清素なる麻の衣やリンネルの服を身に着けて居るといふ事である、日々の業は屢々清

水に浴し死人に觸れず、蟲蝮や汚れたる鳥獸類の屍骸に觸れず汚れた者を妻とせず、實に何所から云つても清くあらねばならぬ筈のものである、尚商賣もせず、職業もせず、神の宮から賜はるところの物を以て衣食をするといふのであるからどの點から考へて見ても嘘言僞りのあるべき筈はない、どの點から考へて見ても聖人のやうな生活をしなければならない筈のレビ祭司の族である、けれども、キリストが其人々を見給ふ時に方つては、爾曹は白く塗りたる壁とか、或は白く塗りたる墓だとか或は宴會の席には上座に座る事を好むとか、人の挨拶を悦ぶとか、或は寡子供の手を振つて其お布施を奪ひ取るとか、極めて痛切なる語氣を以て此族をお叱りなされてあるところを見ると、或人が日本の僧侶を評して俗より出でゝ俗よりも俗なりと申した如く猶太國の祭司レビの族も亦俗より出でゝ俗よりも俗なる人々ではなかつたらうかと思ふのである、當に猶太國の祭司レビの族が聖なる筈であるのに、聖ならずして俗になつてしまつたのみならず、羅馬の天主教會に屬するところの大監督其他の連中も、聖なるべき筈の人々の内に、俗人も跣足で逃げなければならないやうな俗人が澤山ある

事は、ゾラの「羅馬」といふ小説などを繙いて見ても分る譯である、小説に依らなくても事實の上に於て分る事である、希臘教の中に這入つても同樣の事であらうと思ふ、新教の諸教會に於ては僧侶といふのはないのである僧侶はないが教師といふがある、其教師と云ふ中には比較的に俗人が少ないやうである、けれども俗人よりも更に俗なる俗人もない事はないと申して差支はないであらうと思ふ、我日本の僧侶となつては最早口を開いていふだに口の汚れとなるくらゐである、其僧侶の中で比較的に清らかであらうと思はるゝのは禪寺の僧侶である、けれども其禪寺の僧侶でさへもお寺の中から腥臭き香を發し、お寺の門を出入する者には怪しげな淫婦を見るといふ今日……、決して聖なる者を見出す事は出來ないとは云へぬがなか〳〵容易ではなからうと思ふ、我日本の聖地ともいふべき高野山に登つて見ると、殆んど沙汰の限りと云はうか、再び高野には足踏が出來ぬと思つたくらゐに不潔不淨の地になつて居る。

斯くの如き事は私が述ぶる必要はない、聖なるべき筈の者が俗になり、俗人よりも更に俗人になつたといふ事を考へ來る時に方つては、實に人間はなかな

か六ツかしい動物であつて、聖なる道を辿る事は如何に困難であるかと嘆息するの外はないと思ふのである。

然るに諸君、今より千九百十二年の昔にガリラヤのナザレに呱々の聲を提げ給ふたるイエスは、祭司の血統にお生れなされたのではない、キリストの家庭に於ては白リンチルを身に纏ふた者もなければ、青紫と赤紫、眞紅、純白の衣を纏ふた者も居らぬのである、父親のヨセフは朝より晩に至るまで大工の仕事衣を着けて居つたのを、イエスは御覽なされてあつたらうと思ふ、母親のマリアは朝より晩に至るまで前垂を纏ふて、猶太の婦人の常として糸を紡ぎ機を織り、子供等を抱懷へして忙がしく立働かるゝのを御覽なされたであらう、何等の聖なるものもイエスのお育ちなされたる家庭の中には認められなかつたであらう、而して其父のヨセフが、イエスの十三四の時に此世を去つた後は、御承知の如くイエスは父の後を繼いで棟梁大工の職にお就きなされて多くの弟子大工を率ゐて、日々受負仕事をしてお暮らしになつたらう、尙イエスの華客先きの人々からは色々様々な駈引を以て遇はれ給ふた事もあつたらう、凡そ十七八

年間のキリストの生涯は母親のマリアと四人の弟と、少なくとも二人の妹を孚まんが爲に、夜を日に次でお稼ぎなされたであつたらう、三十の年に從弟ヨハヂがいよ〳〵世の中に立つて旛擧をしたとお聞きなされた時には、キリストの衷に鬱勃たるところの英氣は押へんと欲しても押へる能はず、遂にヨルダン河の邊りに至つてヨハヂと會見なされた、ヨハヂは一度イエスを見るや世の罪を任ふところの羔を觀よと云つて、其の神々しき威貌の前に頭を低げたのである、爾來三年の間イエス、キリストは世の爲人の爲に力をお竭しなされたのであるが、キリストは白リンヂルの衣を身に纏ね給はないのである、青紫、赤紫、眞紅、純白の衣を身に着け給はなかつた、口碑に依ればイエスは母親のマリアが編んで與へたといふ襯衣と股引を一緒にしたやうな下着をお召しなされた上に大工の衣を引掛けて、俗人も俗人棟梁大工といふ俗な扮裝で、或は山の上或は湖水の邊り或は街に立つて、多くの人々に道をお說きなされたのである、イエスの從弟なるヨハヂは之に引換へて……勿論白リンヂル、或は純白の麻の衣は纏けなかつたのである、バナスとかいふ一人の人があつて是はヨゼフスの先生

であつたといふ、木の葉を身に纏つて菓物を食物として行をなしつゝ教を建てたといふ、ヨハヂは或は其人の感化を受けたものではあるまいか、身に毛衣を着け革の帶を締め、蝗虫と蜂蜜を食ふて、人里遠き山奥に住んで行をいたして、疾風の如くにヨルダン河の邊りに出て來て悔改の說教をしたといふのである、然るにキリストは大工の職服を身に纏けて、人々の間に立働かれたといふのは是れ何であらうか、私はキリストの感化力の偉大なること、基督教が今日全世界に其勢力を逞しうして行く所以のものは、或は俗中の聖といふところに存して居りはしないだらうかと思ふくらゐである、否夫ればかりではないのである、キリストの感化力の偉大なるところ、キリストの人格の神々しい光を放つところ、俗中の聖といふところに大いに在るだらうと思はざるを得ない。

何となれば聖なるべき筈の人が聖であつても夫は當然の事と見做さるゝであろ、若し夫れ聖なるべき筈の人が少しでも俗であつたならば、其時こそ四方八方から非難の矢が其人に集り來るであらう、之に反して曾て聖なる族籍に列した事もなく、自分は他人と異れる服裝をもなさず、大工のお仲間といふ扮裝で

世の中に現はれ給ふたるキリストをヨハヂが見れば、是は救世主ではないか、是が世の罪を任ふところの羔ではないかと、一見して渇仰した程に聖なるキリストである、ナタナエルがイエスの前に一度出れば是れ我神なり、是れ我主なりと云つて膝を曲げて拜まなければならない程の清きものがあつたとすれば、其キリストの感化が當時の少數の人であつたけれども、其少數の人々に及んだところは實にエライものであつたのである、尙其感化は年々歲々止まずして、二千歲の今日に至るまで多くの人々を動かして居る事は、是はエライ事と云はなければならぬ、キリストは大工の服を纏ふて世にお立ちなされたが、ヨハヂやペテロは漁夫の服を纏ふて世に出たものであらう、イエス、キリストは形こそ俗であれ御修養の點は何うであつたか、ヨルダン河に於てバプテスマを受けて將に河よりお上りなさらんとする時に天より聲ありていふ、是れ我心に符ふ愛子なりイエス、キリストの三十年の生涯を貫いて居るところのものは是我心に符ふ愛子なりといふ自覺であつた、イエスは天の父の獨子である、天の父の秘藏子であるといふ奥床しき自覺にお這入りなされて居らつしやつた事を思は

なければならぬのである、天の秘藏子であるといふ其自覺の奥に這入つて見ると非常なものがある、キリストは今日の諸君が忙しい忙い、聖書を讀む暇もございません、祈禱をする暇もございません、況してや手を拱き眼を閉て默想するやうな、時は得られませんと云はるゝに方つて、キリストは食事をなさるゝ暇さへなかつた、孔夫子が四十年掛つて決行た仕事、釋尊が五十年掛つて決行た仕事を、否夫れ以上の仕事を僅か二年そこらで決行給ふたる主イエスであるからして、何れくらゐに忙がしく居らつしやつたかといふ事は想像に餘る事である、斯くの如く忙がしいところの主が終夜山に這入つて禱り給ふたといふ事が記いてある、晝の内は食事をなさるゝ暇さへない主が、終夜山に這入つてお禱りなさるゝといふ事は是れ如何なる事であらうか、私共の實驗から申すならば朝から晩まで忙がしくして、夜山に祈禱にでも行つたならばもう翌日は綿のやうに身體が疲れて、其勤が務まらぬといふやうになるであらうがキリストは終夜山に這入つて禱り給ふた其の翌朝は早くエルサレムの宮に出て來て、多くの人々の前に立つて勇ましく道をお說きなされた、其敎へて倦まない英氣鬱勃

たるところを見るにつけて、私共は非常に感ずるのである、私共の祈禱は苦しい祈禱である、私共が祈禱をしようと思ふ時には思想が散るから、散らさないやうに集注しようと思つて……思想を集注しようと思つて非常なる苦惱をするのである、祈禱をしようとする時には心を他に散らすまいと思つて奮闘をする、一時間の祈禱をするならばガッカリ疲れてしまふ、何うして一夜の祈禱をする事が出來ようか、キリストは是れ我心に叶ふ愛子なり、神の秘藏子であるといふ自覺にお這入りになつて居らつしやる、山に這入りて天の父に禱るといふは、花嫁が舅姑に任へて疲れ果てた時に、六ツかしい良人に侍へてもう堪へられない思ひになつた時に里返りをして、二三日母親の乳を吸るのと同じ事である、何の苦惱も何の奮闘もないのである、三日の里返りが果てゝ良人の家に歸る時には、非常なる元氣になつて行くのと同じ事である、一夜山に這入りて禱り給ふた後のキリストは元氣百倍した、キリストの爲には無上の幸福、無上の喜悦にお這入りになつたものと云つてよかろう、御互ひの祈禱は苦痛である、御互ひの祈禱は奮闘である、御互ひの祈禱が勤めである間は禱る暇がありません、

聖書を讀む暇がありません、沈思默想をする暇がありませんといふ、けれどもキリストの如く祈禱をして、喜悦であり快樂であり幸福であり休養であるといふ祈禱の妙境に這入つたならば、禱る時は何時でもある、何時でもある、否々十人二十人の人を相手にして商賣をしつゝあるところの人でも、晝飯を食べた後に二階座敷に上つて十分二十分三十分神の聖前に聖書を讀み、神の事を默想し、更に神の聖前に禱るといふ事は、是れ非常の元氣を與へ休養を與へ快樂を與へるものであるからして、其人が二階座敷から店に出て來る時には英氣勃々である、是れ我心に符ふ愛子なりといふ自覺は、終夜山に這入つて祈禱するところのキリストを出した次第である。

斯くの如き祈禱をなされたるキリストの心には神の至誠と正義と慈愛が滿ちたのである、其滿ち溢れた結果は何うなつたであらうか、不義を行ふ者を見てはもう堪へられない思ひを以て之をお責めなされた、憐れなる者を見ては時を忘れ勞を忘れて、之を懷抱へて救ふてやりたいといふ思否にお成りなされた、天の父にお交際なされた結果キリストが斯くの如く高潔なところまで進まれた

での、其キリストの感化は四邊の人々を清めるやうになつたと思ふのである、大工の衣を身に纏け、大工の仕事着を身に纏けた、一見棟梁大工のやうな風姿をいたした俗人なるキリストは、其心が斯くの如き聖であり斯くの如く義であり、斯くの如く愛であつたが故に、其俗なるキリストは當時の世界の少數者を感化するのみならず、今日では世界萬國の幾億の人間に感化を及ぼさるゝやうになつた次第である、私は俗なるキリスト、俗人でありしところのキリスト、大工の仕事をして修養をしたキリスト、大工の衣を身に引掛けて、斯くの如く勇ましく人の心靈を救はんが爲に活動なされたるイエスを思ふ時には、一見聖なる如く見えて俗な心を持ちたくない、寧ろ木綿の服を着て居つても介意ない。さういふやうな表面上の事には頓着せずして、只キリストのお手本に習ひたい、我は神の秘藏子であるといふ其自覺に這入りたいものである、我は天の父の聖前に祈禱をする事が喜悦となるやうな祈禱の妙境に這入りたいものである、更に祈禱に依つて得たところのものを以て、我力の有らん限り世の爲に盡したいものであるといふやうな心は、年々歳々增加はり來る事を思ふけれども、凡人

の常として矢張り心の中には俗なるものがあつて、諸君に對して恥かしく感ずるのである。併しながら諸君、今日二十世紀の世界に於て諸君と共に滿腔の喜悦を以て迎へなければならない事がある、夫は英米監督教會天主教會などに於ては、教師とか何とかいふ連中は何だか聖人のやうな服裝をして居るけれども組合教會の如き其他メソヂスト教會の如きところに於ては、脊廣の服を纏けて講壇に立つ者は尠くない即ちさういふ風に扮裝には頓着をせずしてキリストの御足の跡を慕ふて行くといふ精神を以てさへ立てば、此教師の役は勤まるといふ大活眼を以て立ち居る者が尠なくない事である、私の知れる牧師の内には講壇に立つ時には美服を纏はなければならないといふやうな、愚にも附かない事をいふ者がある、是は實に時世遲れの考へである、さういふ詰らない心を以てやつては駄目だ、決して袈裟が物をいふのぢやアない、衣服が物をいふのぢやアない、眞個に物をいふところの者は其人の心の底である、眞個に物をいふところの者は其人の品性である、其點に重きを置かなければならない、教師の連中の内に俗中の聖たらん事を欲する者を見出す事は、私の非常に愉快とすると

ころである、併しながら更に愉快とするものがある、現在の亞米利加大統領ローズヴエルトの如きは脊廣の服を纏へる正義の說敎者である事は何人も異論がないであらう、ホワイトハウスといふ官舍の中に住んで居るところのローズヴエルトは、脊廣の服を纏ふたるところの正義の說敎者である、彼れが國會に與ふるところの敎書は、是は實に立派なる山上の說敎の如き種類の正義の說敎である、大統領の候補者として屢々爭ふて屢々負けては居るけれども、ブライアンの如きは誤つて政治家になつたといふ說がある、ブライアンが東京の靑年會館に立つて演說をした、其演說に耳を傾むけた時に彼れは實に正義の說敎者である事を認めたのである紐育の今の知事ヒユスは知事の椅子に就いてより今日に至るまで殆んど二年の間彼れは正義の說敎者であつた、彼れの行政は正義の行政であるといふ事は何人も異論のない事であらうと思ふ、次の大統領にならんとするところの陸軍卿タフトは正義の說敎者である、彼れが多く會衆の前に立つて己れの如く其隣りを愛すべしといふキリストの御言葉は、啻に個人々々が行ふべきのみならず、國と國との間に立つても、己れの國を愛する如く隣

りの國を愛せよといふ敎訓を守らなければならないと叫んだ、彼れの正義の說敎は非常なる反響を與へて居るではないか、政治界に於て斯くの如き正義の說敎者が今日現はれ來つて、脊廣服の說敎者を見る事は實に痛快に感ずるのである、尙商賣人の仲間に於てボストンのケペンといふ商人がある、英國の會衆派の內に其人ありと知られて居るアルベルト、スパイセルと云ふがある是等は實に脊廣の服を着たるところの正義仁愛の說敎者である。

斯くの如き人々が一度講壇に立つた時には、人の心を動かす力も非常なものである、以上はたゞ名ある人々を披露したのであるが世界に名の聞えざる脊廣服の正義の說敎者は幾人あるか知れない。過日京城の靑年會館に招かれて多くの朝鮮人に演說をした事がある、其所に一人今度亞米利加のレーマンスムーブメントの代表者として一人の商賣人が步つて來た其人の風采を見其人の言葉を聞いた時にアヽ實に美しい、此商賣人がキリストの十字架を諄々として說く其力の大なることには感佩したことであつた、今日の我日本に雄辯滔々として講壇より人を壓するところの說敎者のある事を私は悅ぶものである、けれども諸

君、今日の我日本に神の國を擴張せんと欲するならば、俗中の聖が諸君の内より起らなければならない、否諸君の内に俗中の聖ともいふべき方がある事を私は悦ぶものであるが、尚其數が益々多く加はらん事を希望するものである、諸君河内木綿の羽織を引掛て或は半纏を着つゝ、口に云はずとも正義の説教を身にせるところの人々が諸君の内に數多く現はれ來つたならば、是れ實に愉快なる事ではあるまいか、東京に在るところの多くの人々は、私に向つて東京に出て來て一ッ東京の思想界に立つてやつたら何うだといふが、成程東京の大學や高等學校の學生を引附けて其人々に演説を聽かせて、其中から有力なる聖者が出て來るといふ事は是れ面白い事である、人生の快事である、併しながら此大阪、即ち東洋の商業界の中心であるところの大阪に於て正義の説教者が俗人として輕蔑され、商人は利にのみ敏いとして輕蔑され、又商人自らも罪を作つて居ると思つて謙遜つて居る、其俗中の俗ともいふべき商賈人の中からして、是は神の聖意に符ふ愛子なりといふ、山に這入つて終夜祈禱をする事を樂しみ、夫が人格として現はれ、其人の品性として現はれ、言動として現はれ、心齋橋

筋の店には俗中の聖者が七人も十人も二十人もある、高麗橋筋にも京町堀にも靭の魚問屋の中にも俗中の聖なる者が三人五人あるといふ事になつて來たならば、天下に道を宣傳するところの者は學士博士の肩書を持ちながら、節を賣るやうな詰らない人ではない、即ち俗中の聖として世に立つべきものに非して何ぞやと私は思ふのである、どうか諸君が自ら銀行の簿記を握る時も、帳簿を書ける時も、店で商賣をする時も、露店を開ひて居つても構はない、どうか我教會員として俗中の聖人が續々として現はれ來らん事を希望する、どうぞ馬可傳の一章の初めのキリストを思ひ、俗中の聖なるキリストを學ばれん事を決意せられたい、私は其使命を果さんが爲に此所に立つて奮闘をする、私の命のあらん限り諸君と共に奮闘を續けたいと思ふ、どうぞ諸君の内より多くの俗中の聖者が現はれん事を切に希望して止まないのである。

第十七章　逆境の聖者

イエス杯をとり謝して曰けるは之を取て互に分よ、我なんぢらに告ん神の國の來るまでは葡萄より造しものを飲じ、またパンを取り謝して擘かれらに予て曰けるは此は爾曹の爲に予るわが身體なり我を記ん爲に此を行、また食してのち杯をとり曰けるは此杯は爾曹の爲に流す我血にして立る所の新約なり

（路加傳第二十二章十七節至二十節）

今人に對して君は春風駘蕩の長閑かなる時節と、寒風凛冽肌を裂くやうな冬枯時と何方が好きかと尋ねたならば何人も春が宜いと答るであらう、四海浪靜かにして枝も鳴さぬ御代と、辻斬強盜の盛んに行はるゝ亂世と何方が宜いかと尋ねたらば、是は治まつた御代の方が宜いといふに違ひはない、家門繁盛一家健全であるといふ時と、家は傾き壁破れ病人が枕を列べて寢て居るといふ時と何方が宜いかと尋ねたらば、夫は家の内に何の煩累もない時の方が宜いといふであらう、學生諸君にして家から豐かに學資金を供給されて、何不自由なく勉

強する身の上と、朝は早く起きて牛乳を配達し、或は人の家の食客をして下女同樣に追使はれつゝ、時を造つて學校に通ふのと何方が宜いかと尋ねたらば學資金のある方が宜いと答へるに違ひはない。

諸君、天意は人の考と少し違ひはしないかと思はれる、私は昨夏布哇に參り實に結構な所だと思つたのである、丁度夏の眞中であつたが、九十度に上るといふ時間は一日の內に二時間ぐらゐで、偶々熱いと思つて居ると眞に肌觸りの宜いやうな涼風が颯々と吹來つて汗を拭ひ去つてしまふのである、冬は何うかと聽けば、六十度か或は六十五度ぐらゐが一番寒い時である、單衣物に薄い襯衣でも着て居ればもう夫で宜いといふのである、生活向は誠に樂である、泥棒も居らなければ乞食も居ない、枝も鳴さぬ御代なれやといふ言葉は布哇島を暗示したのではあるまいかと思ふくらゐである、然るに古來布哇島に一人のエライ人物だに起つた事を聽かない、又現今の布哇島からして天下に名を顯はすやうな人間が出て來さうにも思はれない、夫は余りに結構余りに暢氣で、人は皆醉生夢死の間に暮して居るからである、然るに和蘭の如き國では寒さと戰ひ海

水と戰ひ、種々なる困難と戰ふ所から、大國の間に挾つて今尙恥かしめられず、殊に東洋にまで手を伸して大和蘭といふ時代もあつたことである、又獨逸の如き、國柄から云つても何から考へて見ても、實に劣等であるが所謂濟々たる多士で大學者大人物が續出する次第である、又瑞典諾威の如き北極に近い所に於て、實に美しい理想の基督信者が夥多出る事を二考へて見ると、天意は人の考と少し違ひはしないかと思ふ節がある、孟子であつたらう『天の將に大任を此人に下さんとするや必らず先づ其心を苦め其身を窮乏にする』といふ事が書いてあります、又或書には國亂れて忠臣出で家貧しうして孝子現るといふ事も記いてある、私が幼年時代からの朋友中に豐かに學資を受けて、柔かき衣服を着て勉強をした人で、一人として名を爲した者はない、一人として人間らしい人間になつた者はないのである、或は蒲團がなくして藁蒲團の中に犬子のやうに、潜り込んで居つた者や、或は學資金がなくして學校の拍子木叩きをやつたり、或は鐘撞をやつたりしたやうな人の中から立派なる人物が出て來て居る事を考へて見ると何うも天が我々人間を始終春景色の中に置かずして、時には鑛金の

炎熱肌を鎔かすやうな事もあり、時には寒風凛々と吹來つて肌を擘くやうな事もあり、時には子を喪ひ時には親に別れ、時には杖柱と頼む兄姉を失ふて腸が裂けるやうな思ひをなさしめ給ふといふは、何か天意には深い〳〵人間の解釋の出來ない聖旨があるに違ひはないと思ふのである、若し夫れ諸國が西君立志篇を取つて、篇中の人物を調べて御覽なさるならば孰れも貧苦と戰ひ困難と戰ひ、逆境の中に人と成つた人と申しても宜い程である、教會歷史を繙いて聖者と呼るゝ人々の傳記を調べて見ても、生れながら逆境に立つた者もあれば、好んで自ら逆境に處した人もあるが、兎も角逆境の中に現はれたところの聖者である事を認むるのである。

斯く考へ來る時には順境必らずしも歡迎すべきでなく、逆境必らずしも避くべきでない譯である、然るに玆に一ツ大いに心せねばならない事があるといふのは、人生の大目的を悟つて逆境に立つところの者と、人生の何者たるを知らずして逆境に立つ者との間には非常なる相違が生ずるといふ事である、只美しい衣服が着いた美味い食物を食ひたい、假令金殿玉樓の中に身を置く事が出

来なくても、切めては人らしい人の住むやうな家に住んで見たいといふことを以て此世の願望といたして居る人が、一朝家傾き産盡きて、赤貧洗ふが如き中に身を處さなければならないといふ事になつて來ると天を怨み人を咎め煩悶に煩悶を重ねて、もう死んだがましだと云つて泣きつ喚きつ世を送ることゝなる、人世の何者たる事を知らない者が業に蹉跌いて、大失敗を招くといふやうな事が起ればもう堪えられない、世の中が嫌になつた、朋友に顔が會されない、世間に顔出しが出來ないと云つて、舌を噛んで死するといふやうな事になるのである、若し舌を噛んで死ぬるといふところまで行かなくても其性質が曲けて來て段々此世の中を惡賢く送らうといふやうなところから詐欺をやつて見たり、或は朋友を倒すやうな計略をやつて見たりして其氣質が非常に惡くなる實に手の着けやうもない、箸にも棒にも掛つたものではないと云はるゝやうな曲けた人間が生じ來るのである、けれども人生は當に麗はしい衣服を着るのが目的でない、美味い食物を喰ふのが目的でない、立派な家屋に住むのが目的でない、人々に敬ひ尊まるゝ事が目的でない、人生の大目的は天の神が何の爲に

我を此世の中にお遣はしになつたかといふ事を考へて、天意は仰いで天に恥ず俯して地に恥ないやうな立派なる心を養ひ立つると共に、立派なる人格を磨かしむると云ふ事に存するであらう而して磨き上げたところの其人格を以て、我が四邊ゝ人々の爲に有益なる働きをするといふ事にある、其所を自覺した者であれば、假令食へないやうな時が來ても、人々の前に着て出る衣服がないやうな事があつても、人の借家に假住居をするやうな時があつても、屈する事なく阻む事なく其逆境と戰ひ、卽ち天が此の如き艱難を我に與へ給ふたといふのは我を磨かしめんが爲である、我を人らしい人になさしめんが爲である、我に金鐵の如き意志を鍛えしめんが爲であるといふ事を自覺し、艱難も來い貧苦も來い病苦も來い何でも來いといふ考へになつて磨くところの人の前途は奈何であらう、粗食を食ひ水を飮み、肱を曲げて枕としたる顏淵は、天命を樂んで二千年の今日に至るまで偉大なる感化を殘すところの美しい聖者の一人となつた事を考えて見たいものである、どうせ世の中は艱難の世の中、どうせ世の中は苦痛の世の中、天が始終春景色を與へない、天が何時々々までも、健康體を保たし

めないのである、天が生別死別の悲哀を取去り給はない、時には生別死別の悲哀を與へ、時には腸の裂けるやうな苦痛を與へ、時には世の中に申譯がないといふやうな大失敗を演ぜしめ給ふのであるから、どうせ苦痛は來る、其苦痛が來た時に、私共は其苦痛に堪え得らるゝ丈の信仰を養ふ事が甚だ大切である。

諸君、私は諸君が病氣に罹らるゝ事を願ふものではない、諸君が身代限りをなさる事を悦ぶものではない、又諸君が親に別れ子を喪はるゝやうな事になるのを決して冀ふものではない、何時までも諸君と共に春風駘蕩の好時節を迎へたい、何所までも諸君と共に健全なる身體を保ちたい、何所までも諸君と共に治まれる御世の民として　陛下の萬歳を唱へたい只私が玆に今日諸君と共に味ひたい事は、逆境は嫌でも應でもやつて來る、けれども私共が人生の問題を悟つて眞個に天意を念ずるといふ事になつてさへ居れば、逆境は私共を聖ならしむるのである、私は諸君に順境の聖者になつて貰ひたい、家族團欒の快樂を取るところの聖書になつて貰ひたい、健康と長壽を保つところの聖者になつて貰

ひたい、家から豊かに學資金を貰れて、何不自由なき中に立派な聖者になつて貰ひたい、逆境の聖者となるは容易し順境の聖者となる事が實に難い、然るに二十世紀の文明は逆境の聖者を造り出す事を冀はずして、寧ろ順境の聖者を造り出さん事を冀ふのである、中世紀の基督敎では逆境の聖者を多く造り出さん事を冀ふて居る、然らば順境の聖者となるには如何に致したら宜しいか、順境の聖者とならうと思ふのには逆境の聖者を念ずるより他はないのである、逆境の聖者中の聖者でありしイエスキリストを念ずるの他はないと思ふのである、生れて馬槽の中にお育ちになり、凡そ年十三にして父に別れて、母親と多くの兄妹を支へて行かなければならない程の貧乏の中に日々棟梁大工の働きをなされたといふ、十八年間大工の生涯を送られたるイエスを思はねばならぬ、三十にしてバプテスマを受け、夫から三歳の間といふものは鳥には巢があり獸類には穴がある、然れど人の子は枕するところがないと云ふ貧苦の中に道の爲に力を盡されたるイエスを思はねばならぬ、殊に最後に弟子方を集めて訣別の食事をなさるゝ時、麵麭を裂いて弟子

方に向つて是は汝等の爲に裂るゝ我身體なりと云ひ、己が身體を裂るゝ事を示し、又葡萄酒を盃に注いで弟子方に別つて、是は汝等の爲に流すところの我血であるとて、罪なくして犧牲の死に就く事をお示しになつた、いよ〳〵御訣別が濟んで、ペテロ、ヤコブ、ヨハヂの三人を連れてゲッセマヂの園に入り三度までも死ないで濟むものならば死なずして世の民を救ふ事を得させ給へと、血汐の如き汗を絞つてお禱りになり、祈禱が濟むと羅馬の兵士に高手小手に縛り上げられて祭司長の前に引出され、ピラトの御殿にては或は眼を掩はれ、右左から鐵拳を以て頭邊を毆られ、頭には荊棘の冕を冠せられて、其の荊棘の針が漸次に通つて血汐が額から流れて來るといふ苦痛にお遭ひなされた其時に逆境の聖者イエス、キリストは何故に我を苦めるかといふ、一言のお尋ねだになさらない、如何に橫暴を毆られても、默然として知ざるものゝ如くして居られたのである、終夜苦められて遂に重い〳〵十字架を構成すべき材木を負はされて、屢々途中で絕息いてお倒れなされたといふ事もある、猶太の十字架は御承知の釘もて掌を橫木に打付けるのである、軈身體の重量で掌の釘の孔が漸次大

さく裂けるので、凡そ苦痛と云つてもこんな苦痛はないといふ、其苦痛の中にも逆境の聖者イエスは一言半句も天を怨みず人を咎めず、泰然自若として其苦痛にお堪へなされたのである、母親のマリアが己が子の最後を認めんとして十字架の下に立寄るのを見ては、最愛の弟子ヨハネに母親を委托され、己を殺す者の爲には彼等は實に何にも辨別のないものであれば、天の父よ彼等に罰をお與へなさるなといふ祈禱をなされ、遂に我事成れりとして眠るが如く此世をお去りになつたのである、順境の聖者たらんと欲する者は宜しくキリスト、イエスを思ふべきである、イエスが馬槽の中で取り上げられ給ふた事を思ふ時に、我子に絹衣裳が着せられやうか、宜しく木綿衣服もて子供を育つべきである、いかで十三より大工の仕事をしつゝ己れをお磨きなされたるイエスを思ふ時には、牛乳配達で御座れ新聞配達で御座れ、どんな艱難辛苦も來らば來れ、我々は厭はないといふ考へを持たなければならない、學資を豊かに供給さるゝところのは者宜しく父母を伏拜んで、アゝ實に我は斯の如く幸ひに學問に身を委ぬる事が出來るが、ナザレの主イエス、キリストの艱難の中に人と成り給ふた事

を思へば、此溫かき蒲團の上に寢るのは濟まない、寧ろ一枚を減してゞもナザレのイエスキリストの艱苦を忍んで、貧書生に同情を表さなくてはならないといふ眞心が勃々として起り來るであらう、イエス、キリストが三十の年から枕するところなくして、世の爲め人の爲めに力をお盡しになつた事を考へる時には、出るに腕車あり入るに人力車あり贅澤なる生活を送るところの順境の人は、其逆境の主イエスを思ふ毎に車代を儉約して世の爲め人の爲めに之を用ふべきであるまいか、いよ〳〵最後にケッセマヂの園に禱り、十字架上に一命をお棄てなされたるナザレのイエスを思ふ時には、木石の如く冷やかなる心を持つ私共も犧牲の精神に感じて、ヤアこれではならないといふ氣に滿たされて、マア一ツ世の爲め人の爲めに盡さなければならないといふ考へが胸に湧いて來るのである、アシシの聖者フランシスはキリスト、イエスの十字架に釘られた肖像の前に座して、朝な夕なに十字架の苦痛を思ふた爲に、彼れの身體には十字架の釘の跡が印せられたといふ口碑がある、若し口碑であつてもアシシのフランシスがキリスト以來使徒パウロに亞ぐところの大聖者となつたといふは、逆境の

主イエスを紀念するところに基いたと申しても宜からうと思ふ、順境の聖者たらんと欲するところの我々は、朝に疾く起出でゝ先づ主イエスの十字架を念ずべきではあるまいか、順境の聖者たる我々は何所までも逆境の主イエスを念し又暇があればアシシのフランシス傳を開き、暇があればクレルボーのベルナルドの傳記を開き、或はアシシのクララといふ女の聖者の傳記を開いて、此聖者達が逆境に立つて如何に磨かれたかを思ふて、我も之に倣はなければならないといふ考へが進み來る時に、私共も不束ながら其聖者の跡を踏んで行くことが出來るであらう。

若し夫れ諸君が順境に於て逆境の聖者を念じて、自ら進んで聖者の跡を踏行ひ給はなかつたならば、天は或は諸君に逆境を與へて、逆境の聖者たらしめ給ふ事もあるから、私共は涙を流さないでも宜い時に人の爲に涙を流し、盡さないでも宜い時に人の爲に盡し、贅澤に日が送れる時に贅澤をせずして勤儉力行して、其餘を人の爲に施す事が、是天に對して其順境の御恩澤に報い奉る所以ではあるまいかと思ふ。

第十八章　心情の聖化

我に命じて暗より照出しめたる神、我儕をしてイエスキリストの面にある神の榮光を認し光を顯さしめん爲に我儕の心を照し給へり。我儕この寶を瓦器に藏り、是れおほいに優たる能は我より出るに非ず、神の能なる事の顯れん爲なり。

（哥林多後書第四章六、七節）

今日は『心情の聖化』と云ふ題でお話を致すが、其意味は心を清めると云ふ事である。此頃子供等が歌を謳ふて居るのを聞くのが樂である、私の七ツになる子供と、四ツになる子供も頻りに歌つて居る云く『箱根の山は天下の嶮、函谷關も物ならず、萬丈の山千尋の谷、前に聳え後へに支ふ、雲は山を廻り霧は谿を閉づ』と、實に面白さうに廻らぬ口で謳つて居る、私が其の歌を聞きつゝ思ひ浮べたのは、一昨年頃聞いた事で、凡そ百萬圓ばかり掛けて箱根の山全體を公園にして、世界萬國の人々が遊びに來るやうにしたら宜からうと云ふ計畫を立てた者があると云ふ事である。

丁度私は昨年の夏の初めに塔の澤に一泊を致した事がある、今一日逗留を致

したならば、箱根七湯を巡つて、箱根の元驛の所まで行く積りであつたけれども、歸途を急いだ爲に夫れは心に任せなかつたのである、夕方二人の朋友と杖を曳いて塔の澤から湯本に下り、谷川に添ふて白絲の瀑を見物した又塔の澤湯本に電燈を照す爲に拵へてある發電所も見たのである、其時に考へた事は、箱根に水がなかつたならば、箱根は殆んど云ふに足らない、萬丈の山千尋の谿、前に聳え後へに支へて居るのは、如何にも大丈夫が突立つたやうな工合で、嚴めしいは嚴めしいけれども、何うも何か物足らぬやうな心持がする、併し何所に行つても水がある、殊にタップリと水晶のやうな水が流れて居る、是れが何うも箱根の箱根たる所である、當に清潔なる水ばかりではない、其水の傍側に溫かな湯が何所からでも堀れば滾々として流れて出る、是又箱根になくて叶はぬ所のものである、箱根より彼の淸らかなる水と溫かなる湯とを取り去つたならば、箱根は云ふに足らないと云ふ考が起つたのである。

先年夏期學校の節に箱根の元驛に參つた事がある、箱根驛は蘆の湖に添ふて立てられた所であつて、私共の宿屋の裏座敷から見ると、東の方には駒ケ嶽が

高く聳えて居る、西の方には低いけれども、幾ツとなく小山が綿々として續いて居る、其駒ケ嶽と綿々として續いて居る山々との間に、鏡のやうな湖水が麗はしく横はつて居る、其湖水の向方に乙女峠があつて、其乙女峠の上に白扇を逆倒に懸けたやうな富士の峰が、如何にも清らかに高く聳えて、實に得も云はれぬ景色である、箱根七湯に流れ來るタップリとした清らかな水は此蘆の湖から流れ來るのであらうと思ふ、七湯を濕ほして居る所の溫かな湯は天空に聳えて居る富士の元の噴火口に、何か緣を持つて居るものだらうと思はるゝのである。

諸君、イエス、キリストが山の上の說敎中に於て、力を盡してお示しになつた事柄は何であるか、我等人間の心情を淸めよと云ふ御敎訓であつた、馬太傳第五章の一節より終りの節に至るまで、山の上の說敎の全體は、心を淸らかにせよと云ふキリストの御敎訓で貫いて居ると申しても差支はないのである。『心の淸き者は福なり其人は神を見る事を得べければなり、心の貧き者は福なり天國は其人の者なれば也、矜恤ある者は福なり其人は矜恤を受くべければなり、

和平を求むる者は福なり、其人は神の子と稱へらるべければなり』是れは總て此の心をお示しになつたのである、爾曹の義き事が學者やパリサイ人の義きよりも優ずば天國に入る事が出來ないと云ふ、其教訓も何をお示しになつたかなれば、パリサイ人や學者は外形を清めて居るが、爾曹弟子等は心を清めなければならぬ、清き心を持たねばならないとお示しになつたのである。

キリストは餘程露骨に物を云ふお方であつたと見える、女を見て色情を起す者は其心既に姦淫したるなりと云ふ一言は、猶太の傳道に於いて一度キリストの口を出しより、千九百年の今日に至るまで、聖人も、賢者も、智者も、學者も總ての者が此語を讀む時には、如何に高慢な者でも、假令帝王の位に即いて居る人でも、自から我心を責めらるゝが如く思ひがして、キリストの前には頭を下げざるを得ないことゝなつた。女を見て色情を起す者は心の内既に姦淫したるなりと云ふ一言は、實に強き一言である、ソクラテスも斯の如き語は發する權利がない、釋迦も孔子も斯の如き言葉を發する權利を有たないと私は思ふ、此語を發し得る權利を握つた者はイエス、キリストの他にはない、斯の如き聖

なるキリストが心を清めよとお示しになつたのは實に力ある敎訓であると申さなければならぬのである、馬可傳の內を開いて讀んで見ても、パリサイ人や學者が器を洗ひ、手を洗ひ、足を清めるのをキリストが御覽なされて、何ぼ外を清らかに洗つても此處（胸を指す）清潔にならねば駄目だ、外から這入るものは、口から腹を通つて厠へ落ちてしまへば、スッカリ清まつてしまふが內から出て來るものは實に汚ない、夫れが人を汚すものである、此處を（胸）清めなければならぬと、如何にも適切に切實にキリストはお敎へになつたのである、彼のブッシヂルが斯う云ふ語を申した『人の命は心情に在り、若し其心情に於て活くるに非ざれば、他の點に於て如何なる成功を得るも、決して命あるものとは云ふを得ない』と、其意味は心が第一であつて、人の品格も、思想も、行狀も、みんな心から發展し來るものである、言換れば心が源泉である、泉の源が清くなければ、何を云つても、何を行ふても、夫れは云ふに足らないと云ふ意味である、キリストの山上の說敎をブッシヂルが味ひ得て斯の如き語を發したものであらうと思ふ。

左らは諸君、如何に致しましたならば、私共の心が清らかになるであらうか、一體心情と云ふものはどんな有樣でなくてはならぬであらうか。朝疾く起出でて、蔦の湖邊に參り、不圖湖の面を見ると、水晶の如く清らかに透徹つて居るのを認めるので、私共の心もどうか此通りに混合物のない、清らかな水であれかしと思ふことである、夫れから端艇に乘つて、箱根行在所の沖に漕出し、端艇を止めて、コッソリト何れくらゐ深いか知らぬと思つて、靜かに海の底を覗き込めば、幾百尋あるか、只水は蒼味を帶びて、底の深さが見えない、私共の心は底ひも知らぬわだつ海の深きが如く、深くありたいと云ふ希望が生し來たる、『そこひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀨にこそあだ浪はたて』と云ふ古歌にもあるごとく淺墓な心を持つ者は、人が自分の惡口を言つたと云つては、直きに顏を赤くして怒を現はすのである、人が不公平にしたと云つては、腹の中がムシヤクシヤすると云ふのである、何か不幸に出遇つたと云つては、最う狼狽て取亂すと云ふやうな事になるのである、一角な人物だと思つて居る人が、商業が不景氣になつて損をしたと云つては、宅の妻君に當り散らすのである、餘

程の學者と思ふ人が自分の名譽が上らないと云つては鬱ぎ込むと云ふ、何ぞ夫れ心の淺きや、今申した『そこひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にこそあだ浪はたて』のやうに、何うか私共の心は奥床しい人が覗き込んでも、何れくらゐ其奥があるか分らないやうな、奥深き心の人になりたいと云ふのは私共の希望である。

尙箱根は水の山であつて何所へ行つて堀つても水が出るさうである、駒ケ嶽の絶頂や双子山の絶頂を堀つても、水が出るかは、夫れは私は知らぬけれども其他の場所は何所を堀つても水が出ると云ふ、夫は出る筈だ、蘆の湖以上の所ならば、澤山は出まいが、蘆の湖より低い所であつたならば、確かに堀りさへすれば出るに違ひはないと思ふ、彼れくらゐに湛えられたる源から水を引くのだからして、何ぼでも出て來るに違ひはない、箱根全山に水は漲つて居るのである、その如く何うか私共も極めて心情の細やかなるものになりたいものである、大きな事には愛もあり大きな事には情もあるが、何うも小さな事には頓着しないと云ふやうな、東洋の豪傑にはなりたくない、リンコルンが晴衣を着て

馬に跨つて行きつゝあつても、道端の溝の中に陷つた豚の子は揚げずしては居られないと云ふ、彼の細やかなる心情が得たいのである、傷める葦を折ることなく煙れる麻を熄さゞる所の、イエス、キリストの心情が得たいのである、使徒等が喧しい、子供を叱り付け罵り騒ぐ時に、其幼兒を膝の上に抱いて、天の祝福を求めた所のイエス、キリストの細やかなる心情が私共は學びたいのである、今一ツは箱根七湯を濕して居る所の溫かなる溫泉、如何にも熱くして、水を和めなければ這入る事の出來ない程溫かな溫泉のやうに、私共の心情は溫かにありたいものである、私共が人の家を訪ねた時に、『マア御這入りなさい、何方へお來でなされましたか』と云はるゝと如何にも冷たく感ずるのである、能く入らつしやいました、何うぞ上つて下さいと云つて、引上げらるゝやうにして上ると、其所に火鉢に炎々と熾つた火を持つて來て『さぞ寒かつたでせう、何うぞお暖取なさい』尙其上に熱い茶を汲んで來て『どうぞこれで溫まつて下さい』と云ふ人がある時には、其待遇振が巧者で上手と云ふのではない、其待遇の奥に在る溫かなる情、其が有難い、寡婦の家を訪ねて、共に貰ひ泣をする

溫かな情、子供は不治の病に罹つて居る、其父親は仕事場から歸つても、尙宅の仕事場に坐つて、シク〳〵と泣いて居ると云ふ所に行つて、同情を表する所の溫かな情が欲しいものである。

私はキリストが山の上の說敎に於て敎へなされた敎訓は、此四ツだらうと思つて居る「淸き心」「深き念」「細やかなる情」、更に「溫かなる情」と云ふのである。キリストは確かに此四ツのものを持つて居らつしやつたのである。

今一ツある、それは何であらうか、彼の蘆の湖は箱根山の心である、その蘆の湖が天下の人々に賞せらるゝ所以は、先にお話申した東に駒ケ嶽双子山が聳えて居るからではない、亦西に小山が綿々として連なつて居るからでもない、更に湖水を經てゝ乙女峠があると云からでもない、即ち雲井に高く、得も云はれぬ姿の芙蓉峯が見えるからである、蘆の湖から芙蓉峰を取去つたならば、蘆の湖は殆んど云ふに足らないのである、全く芙蓉峯に對しての蘆の湖である。又私は富士の高嶺に登つて南の方を見下した時に、蘆の湖が云ふに優き姿をして湛えて居るのを認て、如何にも懷かしく思つたのである。殊に諸君、啻蘆の

湖の傍から富士の峰を遙か向方に望むと云ふ丈ではない、雲霽れて綠の空いと清らけき朝、一陣の風だに起らずして、湖水の面は鏡の如く澄める時、彼の富士の峯が湖水の面に逆倒に映る其景色に接した時は地上に居りながら天津世の心地すと云ふ事が云へるだらうと思ふ、凡そ箱根に二三日逗留する積りで行つて御覽なさい、必らず一朝ぐらゐは今お話申したやうな靜かな、清らかなる朝をお迎へなさるだらうと思ふ、其時に富士の嶺が逆倒に湖水に映るのを御覽なされたならば、躍らずしては居られない、現に海老名君が其逆倒富士を見て躍つて私の部屋に飛込んで來て『サア起き給へ、富士が逆倒に映つて居る、見に行かう』と云はれて、引ツ張られて見に行つたくらゐであつた、確かに御互ひの心の內は何が必要であると申しても、まづ神の榮光が我心の湖水に映つて、其所に逆倒富士を見なければならぬ、其所にキリストの面影が映らなければ眞物ではない、其所まで御互ひは爲着けなければならぬ、湖水の面が靜かにして、少しの漣だに打たぬやうになつて、雲が霽れた時に、其清き朝に富士の峰が湖水に映る如く私共の內から情慾の雲霧が取去られ、私共の內から色々の迷の霞

が拂ひ去られて、我心が最とも靜かに澄み切つた時にイエス、キリストを念ずる、其イエス、キリストを念ずる瞬間に天の父の聖顏がイエス、キリストの顏に輝いて、夫れが私共の心に映るのである。セント、フランシスはキリストは十字架を念じて、十字架上のキリストがフランシスの心に映り給ふた、オーゴスチンもキリストの心を映した、セント、ベルナルドもキリストの心を映した、セント、クララも、セント、カザリンも、みんなキリストの心を映した、して見れば私共の心の雲霧が霽れて、我心の湖がいとも靜かになつた瞬間には、キリストの面に在る天の父の榮光が我心に映るに違ひはないのである、私共は其所まで進まなければ、まだ眞物と云ふ事は出來ない。

併し諸君、其キリストの心には常に何が映つて居つたか、彼のゲッセマヂの園に於て三度迄も「父よ此盃を吾よりはなち給へ」と祈られた時は、キリストの心には實に浪が高く打つて居つたのである、漣どころではない、大浪が打つて居つたに違ひはない、けれども我意の儘を爲さんとするに非ず聖意に任せ給へと云ふ、其祈禱と共にキリストの心は全く平靜になつて父の御姿がハッキリ

と映つて來た、間もなく不忠なる弟子イスカリオテのユダが眞先に立て、羅馬の兵士を隨へつゝ攻めて來て、キリストを引ツ縛て、急き立てゝ行てしまつた。それから、ピラトの前に曳出されても、拷問にお遭ひなされても、キリストは靜肅にして、鳩の如く小羊の如くにして居らつしやつた、さうして絕えずキリストの御顏には天の父の榮光が輝いて居つたと云ふ、遂に十字架に懸つて手を貫ぬいて居る釘の所がら血汐が流れて、四苦八苦の苦痛の中に於ても尙ほ『父よ彼等は其爲す所を知らず、願くば彼等に罪を歸し給ふな』とお祈りなされた、キリストの心の湖面には天の父の面影が映つて居たのである、佐倉宗五郎は恨みの數々を言ふたのに、キリストは彼等に罪を歸し給ふな、我を殺す者の罪を免し給へとお祈りなされた、實に其時に愈々天の父がキリストに輝いたのである、彼の使徒行傳中に有名なステバノが石に打殺さるゝ時、イエス、キリストが神の右に立つて居らつしやるのを見たので、ステバノの顏は天の使の如く輝いたと云ふ事である。

今日の私共はキリストの面影を常に望まなければならぬ、キリストの面影を

我心に映さうと務めなければならぬ、何うしたら映るであらうか、キリストの肖像畵を掛けて置いても駄目である、矢張り四福音書を繰返し繰返し讀んで、キリストの御心情を學ばなければならぬ、併しながら墨と紙とで出來て居る聖書を讀んだばかりでは、まだ面影が映らない、孤兒や寡婦を訪ねて行かねばならぬ、さうして其孤兒を可愛がり、寡婦に同情を表する時に、キリストの面影が其所へ映るので、他人の苦痛を我が苦痛にして、他人の爲に溫かなる同情を表する所にキリストの面影が映るのである、基督信者と唱へながら、曾て寡婦を訪ねたこともなく、孤兒を可愛がつた事もなく、他人が病氣をして居ると聞いても、空吹く風のやうに思ふて、一度だに病人の寢床へ見舞に行かない人も信者の內にあるやうだが、恐しい冷たい人もあればあるもの……。或は親戚ならば行くかも知れないか、只の基督信者か病氣に罹つて居るならば同じ信者でありながら一度も訪ねた事はない、又他人の葬式には曾て會葬した事もないと云ふやうな冷たい〳〵人に何うしてキリストの姿が映らうか、キリストの顏に在る天の父の榮光が、何うしてそんな冷たい人に映らうか。金を儲ける事は知

つて居るけれども、金を施す事は知らないと云ふ淺間しい人の心には、決してキリストの顔に在る天の父の榮光など映るものではない、諸君は必らずや自分の心が聖化せん事をお願ひなさるるであらう、私も我心が聖化せん事を切に願ふもので毎日々々キリストを學び、且つキリストを念じて居るが、曾に念ずるばかりではなく、夫れを實行したいと思ふのであるさて愈々御互の心情を聖化せしめたらば、其所から清き思想が出て來る、其所から清き品性が出て來る、其所から清き行狀が出て來る、何としても聖化されなければ清きものは出て來ない事を御自覺なされて、進んで心情の清き者となる事を努めたいと思ふ、夫には何うしても祈禱が必要である諸君が何を差繰つても祈禱の集會には出掛けて來て、さうして兄弟姉妹と共にキリストの面影を學ぶでなければ不可ない、只禮拜說敎に來て私共の口から說敎をお聽きなさるばかりではなく、祈禱會に來つて、共に祈り、共に歌ふて、キリストの御姿を認め、而して各自が密室に於て祈禱を爲し沈思默想をしてキリストの面影を偲び、夫れを現實に行ふたならば、初めて其所にキリストの面影が映ると云ふ事になるであらう、どうか皆

樣まづ第一に心情の聖化されん事をお心懸けなさるやうに幾重にも希望致す次第である。

第十九章　颶風中の聖

時に颶風おこり浪うちこみて殆ど舟に滿イエス艫のかたに枕して寢たりしが弟子かれの目を醒して曰けるは師よ我儕が溺るゝをも顧み給はざる乎

（馬可傳第四章三十七八節）

ガリラヤの湖は南北十三哩東西が七哩地中海の水面に比すれば六百幾十呎の低地にあり、ユダヤ東南の方に、アラビヤの砂漠あり、炎々たる太陽の熱氣に照らさるゝので、非常な暖かい風が茲に起つて北行する。而してガリラヤの北の方にはレバノン山脈アンチレバノン山の山脈が對立してあるので、其山間から非常な冷めたい風が起り、夫が南の方に向つて走るので、丁度ガリラヤの湖の邊で南から來る溫かな風と、北から吹下す冷やかな風と相觸れ、茲に時ならぬ嵐が起るといふことが、タムソンの猶太地理に記載してある。

イエス、キリストとお弟子達は湖の西北の海岸、即ちベッサイダ、カペナウン其他の所で群集が雲の如く押寄て來るので、如何にもして之を救ひたいと

ふところから、師弟總掛で幾日の間か活動されたのである、さる夕方先生も弟子も疲勞が來てもう此上はどうしても暫らく寢んで息を入れなければ、翌日の仕事が出來ないといふ程であつた、湖の此方では四方八方から人々が押寄せ、殆んど夜晝の容赦なくお話を聽くもあれば病氣を治して貰ひたいといふのもある、又我子が狂人になつたからお助けを願ひたいといふのもある、到底お寢みなさることが出來ない、そこで曾て講壇としてお用ゐなされた舟があつたので、弟子も先生も共に其舟に乘り、東の海岸に渡らう、其所は靜かな所だから一寢みせようとにふ企てゞあつたらしい、ペテロヨハヂは勿論其他の弟子達も漁夫の事なれば大抵天氣摸樣は分る筈である、風が吹ふか吹かないか……然るに甚く疲れた爲に綿のやうになり、其頭腦を用ゐる力もなくなつたものと見える、何の辨へもなく先生を乘せて舟を沖へと漕出したら暫くすると大嵐となり小さな湖水がでんぐり返るやうになつて、漁夫出身の弟子達も是では堪らない是では舟が覆る、先生諸共に底の藻屑となるより外に詮術はないと思つて罵り騷いで居つたのである、其大騷ぎの內に先生は連日のお疲勞でもあつたのであ

らう舳の方の少し低くなつた所に身體を横たへて、安らかに寝つて居らつしやつた、外には浪が立騒ぎ、内には弟子達が大騒ぎをして居る中に、先生だけは其浪も其騒ぎも知らずして、安らかに眠つて居られた。

私は先日來井上博士が編纂された『陽明派の哲學』といふ書物を見て居つたところが、今より七十年以前のことであつたらう、天満の與力町に塾を搆へて居られた大鹽平八郎先生が其門人と家來を連れ、年頃日頃お慕ひ申すところの藤樹先生のお屋敷を見たし、一には先生のお墓にも參りたしと思ひ立つて、近江國は小川村の宅へ參つたのである、さて安着して、先生のお屋敷にて先生の手汗の附いた書物だの隨筆だのを拜見し、又お墓にも參り、是で年來の望が達したと思つて、非常なる喜悦に滿たされ、小川村から舟を出して大津の方に歸らんといたした、所が、是も湖水の常として、一天俄に掻曇り比良山嵐が吹き始めた、何うも先生の書いたものを見ると、地が裂けて其所に浪が巻込まれるかと思ふほどに烈しい浪で、四邊は舟といふ舟は一艘も見えない、只自分達の乗つて居る舟ばかり、帆を三尺ほどのところに下してひた走りに走つて居たが、

右に傾くかと思へば左に傾き浪はドシ〳〵舟の中に打込んで來る、弟子も家來も醉ふて狀はない、そのとき賴みにして居る水夫等は『先生實に惡い事を致しました、斯の如き嵐が來やうと測らずして船を出しましたところがこの通りであります、申譯がございません』といふので大鹽先生はアヽ是はもう船が覆へるから此世の望みがないので、覺悟をせいといふことであらうと言外に意味を取られた、其刹那我は豫て良知良能を啓發するてふ修養に志のある身でありながら、是しきの事に罵り騷ぐといふは何たることであるか、伊川先生程川先生の前にも心恥かしいことであると思つて、今まで臥て居つた先生は忽ちに起上り、固く座を決めたといふのである、さうして誠敬を存すると云ふ古人の句を思ひ出し、船の將さに覆へらむとする中に大修養を始めて氣張つた見たのである、さうすると恰も伊川程川の兩先生の眼前に手を突いて居るが如き心持になつて、所謂泰然不動の境に這入つた、泰然不動の境に這入ると間もなく風が凪ぎて、海の面は油を流すが如くなつたといふことである。

是と彼とは到底比べ物にはならないのであるが、今より十數年前に私が九州

からの歸りに多度津沖で大暴風に出遭つた、船は二百噸か二百五十噸ぐらいな小蒸滊であつたが、方十五疊敷位の船室の中に數名の船客が集つて居つた、二人も掛らなければ持てないやうな大火鉢が船室の中央に置いてあつた、其が右に轉げ左に轉げ、船客は柱か何かに摑み附いて居なければ、右に在るかと思へば忽焉として左に在りといふやうな譯で、大搖られに搖られたのである、其時私は斯ういふ場合に浪と風とに負けては濟まないと思つて、ムツクと起き、船室の中央に正座して、右に左に搖られながら引力の中心を取り馬に乘つたやうな心持で居つたのである、間もなく船は島影に這入つたので靜かになつたことを思ひ出す次第である、諸君、修養は座上の空論では不可ない、湖水に於いて船の覆へるばかりの嵐に出遭ふことは人生あるかないか分らないのである、生涯船に乘らない人もあらう、船に乘らない人は船の難を實驗することはないであらう、けれども我々人類は浮世の荒浪を渡つて居るものであるからして、海の難は免るゝことが出來ても、浮世の難だけは何人も免るゝことが出來ない、大なり小なり私共には大風大嵐が打つて來ないとは限らない、其大嵐に出遭つ

たときに果して之に堪え得るか、果して其大浪を凌ぐことが出來るかといふのが、今日皆樣と共に考へて見たい問題である、大鹽先生は海の難に出遭はれたときには固く座して、誠敬の二字を存したといふのは實に意志の修養である、けれども船床に座つて大氣張に氣張つて居られたので、其記事を讀んでさへも肩が凝る思ひがいたすのである、自分が正座したときの實驗を思ひだしても肩が凝るやうな思ひするのである、海の難は船が覆へつたらばイザ知らず、未だ覆へらない間であるならば、兎も角もして忍ぶことが出來ようが、人生の荒浪は何うも只座つて居ても夫で凌げるものではない、只大氣張に氣張つて居ても夫で凌げるものではない、其大風の中に外には浪、內には弟子方が罵り騷ぐ中央に悠然として眠つて居られた主イエスを學びたいものである、何うして主イエスは斯る場合に於いて安らかに眠ることがお出來なされたであらうか、旅の疲勞とはいふものゝ疲勞にも程がある、睡眠にも程がある、其大騷ぎの中になか〳〵眠られたものではない、其中にお眠りなされたといふのは、キリスト、イエスの心の中は全く天の父に身も魂もお任せなされて、母が其嬰兒を育つる

如く、天の父上が我を守り給ふといふ肝腎なる信仰、此世の總てを越えてお任せなさるゝといふ奥深き信仰が存して居つたといふ外に私は言ひやうがないと思ふのである、大鹽中齋は良知良能を發揮するといふ修業でウンと氣張つたのである、肩が凝るほどに脂汗が流がるゝ程に氣張つたのである、主イエスは幼兒が母の乳房に縋つて眠るが如く、眞個に天の父の懐中に安らかにお眠りなされた、到底比べ物にはならない、氣張つて過すのは私共もエライこととは思ふけれども眠つて過すといふ安心の態度には比べ物にはならない、パウロが地中海に於いて難船に出遭つたときの實驗は、使徒行傳廿七章に書いてあるが、其の態度は如何にも立派であつた、船長も水夫も同乘者も皆パウロの命の儘に動くやうになつたところを考へて見ると、彼の心の中には浪をも風をも超脫して、天の父に全くお任せ申すといふ、立派な安心が存して居つたのであらう、又船長も水夫も同乘者も其態度を見たときには、ア、此の人がこの船に居れば大丈夫と思ふ、皆安心を得たやうに書いてある、使徒パウロは嘗に地中海に於いて難破船の實驗を嘗めたばかりぢやない、哥林多書を讀んで見ると、內には敎會

の苦痛あり、外にはキリストに敵對する者あり、夜となく、晝となく頭腦を休むることも出來ないといふやうに慘憺たる苦心であつた、けれどもアバ父と呼ぶ子たるものゝ靈を以て全く任せて居られた、其信仰はいかにも麗はしいものであつた。

某新聞に左の記事があつた、丁度亞米利加の東の海岸で難破船があつて幾十名の船客は皆海中に落てしまつたのである、尤も海岸に近いので、暫らく泳いで居れば助船も來ようといふ希望もあつたので各々申し合せた如くに元氣よく海上に泳いで居つたといふ、ところが一人見えなくなり二人見えなくなり、追々浪の上の黒い頭は波間に沒じ去るのでいかにも心細いことであつた、時に一組の夫婦が空氣枕を相擁して、聲高らかに「ちとせの巖よ我身を圍め」といふ歌を謳ひ始めた、今や力盡きて海の中に沈み掛けて居つた人の頭が再び彼方此方に見えるやうになつて來た、其途端に助船は力を限りに走り來つて皆救はれたと云ふ事である。私は此記事を讀んだときに船が既に覆へらんとするのぢやない、既に覆へつたのだ、もう海の中に落込んだのだ、船客の影は見えなくな

る、其瞬間に「ちとせの巖よ我身を圍め」といふ歌を夫婦の者が聲高らかに謳ふといふことは何うして出來るか、命の惜い人では出來ない、家に殘して置いた子供の事が氣遣はるゝやうな人では出來ない、此世の寶に心を寄するやうな人では出來ない、此世の寶をも我愛子をも天の父の手に委ね奉り、父の聖意に頼りさへすれば萬事善きやうにして賜はるといふ單純なる信仰が心の內に燃えて居ればこそ、臨終の際になつて少しも怯びれた有樣も見えず、「ちとせの巖よ我身を圍め」といふ歌を謳ふて己れ夫婦が助かるのみならず、幾多の同乘者に元氣を付けて皆悉く助かつたのである、是れは非常なる美事ではなからうか、颶風の中の聖は未だ船が覆へらないときに、艙の方に枕して安らかに眠ることの出來た方である、其船が覆へつたならば颶風の中の聖は、矢張り少しも臆することなく恐るゝことなくして、弟子方をお助けなさるゝことの出來た方であつたらうと思ふ、何となれば二千年の今日主イエスを信ずるところの人でさへも、臨終の際に右の如き歌を謳ふて、安心して此世を去らんとする勢ひを示すのである。

して見ると諸君、修養によつて氣張るだけは氣張りもするが、もう一つ夫では物足らないのである、家庭の內に於て荒浪の卷起り來るときに、或は妻が離緣を申立てたといふときに、或は子供等の玉の緒が將さに消えなんとするときに、身代が將に覆へらんとし、自分は病んで將に死なんとするやうな塲合が迫り來つたときに、修養といふことで果して艙の方に枕して泰然として眠つて居ることが出來るか何うか、是は誠敬の二字を存して、勢ひを以て氣張ることは氣張りもせう、けれども心の中には何だか苦しい、息も消えなんとするばかりの苦慘があらうと思ふ、大鹽中齋も其船の覆へらんとする塲合に、肱を枕にして安らかに眠るといふところの安心の佳境までは這入ることが出來なかつたのである、主イエスが到底自力だけで其所までは行かれない、人間が何ぼ修養をして見ても其の修養には限りがあつて、到底其所までは行かれないことを知り給へばこそ只天の父に任せ、只天の父を信じて、其懷中に這入ることに依つて誠の安心が得らるゝといふ、其趣きある修業の塲をお啓きになつたものである。私共もいつ何時難破船に遭ふことがあるかも知れない、若し海の上の難は免

れても、家の内の難、家の外の難は免れないのであるからして其難に遭はない間に、浮世の浪風が未だ凄まじく吹かない先きに、どうか皆様と共にキリストに依つて天の父に通じ、キリストを經て天の父の御懐中に這入り、名譽も位も金も我家族をも棄てなければならない場合が來るならば、父よ御手に任せ奉るといふことに依つて外には死出の浪が寄打せて來ても、心の中には幼兒が母の乳房に縋つて安らかに眠が如き、安心の境に這入りたいものである、夫れが宗教の極意である夫れがキリストの宗教の極意である、其所を握らなければ、只修養といふだけでは甚だ覺束ないものである。寧ろ修養を口にせずとも、私共は單純にして幽玄なる信仰を得てキリスト、イエスの御手に守られつゝ、天の父の御傍に行くことの出來るやうな生涯に這入りたいものである、どうぞ颶風中の聖、大風大浪の中に於ける聖をお學びになつて、何時でも艄の方に枕して、困難の中に眠ることの出來るやうに誠の信仰をお養ひなさらんことを希望いたす次第である。

第二十章　超脫の妙境

爾もし娶るとも罪を犯すに非ず處女もし嫁するとも罪を犯すに非ず然ど此の如き者はその身難に遭ん我爾曹かして煩はしむるに忍びず、兄弟よ我これを言ん今より後の時は逼れり蓋妻を有る者は有ざるが如く、哭ものは哭ざるが如く喜ぶ者は喜ばざるが如く買ものは有ざるが如く、この世を用る者は用ざるが如くすべき爲なり夫この世の形狀は過逝なり

（哥林多前書第七章二十八節至三十一節）

近頃東京を始めとして、彼方此方禪學が大分流行で私共の目から見れば、極めて慾ッぱい人と思つて居る連中が、頻りに何某々々といふやうな名僧の許に參禪して、禪味を味ふて居るといふ事である、『禪の妙味』とか『默雷禪話』といふやうな書物がチラホラと現はれ出たといふのも、矢張り禪學が多少世に持囃るゝに至つた證據である、凡そ時勢といふものは時計の振のやうなもので、一方の端から他方の端に行く傾きがあつて、御維新以來今日に至るまで、世の人々は物質的の文明に醉ひ、何でも壯麗な家に住はねばならぬ、何でも流行の

衣服を着ねばならぬ、何でも美味い物を喰はねばならぬといふやうな事になつて、肉體の慾を充すのには金が必要、過る四十年の間といふものは一にも金、二にも金、三にも金、四にも金と云つて、只金を趁ふて走つたのである、成程日本は貧乏國であつたが、四十年の間一心不亂に金を趁ふて走つた結果として、大分富有となつたことは喜ふべき次第である。

さて何拾萬何百萬と金が出來て見れば、金樓玉殿も出來るし、百味の飮食も喰へるし、錦の衣服も着る事が出來る、貧乏な時に是れ〳〵の物を得たならば、嘸かし樂しからんと夢みて、さて得て見れば余り樂しくないので、丁度魚島が來らば、壹圓貳圓の金を放り出して、充分に油切つたる鯛を喰べて見ようと思つて待構へて居つた、さて魚島となつて、初めの一尾二尾は如何にも美味く喰ふたが、毎日々々油切つた鯛の刺身、鯛の眼球汁、鯛の鹽燒と來ては、何うもお茶漬が欲しいといふ事になる、漬物でお茶漬が欲しいといふ、當今禪坊主の許に行つて禪學をやるといふ人々は、何かなしに淡泊としたお茶漬が欲しいといふ連中であつて、お寺の掃清められた方丈の中で、玉露でも煎じて夫れを飮

ませて貰つて、其所で自分が仰ぐ所の名僧智識から禪の講義を聽聞すると、氣がスートするといふくらゐな連中ではあるまいかと思ふ、山岡鐵舟は明治時代に於ける禪學の大家であつたが翁が私の友人に向つて『何うも此頃禪學をやりたいといふ人があるけれども、みな根氣が惡い、直きに逃げてしまふ、眞個に禪學の妙味を知らうと思へば、二十五年は費さなければならない』と申されたといふ、今日の根氣のない人々は二十五年は愚か、其五分の一の五年さへも辛抱が出來ないだらうと思ふ、お茶漬が喰ひたいといふ金持連中に至つては、五年は愚か一年が何うであらうかと思ふ程である。

私は友人から『峨山和尙の逸話』といふ小さな本を貰つた、夫れを開いて見ると、大阪邊の裁判官や實業家が峨山の許に往つて、峨山和尙に叱られた話だの、諭された話だのが書いてある、其の逸話の中に現はれて居る裁判官や實業家の中に、果して禪の味ひを得たものがあるかと思つて氣を注けて見ると、トンとない、詰り何所かに別莊を拵へて商賣を廢めて隱居したといふくらゐが落ちである、辯護士などの內にも禪をやつたといふ人がある、其禪をやつたとい

ふ人に會ふて、膝突合せて話をして見たところが、初めはなか〳〵宜かつたのだ、夫れで私も思ひ込んで一ッ烈しく突込んで見たところが『イヤもう何うも私などは借金で〳〵、首も廻らぬ不幸で、こんな大きな玄關構へをして居るのではないけれども、小さい所に引込めば、いよ〳〵不可なくなつたといふので債權者の鬼が攻めて來るから夫れで大きな玄關を張つて居るものゝ、實に火の車でござります』といふ懺悔話し……懺悔をするのは禪學を味ふて悟つた結果かと思へば氣の毒にもなつて來るし、禪の話をしようと思つて訪ねた私は、禪でなくして借金の話を聞かされて、這々の體で歸つて來たといふやうな譯である。

斯くの如く禪學を味はうたといふ人ばかりでは決してあるまい、或は私の目に觸れた所のものは野狐禪といふ方の側、即ち詰らない禪であつたらうと思ふけれども、實際の禪には未だ出會はないのである、只私が今日に方つて、其禪を學びたいといふ人の心の底、即ち和尚の許に行つて、お茶漬でも喰べて見たいといふ人の心の底を考へる時に方つては、何だかいぢらしいような、何だか

可哀さうなやうな心持がするのである、過日友人を訪ねたれば、其の友人は不在であつた、其人の夫人が出で参つて『お隣りの奥さんの妹がありまするが、何所ぞへお嫁に行きたいそうで、何所ぞ良い所はありますまいか』といふ話であつた、顔を見るなりにさういふ話を持掛られた、サア何とも挨拶が出來ない、どんな人ですかと聞いたらば『東京において名ある某の女學校を卒業した人で、去る所に嫁いで居りましたが、少し都合があつて今は姉さんの宅に歸つて居らつしやるそうで、其人は肺病患者の所にでも構はない行きたい、假令一日でも幸福な日が送つて見たいといふことであります』とのことである、私は其主人が死んだのか、或は離緣になつたのか、其所は聞漏したのであるが、蓋しこれまで嫁いで居つた所で酷い目に遭はされたのであらうと思はれる、是れは獨り其の婦人ばかりではあるまい、世の中には斯の如き不幸なる事に出遭つて、只の一日でも幸多き日を送つて見たいと願ふ者は、尠なからずあるだらうと思ふ、多少青表紙でも讀んだ者は座禪とか何とかをする、けれども御婦人方や娘さんの間において、假令此の世の中を悲しき辛き浮世なりと觀じて見ても、座禪と

いふ譯にも參るまい、只心の底において一日にても幸ひなる日を送りたいと希望さるゝお方が、尠なからずあるに違ひはない。

そこで私は考へた、基督の教へには禪學に妙味があると人々がいふ如く、左樣な妙味はあるまいか……又は禪學以上の味ひが基督教にはあるまいか、あらば之れを我も得たし、他人にも得させたいものである、そこで佛の教にいふところの解脫とか悟とかいふものは何であらうかと考へて見たのである、詰り我も無く心も無いといふ、無我無心の境に入るといふ意味だらうと思つて見た、恰ど机の上に『佛の聖典』といふ書物があつたから、其の書物を開けて見たところが、此樣な言葉が幾らもあることを見出した『正に黄金の山の如きものありて一人にして之を得るとも亦足るを知らざらん此故に智惠ある者は金も石も同一に感ず』ヒマラヤ山ほとの黄金があつて、それを一人で我物にしてもまだ足らないと思ふのが人間の常である、故に智惠のある人は金も石も同じやうに見てしまふ、其次に『諸々の苦惱を逭れんと欲せば足るを知るを感ずべし、足るを知るの法は即ち是れ富み樂しく安らかなる所なり』慾を少なくしてこれで

滿足と考へなければならぬ『足るを知るの人は地の上に伏すと雖も尙安樂なり、足るを知らぬ人は天の上に住ひすと雖も眞心に叶はず』などゝあるが、結局煎じ詰めた所は何かと云へば、慾があるからして、此の世の中は迷ひの雲霧が掩ふて、自ら苦むのである、其慾を少なくするか、慾を斷切つてしまへば此の世の中は樂しくなるといふのである、併し禪學の妙味は是れ以上に存するだらうと思ふ、慾を少なくする、慾を減ずるといふ丈では消極的だ、マア一歩進んで天地を我心としてしまふといふ妙境に這入るといふのではあるまいふと思つて居る、けれども私は學んだことがないからしていふことが出來ない、マアそんなことであらうと推測するに過ぎない、そこで基督敎の解脫は何所であらうか、基督敎の悟は何所であらうかと調べて見たが、基督敎の悟には消極と積極の二がある、消極の悟といふ方は佛の悟と同じことである、慾を少なくすれば宜い、慾を斷切れば宜いといふとに歸する、無我無心の境に這入るとは云はないけれども、慾を滅ずといふ點に至つては同じやうになつて居る、二三の例を擧げると、約翰第一書二章の十七節に、ヨハネといふお弟子が斯く申して居る『この

世と其慾とは逝るものにて神の旨を行ふ者は永遠存るなり』と此の世の中とその慾は水の如く過去つてしまふ、過去るものだからして、夫れに心を寄せるなといふのである、彼得前書に『愛する者よ我爾曹に勸む爾曹は寓旅また寄寓者なれば靈魂に逆ひて戰ふ肉の慾を去べし』と錄してある、我々は此の世の中に丁度寄留して居るやうなもの、旅客のやうにして此の世の中を送るものである、それで此の世の中の慾には心を寄するな、即ち慾を少なくせよ、慾を滅ぼせよといふ意味である。

諸君、是れが悟であり、是れが脫俗の妙境であるとしたならば、基督敎を强て學ぶの必要もなければ、又强て味はふの必要もない、佛の敎で結構である、佛の敎でなくても孔子の敎で結構だ、孔子の敎でなくても黑住の敎でも結構だ、何れの敎を尋ねて見ても慾を逞ふせよ、慾を盛んに養ひ立てよといふことは云はない、人間には慾があるからして詰らないことになる、慾を減らせ慾を斷切れといふことを敎ふるのである、基督敎に於いての悟、基督敎に於いての超然の妙境と云ふのは、寧ろ積極的の方にあらうかと思ふ、尤も悟といふのは、御

互ひの魂が悟に這入るのである、併しながら只魂とのみ申しては、少し合點が行き難いのである、夫れで私は學者の風習に從つて、第一には情の上に於いての超脫を考へて見たい、私共には七つの情がある、悲んだり苦しんだり、樂んだり、憎んだり、嫉んだり、妬んだり、怒つたり、色々樣々なる情があつて、其情が我內に麻の如くに掻亂さるゝが故に、遂に迷ひ迷ふて靑息を吐く者もあれば、黃なる聲を振立てゝ叫ぶ者も出來るやうなことになるのである、又親に別れ子に別れ、妻に別れ良人に別れ、我杖柱と賴むところの先輩に別れなぞ致して、心苦しいことがある、中には學科の試驗に落第して、眞に身の置所なしと心狹く思ふ者もある、斯くの如く何うしたならば其情を脫して、如何なる雲霧深く閉す時においても超然として居ることが出來るかといふのが是れ私共の大いに味ふべき問題ではあるまいかと思ふ。

諸君、是れはキリストが溫かなる心を以て世に現らはれ、溫かなる手を伸して私共にお示しになつた其の聖語と其の聖語の奧に潛んで居るところのキリストの溫かなる心を味ひさへすれば、確かに解脫することが出來る、馬太傳の十

一章の二十八節以下に『重を負る者勞れたる者は我に來れ我爾曹を息ません』といふ語は即ち夫れである、約翰傳十二章の三十二節に『我もし地より擧れなば萬民を引て我に就せん』とお叫びになつたのは即ち夫れである、キリストが溫かなる心よりして溫かなる手を伸し、四苦八苦の苦悶をして居る人間を摑んで上へ引出して……引上げて下されるといふに外ならない、ポーロがアヽ我惱めるものなるかなと叫んだ時に、鮮血桶の中に足を突込んで、地團太踏めば地團太踏むほど深く這入つて行つて、這るべき途がなかつた時に、我を救はん者は誰ぞや主イエス、キリストなるが故に神に感謝すと云つた即ち、キリストが愛の溫かなる手を伸してポーロをグッと引揚げて下さつた、その時からポーロは悟の妙境に這入つた、羅馬書八章の十五節以下に『復び懼を懷く靈に非ずアバ父とよぶ子たる者の靈なり』と叫ばれたのは情の解脫である、私共も情慾の雲霧に掩はれて、如何にするも晴れず、晴天白日を見ようとしても見ることが出來ずして非常に苦んだことがある、けれどもキリストを慕ひ、キリストに依つて天の父に寄縋ることを學んで、我心が引揚げられたと思つた瞬間に其我を惱した

情、我を苦めたところの煩悶は取去られて、我ながら斯くも晴々とした所に引揚げられたかと思つた時には、眞に愉快を覺えて、跳り立つばかりの心持になつたことを覺えて居る、或はもう眞に多くの苦みに出遭つて、立も這も出來ない場合には、祈禱をしようと思つても祈禱の言葉さへ出でない、我主よ〳〵我を助け給へといふ、其の助け給へといふ聲は出ない、只出るところのものは我主よ〳〵といふ聲、けれども我主イエス、キリストの溫かなる心を目懸けて、其溫かなる手に引張らるゝといふときに、我愛するものがなくなつても、我慕ふものが手に入らなくても、我心はキリストの御膝の許に在つて、矢張り喜悅と慰安に滿たされて居るといふことは、是れ實にエライものである、ペボーロが羅馬書の十四章の十七節に『神の國は飮食に非ず惟義と和と聖靈に由る歡樂にあり』と叫ばれたのは則ち其の意味であらう、ペテロが前書の一章の八節に『爾曹イエスを見ざれども之を愛し今見ずといへども信じて喜ぶ其快樂は言がたく且榮光あり』といふに至つては、最早首を打たるゝやうなことになつても磔刑に會ふやうなことになつても、超然として悅樂を保つことが出來る、ステ

パノが石にて打たるゝ時に、其顔が笑に滿たされて天の使の顔の如く輝いて居つたといふのは何か、即ち打消すことの出來ない、奪ふことの出來ない一種の快樂が充溢れて居つたといふことである、禪學果して斯の如き善悦を人を與ふることが出來るか、禪學果して斯の如き平安を人に與ふることが出來るか、これは世の中の常と云つて諦めることは出來よう、浮世の習ひと云つて諦めることは出來よう、けれども心に跳立つばかりの喜悦を以て、超然として世の中の情念に打勝つことは困難であらうと思ふ。

去りながら諸君、情の解脫だけをした人間ならば、一時跳立つばかりの喜悦があつても、其情は冷めることがある、冷めて見たらば狐に撮まれたやうな工合で、何うも昨日は跳立つばかりの喜悦に滿ちて居つた、昨年の今頃は無上の喜悦に滿ちて居つたが、今の我は又悲しき境に陷つたと夢かとばかりに思ふて、現在の我れは悲しい苦しい思ひをして居る者がある、そこで其の次には思想上の超脫をせねばならぬ、思想上の超脫が非常に必要である、夫れは何であるか極く易いやうに申せば、此頃は高島屋に夏物を賣出した、高麗橋の三越に夏物

を賣出した、行つて見たいものである、お朋友の誰某が見に入らつしやつたが、なか〳〵立派な目の覺むるやうなものがあるさうなと言つて、明ても暮ても高島屋三越と斯う思つて居らつしやる、又は我の朋友誰某は此頃は統監府に用ゐられて、日本に居る時とならば月給が二倍ほどになつて居る、日當も餘程割が宜いさうなと考へて居る、イヤ自分の朋友誰某は株式に手を出して居つたが、巧く當つて萬金を掴へたといふやうに、明ても暮ても左ういふことばかりを考へて居るやうな人間であつたならば、一時キリストの恩寵に依つて喜悦に滿されたと云つても直きに夫れは消えてしまふのであるけれども、私共は思想上に於いて、或は舊約聖書の約百記を繙いて彼の大傑作の內に含まれてある眞理を味ひ、詩篇を開いては彼の詩人が天の高く且つ大いなるところを見て、只此の人間の詰らないものを何故神がお愛しなさるだらうといふやうな考へを起して思ひを天外に馳するところなどを讀んで見たり、或は新約の內の彼所がキリストのお示しなされたるところだといふので、其高く且つ大いなる思想を我衷に養ふて來るのである、さうして目に見えない世界が目に見えるやうになつて來る、

目に見えない神が目に見えるやうになつて來る、其神を常に見、目に見えない世界が現に茲にある如く感ぜらるゝやうになれば、いかに罷り違つても詰らない所に出入をするとか、喜悦がなくなつたからと云つて女郎屋に出入をするといふやうな、そんな詰らないことが出來るであらうか、もう世の中の詰らないとや何ぞに心を取られるといふやうなことはないだらうと思ふ、日々車を引いて稼いで居つても、日々銀行に通ふて居つても、日々店に座つて、來るところのお客樣にヘイコラ〳〵云つて頭を低げて居つても、其の心の內には非常に大きな思想の世界が見えて居りさへしたならば、心が穩かである、心が穩かであるならば、其人は確かに誰が來て無禮を加へても、人が唾を掛けても夫れくらゐなことで怒つたり、喧嘩をしたりすることはしないといふ境に這入ることが出來る、もう一ツの解脫は意志の上に存することである、是れが六ツかしい、是れは惡い事をしないといふ丈の解脫なら直きに出來るけれども慾に負けない惡い事をしないといふくらゐな解脫ではまだ妙境に達したとは云へない、妙境に達したといふ時は即ち孔夫子が『從心所欲不踰矩』とお叫びになつたところ、

キリストは『懼るゝ勿れ我既に世に勝てり』とお叫びになつたところである、其の意味は善をなさうと思へば善がなせる、義を行ふと思へば義が行へる、即ち起居振舞總て思ふこと爲すこと悉く神の御教に叶ふやうになつた時が、意思の上へに於いての超越を得たところである、けれども是れは三十年五十年の修養を經て、初めて其所へ行くべきものであらうと思ふ、ボロロも羅馬書の七章を見ると、意志の解脫を得て居らぬのである、羅馬書八章に於いてポーロは ヤヽ解脫を得たかの如く見える、斯くの如く我々の情と我々の思ひと我々の意の三が揃つて解脫をした時が、即ち心の解脫をしたのである、其心の解脫といふは積極的に我内に溫かなるキリストに觸れたといふ、キリストの溫かなる心に引かれて、さうしてキリストに憬れて、思はず知らずキリストの思ひを我思ひとするやうになり、キリストの心を我心とするやうになつて、我思ひと天の思ひとが一になり、我意と天の意とが一になつて來た時には、初めて超脫の妙境に達したといふ時であらう、昔から今日に至るまで其の妙境に達したといふ人は余り澤山はなかつたらうと思ふ、若し其の妙境に到達しないでも、其の

妙境にあるところの思ひに進みたいといふ一念になつて、諸君が日々〳〵時々刻々に思ひを其所に寄せて御修養されたならば、確かに如何なる困難が打つて來ても、如何に煩悶すべきことが出來ても、私共の心は超然として、毎も平和を保ち、毎も喜悦を保つことが出來ると思ふ。

それで今日の我々キリスト信者が何うも時に不平をいふたり、時にブツ〳〵いふて見たり、誰某が教會に居つたけれども物をいふて呉れなかつたとか、自分の家を誰が訪ねて呉れないとか、或は病氣になつたけれども誰も慰めて呉れなかつたとかいふ、併し夫れは情の一部に於いて多少滿足を得たいといふ希望を現はして居るけれどもマア一ツ進んで思想の世界に這入り、マア一ツ進んで善を行ひ義を行ふて、世のため人の爲にしたいといふ意の超脫を圖らないものだからして、そんな山の麓なる雲霧の中へ頭を突込んで、下らないことばかりをいふて居るのである、若し人が見舞ふて呉れなくても、慰めて呉れなくても、物をいふて呉れなくても、我はキリストと共に語り、我はキリストの朋友であるといふ、所謂洒々落々光風霽月のやうな思ひを以て、此世に活きて居ること

が出來るだらうと思ふ、マア少し我々はサッパリとした人間になりたい、シッコイ〳〵人間ぢやア不可ない、私共がキリストに依つて積極的の道路を開いたならば、人が何うだとか斯うだとかこの世の中の物が欲しいとかいふやうなことには頓着をせずして、その道路を辿つて行くことが出來る、イヤ誰某が當世流行の衣服を着て居る、彼れを自分も着たいなと思ふことがあるが、そんなことは何うでも宜い、素裸體で居る譯には行かないから、夏は涼しいやうに、冬は溫いやうに、親や朋友などが余り心配をしないやうな衣服を着て居れば宜い、余り穢い扮裝をすると親兄弟に恥を掻かせ朋友や何ぞに擯斥される、食物は生きる爲に喰ふといふぐらゐなところが宜からうと思ふ、汝は馬鹿だと人が云つたら、馬鹿で結構でござる、今に賢くならうと思つて修業をいたして居りますと、云つて置けはそれで宜い汝は意久地なしだと人が云つたら、意久地なしでござる、意久地有りになりたいと思つて居るけれども稟性だから仕方がないが、マア折角の修業で何時かは意久地有りになれませうといふやうに、馬耳東風に聞き流して置いて、さて己が目指すところに進んで行くならば、初めに自分を馬

鹿にしたところの者も終には我と共にその妙境に這入りたいといふことになつて來るだらうと思ふ、どうぞ諸君と共に今少しく超脫の人間になつて、さうしてどんな詰らない仕事でも、どんな境遇にでも滿足をして、神と人との爲に盡すといふところに私共は上りたいと思ふのである。

第二十一章　此世ならざる快感

ペテロ答てイエスに曰けるはラビ我儕こゝに居は善わられに三の廬を建せ給へ一は主のため一はモーセのため一はエリヤのためにせん　（馬可傳第九章五節）

此頃世の中は決して極樂でないと云ふ事が染々と分つて參つたやうな事である、一面から觀察をすれば極樂の如き所もある、一面から觀察をすれば地獄の如き所もある、極樂のやうな所を見ては樂觀し、地獄のやうな所を見ては悲觀するのが人生であらうと思つて居る、樂觀するとか悲觀するとかいふ事は是は哲學者の言分として見ても、實際何れの方面に顏を向けても、何だか上から頭を押へ付けらるゝやうな事が多くして、恰も陰雲濛々たる、五月雨の時候に出會つたやうな心地もする、第一に人間が此世の中に立たうすれば、修養をしなくちやアならぬ、修業をしなくちやアならぬ、其修養又は修業といふものは何を意味するかと申せば苦痛である、確かに苦痛である、只智識的の事にしても、青年が試驗前に餓鬼のやうに痩衰へるのを見れば苦痛といふ事が分るのである、

私が熊本洋學校の三年の課業を終へた時であつた、學友十二三名と共に寫眞を取た事がある、其寫眞を出して見ると、紅顏の美少年であるべき筈の青年が、頰の邊が削つたやうに落ち、單衣物を着て居るが、恰も衣に堪へざるが如く痩せ丸で骨と皮のやうである、其寫眞を見ると洋學校に於ける私共の辛酸の狀態が坐ろ察せらるゝのである、若し夫れ靈の修業となつて來れば、神學校を終へて牧師傳道師の生涯に這入つた者が三三年の間は色青褪めて、氣息奄々として如何にも衰へたる狀を現はして居る、靈の修業も亦一種の苦痛である事を意味するのである、一人の赤門派の青年が傳道界に身を投じて、未だ一年經つか經たざるに顏色憔悴の狀を呈して居るのを見て、彼れ丈の素養があり彼れ丈の修養を積んだ人でさへも、斯くまで色青褪めて居らなければならぬかと思ふ時には、靈の修養も亦難いかなといふ感が自然に浮び來るのである。

さて準備の時代は過去つて、いよ〳〵家を持つといふ事になれば、理想の家庭を描いたのは少壯時代の夢であつて、實際妻を迎へて見れば其妻が理想の人でなくして、或は覺めて泣き或は寢て泣き、多年の間淚を以て其妻を薰陶敎育

をしなければ、眞個に我理想に近い妻たるを得ないといふ事を考へ來る時に、是又非常な苦痛を意味する事である、又女が人の妻となつて見れば描いた理想は一も行はれず書物さへ手に觸れる事が出來ず、舅姑に牛馬の如く追使はれ、小姑に折磨らるゝといふやうな事を經て、初めて妻となり初めて母となるといふ事を考へ來れば是又苦痛を意味するのである、さて又何か事業を一ッやりたいと思つて事業に手を出せば、運命で樂な成功をしたと云つても其成功や苦痛を意味するのである、若し夫れ運拙くして失敗に失敗を重ぬるといふ時には、未だ三十ならずして人には貴方は四十五であるかと問はれたり、未だ四十ならずして貴方は五十にも見えると人人に指さゝるゝといふ事は、是れ何を意味するであらうか、イエス、キリストが猶太人に向つて「我はアブラハムの日を見たり」と仰せられた、猶太人は爾いまだ五十にもならざるにアブラハムを見しや」と言つた事が約翰傳の八章の終りに記してあるが、イエスの如き大人格でも救世の事業をなし遂げんが爲には實に苦痛困難をなされた爲に、三十ソコソコで五十とまで見られ給ふた事を思ひ來る時に、成功しても事業は苦痛である

が、失敗をすれば尙更の苦痛であるといふことを信じてをる、是が人生である是は能く行つた時の……先づ〳〵割合に能く行つた時の人生である、中には學業未だ半ばならずして不治の病に罹つて、大なる志を齎して病床の上に呻吟しなければならない人もある、偶然名譽の卒業證書を擔ふて赤門を出たかと思へば、其志をなすに暇あらずして、遂に父母の希望を空しくして永き別れをしなければならぬ者もある、偶然嫁に行つた我娘から孫が生れたといふ吉報に接したかと思へば、產褥熱の爲に遂に斃れたといふ凶報も續いて來るといふ事もある、人生は何が何やら思ひ來れば悲痛慘憺たるものである、併しながら是が人生であるが故に、俗に丁稚や下女等に數入といふ事があつて、是は彼の人々に取ては此上なき喜悅の日であらう、舅姑に仕へ小姑に折磨らるゝころの嫁に里返りといふのがある、此里返りは實に新夫人に取ては此上なき喜悅の日であらうと思ふ、又頰の肉も落ち骨も削らるる程の勉學をしなければ一人前の人間に成られないといふ學生に取つては歸省といふ事がある。暑中休暇の歸省といふ事があるが、是は學生に取つては實にいふべからざる喜悅の日であらうと思

ふのである。

諸君、キリストイエスの御生涯にも數入があつたのである、里返りがあつたのである、否キリストイエスの御生涯には歸省があつたのである、一度ヨルダン河の邊に於てバプテスマのヨハネに洗禮を領し給ふて以來、四十日四十夜の野原に於ける試みは戰ひの初めであつて、引續いて親戚朋友は彼れ狂せりとしてキリストを捕へに來た時には、キリストは親戚朋友と已むを得ず戰ひ給はなければならぬ事になり、竹馬の友でありしところの彼のナザレの青年輩がイエスを崖から突落さうとして押寄せ來た時には、竹馬の友に餘儀なく戰ひ給はなければならないやうな事になつたのである、時には味方と戰ひ時には敵とお戰ひなされて、其戰ひが止んだと思へば、人々は主よ〳〵と云つて押寄せて來て、食事をなさるゝ暇さへなかつたといふのではないか、實にキリストの生涯ほど苦痛多き戰ひ多き生涯はなかつたであらうと思ふ事である、故にイエス、キリストも數入なしには、里返りなしには此苦痛多き人生を、何うしてもお過ごしなさるゝ事が出來なかつたゞろうと思ふ、所謂歸省なるものは、過去の苦

勞を慰むるといふ事と、共に將來の苦痛將來の奮闘に堪え得べき餘裕を造るといふ意味である、ペテロ、ヨハヂ、ヤコブの三高弟を引連れて、未明より山登りをお始めになつて、太陽が將に地中海の上に沒し去らんとする頃に漸く九千尺の絶頂に登り着いて、夫からイエス、キリストが天の父と交はり、舊約聖書の代表者である法律のモーセ預言のエリヤ、此二人と共にお話しをなされたといふ事が此所に書いてあつて、此天の父とお交はりなされたる結果、イエスの顔は雪の如く白く輝き、其衣は布晒の晒した布よりも白く輝いたと書いてあるが、是れはイエス、キリストが天父の許に里返りをなされて天父とお交はりなされたる結果、キリストの御顔に靈の喜悦が輝いたといふ事に外ならぬのである、夢現の間に其イエスとエリヤ、モーセとの物語を見て、又イエス、キリストが天の父とお交はりをなさるゝ其御樣子を伺つて居つたところの三人は、而も其三人の内の長者といふペテロは何だか心の中に言ひ知れない喜悦を覺えたと見えて主よ願はくば我に三ツの廬を建せ給へ、一は主のため一はモーセのため一はエリヤの爲にせんと叫んだのである、イエス、キリストは此山にお登り

なさるるまでに實に非常なる苦痛を堪え忍はれた事である、けれども此苦痛や將に來らんとするエルサレムに於ける一週間に亘れる大苦痛に比べて見れば、殆んどいふに足らない苦痛である、山より降り給ふたならば、即ち里返りしてお返りなされた日には、イエス、キリストにはゲッセマヂの園の苦痛が待つて居る、アンナスとカヤバの前の裁判が待つて居る、ピラトの前の大審判が待つて居る夜を徹しての裁判の座が待つて居る、兵隊の嘲弄侮辱が待つて居る、尚其先きには十字架上の悲慘の最期が待つて居る、故に何うしてもキリスト、イエスにヘルモン山頭に於ける歡入がなくてはならない、彼の歸省がなくては後の一週間の苦痛に堪え給ふ事が出來ないのである、學生が暑中休暇に歸省して體力を養ひ來つて、英氣滿々として勉強を續ける、里返りをした新夫人歡入をした丁稚小者が、後の歡入を樂んで元氣に滿ちて其職務を堪え忍ぶ如く、主イエスも亦お堪え忍びなされた事である、九千尺の山の絕頂に登つて、太陽が地中海上の浪を洗ふ時には金波銀波の漂ふ狀は、確かにペテロ、ヤコブ、ヨハヂには、此世ならざる思ひをさせたであらうと思ふ、眼を南に放てばサマリヤの

谷々山々が眼下に見え、又眼を東に放てば際涯もない野原が茫漠として現はれ來る時に、眼を西北に轉ずればレバノン山アンチレバノン山の方からして、實に得も云はれない冷たい風と共に山靈の氣が襲ひ來る時に方つては、確かに此世ならざる快感を與へたに違ひはないのである、尙其山頭に立ちました時に、四面靜かにして鳥の聲だに聞えないといふ時に、虫の唧く音さへ耳許に響かないといふ時に方つては人間の心情には一種森嚴なる思ひを發して、何とも云へない心地となるといふ事は、私が富士山頭に登つた時の其感じと照し合はせても想像の出來ることである、只山に登つて森嚴の感に打たれた時でさへも、私には直ちに天地宇宙の大實在者に接するやうな心地がいたしたことである、私の友人が神を忘れ祈禱を忘れて居ても、露西亞の數百哩の大森林に彷徨ふた時には、自然に神よ我を導き給へ、我を助け給へといふ祈禱の聲が發したといふことである、如何に神を忘れ祈禱を忘れた人でさへも神々しき山の絶頂に此世界を離れた思ひを起し來つた時には祈るのである、況して天の父を憬れ慕ふところの主イエスの弟子とあつて見れば、彼のヘルモン山頭に登つた時には、確か

に此世ならざる感じがあつたに違ひはない、其所に靈界の大達者といふエリヤとモーセが現はれ來つて、イエス、キリストの眼に見えない靈の世界の話しをする時に、此話しに耳を傾けた時の喜悦は曰く言難しといふのであらうと思ふ主イエスが雪の如く白く輝ける顏容を以て、優しくペテロ、ヤコブ、ヨハヂの顏を御覽なされた時には、もう實に此世に居るか居らないか、身體を抓つても見なければ分らないやうな心地がしたであらうと思ふ、ペテロ、ヤコブ、ヨハヂは是れは登山のお供である、イエス、キリストのお供をして靈界の喜悦をお相伴をしたといふに過ぎない、夫にしても主よ我儕に三ツの廬を建せ給へ、一は主のため一はエリヤのため一はモーセの爲にせんと云つて、此世の中に降り來ることを厭ふて、何時までも此山の絶頂に居つて良い心地を續けたいと思つたくらゐである、お供でさへ尙然り、其主人公で居らせられたイエス、キリストは年頃日頃お慕ひなされた、片時も離れ給はざるところの天の父に對せられた時に、其感じは如何であつたらう、何ぼイエス、キリストでも寧日寧夜なく働きを續け給ふた時には、天の父と常にお交際をなさるゝ事も御困難で居ら

つしやつたらうと思ふ、ヘルモン山の絶頂の夕陽の輝く其頃からして夜更るまで天の父と交際をお續けなされた時のイエス、キリストの御心持は如何であつたらうか、諸君は御記憶の中に存するであらうと思ふ、長らく丁稚に遣れるか奉公にやられるか、或は學問の爲に遠方へ遣はされるか、或は嫁に行くかして、憬れ慕ふところの父母親しい父母の手許を長く離れて居つて、偶然里に返つて其父母と顏を合せ、さうして父母の餘念なき物語に耳を傾むけた時の其感じは如何であらう、私も其經驗はある、我お母さんの前に座つて其顏を見た丈でも嬉しいのである、母親が何呉れとなく料理して食べさせて下さる時の其喜悦、寢床を延べてサア此所に寢みなされと云つて貰ふ時の其喜悦、朝疾く起出れば其畑の物を料理して、卵とじでも拵へて下さる時の其嬉しさは、學生の苦痛も試驗前の困難も何も彼も打忘れて、此所に何時までも長く居たいと思ふのは是れ人間の情である、主イエスは天の父の許にお返りなされて、其天の父の懷中に這入り給ふた譯であるから、ペテロが云はなくても主イエスも何時までも此山の上に斯くして居りたいモーセ、エリヤの如き聖なる人々と聖なる話し

がしたい、天の父の御顔を常に拝して居たいと思召したであらうと思ふ、書いてないけれども確かに思召したに違ひはないと私は思ふ事である、けれども何故に山にお登りなされたか、何の爲の歸省であるか、何の爲の里返りであるか、何の爲の藪入であるか、藪入をせんが爲め里返りをせんが爲め歸省の喜悦を得んが爲の山登りではなかつたのである、後に來らんとする一週間の苦痛に堪えんが爲め、グツセマチの血汐の汗を絞る程の祈禱に堪えんが爲め、十字架上の傷ましき苦痛に打勝たんが爲めに、英氣を得る信仰の力を得るといふ目的の里返りである、既に其目的を達せられたのであるから、ペテロの願望をも許し給はずして、三人を引率れてさつさと山をお降りなされて、麓の人となり給ふた時には、其所に癲癇病の子供を連れた父親が歩つて來て、貴方の弟子のところへ連れて行つたけれども、何うしても癒して呉れる事が出來ませんと云つた、此時イエス、キリストは「ア、憐れむべき世なるかな、何時まで經てば我心を知つて呉れるか、我は奇跡を行ふ爲に此世に來たのではなきものを」といふ嘆息をお漏しになつた事である、キリストを災ひする者が待つて居る、けれども

一度里返りをして天の父の靈顏に接して、己が顏の雪の如く輝くまでに靈界の人といふ味ひを嘗められた主イエスは、其三人の弟子を引連れ跡の九人を供にして戰ひ戰ふて、遂にゲッセマヂの園に於ても大勝利を得、ピラトの前に於ても大勝利を得、最期の十字架上に於ても大勝利を得て、遂に勝利の人として此世の中を終り給ふたのである、陰雲濛々として降りず降らずみ五月雨の時には、もう私共は鬱陶しくなつて、何も彼も眼の觸るゝところ悉く懲ならざるはなし、是位に蒼蠅い事はないのである、けれども陰雲を破つて日光が照り來る時には何うも實に心地よく感ずる如く、此苦痛多き世の中、此悲慘なる出來事の多き世の中、時には家庭の重荷に堪えられず時には事業の責任に堪えられずして、アヽもう斯ういふ世の中であれば早く死んだがましだと思ふやうな事もある、其時に私共が天の父の御許に歸省して其麗はしき御顏を拜し是れ我心に符ふ愛子なりといふ御聲を聽くの必要はあるまいか、私は確かに此必要があると思ふ、此歸省に依つて力を喚起すに非ざれば此里返りに依つて此世ならざるところの快感を得るに非ざれば、私共も亦厭世の人となり私共も亦悲哀の人となつて、

顔色憔悴形容枯槁して、遂に屈原と共に汨羅の河に身を投ずるの人となるの外ないのである、如何に苦痛が多かればとて如何に難儀が多かればとて、ヘルモン山頭に登つて天の父の御前に里返りの出來る、又其里返りに依て得らるべき此快感を一度味ふたところの私共には、此世の中の苦痛は何のそのといふ考を以て奮戰も出來れば奮闘も出來る事である。

どうか私共は諸君と共に屢々此里返りがいたしたいのである、屢々天の父の御許に歸省がしたい、親の家に歸つてより私共は非常なる力を得るのである、魂を己が姿に像つてお造りなされて、さうして此世の苦痛に耐ゆべく此世の修養をなすべく、此世の中に遣はし給ふた天の父の御許に里返りをするといふ事であれば、其里返りをしたといふ時だけが、最早私共には如何なる戰ひにも如何なる苦痛にもどういふやうな事が打つて來ても、耐へ得べきものを與へて下さるのである、サア其里返りに依つて經驗を得た人の顔が輝くのである、其靈妙な經驗を得ないところの人は思ひに堪えずして、アヽ〳〵と嘆息ばかり吐いて居るから、其人の顔は何時も曇り勝である、基督信者と基督信者ならざる者

の別は顔が輝いて居るか居ないか、顔に喜悦が現はれて居るか將又憂愁が現はれて居るか、其顔に天國の色香を帶びて居るか此世の色香を保つて居るかといふところに違ひがあらうと思ふ、第三の天に登つたポーロの顔は確かに輝いて居つたに違ひはない、此喜悦は曰く言難しと叫んだペテロの顔も亦輝いて居つたに違ひはないのである。

どうか私共も折角里返りをして、里から歸つて來た時に「お前はエライ健康になつて來たナ、顔の色は實に宜い色になつて居る、過日まではもう衰へて、顔の色は青褪めて、何うも病氣になりはせんか知らぬと思ふて居つたが、お母さんの乳房を吸ふて來た結果、見違ふ程に何うも顔の色が宜くなつて來たナ」と云はるゝ如く、キリスト、イエスと共に天の父の御前に里返りをした結果は私共の顔も輝いて來て夫が安心の基ゐとなり、夫が奮闘の基ゐとなつて、さうして此世の中に戰いを繼續して行く事の出來るやうに、皆樣と共に屢々里返りを繰返したいものである、此世ならざる快感に觸れたいものであるといふのが、私の切なる感じである。

第二十二章　生辱と死榮

義ことの爲に責らるる者は福なり天國は即ち其人の物なれば也、我ために人なんぢらを誹譽また迫害いつはりて各樣の惡言をいはん其時は爾曹福なり、喜び樂め天に於て爾曹の報賞おほければ也そは爾曹より前の預言者をも如此せめたりき

（馬太傳第五章十節至十二節）

夫我儕が受る片刻の輕き苦は極て大なる窮なき重き榮を我儕に得しむる也、我儕が顧る所は見ゆる所の者に非ず見えざる所のもの也蓋見る所の者は暫時にして見えざる所の者は永遠ければなり

（哥林多後書第四章十七八節）

生辱といふは生きての辱をいふ、死榮といふは死んでの後の榮をいふ、前者は軍人であれば、阿容々々と敵の手に捕虜にされて我國の恥辱を晒すよりは、死して靖國神社に神として祭らるゝ方が宜いと信ぜられてある、其信念が我軍人の強き所以であつて、死を見る鴻毛より輕いのが日本國民の特徴と申しても宜い。併し軍人ならざる我々は少し考を異にしなければなるまい、俗人が生き

ての辱と思ふ事は汚穢い家に住ひ破れたる衣を着て、詰らない生活をなすといふ事であらうが、夫は自分が懶けたか又は信用を失つて、斯くの如き貧しき生涯に陥つたといふ事であれば自業自得であらう、けれども少しも信用を失ふ様な事をいたした覚えもなく、孜々營々として力め勵んで居るけれども、時利あらずして貧乏に陥つたといふ事であれば是は清貧といふべきものである、同じ貧乏でも清らかなる貧乏であるから、何の恥る事もない譯である、夫よりも或は貴人の宅に腰を屈して出入し、力ある者のお髯の塵を掃つて、榮耀榮華の夢を貪りたいといふ人間が居つたならば、私は寧ろ其人が生辱を掻いて居ると申さなければならないと思ふ、嘗ては多くの人々に一種の豪傑ではあるまいかと謠はれた人にして今日は競馬などに關係して、而も馬券を賣買する役に當つたといふ事を耳にしては、彼れは生辱を晒して居るといふの感に滿たされた事である、嘗ては女子教育の爲に犧牲となつて幾百の乙女子を教育するとして聖人風を吹かし人にも敬はれた男にして、今日は南米の移民會社の重役となつて、憫然なる移民共の頭を刎ねて金儲けを得意がつて居る者もある、如何に金が得

られても如何に金樓玉殿の中に錦の褥の上に春の夢を貪つても、人間といふ尊い立場から見れば、斯る人々は生辱を掻いて居ると云はなければならぬ、之に反して橋本左内の如き二十六歳にして幕府の獄に繋がれて首を斬られ、吉田松陰の如く二十九歳にして同じく斬罪に處せられたが、俗人の眼から見れば生辱を掻いたやうである、けれども人間といふ立場から見れば、是等は決して生辱を掻いた人々ではないと思ふ。

諸君、人間が此世の中に百二十五まで生存へたとしても、死後の命に比べて見れば束の間である、二十六二十九といふ若盛りにして此世を去つた人は生れたかと思ふと直きに此世を去つたので、死後の生命に比べて見れば、殆んど云ひ様のない短かい生涯を送つたものである、けれども玆に考へなければならない事は、此世の中に生存へて居るといふ時は比較的短かくして、死んで後の命は千萬年百萬年人間の歴史が續く限り續くと共に、其人の靈は永遠の國に於て限りなく續く事を思へば、生きて居る内には貧乏であらうが何であらうが、假令屈辱を受ても死んだ後に限りなく伸る方が人の榮ではあるまいか人嘗て或人

が私に向つて、君等は「可哀さうなものだ、燧箱のやうな家に住んで、貧乏な生活をして居るぢやアないか」と申した時に「ナーニ君、此世の中でどんな大きな邸宅を拵へて見たところで何にもならない燧箱のやうな家の中に縮んで居るのは丁度蚯蚓が縮んで居るやうな譯だ、一夜の夢の覺むる時には我々は限りなき命にまで伸る事である、天の父の家にては測る事の出來ないほど大きな屋敷を賜はるぞ其大きな屋敷に住みたいと思つて、地上に於ては寧ろこんな小さな所へ縮んで居るのだ」と笑つて答へた事があつたが、是れは非常に味ひのある事である、本年の初め亞米利加の新聞雜誌が參る度毎に傳へたのは、アブラハム、リンコルンの百年祭、亞米利加全國は申すに及ばず、英國其他の國々にてもリンコルンの百年祭を執行いたして、其德を慕ひ其人格を崇め、實に何も人道の爲に命を棄てた恩人であると賞讃された記事であつた、リンコルン死して半百年を經た今日に於て、世界萬民其の芳しき名を傳へ聞いて之を崇拜するといふ、彼は百年二百年五百年千年五千年萬年と世界の歷史が續く限りは紀念さるゝところの人物であらうと思ふ、昨朝であつたか一昨朝であつたか、新聞

を取つて海外電報のところを見た時に、元の同志者の社長新島襄氏の肖像除幕式をアームルスト大學に行はれ、高平大使も之に出席をしたとあつた、此電報の言葉甚だ簡單なりと雖も、新島襄先生が嘗て學ばれたアームルスト大學に於ては其肖像を描いて、氏の芳しき名を天下萬世に傳へんといたし居る美擧を讀んでは、私の心は飛立つばかりに悦んだのである。リンコルン氏の如きは生れて赤貧洗ふが如き中に育つて習字をするに紙なく、已むを得ず枯れた木の葉を集めて來て葉の上に字を習ひ、讀むに書物なく、近所合壁から本を借りて來て之を讀んだといふ人で、幸ひに大統領に擧げられたが、第二期の選擧に當撰し就任式の當日暗殺に遭つて消えてしまつたのである、新島襄先生の如きも十九歳にして飛んで海外に行つて水夫となり、石運搬夫となり、學校の內に於て人の知らない苦心を積んで歸り來つて、同志社大學を創立しようと思つて、西に東に奔走された、志未だ成らずして終に大磯の露と消えられたのである。生前に於ては何等の見るべき榮もなかつたのである、けれども死後に於て其芳名は世界萬國に傳はつて居る事を見ると共に、彼れの靈は天上に於て限りなき長の

春を迎へて居ると思へば、死して後の榮に比ぶべきものはなからうと思ふ、斯く考へ來れば、諸君、ナザレのイエス、キリストは此世に於ては鬱屈さるゝ丈は鬱屈された人である、此世に於ては屈辱といふ屈辱、實に此上もなき屈辱を忍ばれたのではあるまいか、馬小屋の中に生れ馬槽の中に育てられヘロデ王は幼兒なるイエスの首を斬らんとするので父母は彼を携へて埃及に流離人となり十二三歳にして父を失つてナザレ村に大工となりて十八年の生涯を送られたといふ、非常なる屈辱をお忍びになつたのである、いよ〳〵三十にして救世主として世に立たうとすれば、稅吏の友罪人の友だと云つて恥かしめられ、狂人と云つて親類朋友に捕はれんとし、居るに家なく寢るに枕なく喰ふに食なしといふ有樣で、三歳の間お過しになつたのである、そうして人もあらうに己が弟子の一人に敵の手に渡され鞭撻れ罵られ有ん限りの屈辱を受けて、遂にカルバリ山の麓に世界何人も未だ曾て受けた事のない程の屈辱を受けて十字架上に横死を遂げ給ふたのである、お弟子方も亦之に倣ふて或は遠島に流され、或は逆磔に遭ひ、或は首を斬られ、概ね皆屈辱を受けて此世を去つたのである。

けれども諸君、逆磔に遭ふたペテロはキリストのお弟子中の大達者として幾千萬の人々の尊敬を受け、遠島に處せられたといふヨハネは愛の人として萬民に慕はれ、三十九の鞭を三度まで受けて石にて打たれ囚に投込まれ、猛獸と戰ふといふやうな酷い屈辱を受けたパウロはキリスト以來の第一人として、又は世界に於ける最も立派なる紳士として慕はるゝといふ事を考へ來る時に、更に十字架上に横死を遂げられたナザレのイエス、キリストは神の子として救世主として、世界幾千萬の人々は神として之を拜むといふに至つては、生きての辱は死しての榮となつた事を思はざるを得ないのである、偶々世の中には生きての榮と死しての榮と二ッながら、兩手に花を持つ事の出來る人がないではないけれども夫は極めて少ない例外である、多くは俗人が悦ぶやうな生きての榮を受けた者は、死しては誰も記憶する者がない事になつてしまふのである、横濱の山手に城の如き家を築いて居るところの某が永眠つたとすれば鬼の首を取つたように人々は悦ぶであらう、後の世に是は鬼なる某の住んだ岩屋であるとして、其遺跡を止むかぐらゐな事であつて、他に紀念さるゝやうな事はないと思

ふ。

果してさうであれば諸君、私共の人生を如何に送るべきであらうか、殊に今日洗禮を領して敎會にお這入りなされたる諸君は、新たなる命の旅路にお上りなされたる方々である、左れば今後の生涯を如何に費すお覺悟であるか、キリスト曰く義事の爲に責らるゝ者は福なり、義事といふはキリストが與へ給ふたる理想を目的として、キリストが與へ給ふたる主義を我主義とし、イエス、キリストの御足の跡を踏んで、茲に正しい人格を造るといふ事の爲に苦しむ者は福なりといふ意である。キリストの御足跡を踏んで人格を作らうと思はるれる時には諸君が從事せらるゝ仕事から離れねばならない事もあらう、時には會社から放り出されるやうなこともあらう、何所へ行つても人が前途を遮斷るかも知れない、其時に諸君が我は裸體にして此世の中に產れたる者なれば淸貧に甘んずれば宜しい、不義の金を得て麗はしき衣服を着んよりは、正直の一圓を儲けて淸らかなる生活をする方が、是れキリストの聖意に叶ふ事であるのみならず、是が人間の生命である、是が人間の尊むべき所以であるといふところに味

ひを着けて、清貧に安んじても道に背くやうな事はしない、人に名も知られずして、一生涯を送るにしても、腰を屈して節を賣るやうな事はしないといふ覺悟を持たれて是から鰻上りに上らるれば上つて行くが、上られなければ貧乏に甘んじ、無名に甘んずるといふ覺悟でさへあれば、死しての後には美しき基督信者としての名を天下に殘すのみならず、神の聖前に於ては善且つ忠なる僕、永久の喜悦に入れといふ御賞讃に與るに違ひはない、若し之に反して虛名を貪りたい爲に、不義の榮華が得たい爲に妻女が美しい衣服を着たいと強請むが爲に、節を曲げたり信仰を曲げたり品格を崩したりなされたならば、人生といふ上から云へば生きての恥辱であるのみならず、我爾曹を知らず外の暗黑に出よと云つて、死しての恥辱をお受けなさるゝ譯であるからして、どうか使徒パウロが云はるゝ如く、此世で受くる片刻の輕き苦みは極めて大なる窮りなき榮に較ぶべきにあらじといふ一句を膽に銘じてお忘れなさるゝ事なく、キリストが義事の爲に責らるゝ者は福なり、喜び樂しめ天に於て爾曹の報賞多ければなりと仰せられた一句を心にお刻みになつて、とうぞ其初一念を完くして貰ひたい、

早くより基督教會にお加はりなされたる兄弟姉妹の内には中途にして信仰が挫けたり、キリストが拜むなと仰せられた富の前に頭を低げたり、見醜ない辱を晒して居らつしやるやうな方がなきにしもあらずと思ふのである、即ちそれは生きての辱であるのみならず死しての後の辱であるから、若し天が幸ひに諸君に生きての榮と死しての榮をお與へなされたなら夫は天のお許しであるから兩手に花を持つてお悦びなさるも亦結構であるけれども、天はさう旨い事を一人の人にお與へなさるものではないやうであるからして、死しての榮と生きての榮との何方を取らなければならぬかといふ問題が迫つて參つた時には、我は死後の榮を取る方が永久の幸福であるといふ事をお悟りになつて、寧ろ此世の中に於ては屈辱を忍んでも永久に續くべき人格を維持へなければならぬといふところに心をお寄せになる事を希望する、主イエス、キリストは『我と共に苦みなば又我と共に榮を受くべし』と仰せられた、キリストを離れて獨り榮を得ようとする者は永久の苦みに這入る、キリストと共に苦むといふ覺悟をする者は永久の榮に這入る、果して何方が宜いであらうか、今後の日本はいよ〳〵虚名

と富貴の戰爭場となつて來るからして、どうぞ諸君が如何なる場合に於ても不義の寶を貪るよりも、寧ろ神の民として共に苦しむ方がましだといふところに信仰を置かれん事を希望して止まない次第である。

第二十三章　天上の星

我は輝く曙の明星なり　（默示錄第廿二章第十六節）

夏の日海濱に出でゝ白砂の上に横はり蒼穹を眺めることゝ又夏の夜に外に出でゝ大空に閃めく千萬の星を見ることゝは、私が最も大いなる愉快といたして居る所である、猶太の詩人は之れと同じやうな感じを持つたものと見へて、詩の第十九篇の一節には『もろ〳〵の天は神の榮光をあらはし蒼穹はそのみ手のわざをしめす』と謳うて居る、又ダビデが詩の第八篇の三節四節に『我なんぢの指のわざなる天を觀、なんぢの設けたまへる日と星とを見るに、世人は如何なるものなればこれを聖意にとめたまふや、人の子は如何なるものなれば之れを顧みたまふや』と謳うて居る、燐寸箱のやうな家の中に住み、日々の生活に只齷齪として居る所のものが、右お話し申すが如くに、晝は蒼穹を眺めて太陽の東から出でゝ西に進み行く樣を見、夜は爛々たる幾千萬の星が輝く有樣などを見る時我心靈は肉體を離れて此星より彼星と飛び、又彼星より此星と飛びかふ

が如く實に幽遠なる清想に身の現をも打忘るゝに至るのである。

私はふと聖書の中に天上の星に就いて、何か教へてありはすまいかと研究して居つた所が、中々〳〵趣味のある教訓が幾らも出て來たのである、今其二三を擧て見よう。

馬太傳の二章の一節より十二節まで、イエスがお生れになつた時分に、亞剌比亞の方から三人の博士達が參つたことが記してある、是れは一の物語りに過ぎないかと思はれるが、物語と致しても實に興味がある、亞剌比亞と申せば漠々たる砂原であつて、旅人が其の砂原に游ぎ出して參ると、何方が西か東か北か南か、殆んど方角さへも分らない全く大海原に舟を漕出したのと同じで、實に途方に暮れると云ふ話である、此の三人の博士は兼ねて神の子がお生れなされると云ふことを傳へ聞いて居つたので、彼の閃めく星は異樣の光を放つからして確かに神の子がユダヤにお生れ遊ばしたのではあるまいかと思つて、一人の博士が駱駝に鞭打つて出て來て、或一叢の草木の繁つたる所に天幕を張つて息らうて居る所へ又一人の博士も同じく駱駝に鞭打て歩つて來た。

暫くすると又一人の博士が同じく駱駝に鞭打つて馳け付けて來て、思はず三人一所に天幕を張つて『あなた方は何所へ行くか』と尋ねて見れば、同じく綺羅めく星を目當に神の子を捜すのであると云ふのでともく連立つて其の三人が星の導く儘に辿り辿つて遂にエルサレムに參り、更に星の導きに從ひベッレヘムに至れば、果して馬槽の中にイエスの臥したまふのを見たと云ふことである、私共が母の胎内より不圖此の世の中に生れ出でゝ、二歳三歳までは殆んど無意識の生活をいたして居るが、段々智慧附いて參つて、さて人間は何の爲に此の世の中に生れて來たか、何所から生れて來たか、又我使命は何であるか、人間の踏むべき道は何であらうかと云ふやうなことを考へ來る時に當つては、吾々も亦今日の青年の煩悶とか煩惱とか云ふものに取附かれ、惱み苦しむが如く、大いなる苦の中に陷るものである、即ち五里霧中に迷ふので、其の迷ひも雲霧の中に鎖された時に、若し他の一方に一ッの閃めく星を見出すことが出來たならば私共の煩悶は取去られ、私共の苦惱は除かれて、心の中に大いなる光を認めて悦ぶことであらう。

使徒達の時代を去と遠からざるときにジョスチンと云ふ獨りの人が居つたが、彼は非常に哲學が好きであつて、希臘に行はれ、羅馬に盛んに持囃された、我が禪學なり我武士道なりに似たと云ふストアの哲學を研究したが、更に心に滿足が出來ないので又轉じてピタゴラスの哲學を學んだが是亦更に心に光を與なかつた、更にプラトーの哲學に入つたが、是も又一つも心を開くことが出來なかつた、一日歩くともなしに野原を歩いて居ると、風采の卑しからざる一人の老人に出會つたのである、そこでジョスチンは『あなたは何うして此の人里遠き野原をお歩きなさるか』と云へば『イヤ世の中は騒々しくて五月蠅ですから此の閑靜なる所に參つて我と我心に問答を致すのでありますと云ふやうなことからして、二人の間に段々問答が始まり、鳥や獸に靈魂があるや否や若し鳥獸に靈魂があるならば、是等も神を知ることが出來るや否や、と段々議論が激しくなつて參つた、老人は笑つて預言者の導きに據らざれば神を知ることが出來ない、神を現はした者は預言者である、預言者なるイエスを學ばざれば神を知ることが出來ないと云ひ、又莞爾と笑つて、遂に彼方に去つて仕舞つた、其時不

思議にもジョスチンの心の中には神の愛が溢れて、天より來る所の光明に照されて廓然として今までの迷ひが覺めたと云ふのである。ジョスチンは確かに曙の明星である所のイエスを見出したのである、イエスを通じて天に閃めく父なる神を見出すことが出來て、ストア、ピタゴラス、プラトーの哲學が與ふることの出來ないものを握り、こゝに初めて動かない信仰の土臺を立てることが出來たと云ふことである。其後、亞弗利加のカルセージにオーゴスチンなる賢者が生れた、其父は放蕩無賴の異邦人であつたが、その慈母は熱心なる信者であつた、オーゴスチンは埃及の智識を究め、又希臘の學問に通じ、實に學問に於いては、殆んど世に並ぶ者のない位の碩學であつたけれども不圖身を持ち崩して、十五の年には已に妾腹の子すらあつたと云ふことである、然るに一たび伊太利のミラノに參つて、アンブロースの說教を聽いたのが動機となつて、或公園の大樹の下に座して居るとき忽然曙の明星なるキリストを見出したのである、爾來全く新なる人物となり、終に又後世を照らす天上の星となつたのである。

イエス、キリストの人格、聖德、又は智惠を究むるときに當つて、其の神々

しき人格の輝きが私共の眼に映るやうになれば、使徒パウロの如く『われは我主キリスイ、イエスを識るを以て最も益れる事とするが故に凡てのものを損ぜしかど之を糞土の如く意へり』と叫ぶに至るであらう、私共はイエス、キリストなる曙の明星を見れば、其のキリストの人格の光に引かれて不知不識向上發展して自らも亦遂には天上の星の如く輝くものになるのであらう

又以賽亞書第十四章十二節以下を見ると『あしたの子明星よ、いかにして天より隕しや、もろ〳〵の國をたふしゝ者よ、いかにして砍られて地にたふれしや、汝さきに心中におもへらく、われ天にのぼり我くらゐを神の星のうへにあげ北の極なる集會の上にざしたかき雲漢にのぼり至上者のごとくなるべし』と錄してある、是れは人の子なる人間の理想を謳ふたものである、高き雲漢に上り至上者となるべし、爾曹天の父の完全きが如くに自ら完全うすべしと主イエスはお敎へになつた、イザヤも亦同じやうに人の子なる人間が高き雲漢に上つて、最高き天の父の如く高きものになりたいと云ふ理想を描いたのではあるまいか、その理想を描いた者が、何うして隕ちたであらうか、先に朗讀致したる

詩の八篇を見ても、ダビデが外に出でゝ指のわざなる天を眺めてその廣大無邊なるに驚くと共に、人の子は如何なるものなれば神が聖意にとめたまふか、人間は如何なるものなれば神が御寵愛なされるかを考へて驚いた、私共人間は蛆虫の如く地から發生たものではない、私共は溝や泥から生く子孫の如きものではない、天の父の聖姿に形どつて造られた神々しき性質を賦與されたもので、實に尊榮極りなしと云ふ程のものである、サア其の人間が貧に迫つたと云つては娘を糸竹の流れに沈めて恥辱をさらし又困つたと云つては、他人の金錢を己が物の如く消費して知らぬ顏をして見たり、又一夜の樂を買はんが爲には、千歳の恥をも顧みないと云ふやうなこともある。大空に閃めく星を見る度毎に我人間は星の上に位を置き、高き雲漢の上に立つて神の如き姿を養ひたいと云ふ理想を有し又かく養はせたいと云ふのが神の聖意であるのに、地上に隕て下らない酒を飯んで見たり、臭い煙草を喫うて見たり、又夫婦喧嘩をして見たり他さむしい行ひをすると云ふやうなことは、實に天の星に對して恥づべきの至りである、太陽の光るのを見て、我心を厭ひ、夜星の閃めくを見ては我心が

如何に墮落したかを考へ來れば、あの理想に立歸らなければならないと云ふ感じが起らう、是れ私共が星に對して大いに學ぶべき所のものではあるまいか。

今一ツ但以理書の十二章三節に『顯悟者は空の光輝のごとくか輝にん、また衆多の人を義に導ける者は星のごとくなりて永遠に至らん』と錄してある、歷史を繙いて見ても確かに其通りである、又現在の記事を調べて見ても確かに其通りである、ジョンブライトはクリミヤ戰爭のときに、非戰主義を標榜して大臣の位地を拋つたので英國の人は彼の愚を笑ふたが、戰爭が終つて國民の心が靜まつて後にジョンブライトは曙の明星として英吉利の雲漢に輝き初めたのである、トーストイーは日露戰役に當つて不義の戰爭を爲すべからずと云ふ大論文を倫敦タイムスに掲げたので露國の上下は彼の愚を笑つたが露西亞が鴨綠江に敗れ、旅順に敗れ、奉天に敗れて後トーストイーは暗き露西亞に曙の明星の如く輝き初めたのである、又ローズベルトが亞米利加大統領の位地に就いて、トラスト征伐を初めんとするや實に人々は彼の愚を笑つたが、彼の勢力は太陽の東天に登るが如く進み來り、トラストは散々敗れ、否な全く敗れなくつても

其の内幕を見透されて、紐育保險會社が醜態を現はし、シカゴのストクヤルドが醜狀を現すといふなり、ローズベルトの正義が日に月に輝くやうになつた彼は大統領の位地を去つた後にもワシントン、リンコロンと共に亞米利加の天に曙の明星の如くに輝くであらう。

諸君、今日我日本に於いて、多くの青年が人生問題が分らないと云つて、華嚴の瀧や、阿蘇の噴火口に飛び込む時代に方つて、私共は幸ひに曙の明星なるイエス、キリストを見出だし其の光に照されて、我が行くべき道を行き、竭すべき義務を盡すことが出來るやうになつたと云ふのは、實に主の賜物である、私共は世の青年に向つて若し世の雲霧に迷へる者があれば宜しく曙の明星たる主イエス、キリストに來つて光を得よ、イエス、キリストに來つて光を得るに非ざれば天の神を知ること能はずと叫ぶのが、是れ私共基督信者の勤めである、世の人が酒、色に迷ふのは高き理想より隕ちたのである、何にとかして天上の星の如く高き所に理想を置かなければならないと叫ぶのは、是れ私共信者の勤めではあるまいか、併しながら若し我々の心の中に『位を神の星の上に擧げ北の

極なる集會の山にざし高き雲漢に上り至上者の如くなるべし』と云ふ理想がなかつたならば、世の人々に理想を得よと叫ぶことは出來まい、更に進んで、『穎悟者は空の光輝のごとくに輝かんまた衆多の人を義に導ける者は星の如くなりて永遠に至らん』と云ふダニエルの言を讀んで、何うか我々が曙の明星なるキリストに倣つて、我心と我人格が星の如く輝き小にしては我を照し、大にしては我國家を照す所の天上の星となりたいものである、私共は天上の星と云ふ趣味ある敎訓を諸君と共にその星を眺むる毎に想ひ、愈々磨き養ふて永久に輝くものとなりたいと云ふの希望を以て奮闘を續けたいものである。

第二十四章　家庭の向上

エホバ家をたてたまふにあらずば建るもの〻勤勞はむなしくエホバ城をまもりたまふにあらずは衛士のさめをるは徒勞なり　（詩一二七篇一節）

世の中のものは何でも思想が第一である、人間は善い事をするにも惡い事をするにも一ッの事を遣らうとするには百度千度考へ考へた後に夫れが實行となるので、惡い方で云へば彼の男の頭を一ッ叩いて遣らうと云ふ時に其の頭を叩くまでには幾度心の内で頭を叩くかも知れない、そうして夫れが遂に實行となつて、此方の鐵拳が向ふの人の頭へ行くのである、かくて考が世界を動かし、考が品性を作り、又考が人物を造るのである、家庭と云ふ問題に就いても同じ事であらうと思ふ。

然に多くの人が妻を迎へる時には情慾を果す對手が欲しいと云やうな下劣な考を以て彼れか是かと配偶者を撰ぶのである、又其父母も最早子供が年頃になつたから早く對手を定めて置かなければ、品行が惡くなるかも知れないと云ふ

樣な卑劣な考で子供の配偶者を撰ぶのである、そんな汚ない腐された考で妻を得て造れる家庭はどんなものであらう、實に詰らない足踏も出來ないやうな汚ない家庭に外ならうと思ふ、勿論結婚上における眞理の一部には情慾を喜ばしむると云ふ意味も含んで居るに違ひない、併し其れが目的となつては大變なことである、我が日本の家庭が今日汚れて居ると云のは根本において考が間違つて居るからである。

又昔の武士は子孫長久を目的とした、是れは確かに眞理の一面ではある、けれども妻を娶ると云ふ場合に當つて、子孫長久と云ふ考のみが支配をすると云ふことであつたならば、子の無い妻は去ると云ふことも出來るし、或は本妻に子がなければ妾を入れて跡の絶えないやうにせねばならぬといふ考も加はり來たるのである、我日本において蓄妾の風が行はるゝのは此考が一の大原因であつて、家庭を破る事甚しく、とても家庭を拵へる第一の考ではないのである。

又或人は幸福を目的として娘を嫁に遣る、又嫁に取る方でも何でも我身の幸ひとなるやうに、快樂となるやうにと云ふ考がある、是れも確かに結婚の眞理

の一面を現はして居るに違いはない、私共家を造るのに不幸を得たいとは思はない、家を造るのに不愉快を得たいとは思はない、けれども唯幸福を得たい快樂が得たいと云ふことが根本であれば我娘の良人となるべき人の人格が何うであるとか、斯うであるとか云ふよりも、只金さへあつたならば幸福が得られようと云ふので、金の多いところに娘を遣りたいと云ふ考が生じて來るのである、嫁に取るべき婦人が何うである、斯うであると云ふことも考へなくちやアならぬが、兎に角一萬圓ぐらいの持參金を持つて來るならば、屹度幸ひが得らるゝと云ふ考から、人を妻に貰ふよりも金を妻に貰らふと云ふ人間が出て來る次第である、現にさう云ふ人がある、澤山ある、學士とか博士とか云ふ立派な肩書を持ちながら金滿家から妻を貰つて幸福を得ると思ひの外其の妻君の鼻の先で使はれて、他所へ行つて一晩泊ることも出來ないやうな目に遭ひ、只奥さんの鼻息をのみ窺ふて居ると云ふ人間も居るのである、そこで幸福を得たいと云ふのみの考は非常な間違である。

然らば家庭を造ると云ふ第一の目的は何であらうか、私は先づ諸君に向つて

人間が此の世の中に生存する第一の目的は何であらうかとお尋ねし度いのである、人間が生存する第一の目的が金を造ると云ふことであるならば、家庭を造る目的は金を造ると云ふことが第一になつて來る、人間が此の世の中に生存する第一の目的が快樂を得ると云ふことであるならば、家庭を造る目的は快樂を得るとであらう、人間が此の世の中に生存する第一の目的が情慾を逞しふすると云ふことであるならば、家庭を造る第一の目的が情慾を逞しふするとになるだらうと思ふ、けれども私共は人間が此の世の中に生存する第一の目的は理想の品性を磨き立つると云ふとであると信ずるのである、即ち仰いで天に恥ぢず俯して地に恥ぢず、内に顧りみて本心に恥ぢず、家の中に在つて屋陋に恥ぢない、即ち麗はしい人物に成ると云ふのが、何う考へて見ても人間生存第一の目的であらねばならぬ、若し之が第一の目的であるとするならば、家庭を造る第一の目的は修養と云ふ事である、修養これ實に味ふべき事である。

人間生存の第一の目的を達するのに修養が大切である如く、男女茲に相合して家庭を造ると云ふ時に其の理想の品性を二人して互ひに扶け合ひ、磨き立て

るのが根本の目的であると考へらるゝさう考へたならば男が妻を迎へやうと云ふ時に我の長所は茲であるが、又我の短所も茲であると考へて、我妻となるべきものはどうか此の短所を補ふて呉れるものでありたい、此の長所を益々發揮するに助けとなつて呉れるものが欲しいと思はずには居られない、人の妻になるらうと云ふ婦人も、亦妾の短所は茲だ、若し妾に長所があるならば茲であるが、さて自分の此の短所は如何にして補はるゝか、此の長所は如何にして益々之を磨き立てゝ世のため神のためになろうかと云ふ高尚なる考を以て、茲に良い配偶者を發見けたならば如何であらう、希臘の聖人ソクラチスは家庭を造る目的は己れを磨き養ふにありと信じたところから、希臘第一の邪慳な、ゐけずと云ふ名の付く女を娶つたと云ふとである、是れは餘りに極端である、けれ共聖人ソクラチスの心を考へて見るならば、其所まで己れを磨き養ふことを目的とされたと云ふことには私共感服せざるを得ない、私が敬愛する一人の先輩も修養の目的で不可ない女を娶られたのであつたか、どうか、兎に角其夫人は頗る氣儘な人であつたけれ共、其夫人と連添はれた二十年間其の家庭の見醜き話は

世間に聞えなかつたとを思ふ時に、其の先生が如何に修養されたかゞ分る、或時其の先生が『宮川君、私の家内は強情を云ふことより他に取得はありません』と話されたが、此の語を聞いた私は實に心中同情に堪えなかつたのである、強情より他に取得のない女を妻として少しも悪しき評判が聞えない程に其の先生が德を磨かれたと云ふはエライのであつた。

ソクラチスは希臘第一の邪慳な妻を得て修養し、私の先輩は強情より他に取得がないと云ふ女を得て修養せられたが、幸ひに御互は夫程のねけずを妻にした譯ではなく、夫程の詰らない男に嫁いだ譯でもない、先づ普通の男を良人とし、普通の女を妻としたと假定する、其の夫婦が心を揃へて男の長所を認めては妻が、彼所を手本としなければならない、男の短所を認めては、彼所を補ふて行かなければならないと眞に思ふ、男の方では妻の長所を認めては、自分が少しでも過失があれば、其の過失を妻が影になり、日向になりして補ふて呉れて居るが、妻の善いところは自分が習はなければならないと云ふ考になつて、眞から其妻の人格に對して尊敬を拂ひ、さうして此の二人が心を併せて互ひに

磨き養ふて行く内に、いよ〳〵敬ふべきところが出來て來、いよ〳〵愛すべきところが出來て來、いよ〳〵信賴すべきところが出來て來て、其間に二人は知らず識らず德が進んで來る、品格が出來て來る、人々よりは實に奇特な夫婦だと賞らるゝやうになつて來るのである。

諸君、家庭は男と女との修養に就いては、學校よりも敎會よりも何よりも大切なものである、何となれば學校でも互ひに切磋琢磨をする時間と云ふは僅かよりない、敎會でも互ひに相集まつて磨き養ふ時間は少ないのである、けれども家庭は二十四時間の內で、諸君が十時間外へ出て何かの勤務をなさるとしても、十四時間は良人と妻と一緒に居るべき時間である、一日の半分十二時間を外に送つても、殘りの半分十二時間は內に居るのである、而して學校や敎會其他の箇所においては皆白粉を附けて居る、癇癪持でも笑顏をして居る、下劣な根性の男でも成るべく人々に立派に見られようと思つて高尙な話をして居る、けれども一度我家の門に這入つたならば白粉は剝げてしまう、白粉を附けるとは許さない、良人は妻の前に穴だらけである、妻は良人の前に穴だらけで現は

れて來る、其の穴だらけ即ち有の儘に現はれたときの男と女が、互ひに切磋琢磨し共に心を揃へて磨くと云ふ考へになつたならば、牧師の說敎よりも、先生の道德の講釋よりも何よりもそれが眞身に徹して、妻の一言が我を助け、良人の一言が我を勵ますやうになつて來る、否其妻の手本が良人を感化し、良人の手本が妻を感化するとになつて來るのである、夫れに妻が何か良人に忠言を云へば「汝のやうな奴が何かッ、默れ馬鹿野郎ッ」と云つて良人が叱る、或は良人が何か妻の心得に就いて一言注意すれば、妻はプーフと膨れて物も云はないやうになると云ふのは、男と女が家庭を造るときに幸福を得ようとか、快樂を得ようとか、情慾を滿たさうとか云ふやうな下劣な考があつて、夫れが其所に角を出して來て膨れたり叱つたりするのである、夫婦が家庭を造る第一の目的が互に切磋琢磨をして立派な人格を磨き立てる、即ち其の修養が目的であつたならば、妻が優しい言葉を以て斯うしては不可ませんぞと云つて呉れたならば、先生に云はれる時のやうな態度で妻の一言を耳を傾け、良人が一言妻に手前はそう云ふ考では不可ないぞと云へば、如何にもと思つて心から其の敎を聞くと

云ふことになつて初めて夫婦相愛して茲に麗はしき家庭が造れる譯だらうと思ふ。

尙諸君、家庭は男女の修養の道場であるばかりではない、又一つ大きな目的がある、乃ち人物の養育場と云ふことを考へなければならない、我國の人は子供を小學や中學に遣れば、其所で道德の敎育は出來ると思つて居る、それも出來るに違ひはない、けれども子供が未だ小學校に出ない內に、既に家庭で立派な品性が形造られなければならないのである、遠方に修養に出して居る息子娘が冬の休み春の休み夏の休みに歸り來つた時に、我父我母の見上げたる人格から現はれ出るところの感化が及んで、其息子娘が學校に居る間に受けた傷が癒され再び學校に歸り行くほどに、家庭が立派でなくては不可ないと思ふとである、ところが學校などにおいては立派な事を學んでも、一度家庭に足を踏込むと、お父樣は酒を飮み、お母樣は癇癪を起し、さうして互ひに喧嘩を仕出かす而已ならず、下男下女までがブツ〳〵と云つて、一家の內に紛紜が絕ないと云ふことであつたならば、どんな良い敎育を受けても、どんなに良い道德の講釋

を聞いても、我家庭に這入りこむと忽ち汚ないものになつてしまふではないか。

亜米利加のニューイングランドには古來誠に良い人物が起る、其の本は家庭である、英吉利人が世界の面において立派な道徳を維持して、多くの人々に尊敬を受くると云ふのは、何かと云へば家庭が好いからである、若しも英米から良い家庭を取除いて御覧なさい、何も他に彼の人々をして立派な人格たらしむべきものはあるまい、今日我日本が智識に於ても、其他文明の事物に於てもをさ〳〵英米に劣らないまでに進みつゝあるのに、獨り家庭と云ふ問題になつて來ると赤面するの他はないのである、さうして公徳が何うだの、貴族院衆議院の連中が馬鹿をやるぞと云つて攻めて見たときに、今日のやうな家庭であれば、未來永劫我日本に於ては立派な人物は出ないと云つても宜いかも知れない、まだ今日は士族の魂に依つて形造られたる家庭が存するので、稍々立派な人格が造れる譯であるが、併し其の士族の家庭も日々に破れて行きつゝある、然らば其の後に代つて茲に立派な家庭を造るべきものは、我々基督信徒の外にはなからうと思ふ、然るに其の基督信徒の家庭に這入つて見て何所に立派なものがあ

るか、何うも餘り澤山は見受けられないのである。

シテ見ると諸君、我等の家庭は男と女が修養をする場所であつて、而かも人物を養ふ神聖なる場所であると、今日まで考へて居た人は宜しいが、まだ考へたことのない人はさう考へて貰ひたい、其の考に變つて欲しい、其所に考が定まつたならば、良人が妻に對し、妻が良人に對する時に、親が子に對し、子が親に對する時に其態度が變ずるであらう、そこで私は更に進んでさらばそふ云ふ家庭においては何う云ふことを心懸とすべきかを考へて見たい。

第一清潔　清潔は實に天が命ずる第一の命令である、身體の上から考へても、家庭は清潔を第一としなければならない、机の上には塵が積もり、障子の桟には埃が溜り、家の隅には芥山をなし、衣服には垢が附いて居ると云ふ家庭は、決して修養の場所ではない、決して人物を養ふに適當する場所ではない、假令家は狹くても、假令屋根は破れてあつても、私共の家庭は清潔でなければならないのである、雷に眼に見えるものが清潔であるばかりでなく、眼に見へない玆（胸を指す）に清潔がなくてはならない、私が清潔と云ふ中には高潔貞潔廉潔

の三者を含むのである。

（イ）高潔　吾々が茲に夫婦相合して家庭を營むのは、立派な人格となるのであると云ふ、高く清き思想がなくてはならない、子供を天より授けられたと云ふのは、此の子供を成長かして後々は此の子供に懸り、甘き飯を喰はうと云ふやうな、否な子供が大きくなるのは郵便貯金が殖えるやうに考へる人がある、是れは不潔な考である、天が私共にお托しなされたる此の子供の前に善き手本を表はし、好き言葉遣ひをなし、良き行ひをして、此の子供等を清き潔きものに育て擧げなければならないと云ふ、高き思想が私共の内に滿ちて居なければならない。

（ロ）其次は貞潔　妻は世の中に男は多けれども、我が良人のやうな男はないと思ひ、全身を其男に捧げるでなければならないのである、男は又世の中に女は多けれども、我妻のやうな女は世の中にはないと思つて、其妻に我心を悉く與へなければならないのである、夫れを貞潔と云ふ。

（ハ）尚今一ツは廉潔である、子供の前に吝嗇を遣つたり、良人は外に出て金

を使ふが妻に向つては非常な吝嗇であつたり、妻は内密で臍繰金を拵へるが良人に對しては非常な吝嗇で喰べる物も碌に喰べさせないやうなことをする輩もある、そふ云ふ家庭には必ず夫婦喧嘩は絶えない、親子喧嘩の絶間はない、矢張り廉潔でなければならぬ、他ではどんな辛抱をして儉約をしても、良人には美い物を喰べさせる、又良人は妻には良い衣服を着せて遣る、我子には貧乏なことを知らさないやうにする、其の立派な廉潔なる德を以て家庭を經營して行くと云ふ考でなければならぬ、英國人は家庭を支ふるに一番多くの金を使ふと云ふことである、日本人は自分が立派な衣服を着、他所に出て綺羅を輝す爲には多くの金を使ふが、家庭を清潔にする爲に金を惜む國民である、それでは不可ない、他所の人からは吝嗇と云はれても、我妻に吝嗇と云はれない、我良人に吝嗇と云はれない、我子供等に吝嗇な親父だ吝嗇な母親だと云はれないやうに、家庭の内には廉潔の空氣を滿たさなければならぬ。

結局目に見える上においても家庭が清潔であり、眼に見えない心の奥においても、高潔、貞潔、廉潔の三德が行はれなければならないと思ふのである。

第二光明、家庭は明くなくては不可ない、大阪の金満家の家に這入つて見ると、何うも實に薄暗い、雨でも降る時には洋燈を點けなければ本が讀まれない様な薄暗い家の中に住んで居る、其點になつて來ると貧乏人の方が却つて幸ひである、狹い家であるから何時でも明るい、太陽の光線の射す所は黴菌が死んでしまふ、けれ共眞暗い家の中には黴菌や病毒が滿々て居る、眼に見える我々の家が明るいばかりではいけない、眼に見えない私共の心が光に照されて水晶の如く透徹つて居らなければならない、妻が良人に對して隱さなければならないやうなとがあつてはならぬ、良人が妻に對して何か隱さなければならないと云やうな陰密な事があつてはならぬ、良人は妻の前には水晶の如く透徹つて居らなければならない妻は良人の前で水晶の如く透徹つて居らねばならぬ、水晶の如く透徹つた父と母とが子供に對したならば、子供も亦父母に何も隱す事があつてはならないと云つて、水晶の如く透徹つて來る、然るに若しも子供は親に見付からないやうに何か狐鼠々々と隱れ事をやる、親は子供に見付け出されては大變だと思つて狐鼠々々と隱れ事をやる、妻は良人に見付け出されては大

變だと思つて、良人の不在に狐鼠々々とやるやうでは其の家庭は駄目だ、其の家庭は確に紊亂する、外に向てはそう水晶の如く透徹つてやれないにしても、妻が良人に對した時に、良人が妻に對した時に、親が子に對した時に、子が親に對した時には何の隔壁もなく、實に水晶の如くなければならないと思ふのである、既に清く、既に光であるならば、其次には何であるか、即ち

第三溫情之は最う度々皆樣にお話をした事であるが家庭はどふしても夏冬を通じて溫かでなければならない、家の中に火がなかつたならば、是れぐらゐに寒い淋しいとはなからう、何んぼ貧乏をしても火鉢の中には溫かな火を熾して置くことが必要である、石炭が高くなると英米の家庭はもふ實に憂に滿たされる、六年ばかり前に石炭が高くなつた時に、石油をストーブに用ゐた、さうするとロックフエーラーのスタンダード石油會社はウンと石油の直段を上げたところが「憎むべきはロックフエーラーの處置である、憎むべきはスタンダードの仕方である、家庭を破るものはロックフエーラーだ、家庭を紊すものはスタンダード石油會社だ」と云ふので大變に攻撃をやつた位である、家庭には火

が必要である、眼に見える身體を溫めるのに溫かな火が必要である如く、眼に見えない良人の心が妻に對して溫かに、妻の心が良人に對して、子が親に對して溫かに、親が疲れて歸つて來る時に、子供が溫かな笑顏を以て「お歸り、お疲れでせう」と一言云つて呉れば、寒さも疲れも打忘れてしまふ、又子供が學校から「只今ッ」と云つて歸つて來た時にお母さんが溫かな心で「お歸り」と云つて、さうして「溫かなお芋を買ふて置いたぞ」と一言云つて御覽なさい、最う子供は心から溫かさを感じて、勇ましく靴を脫ぎ、勇ましく衣服を着替へて「お母さん、其の溫かなお芋を頂戴」と云つて其のお芋をほうばつた時に、其の子供と云ふものは天地何物か此の快樂に及ぶものはなしと云ふ溫かさを覺ゆるのである、此の秘訣を知らない母親は「お母さん只今ッ」と云つて來るのに、お母さんは不悄〳〵に冷い返答をし「お母さんなんぞ頂戴」と云ふと「喧しく言ひなさんな」とねめつける、最う其の一言で子供は親に對しての反抗心がムラ〳〵と起る、さうしてお母さんが「郵便函に此の手紙を入れて下さい」と云へば「お母さん、待つて頂戴」「待つことは出來ません、急ぐから早く入れ

て來なさい」「お母さん用をして居ります」と直に子供は復讐をやる、夫れから親子喧嘩が始まるのである、けれ共只一言お母さんが溫かな聲で挨拶して、さうして子供が云はない先きに溫かな物を目前に與へて遣つたならば夫れから凡そ十三四時間は子供は親の命の儘に動くのです、豈夫れ獨り子供のみならんや、良人が歸つて來た時に、戸外にカタツと車の音がした時に、妻は心地よき笑顏を以て「嘸ぞお寒うございましたらう、炬燵に溫かな火が入れてあります、お茶を召上れ」と云つて、さうして湯呑に波々と溫かな茶を持つて來て飲ませて御覽なさい、最う良人はそれで滿足する、夫れから後良人は十二三時間は妻の命の儘に動く、又妻が他所から歸つて來た時に、矢張り良人が妻に對し「お歸り寒かつたらう、早く茶を汲んで上げよ」と女中に一言云つて御覽なさい、最う夫れから十二三時間は妻は良人の命の儘に動く、其の秘訣を知らないと云ふのは愚の極である。併し之がお愛想一偏ですると云ふ日には他所の人に對しては出來るが、家内の者に對しては出來ない、家庭では白粉を附けることは出來ない、故に眞から良人の事を思ひ、眞から妻の事を思ひ、眞から我子の事を思

ふ、其の熱情が溢れなければ、温かな一言は出ないのである、家庭の内がさうであればお客様に對しては無論である、下女下男に對しても非常に温かな心を以て接することが出來る。

シテ見ると諸君、何うしても家庭は清くなければならない、明るくなければならない、温かでなければならないが、何うしたならばそう云ふやうに遣れるかと云ふに、他ではない、家拜を盛にしなければ駄目だ、家拜と云ふは一日の内に少なくとも一度は良人と妻とが額を鳩めて、神の聖前に讃美歌を歌ひ、聖書を讀んで祈ることである、私の良人は未だ信者でないから共に祈る事が出來ないと云ふ妻は、良人が役所へ或は店に出掛けて行く後ろ姿を見送つて、夫れから自分の室において良人の分をも自分が祈らなければならぬと思つて、熱心に天の祝福を良人の爲に祈るがよい、子供が學校に行く其の後ろ姿を見送ると共に、母親は室の中に這入つて、我子の上に幸あれ、どうぞ今日は能く勉強をして、人樣に親切を盡して、人間らしい擧動をして歸り來るやうにと祈らねばならない、又良人も妻も信者であるならば、我子の爲に日々斯くの如く祈らな

ければ不可ない、若しも家拝を怠る様では其の家庭には天の光を受くる事がない、天の光を受くる事がないから、温かでありさうな事はない、冷たい〳〵事になつてしまふ、又家庭の内において讃美歌の聲が聞えないやうな事であつたならば、必ず喧嘩の聲が聞える「朝に妻は花とゑまひ、夕に稚子は鳥と歌い」と云て歌ふは人間の天性である、然るに其の子供等が親に恐れて歌を唱ふことが出來ず、ビク〳〵もので居ると云ふやうな家庭はどんな家庭であらう、下女は走り元で歌を唱ひつゝ洗物をする時の心は、決して怒に満ちては居ない、妻が歌ひつゝ衣服を縫ふ所には怒の心はない。子供等が謳ひつゝ掃除をする時に、其所に怒の心はない。

かくの如くして造られた家庭にして初めて立派な人格を出すことが出來る、ドーカ家庭を向上させたいものである。

第二十五章　家庭の趣味

菜蔬をくらひ互に愛するは肥たる牛を食ひて互に恨むるに愈る（箴言十五章十七節）

本日は家庭の趣味と云ことを考へて見たい。第一に泛び來る問題は趣味とは何であるかと云ふことである。趣と云ふ字と味と云ふ字を連ねて、趣味と稱る熟字が出來て居る、理想と云ふ二字が說明が出來ないやうに、趣味も亦說明が出來ないのである。何とかして說明をして見たいと思つたが說明をしやうとすれば趣味がなくなつてしまふやうな心持がする、そこでこゝに一つ描いて見やうと云ふ考が起つたのである。

さて茲に一つの家庭があつて、之を外部から覗けば恰も城廓のやうであるが、門を入ると門內は白砂が敷詰められ、規則正しく掃き淸められてある。玄關に訪へば袴を穿た書生が取次に出て來る、いよ〳〵客室に通つて見れば新しい疊が敷詰められて種々な軸物が掛けてあり、又季節の花も活けてある、其軸物を見ると何れも大家の作でなか〳〵に美事なものである、奥の方には夫婦に二三

人の子供と三四人の下女下男も使はれて、その起居振舞は如何にも優雅であつて、眞に大家と見える次第である、去りながら夫婦相對して居るときの模樣を見れば、行儀は正しいが頓と打解けたる所が見えない、子供が父母に對するの見れば一々手を突いて誠に行儀よく振舞ふて居る、去りながら親子の間には溫かなる情愛が見えない、來客に對するときも何となく冷たい、これは確に上流社會の家庭の情態である、斯くの如きを趣味ある家庭かと云へば非ずと答ふるの外はない。

又玆に一つの家庭がある、家根は崩れ、戸障子は破れ、內に入つて見れば親も子も其所に轉げて居る、何の禮儀もなければ、何の氣兼もない、眞に親だか兄弟だか分らないやうに打解けて居つて、一ツの物は分け合うて喰べると云ふやうな風である、客が來ても辭儀一ツせなければ、長上の人に對して改まつた言葉も遣はない、これが趣味ある家庭であるかと云へば是れ又非らずと答へなくてはならない。

又玆に一ツの家庭がある、別に大きな家と云ではないが、先づ膝を容るゝに

足るだけはある、戸障子はチャンと篏つてあるが、別に人の眼を惹くほどの立派なものでもない、さて一家四五人の者が如何なる生活をいたして居るかと云ふと、第一に現はれ來る所のものはその言葉遣ひである。良人が妻に對し、妻が良人に對し、親が子に對し、子が親に對する其の言葉遣ひが何とも云へない一種の愛嬌を帶びて居る、又起居振舞を見るに、別に禮儀があると云ふではないが、さて亂れて居るのでもないので、子供が眞に父母を喜ばせたいと云ふの情念に滿ちていそ〳〵と立働いて居る、良人は妻を助けたい、妻は良人を喜ばせたいと云ふ有樣で、曾て大きな聲を發したのも聞かず、一家の內は四海浪靜にして實に能く治まつて居る、朝より日暮までは眞黑になつて各々勤め勵んで居るが、夕方よりはオルガンの音も聞ゆれば、讃美歌を唄ふ聲も聞える、家內には種々〳〵な額もあれば軸物もある、床には四季折々の花も挿まれて、客あれば家族全體一人の如くになつて款待すと云ふやうな風であるから、來客は歸る時をも忘れる有樣である、一種の趣味ある家庭とは確に是である。

此最後に描いたのは確に中流の家庭であつて周圍には綺羅人の眼を眩ます程

のものはないが、其家の主人夫婦を初めとして、其家を形作つて居る人格に趣味がある、その趣味ある人格が撰んで掛けた額や軸物や、または娘が其邊から手折つて來て活けた花が一種云ふにいはれぬ風情がある、是れ即ち趣味と云ふものであらう、そこで其趣味と云ふは何うしたら出來るであらう乎、今日此禮拜にお出掛けになつた諸君の中には、家庭の趣味と云ふ題を見て、何か一ツ我家庭に足らないものを見出して、趣味のある家庭を作りたいと云ふの希望からわざ〳〵此所にお集ひになつた方も居らつしやらうかと思ふ、庭に梅樹を植附けた、勿論枝振の宜いのを撰んで植えたのであるが、併し未だ根が定まらぬ、ソコデ木を立てゝそれに縛り附けて置く、此梅樹には趣味があるか、何うも枝振は宜いが趣味は見えない、けれども三年五年經つうちに其の助けにして置いた木は取除かれ、根本には苔が生えて來て、梅樹は追々古びて來る、こゝに至りてその梅樹には何處となしに所謂趣味なるものが見えて來た、新に結婚し、新なる家庭を作くつて、或家に住込んだ、萬事高襟式にやつて居る、どうだ趣味があるか、枝振は宜いが、まだ趣味がないと云ふの外はない、三年五年七年

經つ内に二三人の子供が出來る、夫人は年を老つて來る、家庭は次第に老熟する、其家の内に入つて見れば何となしに趣が出來て來た、あア云ふ家庭に入ると俗氣が脫ける、あんな家庭に四五日逗留して見たいと、人をして云はしむるに至つて、初めて其家庭に趣味が出來たと言ひ得るだらうと思ふのである。

されば此趣味は何に由つて生ずるが、箴言の記者は十五章の十七節に「蔬菜をくらひて互に愛するは肥たる牛を食ひて互に恨むるに愈る」と言ふて居る、蔬菜を食ひて互ひて相愛すると云ふ家庭は餘り富んだ家庭ではあるまい、去れば云つて赤貧洗ふが如き家庭でもなからう、兎に角野菜だけの料理でも喰べられる位であるから、菜葉一ツ料理するのにも、蕪菁一ツ料理するにも、その夫人が愛心を籠めて料理し、その愛心の籠つた料理が膳の上に置かるゝときは、其良人は其妻の愛と苦心とを合せ喫るのであるから確に肥えたる牛肉に勝るところがある、何程西洋料理を取寄せて喰べても良人と妻の心が氷の如く冷たくて互ひて打解けることがなかつたならば、決して趣味も何もあるまい。東京で多くの青年を預つた人の話に、貴族や金滿家の息子等が何んな事を云ふて居る

かと聞くにお父様やお母様と毎日一度だけ一緒に食事がして見たいものだと云ふて居るとの事である、上流の家庭においては息子や娘は父母と一緒に御飯が喰べられない、料理人が拵へて呉れた御飯を下女の給仕に依つて喰べるのである、御馳走はあり餘るほどあらうが、其所に趣味といふものが加はつて居らないのである、して見ると趣味のある家庭を起さうとすれば何しても其家庭において愛を養はなければならぬ。良人としての愛、父としての愛、妻としての愛、母としての愛、子供としての愛が先づ養はれなければならぬ。其愛は何したならば養はれようか。私は此愛心は家庭禮拜の行はれざる所においては充分に養ひ立つることは六ッかしいと思ふ、晨に夕べに家内の者が皆打寄つて愛を增させ給へと云ふ祈禱をする所でなくては、イエス、キリストが己を捐てゝ他人の爲になされたと云ふ奥深い愛を眞から學ぶ家庭でなくては、表面の愛だけは眞似することは出來ようが、眞實、心の奥底からの愛は出て來ない、眞實心の奥底に於て愛がなければ趣味を產出すことは出來ない、先に三百八十三番に唄ふた如く、天の父を我父として、爾うして同胞が打寄つてその天の父のお與へな

される愛に結び附なくては眞實の愛情は行はるゝものではない、天父より來る愛、人間の爲に己の命を捐て給ふたるキリストの愛が良人の心に充分行渡つて來たならば、其良人が妻に對するときは實に何とも云へない一種の情味を帶びて來よう、又その妻たるものも同じやうに天父の愛に感じて良人に對するときには又何とも言へない趣が其所に生じて來よう、親は天父の心を以て子に對し、子は亦同じ心を以て親に對するときに、初めて眞實の趣味が生て來る譯である。

箴言の記者は三十一章に「誰か賢き女を見出すとを得ん、その價は眞珠よりも貴とし、その夫の心はかれを恃み、その產業は乏しくならず、かれが存命ふる間その夫に善事をなして惡きことをなさず」と書いてある、かゝる賢妻を得て初めて趣味ある家庭が出來よう、尙ほ二十三節を讀んで見ると「その夫はその地の長老と共に邑の門に座するによりて人に知らるゝなり」と錄してある、此夫にして初めて趣味ある家庭を形作ることが出來ようと思ふ、尙ほ箴言の七章の一節から四節までには「我子よ、わが言をまもり、我が誡命を汝の心にたくはへよ、我が誡命をまもりて生命をえよ、我法を守ることは汝の瞳子を守るが

如くせよ、これを汝の指にむすびこれを汝の心の碑に銘せ、なんぢ智慧にむかひて汝は我が姉妹なりといひ明理にむかひて汝はわが友なりといへ」とある、子供が父母の誡令を守つてその法を指に結んで念々忘るゝことなく、よく父母を慕ひ奉ると云ふ精神が胸に溢れて居る、斯くの如き子供を得て初めて茲に趣味ある家庭が出來るであらう、斯くの如き人格即ち此の父母この子供等が家の主人公となつて、其家に下女が使はるゝやうになり、其家に賓客が訪ひ來るやうになり、又その家庭において音樂裝飾に注意し、或は此頃であるならば朝起きて見れば黃菊白菊が咲き亂れて御互ひの眼を悅ばして呉れる、其の草花が麗はしく咲初むるのを見て其黙に一種の味を有つことが出來る、床の軸物にも氣を注けて、其書を眺むるときに何とも云へない一種高潔なる精神を呼起すやうであるならば、矢張り其所に趣味を感ずるやうになつて來ることである、人生五十年七十年は古來稀であると云ふが如く其の僅に五十年よりなき世の中、長くて七十年よりない世の中を摺つた揉んだと云つて沒趣味の生涯を送るのは實に不幸の極である。

家庭を飛び出して淵川へ身を投げたとか、或は斬つたとか斫つたとか云ふやうなことを見るときに、其の原因する所を探れば家庭の波瀾である、家庭の波瀾のために斯くの如き悲慘なることを演出するのである、仄かに洩承はる處によると幸に我國の皇族方の中に趣味ある家庭をお有ちなさるゝ方が多く在らつしやるといふ事である、併し私は其家庭に這入つたことがないからどれぐらゐ趣味ある家庭であるかは知らないが、立派な家庭に相違ないと思ふ、何うしても我々はキリストの聖名に依つて朝な夕なに神に祈つて趣味ある家庭を作つて、今日の冷酷なる我日本の社會に溫かなる潮を漲らしたいと云ふ考である、既に稍良くなりかけた家庭をお有ちなされる方は、良人がまだ不信者であるから何うも趣味ある家庭が出來ない、又は妻が不信者であつて趣味ある家庭が出來ないとか、子供等が神を信じないから趣味ある家庭が出來ないと云ふのであれば、家庭傳道に專ら力を籠めて、一家を殘らず信者となされるのが當面の任務であらうと思ふ。

此事が成らなければ到底趣味ある家庭は望まれないから、何卒諸君が家庭全

體をキリストの愛に感化せしむると云ふことに先づ第一に力をお入れにならんことを希望して止まない。

心靈の修養 終

明治四十二年十二月十二日印刷
明治四十二年十二月十五日發行

不許複製

心靈の修養奥付
○定價一圓

著者　宮川經輝

發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　福永文之助

印刷人　東京市京橋區日吉町四番地　渡邊爲藏

印刷所　東京市京橋區日吉町十番地　民友社印刷部

發兌　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　警醒社書店　振替東京五五三番

宮川經輝先生譯述

約翰傳釋義

本書の内容○總論○道の化身○眞光の證明者○イエスの而立○キリストの初行動○新生○ヨハネの証明○サマリヤ傳道○貴人の信仰○キリストと天父○生命のパン○批判渦中のイエス○イエスの論戰○生來の瞽者○善牧者○神子論○キリストの友愛○キリストの牽引力○相愛の教訓○最終の教話○告別の祈禱○キリストの受難○キリストの復活等一讀すべき良書

定價一圓
小包八錢

宮川經輝先生著

靈界の妙趣

大阪講壇の第一輯として出づ、輯むる處○元始論○基督論○十字架の眞意○祈禱の眞意○新生命○永遠の生命○靈覺の妙○聖書論○幸福よりも聖德の九篇、靈界不振寂寞の今日、其妙趣を味はれんことを祈る。

定價四十五錢
郵稅六錢

安部清藏先生述

馬太傳講義

定價一圓八十錢　小包

松本益吉先生譯

耶穌の教

上製八十錢　並製六十五錢　小包八十錢

原田助先生著

耶穌の時代

附錄、猶太の地理氣候及曆一斑

定價五十錢　小包八十錢

湯淺吉郎先生著

箴言講義

定價上製六十五錢　並製五十錢　小包八十錢

牧野虎次先生譯述

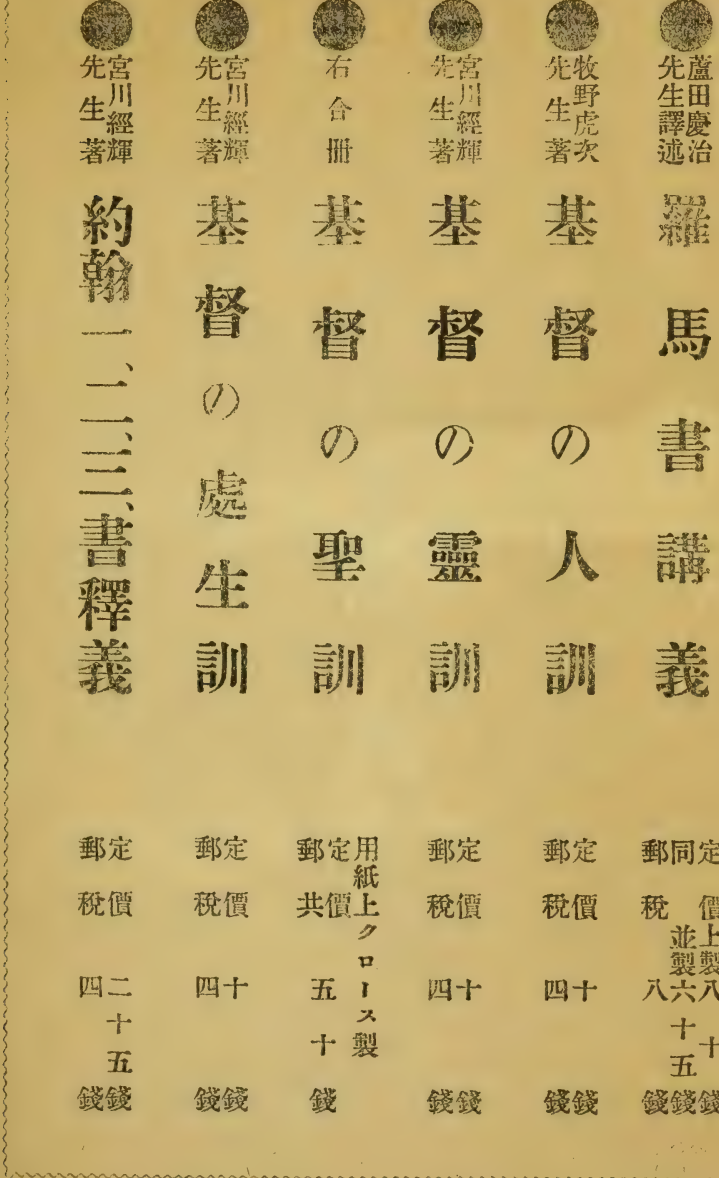
舊新約聖書總論

定價上製一圓五十錢　並製一圓廿五錢　小包各十二錢

日野眞澄先生著

以賽亞書講義

定價上製一圓五十錢　並製一圓廿五錢　小包十二錢


蘆田慶治先生譯述
羅馬書講義
定價上製八十錢並製六十五錢 郵税同
牧野虎次先生著
基督の人訓
定價十錢 郵税四
宮川經輝先生著
基督の靈訓
定價十錢 郵税四
右合冊
基督の聖訓
用紙上クロース製定價五十錢 郵共
宮川經輝先生著
基督の處生訓
定價十錢 郵税四
宮川經輝先生著
約翰一、二、三書釋義
定價二十五錢 郵税四